毎月一回五日發行
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第一號

大附錄
竹の園生

口繪
高貴
獨逸皇后
毛利公爵夫人
御題雲中竹
徐世賓の王冠
天の橋立
華族女學校
共立女子職業学校
其他




新年の御慶目出度申納候
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋三丁目
三井呉服店
四番賣場
地方よりの御注文に對してはくわしき御案内書有之候間御一報次第御送り可申上候

女學世界第壹號目次

新刊の辭

論説

女子の三大育に就て……西村茂樹

講義

土佐日記講義……鹽井雨江
百人一首講義……大町桂月
漢文評釋……久保天隨

傳記

以沙伯女王……中内蝶二
豐太閤の夫人……鹽井ふく子

學術

裁縫の衞生……三島通良
牛の話……藤堂忠次郎
空氣の話……岡田みつ子

技藝

造花科……伏見藤三郎
裁縫科……金子鋼子
書法指南……野口小蘋
書法指南……多田親愛
書法の話……坂正臣

寫眞石版

蘭と竹（畫 四葉）……野口小蘋筆
歌と書翰文（書 四葉）……多田親愛筆 坂正臣筆

小説

古情人……内田魯庵
玉椿……三宅花圃

家庭

家政學の範圍と婦人の本務……塚本はま子
食物の獻立……溪流女史
姿見かゝみ……水原翠香
家庭と音樂……三輪田眞佐子

雜録

夜半の埋火……花圃女史
女子の服裝……下田歌子
江湖叢談……錦衣公子
女子教育上の所感……日東散史

文苑

和歌（七十七首）
新體詩（一首）
○夜半の梟……………………（鹽井雨江）
和文（三篇）
歲の暮（大和田建樹）○宮城御移轉記（佐々木信綱）旅の命毛（中村秋香）○發刊を祝す（柏倉一德）

娯樂

春遊び
いろはまはし○鶴取り○子探し○日本寶鏡
戸外遊戲の一法

社交

交際の栞…………………………翠香女史
音問贈答の事（年首の贈物）

流行

流行の春着
男子向禮服○同上略服○其次の男子向○婦人の禮服○婦人の略服○
反物の相場○流行美術裝飾品

才媛詞藻

歌のしをり
女學世界の初ずりをことほきて○雪中の竹○初冬曙○新年霄○新年國旗○新年外征に從へる人を思ふ○國旗○奈良縣高等女學校生徒の歌を閲して
文のしをり
蟲さのたき○秋の夕○通信手習會を催さんとて遠方の友の許に○寒夜讀書○月○舟あそびの記○寫眞を送る文○冬の夜書を讀むの記○秋の夕ぐれに古里をおもふ○冬のはじめ○吉川金造氏の米校につきて○定家卿の家集を讀む○同胞女子諸君に告ぐ○秋の野○初雪○新年遠征軍人を思ひやりて○月なき夜半

問答

豚の飼料○冷水摩擦法○窓硝子の霜除け法○胃擴張の養生法○第一回懸賞文募集

學事

女子職業學校參觀
同 校規則

雜報

西園瓜生會○忠婢の旌表式○孤島の貞婦○市教育會の希望○日本女子大學の近況○體育會の女子遊戲○女子嗜輪會の設立○三井の新陳列場○女子制服の改良意見○飲食用器の取締規則○鉛性白粉の害○海外女界の奇聞○巴里博覽會と結婚○維納大學と女生徒○流行の女裝

總裁 小松宮大妃殿下　副總裁 鍋島侯爵夫人

大日本女學會

女學通信教授

本會創立明治二十八年現在會員數壹萬貳千人何時にても入會を許す

本會は女子教育の普及發達を圖らんが爲め女學講義と稱し女子必須の諸學科を掲載せる講義錄を發行して頒ち來りしが此度進んで女學講義の外更に『をんな』と名くる婦人雜誌を發行し廣く會員外へも配布し以て一般婦人の智徳を增進し我國女子の品性を高めんことを企圖す學問に志せる淑女達幸に愛讀あれかし

『をんな』第壹號掲載種目

（修身）公徳の養成 法學博士穗積陳重、儉約論 法學博士天野爲之、女子の體育 女子高等師範學校教諭安井哲子（學藝）科學大意 東京專門學校講師島村瀧太郎、國書解題 女子高等師範學校教授（文學博士）根正直、漢書解題 文學士丸井圭次郎、作歌批評 御歌所參候大口鯛二、作文批評 今泉定介、日本女子服裝の沿革 華族女學校學監下田歌子（家事）小兒教養法 文部省學校衞生課長三島通良、家政 女子高等師範學校教諭後閑菊野、泰西禮法 女子英學塾長津田梅子、湖處子、石井泰次郎（世事）法律問答、經濟問答（小說）家庭小說 水谷不倒（お伽話）雅松（詞藻）華族女學校教授坂正臣、今泉定介（寄書）明治女學校長巖本善治（雜錄）勝史談 文學士大森金五郎、地理談 文學士喜田貞吉、十九世紀間の婦人問題（時報）十數件

『をんな』は每月一回廿五日に發行す一冊紙數百卅頁定價金拾五錢全國無遞送料なり郵券代用は一割增の事

一月廿五日第壹號發行　東京麴町區土手三番町　大日本女學會

女學叢書第一卷　**家事衞生**　醫學博士三宅秀著

菊版總クロース一百五十頁金文字表紙　定價金六十錢郵稅十二錢　一月發兌

此書は三宅博士が文部省夏期講習會に於て各府縣師範學校高等女學校の女教員達に講義されたるものにて卷中、衣、食、住、育兒、看病の五篇に別ち其說く所、我國一般の民度に應じて實施し易からんことを務められたり此書世に出でなば齊家保育の上に一進步を見るべきを信ず家政を主る人々の必ず讀み給ふべき書也

◉女子講習會誌發刊報告●●●●毎月二回（五日 廿日）發行●

●高等女學校教科の程度●速成明治三十三年七月より同卅四年三月までを一期とす

女學枝折

第十二號

一月十日發行

毎號紙數百ページ●定價一冊金十三錢●郵税一冊金一錢●割引法上欄にあり●郵券代用差支なし●

●前金 十冊一圓二十錢外に郵税十錢●十八冊（十八冊は一期なり）一圓九十八錢外に郵税十八錢●

毎號載する所の事項要目

一 修身、（我帝國の婦人として踐むべき常道）

一 家事、（常用實際の要務）……

一 附、禮法、割烹（高遠に流れず卑野に陷らず）……

一 家庭教育、（臨機應變の活用を期す）……

一 國語、（現用高等女學校教科書説明）……

一 附、作文（實例を擧げて添削）……

一 算術、（日常應用すべき理論及練習）……

一 地理、（本邦地理）……

一 歴史、（本邦歴史）……

一 理科、（日用須知の生物研究）……

一 習字、（實地書面の手本及び説明）……

一 裁縫、（最も日常適切なるもの）……

一 雜錄、（專用あり趣味ある事項の展覽、中に就き毎號翠南氏の理想女子は最も妙）

前女子高等師範學校助教諭 塚本はま子
講師 幽香女史
女子高等師範學校教諭 藤堂忠次郎
東京府第一高等女學校教諭 小島政吉
同上 同
同上 溝口鹿次郎
東京府第二高等女學校教諭 高本みつ子
同上 同
女子高等師範學校教諭 藤堂忠次郎
華族女學校講師 小野鷲堂
女子講習會講師 幽香女史

女子講習會は目下女子教育の機關具はらざるを憂ひて上記諸氏を聘し簡易の方法により實用ある諸學科を講じて或は直接に女子を修養或は他の女學校入學の準備となさしめん目的を以て本年五月始めて設立せられ僅々一ヶ月にして望外の盛況を呈す今般更に此趣味を全國に擴め會誌を發行して有志の諸孃及び母子の爲にせんとす本誌購讀を望まるゝ方は速に發行所へ前金を以て申込まるべし

發行所 東京市京橋區南傳馬町一丁目 吉川半七

大刷新を加ふ

本會は年とともに大革新し、一變し、教授の方法を改め、都へて完全無缺、組織を本邦惟一の文章通信學校たるを期す

大日本文章學會

講師 大町文學士●久保文學士●十時文學士斯道の大
内海文學士●杉文學士●江藤米文學士其他家約十名
學科 文章作法●和漢文
詩歌の評釋●修辭
學●新聞學●日本文典●審美學
故事熟語解●漢文法●文章漫話其他新設すべき者六科以上
講義錄 毎月二回●一ヶ年卒業今回大改頁を加へ、紙數を増し
紙質を頁好にし繪畫を入れて説明を補ふ
學費 入會金參拾錢●月謝參拾錢●六ヶ月分壹圓六拾錢●此際至急入會者には學費減額の特典あり

東京神田錦町二丁目六番地
規則書申込次第進呈す

國文學第廿五號

新年に相當するを以て、特に紙數を増し「初日影」と題し、之を滿たすに諸名家の傑作を以てす

初日影

本號に限り一月一日發行定價一部拾錢郵税一錢

國文學毎月一回一部五錢郵税五厘一ヶ年六拾錢
國文學は毎號斯道大家の論文美文韻文を載せ又廣く江湖の投稿を歡迎す。第廿五號は第三回の

新刊

金子元臣先生著

古今集評釋

内容形式につき嚴正なる評論を加へたるもの、和歌研究者の坐右欠く可からさる珍書也

●第一冊一月一日發賣●以下續刊
和裝美本全五冊●毎卷定價金四拾錢郵税四錢●

古今集註釋書の世に出でたるもの多し、而も之を評釋したるものなし、本書は廣く異本を參照して之を正し、詳細に字句の解釋を施したる上

東京神田錦町一丁目十番地 明治書院

新製繪はかき

繪はかき 繪畫 寫眞

見本廿枚郵税共金拾錢

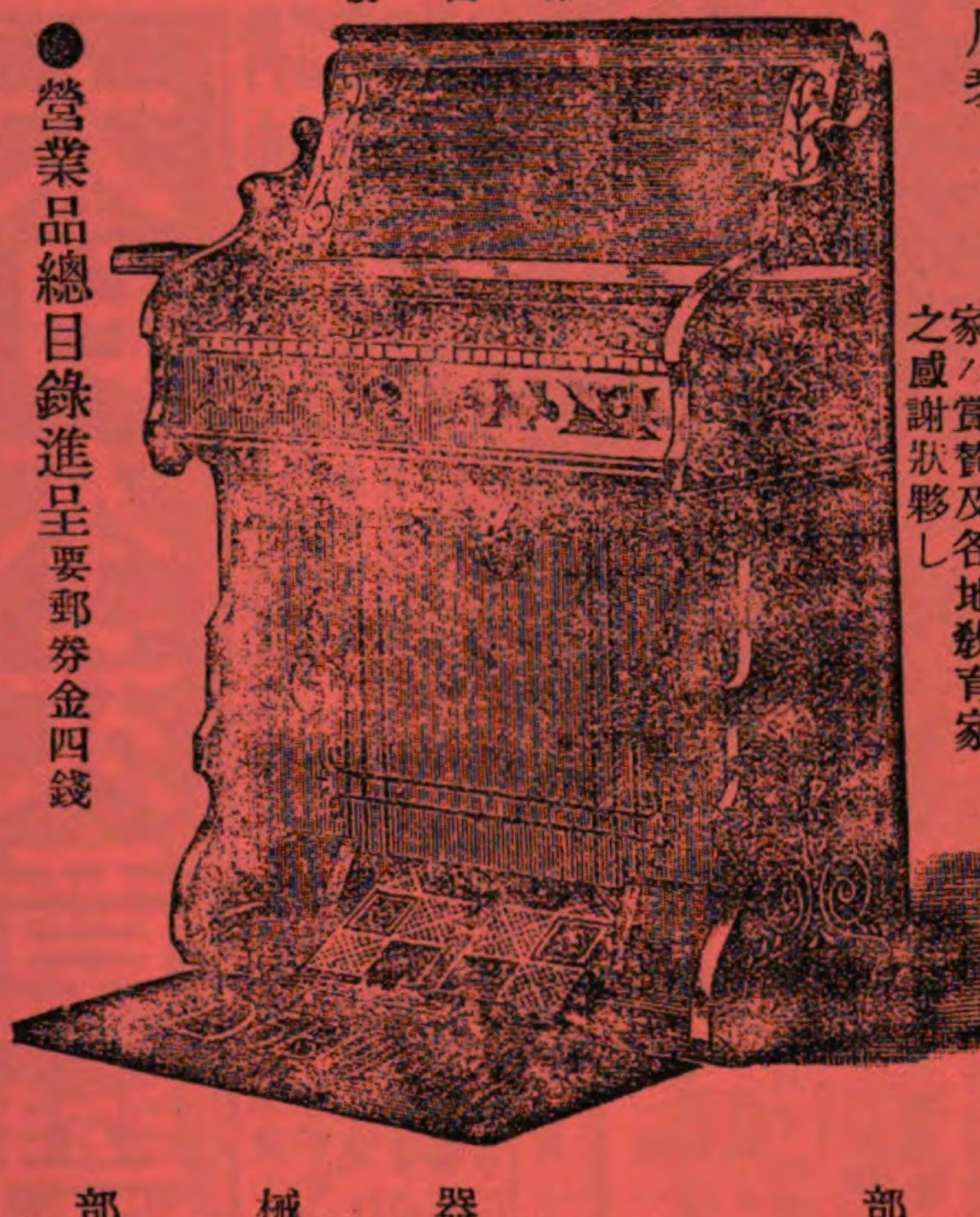
東京神田神保町三 こぐら商會發行

恭賀新禧

東京神田區小川町 佐々木信綱

東京同文館樂器校具店

改良第四號



音律正確
音調鮮明
裝飾優美
保險確實

改良風琴

第一號金拾八圓以上
第拾三號金貳百圓迄
各種

改良風琴特色

弊館製造改良風琴は今般東京音樂學校より音律正確音調鮮明にして學校唱歌教授用として尤適當品たることを證明せられたり斯道大家の賞賛及各地教育家之感謝狀夥し

音律正確
價格低廉
構造堅牢
保險確實

普通風琴

第壹號金拾五圓以上
第拾號金百二十圓迄
各種

●營業品總目錄進呈要郵券金四錢

樂器部

舶來風琴 金百二十圓以上 金九百圓迄各種
舶來洋琴 金二百圓以上 金三千圓迄各種
ヴァイオリン 金五圓以上 金三十圓迄各種
舶來手風琴 金三圓以上 金十五圓迄各種
フラジヨレット 金五十錢以上 金一円五十錢迄各種
ハーモニカー 金三十錢以上 金一圓迄各種
吹奏樂器各種

器械部

高等教育新式弄具
外國形瀛船 金壹圓七拾五錢以上
鐵道瀛關車 金八圓五十錢以上
電氣鐵道 金二十二圓
右はレール及附屬品一式付
其他自動進行發動原理示教器各種
學生身體檢查器械
美術模型各種標本
各種躰操諸器械
學校用諸器械地球儀

風琴製造●諸樂器輸入●學校用諸器械製作

東京市神田區錦町二丁目 同文館樂器校具店 電話本局二千三十三番 電信略號ガツキ

(前付の四)





公爵母堂毛利安子君



御題　雪中の竹



獨逸皇后ビクトリア陛下

◉洋琴　金參百圓以上貳千圓迄各種

◉ヴァイオリン
鈴木製金五圓以上百拾圓迄各種
舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種



◉手風琴　金貳圓五拾錢以上參拾圓迄各種

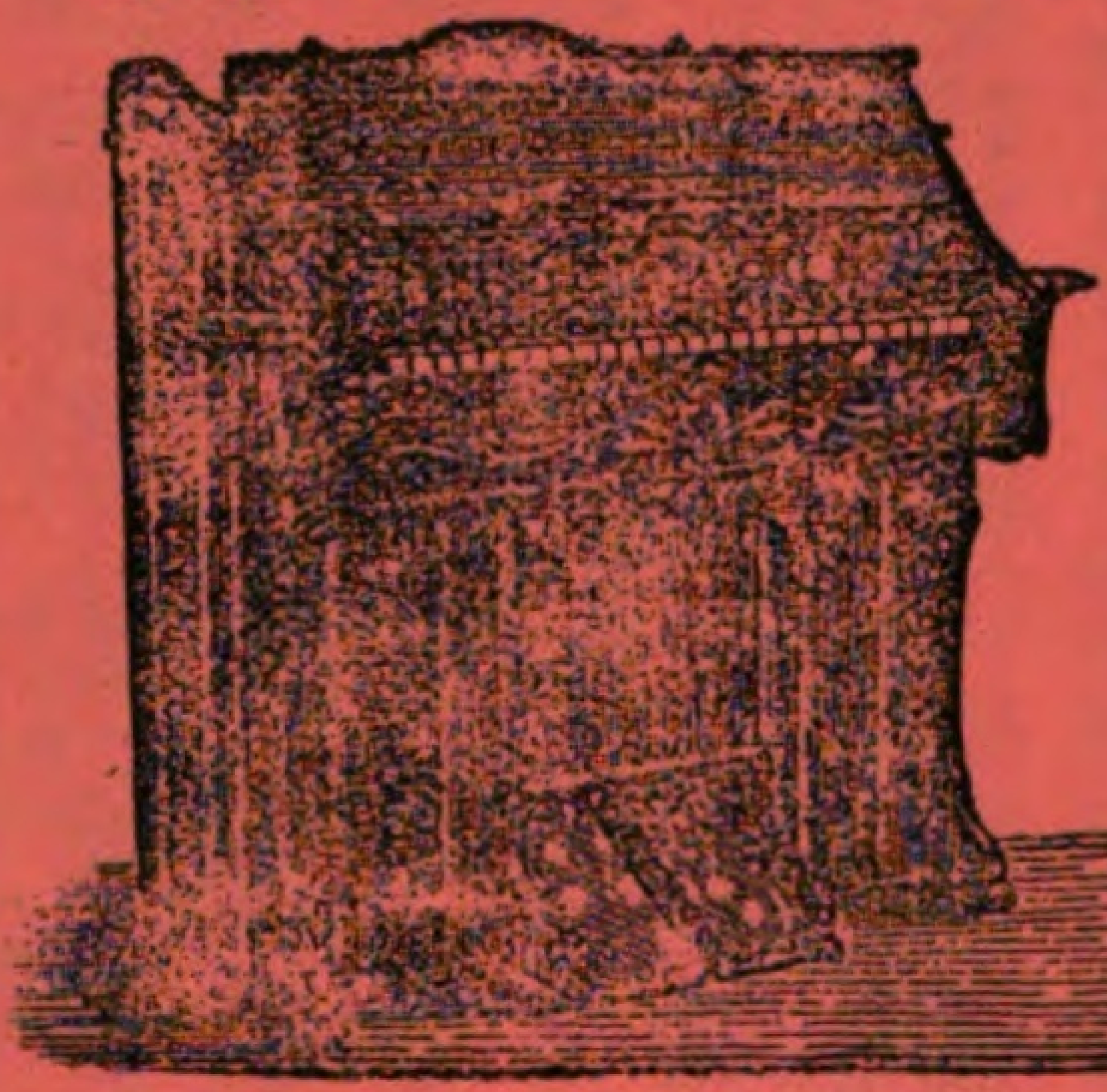
保險附　山葉風琴

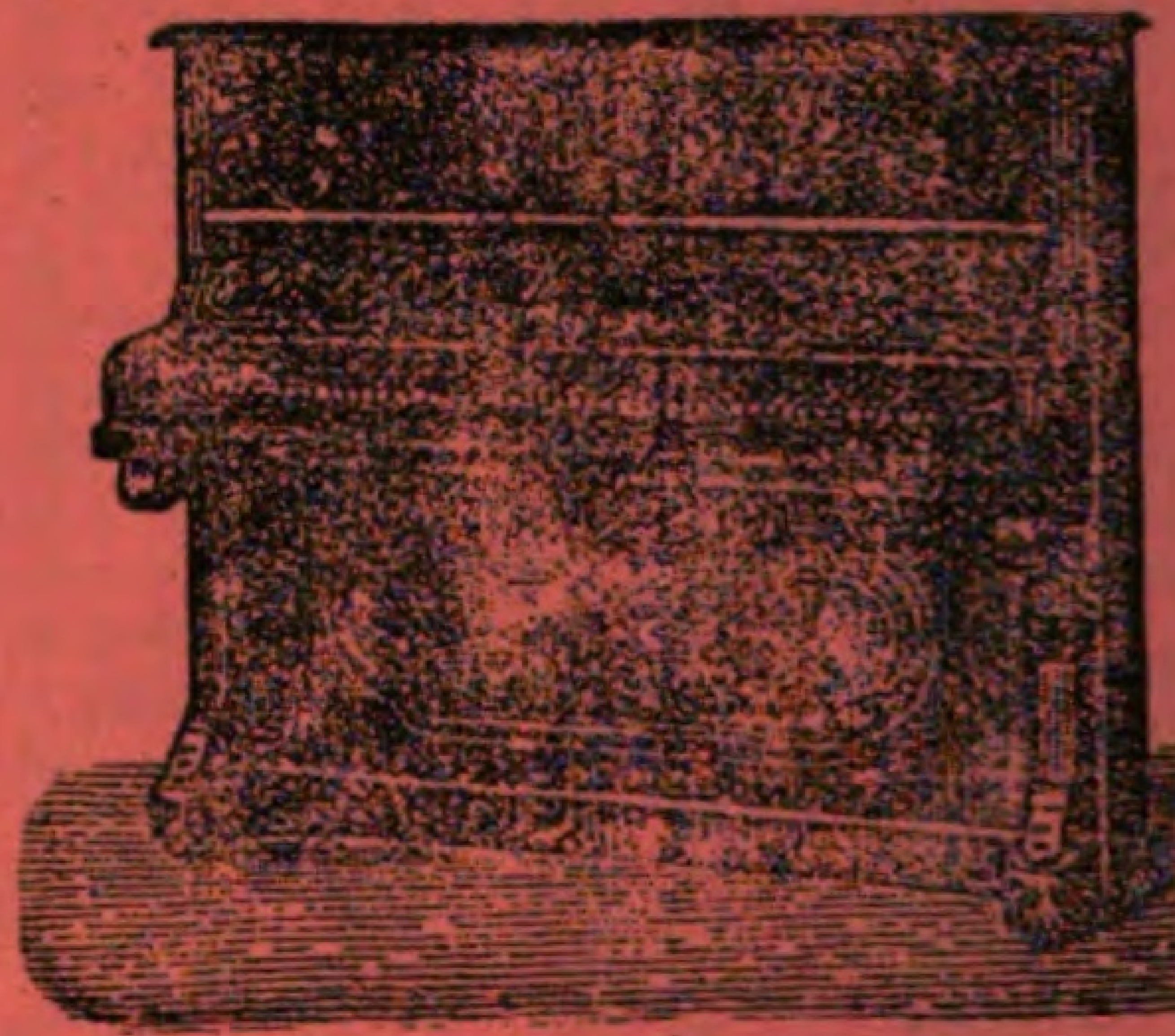
一號形　二號形　三號形　四號形　五號形　六號形　七號形　八號形　九號形　十號形　十一號形　式場用新形　教授用新形

定價金拾六圓五拾錢　定價金廿六圓五拾錢　定價金參拾七圓　定價金四拾參圓　定價金四拾八圓　定價金五拾五圓　定價金六拾五圓　定價金七拾五圓　定價金百圓　定價金百貳拾圓　定價金百五拾圓　定價金四拾五圓　定價金八拾圓　定價金百參拾圓

（荷造費を要す）

◉右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨーレット、其他各樂器幷に和洋音樂書各樂器附屬品各種





新刊廣告

◉重音唱歌集　小山作之助編
洋裝美本　第一集　第二集　定價金五拾錢　郵税不要　近刊

◉女學唱歌　山田源一郎編
洋裝美本　第一集　第二集　定價金五拾錢　郵税不要　近刊

◉オルガン教則本　島崎赤太郎編
洋裝大形美本　一之卷定價金三十五錢　郵税六錢　二之卷定價金五拾錢　郵税八錢　三之卷　近刊

◉新遊戲　鈴木米次郎編
音樂適用　洋裝美本全一册　定價金三拾錢　郵税不要

◉新撰小學唱歌教授法　石原重雄著
洋裝美本全一册　定價金三十五錢　郵税不要

◉四季　瀧廉太郎著

◉ヴァイオリン教則本　共益商社譯
洋裝大形美本全一册定價金五十錢郵税六錢

◉流行俗曲集　昇霞逸人著
洋裝大形美本　一之卷定價三十五錢　二之卷定價二十五錢　郵税六錢づゝ　三之卷　近刊
和裝美本全一册　定價三十五錢　郵税四錢

○ピアノ、オルガン調律修繕
○郵券二錢御送附目錄進呈

東京京橋區竹川町三十番地　共益商社樂器店　（電信略號キヨ）（電話新橋五百廿九番）

（甲の一）

明治三十四年一月廿日發行
●以後は毎月五日發行

婦人と子供

定價一冊拾錢 郵税壹錢
六冊前金五拾七錢
十二冊前金壹圓拾錢
郵税一冊に付一錢宛

客員
高等師範學校長 伊澤修二君
高等師範學校教授 波多野貞之助君
華族女學校長 細川潤次郎君
女子高等師範學校講師兼華族女學校講師 奧好義君
陸軍教授 尾田信忠君
造士會々長 嘉納治五郎君
女子高等師範學校長 高嶺秀夫君
臺灣國語學校教授 田中敬一君

高等師範學校教授（在佛國） 谷本富君
東京工業學校教授兼文部省視學官 中川謙二郎君
文科大學教授兼女子高等師範學校教授 中島力造君
文部省視學官 野尻精一君
高等師範學校教授兼文科大學講師 松本孝二郎君

東京盲啞學校長 小西信八君
華族女學校教授 淺岡一君
文部省學校衞生主事 三島通良君
女子高等師範學校教授 篠田利英君
文科大學教授兼高等師範學校教授 元良勇二郎君
奈良縣視學官 尺秀三郎君
醫學博士 瀨川昌耆君
右「いろは順」
（未完）

會員（女子高等師範學校教員 東京府女子師範學校教員 東京府第一高等女學校教員 東京府第二高等女學校教員其他全國各種女學校長、教員等數百人）

本誌は婦人及兒童の教育に熱心なる教育家相謀り、女子教育界刻下の急に應ぜんとて生れ出でたるものにして（一）兒童教育法の研究（二）婦人教育殊に母としての婦人教育の普及（三）家族に向て婦人女子の讀書材料を供給するを主眼とす。其の材料は幼兒に適するものゝ少女又は母たるものに適するものを交へ載せて大に興味を感ぜしむると共に大に智能を開き性情を養ひ且つ日常家庭の生活を益せしめんことを期し、文章は特に平易に認めて假名さへ附したれば家庭必須の讀本たるは言ふに及ばず、小學校、高等女學校、女子師範學校等の生徒には科外唯一の必讀書たるべく、幼稚園、小學校、高等女學校、師範學校等の教員には子女教育上の良參考書たるべし

第一號要目

●卷首挿繪（フレベル氏肖像○細川華族女學校長肖像及眞蹟○高嶺女子高等師範學校長肖像及眞蹟）
●子ども（猿と狐とのはなし○つばきの唱歌○障子に象を遣はす法○なきごゑ○不思議な文字）
●家庭（教育上に於ける家庭の地位：：齋藤鹿三郎○兒育て草：：瀨川昌耆○幼兒の取扱法：：中村五六○料理法一斑○子供の衣服のこしらへ方につきて：：神門さも○シスチードミノー：：安井てつ○子供は鏡なり：：林ふみ○無心の感化：：東くめ）
●學術講義（鶴龜の話：：岩井友太郎○日本化したる外國語：：東基吉）
●史傳（吉田松陰の母：：下村三代吉○ローランド夫人：：廣瀨豐十郎）
●文苑（和歌唱歌：：中島歌子、東くめ○愛らしき幼兒：：羽田はる）
●說林（婦人と子ども發刊につきて：：：高嶺秀夫○幼兒に課する唱歌と遊戲：：：伊澤修二○未定：：細川潤次郎）
●研究（幼兒保育法につきて：：東基吉○板と箸：：松村ひさ○はきよせ：：清水鶴○漫錄：：M、H生○紀州新宮の手毬歌（樂譜附））
●雜錄（新年と家庭○正月の餅○富豪の美擧○家庭保姆養成の必要○言葉の選び方○讀書の習慣を養成すべし○女振舞の衝突○表紙模樣圖案考○口繪解說）
●彙報（數十件）

發行所 本郷區湯島女子高等師範學校幼稚園內 フレベル會「婦人と子供」編輯部

發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 金昌堂

（其の二）

文部省学校衛生主事 三島通良 作歌
兼高等師範学校教授
高等師範学校助教諭 鈴木米次郎 作曲

衛生唱歌 壱之巻 再版

定價金七錢

三島先生は本邦幾千萬兒童の大恩人なり、十年以來先生が獻身小兒衛生學校衛生の爲に盡されたる功績は永世決して沒すべからず、先生今や益々進んで兒童の健康を保護增進せんが爲此衛生唱歌を作くる世の慈愛に富める父母、國家の富强を期企する識者及敎育家諸君希くは兒童をして日常之を歌はしめられんことを

發兌元 東京市日本橋區通旅籠町 株式會社 集英堂

(甲の三)

（甲の四）



華族女學校職員並卒業生諸君



那翁一世妃徐世賓の皇后宣下式(ダアビー氏筆)



米將ベヤズリー氏歡迎會(上野公園)

觀内の校學業職子女



裁縫科教室



刺繡科教室



圖畫科教室



第七巻 第壹號 一月五日發行

口繪 アートペーパー印刷
○高貴肖像
○雪の金閣寺
○獨逸帝室
○氷のナイヤガラ

●九條道孝公●佛帝奈翁三世及皇后●紀州名勝●韓帝と王宮●瑞西の大氷原●ベヤスリー氏歡迎會●越中越後の奇勝●雅邦筆十六羅漢●ラファエル筆美人庭園圖●丹青三絶●清國遊戲等

昨今の露帝……有賀博士
學政振張の財政……久保田讓
韓國移民論……加藤増雄
歐洲農界の大勢……横井博士
文明の批評家……高山林次郎
平和の基礎……國府犀東
大學派の政治的系統……人物元旦
文藝時評……大町桂月
政治時評……國府犀東
法律時評……岡田朝太郎
教育時評……大町桂月
宗教時評……數項
櫨紅葉……廣津柳浪
暗合か飜案か……饗庭篁村
老壯士……内田貢
燕歌鴻吟……大江小波
雪中竹……尾崎紅葉

藤原時平……大町桂月
青年時代の苦學……芳川子爵
砂金地巡見……福地信世
朝鮮王宮……坪谷水哉
將棋雜話……幸田露伴
車窓漫錄……落合直文
序びらき……大橋乙羽
農業世界(數項)……上野英三郎
商業世界(數項)……祖山鍾三
工業世界……數項
卵の大小と其數……石川博士
地殼中の產物……佐藤傳藏
社會事情○海外事情○輿論一斑○寄書○海内彙報等あり

定價 一册金三拾錢○半ヶ年分(増刊共八册)金二圓二十錢○一ヶ年分(増刊共十六册)金四圓廿錢○郵税一册三錢五厘

(乙の一)

短篇小説



戀愛小説家としての江見水蔭氏が**戀**に關する小説數十種を合せて一巻とし、附錄としては、氏が得意の詩篇數十種を添えたるが、艶は固より艶なりと雖も、濃を避けて淡、俗を捨て雅、情緒の纏綿は春山の薄霞、靄々の内に猶認む可きは**戀**の本軆なる**神聖**にして、毫も卑猥なる文字を狹まず、されば戀する人も、戀せざる人も菫咲く野邊、花散る山路、又は名香薫ずる閑室に最愛の友として、閲讀あらんことを乞ふ。

全壹册
江見水蔭君著
《五版》

洋裝上製 袖珍美本 ‖ 正價三拾錢 郵稅六錢 ‖ 紙數四百餘頁

鶯亭金升君著
《全壹册再版》

洋裝上製 袖珍美本 ‖ 正價三拾錢 郵稅六錢 ‖ 紙數三百餘頁

新撰落語



『サア出ました〳〵、**一休曾呂利**も舌を捲て逃げ出す金升君が新作の落語、おまけに、滑稽小説まで附て居て、**二百五十餘種**ズラリと並んだ玉揃ひ、見れば誰でも笑はぬ者は無く、笑ふ門には福が來る、**福**の神の嫌ひな人は御覧なさらずとも宜しいがお好きなお方は試みに御覧あれ、法螺をふくのふくとは大違ひの**福**で御坐い升。

博文館發兌

（乙の三）



福びき集

全壹册
正價十二錢
郵税四錢

附り 歌かるた法

新年目出度席上になくてならぬものはナニーと謎かけにはあらねども福引の本といふものは是非とも一册入用でありますよ

星

江見水蔭編

袖珍美本
紙數六百八十餘頁
定價金五拾錢
郵税八錢
口畫寫眞銅版四頁挿入

演劇脚本◎源頼朝◎源義仲◎佐々木盛綱
短篇小説◎絕壁◎非常線◎實國奴の兒◎大競走
時代小説◎元祿ハ花◎朝日川◎猪王丸
滑稽小説◎蛙ぎらひ◎大獵の御供◎ポスト
冒險實記◎姥島探檢記◎別子銅山變災視察錄◎六甲山鳴動探檢物語
訪問筆記◎老探偵◎老女將◎新水夫◎新俳優
文士口演◎鮪つり
其他數種

(寫眞銅版)▲相洋中の大偉觀▲六甲山の最絕頂▲エス井オの噴火▲作家さ美人遊戲

天界の星は或る意味にて數の無窮を現はすが如く人爲の星は江見水蔭氏が思想の無窮を現はすものにて卷中脚本あり短篇あり時代物あり滑稽物あり冒險談あり訪問錄あり文士口演あり材料の豐富なる實に闇夜の星も啻ならず日月の如き大傑作、或はなからむも北斗星の如く文海航行者の指點とならむは決して誇大の言にあらざるなり

饗庭篁邨君著

聚寶盆

寫眞銅版口繪入洋裝頗美本

著者自から我家の至寶と稱するる小説、脚本、紀行等を聚めたるものなり、其文情筆致、笑ふうちに血涙あり、泣くうちに温情あり、啻に輕妙滑脱とのみ評し去らずして精讀再誦すべき珍書なり

正價金三拾錢郵税六錢

發兌元 博文館

東京日本橋區本町三丁目

(乙の四)

婦女必讀

再版

明治才媛美譚

全壹册

洋裝總クロース金字入
美本紙數六百頁畫入
正價金五拾錢
郵稅八錢

明治才媛美譚は、猶ほ百花園の如し、清痩梅の如きもの、艶麗櫻の如きもの、濃麗牡丹の如きもの、嬌紅海棠の如きもの、芳姿芙蓉の如きもの、幽香菊花の如きもの、皆收めて卷中に在り。然れども本書の取る所は、姿色にあらずして、德操に在り。妙齡の令孃にして、父母に孝なる、兄弟に友なる、朋友に信なる、婢僕に慈なる、而して才學の卓絶、智識の俊邁なる、苟くも**婦女の龜鑑**たるに足るべきものを擇びて之を取る、女子は必ず讀まざるべからず、女子を有し女子を敎育するものは必ず讀まざるべからず、家庭の讀本蓋し之れより善きは無けん。

華族女學校學監下田歌子女史題詠
三輪田眞佐子女史序文中島儀一君著《訂正三版》

新撰小學女禮式

全壹册洋裝
正價廿五錢
郵稅六錢

世の開明に連れ時の文化に伴ふて淑女の令風又改善の域に進まざる可らず、今や中島氏本書を著はして婦女家庭の要義たる禮式を新選し洽く女敎の軌範を網羅せり、且つ文章平易流暢にして幼兒と雖も能く讀了せられ挿畫又た本文を補ふて用意精密なれば、貴姉令孃は素より家庭上には缺くべからざる禮書なり。

本書要目

○家庭の敎　○座禮作法　○婚姻の部　○新舊包物折方　○水引結びよう俯向の圖
○女禮式　○進退作法　○新撰儀式
○立禮作法　○諸品取扱樣　○新舊結物

讀賣新聞記者鈴木光次郎君編

明治閨秀美譚

第六版

全壹册袖珍　正價金拾貳錢　郵稅四錢

浸潤膚受の力は實に驚く可きものありて存す。古來哲人傑士の、其母より受くる感化の大なるは、史傳之を示して炳焉たり。婦人は實に社會の潜勢力、**賢母良妻**の國家に裨補する所誠に測る可らざるものなり。本書は明治閨秀の言行實錄にして、實に社會の龜鑑たり。

博文館發兌

（乙の六）

華族女學校學監正五位下田歌子女史述

九版

家政學

全二冊洋裝美本　正價金六拾錢　郵税拾二錢

目次

◉緒言◉家事經濟◉衣服○衣服の撰定附布帛の名稱○衣服の取扱○禮式服裝○裁縫　編物○機織○紡績○養蠶◉飲食●食品の撰定○飲料の撰定◉本邦料理◉飯の炊法○麪類の製法○煮炙の法○鱠の製法○漬物の法製○味噌の製法◉西洋料理○肉羹汁、醬液の製法○煮炙の法○食物貯藏法○料理雜則◉住居○住居の規定○住居の構造○住居の掃除○宅內の裝飾○移轉○火災盜難○風災、水害及び震災○家具什器○器物書類の保存及び取扱ひ○器具、書類の貸借◉禮法○一般の禮○尊長に對する禮○賓主の禮及び吉凶◉裝飾◉書翰◉贈品◉看病法◉婢僕の使役

家政は女子必須の學術なり而して未だ嘗て好書のあるなし吾儕常に以て遺憾とす下田先生多年華族女學校の學監として家政學の教授を主とる今や本書を著はし、凡そ家政に關する事物細大洩らすことなく尙ほ數多の插畵を加へて其理解を助けしむ、本書は實に師範學校高等女學校等家事科の教科書として無双の好書ならん、弊館幸に之が發兌の榮を得たり世の教育に從事する士女は速に一讀せずむはあらず

三浦智之君著

實用家事經濟學

附　家內心得隨筆

全壹册　洋裝袖珍　正價金廿錢　郵税四錢

●一家經濟學の學問上に於ける地位●一家經濟學の定義●物件と勞力との關係●一家經濟上戶主の地位幷夫婦の關係●收入●收入の種類●支出●支出の種類●收支に關する餘論●收支に關する法則●豫備金の必要●貯金の方法●一家の豫算幷に收支に關する始期終期●收支に關する帳簿●土地●家屋●衣服●飲食物●器具器械●雜物日用●起業論●一家に要する帳簿●保險の必要●物價險知論●一家經濟上須要ナ書籍其他の事項●一家經濟上家人の守るべき諸德●交際の程度を論す（別記）●郵便税●郵便爲替料●電信料●電信符號●爲替取扱休業日●萬國郵便料●小包郵便料●地租●所得税●炊飯の事●赤飯の事●麥飯の事●味噌の製●酒は命の敵なり白樂天の詩●烟草は身の敵なり●傳染病●三府に於ける三市の人口●五港に於ける人口●賢人の遺筆●茶の事●烟草の事●衞生節儉に關する古人の金言●五官の事●兩便の事●人體の溫度●滋養原質とは何ぞや●小兒病の種類

坪谷善四郎君著

家政整理法

全壹册　定價金拾五錢　郵税六錢

家政整理の任は家の大小と人の貧富に論なく主婦たる者の最とも大切なる務なり金錢の出納を愼しまざれば生計の出入相償はず况して餘裕を貯蓄し益々家運の繁榮を望むを得べからず家內の取締り正しからざれば內には一家の和順を缺き風儀紊れて幸福を減殺し外には世間の交際に當を得ずして公衆の擯斥を發かれず之を要するに成るべく少なきの經費を以て成るべく多くの幸福を求め一家の規律を嚴かにして恩威並び施こし內外の幸福を進むることを家政整理の主眼とす本書之を說くこと最とも親切なり

博文館發兌

（乙の七）

特別割引券進呈

恭賀新年

博文館發兌

圖書特別割引券

●有効期限明治三十四年二月十日限り
●期限中本券添附御注文は一割引とす
●目下豫約中の圖書は五分引とす
●前金御注文に非ざれば本券の効用なし

館友にして此券を添へたるは五分引

切取線

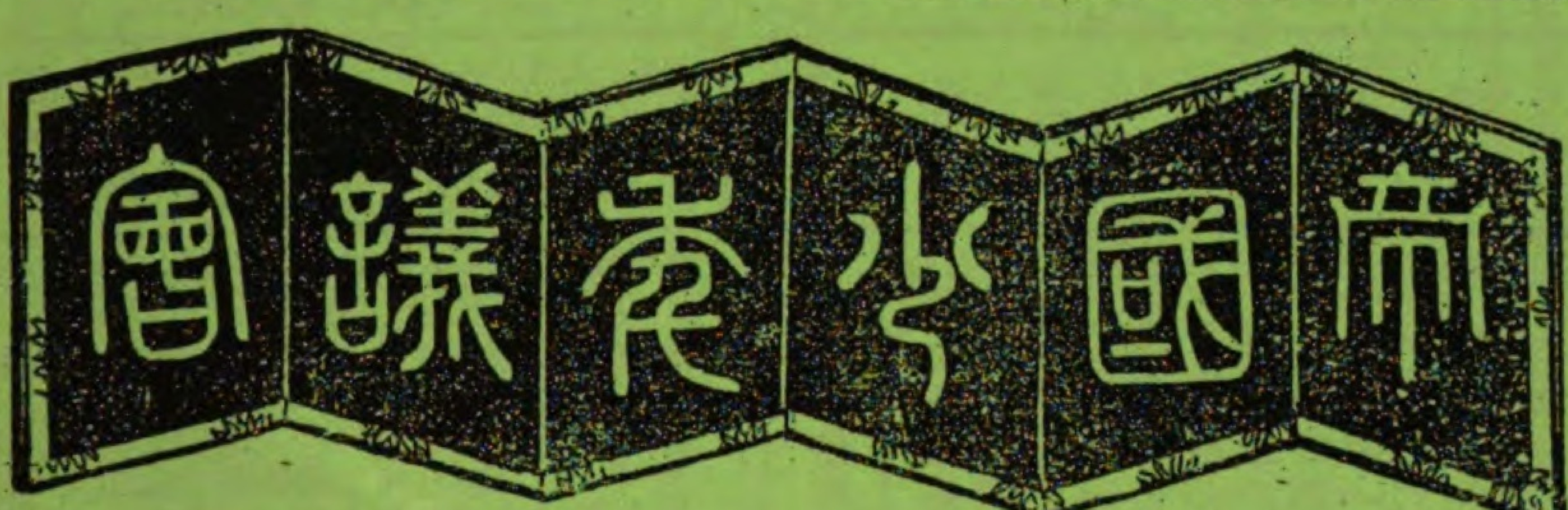
博文館發兌

雜誌特別割引券

●有効期限明治三十四年二月十日限り
●期限中本券添附御注文は五分引とす
●館友にして此券を添へられたるは二分引
●前金御注文に非ざれば本券の効用なし

辛丑元旦

(女學世界)　讀者諸君の健福を賀す　(女學世界)



皇太子殿下の御上覧を辱ふす

議院制少年筆戰場

議事錄

毎月一回見本七錢
我國學生機關雜誌

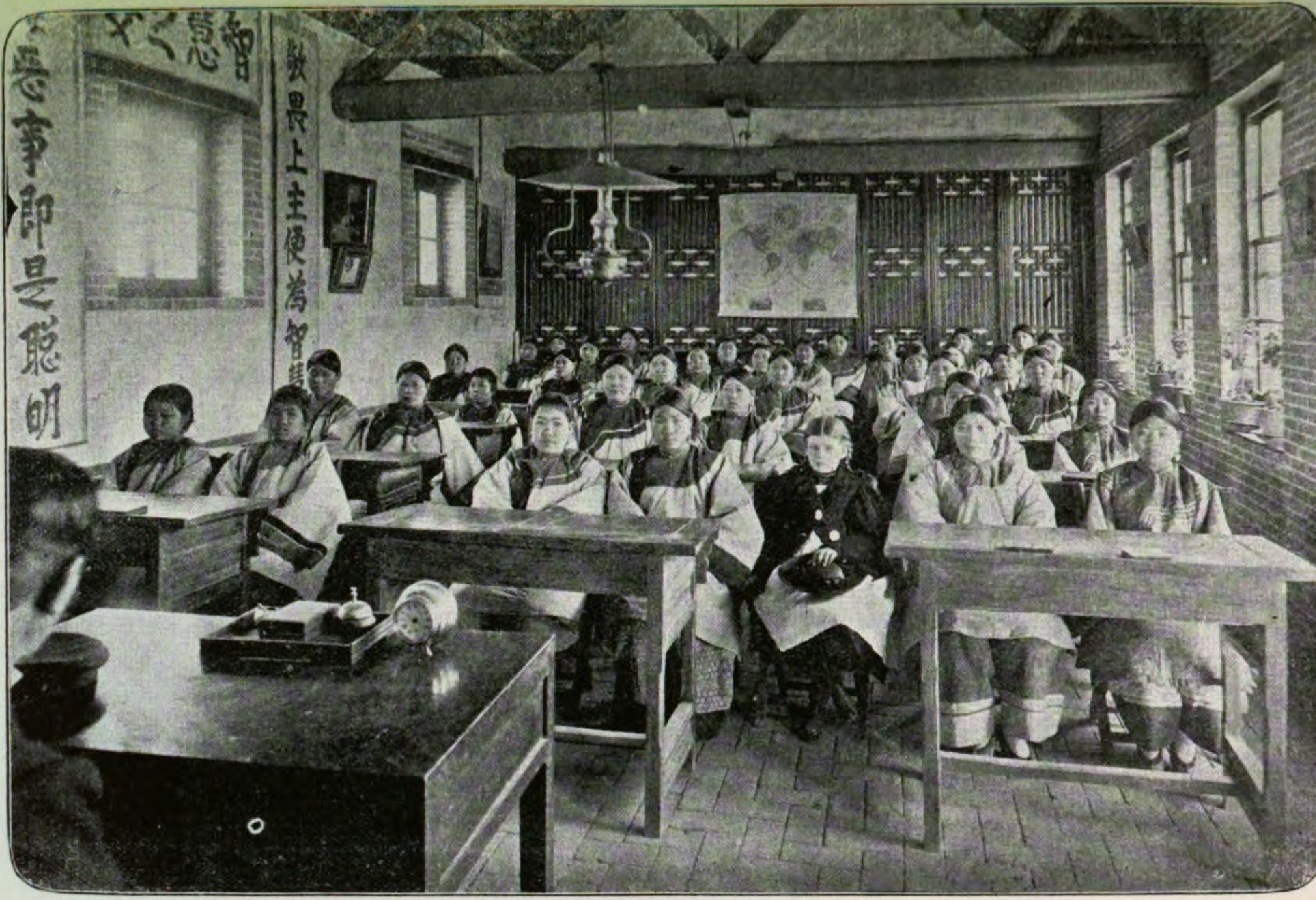
入會費金拾錢

本會役員
議長　男爵　本多副元
副議長　巖谷漣
委員長　万朝報英文主筆　山縣閑水
編輯長　文學士　中山久四郎
庶務監督　法學士辯護士　篠田治策

一ヶ月金七錢半年分四十錢一年分七十五錢郵券代一割增爲替振込神田支局宛
規則御申越無代進呈
第二期第一號一月一日發行

東京神田區千代田町
帝國少年議會
電話本局一四四四番

(乙の八)



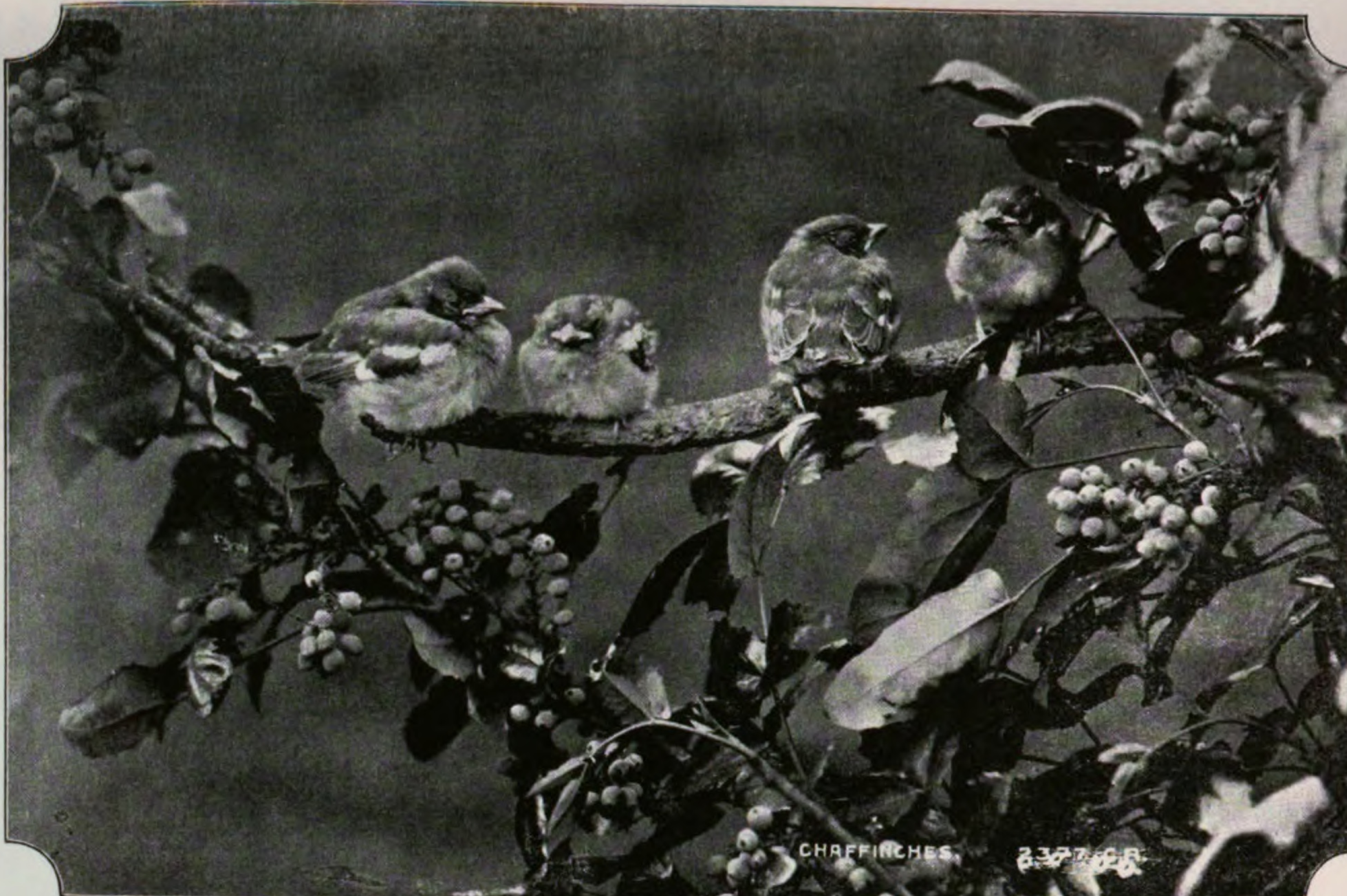
上海基督教女學校



巴里大博覧會內の婦人館



天の橋立　（光村利藻氏寫）



鳥　と　花



讀者御注意

明治卌四年新刊雜誌

誌名	發行日	定期増刊	一冊代價 本文二百四十頁	三ヶ月前金 増刊共四冊	半ヶ年前金 増刊共八冊	一ヶ年前金 増刊共十六冊	郵税 一冊
太陽	毎月一回五日發行	年四回	金參拾錢	金壹圓拾五錢	金貳圓貳拾錢	金四圓貳拾錢	三錢五厘
女學世界	毎月一回五日發行	年四回	金貳拾錢	金七拾五錢	金壹圓四拾五錢	金貳圓八拾錢	貳錢
少年世界	毎月一回一日發行	年四回	金拾錢	金三拾八錢	金七拾五錢	金壹圓四拾錢	壹錢
中學世界	毎月一回十日發行	年四回	金貳拾錢	金七拾五錢	金壹圓四拾五錢	金貳圓八拾錢	貳錢
文藝倶樂部	毎月一回一日發行	年四回	金廿五錢	金九拾五錢	金壹圓八拾錢	金三圓五拾錢	三錢
太平洋	毎月曜日	……	金六錢	十三冊 金七拾五錢	廿六冊 金壹圓四拾錢	五十二冊 金貳圓七拾錢	壹錢

御注意 本年より各誌とも紙數を増加し定價前金及び郵税に改正あり

博文館發兌

恭賀新年

合資會社博進社
社長 大橋佐平

專務理事 山本留次
仝 大橋光吉

博進社洋紙店
吉田龜次郎
山本九兵
富田新太郎
小和田兼吉
富谷松三郎
山中保二郎
上山太郎
羽根喜右衞門
太川文吉
笹田米藏

博進社工塲
宮崎仁助
澤田宮三
水谷景長
野口安治
竹尾幸次
福田熊三郎
矢部忠清
高橋正信
梅原文三郎
市川七作

近山喜代三
浦山鐸太郎
高橋鉄太郎
武市安衞
大内德亮
薗田三佐雄
大崎福太郎
深見豐二郎
内山長吉
田中安藏
宮田康弘

博進社大阪支店
坂井福太郎
菅熊作
高木久馬太
中村孝吉
藤井英三郎
松本作造
上村新之助
野藤佐吉
山本瀧三郎
田中玉太郎

（丙の二）

（丙の三）

黒田侯爵題字

長岡子爵題詩　末松男爵序文

大橋乙羽生著

増補 千山萬水

全壹冊洋裝袖珍頗美本

本書は辱くも九重の御覧を賜ふの榮を得、發售以來忽ち第拾版を重ぬるの運に至りたれば、今般更に大增訂を企て四國中國九州一帶の案內記六十四頁と其他風俗寫眞三十二ヶ所とを加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戲をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を增加し、一層釘裝を美にしたれば、之に優れる旅行案內はあらざるべし

正價金五拾錢　郵稅拾錢

文學士石澤發身君著

西伯利亞漫遊

白山黒水

全壹冊上製美本寫眞銅版十六葉入

著者は昨夏西比利亞遠征を企圖し朝鮮東海岸を經て浦潮港に上陸更に深く內地に入り滿北の野を跋渉する八百里滿州動亂の本源たる愛琿、ブラゴウエ、チエニスク、ハバロフスク、ニコリスク等の都市皆至らざる所なく歸來筆端に演說に西比利亞の新天地を紹介して學者の耳目を聳動せしめしは世人の熟知する所なり而して本書は實に氏が著はす所にして其政治經濟殖史地理人類社會より風俗探勝搜奇景網羅せざる所なく特に一方は烱々たる經濟眼を以て該國の財政を觀破し他方には著者の史的眼光を以て古來史家の明鏡域說に一光明を與へ上下數千歲過去現今の情勢を論評して西比利亞は東方問題の源泉たる所以を明にせり尙一篇西比利亞鐵道の過去現在未來を附し主として此大鐵道の現狀を詳にす

正價金四拾五錢　郵稅八錢

湖南内藤虎次郎君著

支那漫遊

燕山楚水

全壹冊洋裝美本口繪十六頁

北は燕京天津より長城に及び南は蘇抗金陵武陵を盡し九十日の舟車五千里の征途其間古蹟の憑吊あり光景の流連あり志士の談論あり美術の評隲あり史學の攷據あり風俗の觀察あり加ふるに支那の改革、利原の開發彼我の關係に就て實地踏査より得たる最新の議論を以てし著者が烱眼支那事情の研究に於て獨得の長を有することは其記事に議論に節々完實するを見ざることなし以て支那旅行案內記と爲すべく以て一種の東方時務經綸策と爲すべし

正價金四拾五錢　郵稅六錢

伊藤侯爵題字　土方伯爵題詩

大橋乙羽生著

續千山萬水

全壹冊洋裝袖珍頗美本

東洋古來第一の美本として內外の喝采を博したる千山萬水は、其記する所の地、東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして東海畿內中國西南より北陸諸州も跋渉せしめぬ、是に於てか續編あり、之を初編に比するに、經し所廣きに從ふて寫眞に上れる絕景亦頗る多し。裝幀の美麗亦優るとも劣ることなし。

正價金五拾錢　郵稅拾錢

(丙の五)

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

豫約大出版

實業寶典

戸田翠香君編

男爵金子堅太郎君題辭

全壹冊洋裝上製
背皮金文字入紙
數二千ページ四
六判頗る美本
正價金參圓
目方四百五十目

豫約價（前金拂込）**一月中拂込金貳圓四拾錢**

豫約期限三十四年一月三十一日限り〆切後直に正價に復す

實典の特色

斯書は著者が明治初年以來、勸業寮博物館及開拓使物産取扱所等に歷仕し、親しく實地に就きて調査し以て一の物産史を編み又其餘錄を纂めて商品學として出版せしを端緒とし爾後各地に歷遊して其資料を收集し且つ其異同を質し屢々校訂改竄を加へ遂に積んで一大冊子と成れるを以て其編纂を辭書に倣ひ語每に各項に分ちて丁寧簡明に解說を附したるものにて普通辭典又節用大全等に載する所のものは更なり雅語俗語古語等も諸書を參考して補正を加へ以て脱漏なきを勉めたり特に斯書の出色は單に語の解說に止まらず尙進んで植物に於ては品種、播種、栽培、適地、收穫、製造、料理、成分、貯藏等に分ち動物に於ては品種、形狀、飼育、繁殖、料理、成分、貯藏等に分ち鑛物に於ては品種、採掘、製造等に分ち産地、海外輸出等に至るまで悉く解說を加へ例へば衣服の目に於ては東西兩樣の裁縫法を載せ、料理の目に於ては有ゆる料理法を解き、染物の目に於ては東西二樣の染色法を掲げ、茶の湯、生花、音樂、其他の遊戲に至るまで詳密に起原沿革考證等を附記したれば一本にして殆ど實業百科の誇を網羅し一度繙けば立ろに萬能師と爲るを得べく苟くも商工農の業に從ふものは勿論家政を執るもの、參考として必らず各家に一本を備へざるべからざる最良有益の大寶典たるを鼓吹するに憚らず請ふ陸續豫約御申込あらんことを、

豫約出版元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の六）

袖珍美本短篇小説

江見水蔭君著

戀

戀愛小説家としての江見水蔭氏が戀に關する小説數十種を合せて一卷とし附録としては氏が得意の詩篇數十種を添へたれば、艶は固より艶なりと雖も、濃を避けて淡、俗を捨て雅、情緒の纏綿は春山の靄霞、靄々の内に猶ほ認むべきは戀の本体なる、神聖にして毫も卑猥なる文字を挟まず、されば戀する人も戀せざる人も最愛の友とせられんことを。

全壹冊洋裝袖珍紙數六百頁
正價金參拾錢郵稅六錢

鶯亭金升君著

新撰落語 福

サア出ました〱、一休曾呂利も舌を捲て逃げ出す、金升君が新作の落語、おまけに滑稽小説まで附て居て二百五十餘種ズラリと並んだ玉揃ひ見れば誰でも笑はぬ者はなく笑ふ門には福が來る、福の神の嫌ひな人は御覧なさらずとも宜しいがお好きな御方は試みにお覧あれ法螺をふくのふゝくとは大違ひで御座い升。

全壹冊洋裝袖珍美本紙數三百頁
正價金參拾錢郵稅四錢

江見水蔭君著

星

天界の星は或る意味にて數の無窮を現はすが如く人爲の星は江見水蔭氏が思想の無窮を現はすものにて卷中脚本あり短篇あり時代物あり滑稽物あり冒險談あり訪問録あり文士口演あり材料の豐富なる實に闇夜の星も啻ならず其能く北斗星の如く文海航行者の指點とならんは決して誇大の言にあらざるなり。

全壹冊洋裝袖珍紙數六百頁
正價金五拾錢郵稅八錢

巖谷漣山人著

笑

此書題して笑といふも思出し笑の罪深きにあらず世辭笑の追從も學ばず虎溪三笑の禪味もなければ時平が七笑の惡きもせず畢竟後となきニタ〱笑ひ、一人よがりの馬鹿笑に過ぎねど若し夫れ世間の冷笑にあひなばやがて作者の苦笑となるべし、兎角は福の神呼出しの呪笑へたまへ讀みたまへと申す

全壹冊洋裝袖珍紙數五百五十頁
正價金四拾錢郵稅八錢

博文館發兌

（丙の七）

少年世界一月增刊

第七卷 第二號

一月十日發行
定價十錢郵稅一錢

春遊び（はるあそび）

口繪 寫眞銅版畫

- ○小兒春遊の圖
- ○春水游禽の圖
- ○ナポレオン一世と其愛兒
- ○ナポレオン一世戴冠式
- ○トラフハルガー附近オステンド埠頭
- ○オートルロー大激戰
- ○オートルロー古戰場紀念碑
- ○ベルサイユ宮殿
- ○ナポレオンの最後と墓所



記事

- ●春遊び……江見水蔭
- ●春興遊戲……志岐守二
- ●算術遊び……竹貫直人
- ●正吉物語……石橋思案
- ●新勇戲……木村小舟
- ●母の說諭……生田葵山
- ●西洋物の始……胡蝶生
- ●炭の鋸……泉鏡花
- ●猛獸の愛……德田秋聲
- ●讐討少年……大澤天仙
- ●白薔薇館……福田琴月
- ●班と熊……谷活東
- ●くらべ弓……泉斜汀
- ●出世大黑……猪波曉花
- ●蜘蛛角力……湖山人
- ●椎の木……藤井紫明
- ●裸の王樣……西村渚山

發兌元 博文館

（丙の八）

多田親愛先生筆

貫之

袖ひちてむすひし
みつのこほれるを春
たつけふの風
やとくらん

俊成

けふといへは
もろこしまても
ゆく春を
みやこにのみと
おもひけるかな

年始の御賀申上候
早速うかゞふべきはずに
候へども来客たえまな
く御無沙汰に相成申候

御両親様御子様方益

御機嫌よく御暮遊あ

そばし免でたくぞんじ候

近きうちに参上いたすべく候



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆



野口小蘋女史筆

新文藝

編輯主任　久保天隨　八杉荔舟　大谷繞石

第壹卷　第壹號　一月一日發行

挿畫　淸淨受胎の圖（ムリリオ）　佛國名優クレマン及ビグノーの圖

目次

二十世紀の和歌壇……八杉文學士
ドーデーを論ず……淺野文學士
『獨眼龍』の卷首に題す……久保文學士
ロングフェロー評傳……大谷文學士
ムリリオ……上田文學士
フリイドリヒ、ニイチエの文章論……登張文學士
ギヨキテが支那小説評を讀む……飯田文學士
鳥獸比喩譚に於けるサンスクリット根元……國府犀東
五元集に引用せる謠曲……小嶋無角
山かげの道芝……久保文學士
風の賦……笹川文學士
劇詩ウヰルヘルム、テル……中内文學士
天馬の歌……八杉文學士
鐵窓物語……小日向是因
三ロの旅……大谷文學士
戀づくし……沼波瓊音
斷篇……中内文學士
に戀……齋澤古雪
アビサアグ……小嶋無角
埋香塚……大町文學士
落梅集……與謝野鐵幹
秋碧樓詩叢……久保文學士
新年詩……犀東、質軒
歌十首……尾上柴舟
紅葉餅……たねのり
筑波餘影……筑波會
秋風吟……紫生
利根川……星[illegible]人
◉評論○勢力の濫用○前世紀の國文學○新世紀の國文學○講談文學上現代語の修養○詩歌音調の研究……
●消息○○晩翠氏、綠雨氏の手翰……
◉批評○○成美全集○歐山米水○星……

本誌体裁四六二倍

毎月壹回一日發行

定價●一册金十二錢●六册前金六十六錢●十二册前金一圓二十錢●外に郵便税一册一錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す

但し投稿は本郷區西片町十番地にノ二十一號新文藝編輯所へ宛送附の事

發行所　東京市神田區仲猿樂町　新文藝社

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

(了の二)

恭賀新年

舶來 帳簿用原紙併ニ附屬品直輸入販賣廣告

右帳簿用原紙ハ多年研究ノ結果極適當ノ品新輸入仕候

一 上等帳簿用原紙　各種
一 帳簿用綴糸　二號ヨリ四號（英國クリートル會社製）
一 帳簿用　ヘトバン　〇號ヨリ四號迄各色取揃有之候
一 帳簿用　脊皮類　各種
一 帳簿用　クロース　各種
（右二種）英國バーレー、ロバーツ會社製
一 活版石版用　各色インキ（米國シヤタツク會社製造）
　一斤入　スペシヤル一號　スペシヤル二號　D E F G H J
　色合ハ何色ニテモ一切取揃有之候
　外ニ樽入黒インキ三十二斤、六十斤、百廿斤、百六十八斤、有之候

右今回各製造元ト特約ヲ結ビ直輸入仕リ尚此外内國製紙會社ハ勿論歐米各製造元ト特約ノ印刷紙其他ノ洋紙類廉價ニ販賣仕候間多少ニ不拘御用向被仰付度奉希候見本御入用ノ方ハ御一報次第送呈仕候

直輸入元　東京市神田區錦町一丁目十番地　(博) **博進社洋紙店**（電話特本局一六〇三番）

直輸入元　大阪市大手通二丁目三十番地　(博) **博進社大阪支店**（電話特東四四五番）

（丁の二）

佐々木弘綱君
佐々木信綱君 校訂

毎編高貴諸名門題辭序文

日本歌學全書

定價一冊金貳拾五錢 郵税壹冊金六錢 紙數一冊四百廿頁

全部十二冊

(第一編)古今和歌集●躬恒家集●友則家集●貫之家集●忠岑家集●(第二編)後撰和歌集●元輔家集●順家集●能宣家集●天德歌合●(第三編)拾遺和歌集●紫式部家集●公任家集●清少納言家集●(第四編)後拾遺和歌集●相模家集●經信卿母集●高陽院歌合●(第五編)金葉和歌集●詞華和歌集●堀川百首●(第六編)千載和歌集●永久百首●忠度朝臣集●後京極自歌合●(第七編)新古今和歌集●自讃歌●鴨長明集●(第八編)林下集●源三位頼政集●山家集●金槐集●(第九、十、十一編)萬葉集●(第拾二編)悅目抄●無名抄●歌かたり●にひまなひ●新學異見●歌ぶくろ●調の直路

博文館發兌

移轉

拙者今般『麴町區上六番町四十三番地』に轉居致候間此段江湖諸君に謹告す

一月

大橋佐平

博文館發行圖書目録 (改正)

右御入用の方は郵券三錢封入御申込あれ

博文館小賣係

唱歌遊戲

旗野士郎、佐々木信綱、江見水蔭先生作歌
日本體育會遊戲科講師白井規矩郎作曲

全一冊 定價金七錢 郵税二錢

東京京橋區弓町十二 松邑三松堂發兌

農科大學 志岐守二君著

室内遊戲法

本書要目

●劍舞 ●歌曲
●樂器遊び
●カルタ遊び
●學術遊び
●室内雜遊戲
●車座遊戲

全壹冊 袖珍繪表紙頗美本 正價十二錢 郵税四錢

發兌元 博文館

(丁の三)

卷頭

内閣總理大臣侯爵伊藤博文君題字（石版眞蹟）
橋本雅邦翁筆智慧文珠の圖（極彩色木版畫）
寺崎廣業君筆上﨟普賢の圖（極彩色木版畫）
中村不折君筆放牛田家の圖（極彩色石版摺）
光村利藻君撮影雪の金閣寺（巴里博覽會金牌逸品）

一月一日發行

新版

大橋乙羽生著



山水建築 寫眞銅版 船來光澤紙
風俗美人 百五面 彩色八遍摺

全壹册
和洋折衷美裝
正價壹圓五拾錢
郵稅拾錢

菊版五十六頁挿入

旅行癖美術癖を以て知られたる乙羽子今春遠く世界漫遊を思ひ立ち、歐米の山水に周遊し、各國の都市を觀察し、更に巴里の萬國大博覽會を視、ライプチヒ連甍の大書肆を歷觀して書帙の絕美絕精なるを歎じ、其の美術の發達せるに感じて我出版業の幼稚なるを慨し歸來見聞する所を記して歐山米水の著あり、繪畫、彫刻、寫眞、製版、印刷、製本の技に至るまで總て第一流の名工を選びたれば其美其精、獨り我が邦未曾有なるのみならず之を歐米の書店に陳するも必ず遜色なかるべきなり、卷中挿む所の寫眞版一百餘圖、璀璨人目を眩す、讀者僅々一圓五拾錢を投じて一本を購はば、坐して世界を周遊すると齊しく、著者が萬金を抛つて得たると同一の見聞快樂を博するを得、嗚呼亦廉の至なるかな。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丁の五)

總ふりがな附

◉楠田産科婦人科病院長楠田謙藏述◉鈴木准二編

通俗婦人の衛生
附小兒の衛生

此書は婦人の月經時、婚嫁時、妊娠時、分娩時、産褥時並に固有の疾病時に當りて注意すべき事柄を漏すことなく記述し之に附するに小兒の保育上の注意疾病時の注意を以てしたるものにして婦人は此記述に準じて自愛するときは庶幾くは其健康を保持し且愛兒を適當に覆育することを得ん此書に類したる名を負せて世に出すところの書冊に比すれば其所述に於て其行文に於て其優美にして卑猥ならざる點に於て少しく撰を異にするところあるを信じ敢て貴婦人方に向て其篋中の藏本たらしめられんことを希望するものなり

◉◉正價四拾錢◉郵税四錢

東京市本郷區龍岡町卅四番 吐鳳堂

●速記法 自宅獨習生募集 二ヶ月卒業 月謝三十錢

●規則入用者は郵券二錢を投すべし

東京市下谷區徒町三丁目九十五番地 速記學專修所

恭賀新正

神田千代田町 廣告大取次所 博報堂

增酒資料（さけふやすもとで）

は常館發明の清酒倍增法を傳習せよ此清酒倍增法と云ふは釀造化學の作用により普通の清酒を座に倍增し（即ち壹石の酒は直に貳石となる）にする法にて其味ひ、醉の度かをり等總て元酒に優るとも毫も劣るとなく製造元費は極めて廉價に出來上り盛暑中決して變味せず衞生上無害の新法也故に酒類營業者は一刻も早く本法を應用し一擧して**大利益**を占得せよ眞に營業上一日も缺く可らざる確實大有益の秘訣也…是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲するゝ確證す望の方は郵券四錢相添申込次第詳細なる傳習手續摘要錄を送呈す

申込所 東京神田區五軒町 日本授產館

（無料進呈）

新年第一の吉報

新奇發明、至大有益、一擧して**大金儲**をなし得べき新案を詳記せる六拾ページの雜誌（即ち摘要錄）壹萬部を限り無代進呈す希望者は郵税四錢送れ直に送呈すべし速に見よ就業致富の良方針

東京市神田五軒町拾九 日本授產館

謹告

女學世界廣告に依り廣告主と取引應答遊され候節は御序を以て其旨廣告主へ御申添へ被下度候

博文館廣告部

（丁の六）

●月やく忽ち下る確證藥●

月經調節 調經丸

壹週分藥價送料共六拾錢●貳週分同上壹圓拾錢

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止にても必ず程よく下す特効あり、但し此藥は多量に用れば**流産**する恐れなきに非ず故に姙婦に飲むを禁ずる程なれば毒血惡血を一掃すること請合なり▲本劑壹週分を用れば貳參月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又貳週分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず程よく下すこと確證す▲本劑定量を用れは**毒血惡血**を流すが如く滲らひ淸血を加へ身躰の健康を保ち元氣を増し勢を加ふ▲總て婦人の病の多くは月經不順に基くものに付月經不順より起る氣鬱、頭痛、眩暈、逆上、かたこり、胸わるき手足腰ひゑ、白血、長血、血塊、血ぶとり等の諸病に用ひて必ず根治する無類の特効あり‥實に婦人病の藥王**(注意)**月やく不順或に止るを豫防するには毎月壹度宛本劑壹週分を服用し置けば決して**止ること無き**を確證する所なり……婦人諸君記憶せよ……

(證明)前文御免却説私妻義永々月經不順閉止症の爲め大に困難致し各地病院の治術を受け候も更に効なく誠に困り居候處去月貴店專賣の調經丸貳週間分服藥致させ候に忽ち其効を奏し最早全快に致り候間此段御厚禮申上候也次に私近傍の婦人愚妻の全快を傳聞し是非共貴藥取寄せくれとの依頼に付甚御手數樣ながら貳週間分大至急御送藥被下度別紙爲替券相添へ御注文旁々御謝禮申上候也との書を寄送せしは熊本縣玉名郡高瀬町美並健次郎氏なり其他如斯感謝狀は續々到着して山の如し妥に略す



わきが 根治確證藥 の新發見!

従來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と断念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を断絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治御謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割増しの事◎着金の速刻送藥す▲(注意)本劑の大盛々羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

(丁の七)

專賣 (東京市神田區五軒町十九番地) 日新館藥房

女學世界

明治三十四年一月五日發行

第壹卷　第壹號

紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

發刊の辭

一國の文明とは、男女及び小兒の發達の謂なりとは、西人の說ける所なり。一聞すれば、他の奇なきが如くなれども、能くこの男女小兒の語を味はざるべからず。教育はひとり小兒の發達のみを圖るべきものに非ず。男子一般の發達を圖らざるべからず、更にまた女子一般の發達を圖らざるべからず。かくて國には良民あり、家には賢母あり、學校、社會、家庭の三教育具備して、一國の文明玆に初めて完全なるを得べき也。

我國今日男子及び小兒の教育の發達せるに比して、女子の教育は大に劣れりと言はざるべからず。最近の統計に據るに、中學校の數は、公立私立あはせて百五十七、高等女學校の數は公私合せて、僅かに二十六に過ぎず。學生の數は、中學校が五万二千六百七十一、高等女學校が六千七百九十九也。固より先進の文明國と比較するは無理なることなれど試みに今より三年前

の統計によりて英國の中等教育の狀態を見るに男子のみの學校千九百五十八其學生の數十二万二千三百十三女子のみの學校三千百七十三其女學生の數十一万四千二百三十九男女混交の學校千七十八其學生の數三万九千九百九十二あり。全躰の人口は、我國の方が多き位なるに、中等教育を受けつゝあるもの、數、非常に少なきは、今日我國の文化の程度、止むを得ざるものありとするも、英國にては、男女殆んど優劣なきに、我國にては女生男生の八分の一に過ぎず。其懸隔も亦甚しと云ふべし。何ぞ女子教育の振はざるや。

女子が教育を受くれば、生意氣になり、おてんばになりて反て女子の品性を墮すとは、新教育を受ざる人達の憂ふる所なれど、全くいはれなき事也。教育が智育にのみ偏せし頃には、かゝる弊害なきにあらざりしが、今や智育と共に德育に力をつくすに至れり。智德兼備して女子の發達を圖らむとするの時代也。今の時に當り、女子教育を非とする者は、固陋の見も、亦甚しからずや。古來英雄の子には不肖の人多けれども、賢人の母は、必ず賢女也。孟子の母、小楠公の母、などの例は引くまでもなし。現に今日の賢人の母を見ても、わかると也。女子は實に家庭教育の管理者也。其賢不肖、學無學德不德は直に家庭教育に影響す。これ賢人の母の必ず、賢なる所以也。女子はまた家政の主配者也。古人故に曰く、家貧にして良妻を思ひ國亂れて良

相を思ふと。一家の經濟よく整頓せる家は必ず賢妻ある處也。然らざるものは之に反す。女子は實に家を治め、夫を助け、子を育つる大任を有する者也。其敎育を盛にせずして可ならむや。

敎育はひとり政府にのみ依賴すべきものに非ず、又學校のみに依賴すべきものに非ず。弊館玆に本誌を發刊せむとするは、方今の女子敎育の缺ける所を補はむとするの微衷に外ならず。遍く女子敎育に經驗ある諸大家の寄稿を仰ぎ、あらゆる女子に必要なる事柄を網羅し、學を進め、智を開くと共に其德を淸淑にし、其情を優美にし、家政に通曉せしめ、女子に必要なる藝能を自得せしめ、以て賢母良妻たるに資せむと欲す。日本には、日本女子の美德美風あり。妄りに外國に模擬すべからず。また女子は學藝のみに偏すべからず、良妻たり、賢女たり、家政の主配者たるの覺悟、最も必要也。これ本誌の意を致す所也。願くは遍く日本の家庭に入りて、其友となり、其忠告者となり、其慰籍者となるを得む。

女學世界の發刊を祝して　公爵母堂　毛利安子

くにのためわか身のためぞおこたらず
まなびのみちをつくせをとめ子

女學世界の發刊を祝して　下田歌子

ことの葉の花のかけなるひめ小松
千代のかさしと誰れか見さらん

としく〳〵に若緑して老松の　侯爵夫人　鍋島榮子
千代へんかげのまるき君哉

末遠く榮えむ君のためしには　伯爵夫人　柳原銀子
野邊の小松を引くべかりけり

老木とも見えぬ松かな年なれど　伯爵夫人　庭田長子
色も變らず若みどりして

論説

女子の三大育に就て

西村茂樹

近年我國に於ても、女子のことに關しては、或は其敎育或は其道德に就て、種々の論者起りて種々の議論の唱道せらるゝを見る。是れ文運の進步として邦家の爲め大に喜ぶ可きことなり。予も女子敎育に就ては平生懷抱せる所あり、而れども唯だ漠然として女子のことを論ずるより是を五項に分ちて說くの可なるを想ひ居れるもの。曰く、一に女子の天然法、二に日本の女子、三に女子の敎育、四に女子の德義、五に女子の風俗と爲す。而して今皆な之を說けば、甚だ冗長となるを以て茲には最も肝要なりと信ずる第三項の女子の敎育に就て聊か鄙見を陳述して大方に示さむとす。是れ女子の敎育は前の二項と後の二項とに通じて肝要措く可からざるものなるを以て特に之を擇むで說かむとする所以なり。亦た女子の敎育中に於ても先づ世間にて大問題となせる德育より說かむとす。女子の德育は現今我國にては右と左との兩極端

説が出て居れり。一の極端は女大學主義にして、他の極端は俗に云ふ西洋のお轉婆主義なり。前者の女大學主義は漢學者主として之を唱へ、幷に現時の老婦女等之に和し、後者は勿論西洋學者殊に基督敎を信奉せるもの之を唱へ居れり。予は元來を云へば女大學主義を贊成するもの、何となれば**女大學**は言ふまでもなく儒敎を飜譯せる如きものにして儒敎の主義は素より秩序を重んずるものなり。既に秩序を重んずる上は總べての物は同時に併び立つ能はずして、勢力のあるものを重くし、其のなきものを輕くする片端となるは理の當然なり。若し實際に女大學の主義行はるれば、一家の平和、社會の秩序は之に由りて保つを得べし。其上に彼の女大學は男子に取りては大なる利益あるを以て、男子と生れしものは何人も之れに贊成して可なりと思ふ。理窟より云へば予は彼れを贊成するも、只奈何せん今日は實際に之を行ふ能はざるに至れるを。何となれば時勢の進歩が彼れを實際に行ふを許さゞるを以てなり。昔し貝原翁の彼れを認めし時代は彼れにて適當なりしも、文物の發達せる今日に於て實際彼れを行はむとすれば勢ひ其時代に現今の時勢を溯らしめざるべからず。而も此の天地自然の機運に伴ふて進歩せる時勢を忽ち二三百年の後に戻らしむるは人力の爲し能はざるとなり。**是故に女大學主義は理窟に於て贊成なるも實際は到底之れを行ふ能はざるを以て遺憾**

なから之を見棄てざるを得ざるなり。

亦た一方の西洋主義は二千五百年來我國に無き所の風俗を直に行はむとするもの、故に古來よりの秩序習慣を殘らず變改せざれば亦た之を行ふ能はず。是を以て一家の平和に取りては頗る危險千萬なる主義と言はざるを得ず。加ふるに西洋の說に從へば女尊男卑と成らざるべからず、始終男子か外出するにも女子のお供をせざるべからざる譯にて是れ殆ど女子の奴僕と爲るもの、這は男子となりては便利の惡しきことにて甚だ耻づべき次第なり。西洋の如くに往昔より斯かる習慣あれば不可なきも、日本は古來秩序の立ち過ぐる程嚴格なるに、今何等の刺激をも受けずして之を變改するは遺憾なりと言はざるを得ず、抑も亦た男子の位格上より見るも太だ殘念のことなり。

世間の西洋風の女子の德育を論ずるもの、往々奇怪なる說を爲して曰く、彼れに在りては女子が皆な健氣に働くを以て富國强兵なり、故に女子を彼れの如くに養成せざれば國も亦た彼れの如くなる能はずと、一たび西洋の歷史を讀むで深く考察すれば、彼れの富國强兵は全く女子の力にあらざることは、彼れの經濟歷史を見るも明かなり。彼れに在りては一躰の男子が東洋人よりも世界の形勢を知ること早く、且つ豪膽に、且つ忍耐力强し、之れが淵源となりて今日の富

強となりしもの、奈何にお轉婆の女子を多く造るとも決して富強とはならず又た實際に適はざるとなり。而して世間にて女德を喋々するものは、奈何なる性格を有せる人なるか、予は能く之れを知らざるも、他の技藝と異りて道德のみは其人自身に行はれざるを、况して人に行はしむる能はざるもの。議論は尤千萬なることを述べあるも、其人自ら道德を行ふ能はざる人か之を喋々するは、議論として不可なきも之を實際に行はしむる能はざるの不都合なることあり。且つ亦た予の見る所を以てすれば、女子の教育、女子の德義を論ずる資格を有せざる人が多く此等を論じ居れり。その資格なきは如何なる人なりやと云ふに、先づ第一に妻のなき人にして、既に妻なければ亦た子なし、斯かる人か女德を論ずるも實際の經驗なきを以て、畢竟は空論にして取るに足らず。次に亦た妻の外に妾を蓄へ其他不行跡にして藝妓抔を買ふ人は、己れの妻を處理する所以も知らず、妾藝妓を玩弄物とするのみにして、素より女子の德義を知らざるもの、其の如何なる人の口より出づるも一切耳を傾くるに足らざるなり。今ま一は世間にて女子の教育乃ち女子の德育を喋々する人は箒にて掃き桝にて量るほどあるも、全躰如何なる人間を標榜として如何なる人間を造らむとするか、觀念の玆に及べるものは殆ど稀なり。先づ何人の如きものを造れば可なるや、一向標準立ち居らざるなり。我國にては紫

式部を造らむとするか、或は巴を造らむとするか。若し然りとせば、實際道德を行はざる人が、唯だ理想として數百年間未だ行はざる地位までも行はしめむとするものにして到底能はざることとなり。苟くも女子の教育を論ずるものは、先づ斯かる人物を造りたし又造らざるべからずと、標準を立てざるべからず。若し一人にて不可ならば、此の人と彼の人とを鑄合せたるものと爲すべし。然れども二人の特性と長所とを併せたるものを把りて一人に望むも隨分六ヶ敷ことなり。

要するに今日唱道せられ居る議論は餘まり高尚に過ぐるなり。亦た今までの西洋風の議論を爲す人の精神は、西洋の學者碩德の說を採用せむとするにあるか。或は現今行はれつゝある彼國女子の風俗を其儘に取らむとするにあるか。論者の多くは後者にして、彼國の學者某に斯かる說あるを以て之を採ると云へるものゝ如きは未だ見ざるなり。予が臆面なく斯く云ふ所以のものは、西洋にても學者の議論と、一般の風俗とは大に徑庭あるなり。學者の議論の多くは西洋今日の風俗を慨嘆し居れり。彼れの學者の議論は隨分立派なるを以て之を模範とすべきも、唯だ我國今日の議論は、彼國にて今日行はれつゝある風俗を採るか如し。若し然りとせば、大に熟慮深思を要するなり、這は如何なる國にも長所あり短所あり、又た彼れに適し

て此れに不可なるものあるを以て。西洋にて美風とする所も之を東洋に持ち來れば然らざるもの多し、この故に風俗を以て定規と爲す能はざるなり。況して彼れにて既に不可なるものを我れに採るか如きは誤れるの甚だしきもの。元來日本の女子と西洋の女子とを歴史上より比較すれば、我れの女子は敎育の結果か將た天然か、太だ美はしきことあり、乃ち親に孝行、夫に貞節、人に對して從順なることにして、此等の道德は我れの彼れに勝ること萬々なり。彼れと我れとの長短を比較せば、我れには右の如く己れの身を修め家を齊ふことに長じ居れり。之を彼の飜譯語にて云へば消極的のことに長ずるもの、佛語にて云へば小乘に類するなり。只その先きは不可なり、その先きとは社會公共の爲めに健氣に働らきを爲すことか欠け居れるなり。社會公共の爲めとは此れ亦た飜譯語の積極的にして佛語の大乘が欠け居れるなり。彼の英國にて始めて看護婦となり黑海まで旅行せしナイチンゲール杯の事業、亦た印度の無學の子供を敎育せむとして學校を創立せしユルソン夫人杯の爲せる事業の如きは是れ乃ち積極的にして、是等は我れの到底彼れに敵せざる所なり。斯の如く東西各々その長所と短所あるを以て、予は是の東西の兩極端を調和せむとの意見を平生より懷抱せるもの、その調和の仕方は己れの一身を修むるは古來東洋に有せる孝行、貞節、從順の三ヶ條にて可なり。只だ此の

上に積極的を新に加へて國家、社會、同胞の爲めに先きに伸び〳〵する道德乃ち佛語の大乘を敎ゆれば全く遺憾なきなり。今ま我國の西洋主義の人の云へる如くに、親に孝行、夫に貞節、人に從順なる點を捨てゝ顧みず、男子を眼下に見、肩にて風を切り意氣揚々たるものは、是れ消極を捨てゝ積極のみを取るものにして予の甚だ採らざる所なり。而して積極的の仕事は世上の進歩と伴ふもの、世上か進歩せず一家の組織か變改せざれば實際六ヶ敷ことなり。若し今日の女子にして消極的道德は昔しの頑固として捨つれば、その節操は我國古來の女子に及ばず、さればとて亦た西洋女子の活潑にも及ばざるの恐あり、是れ深く注意すべきことなり。予の今ま一の流行論者とその見を異にせるは、凡そ女子の德義にて最も必要なるは一家の平和を計ることにして、其他は殆ど見るに足らずと爲す點なり。一家の平和を計ることは、西洋とても然るべきことなれど、我國は古來より殊に之を必要とせるものにして一家の團欒は力めて求めざるべからず。今日我國の家族の狀態を見れば、舅姑、夫妻の不和よりして此の大功なる一家團欒は動もすれば破られ居れり。娵と舅姑の不和は後者か無理難題を云ふより起れるもの十の八九に居れり。夫婦の間の不和は先づ一概に云ふべからざるも、大抵は夫の不品行にして資産を蕩盡し藝妓を買ひ妾を圍ふ抔のこと起るもの平穩なる思ひにて考ふれば乃

ち斯く論斷せざるを得ず。而るに從前の我國の敎育を尊ぶ人も、西洋主義の敎育を唱ふる人も、多くは之を云ふを知らずして只妻のみを責めて之を敎へむとす。是れ俗に謂ふ喧嘩兩成敗を爲さずに片手落ちの判斷なり。今日たとひ日本風の女大學主義にて消極的を執るも妻のみに責任を負はしむるは甚だ當らざるなり。以上にて德育のことを終れり、此より更に智育を説かむとす。

○○智育は古來我國にては今日の如くに完備せざるを以て、這は悉く西洋より採りて毫も差支なし。唯だ彼國の敎育の發達と我國のとは一の相違あり。彼國の敎育は社會の進歩に伴ふて發達し或は詳細に或は廣大と爲りしもの。我國は維新の後、須臾くの間は、社會の狀態依然として、女子の敎育は封建時代の儘なりしに、一朝西洋の敎育を可なりとするや、彼國の敎育その儘を皆な移し來れり。然るに社會百般のことは未だ甚だ卑きに、敎育のみ高きを以て喰ひ合はざるなり。先づその一例を擧れば、彼國にては家庭にても學校にても、何事も腰を掛けて爲す風習なるに、我國にては家庭には疊の上に座する昔の儘なるに、學校にては椅子に憑るを以て、學校にて爲すことか無益にはあらざるも、家庭にて爲すと異るを以てその力の入れ方か稍々異るなり。百般の情態總べて此の如し。勿論今日は社會の進歩と學校敎育とは大いに

接近せしも兩者の間その喰ひ合はざる點尙ほ尠からず。而して予の見る所にては今の兩者喰ひ合ふ如何は暫らく措き、女子の敎育は上中の二者に分つを以て其宜しきを得たるものとす。乃ち上流の女子には美術風のことも仕込み、中流以下は專ら實用的のことを仕込むこと是れなり。是の二者は何れも必要なるも、さればとて双方共に採りて敎ゆることは到底爲す能はざるを以て之を分つか可なり。謂はゞ前者には音樂、抹茶、挿花等をも敎へ、後者は生徒としても女房としても主として裁縫、割烹を敎へざるべからず。併しながら前者なりと雖も之を廢する譯には行かず、唯だその力の入れ方を異にせるのみ。亦た習字、禮節、算術、物理、化學、博物は兩者を通じて敎へざるべからず、この中習字と禮節とは最も力を入れて爲さしめざるべからず、以下は我國今日にては大畧にて可なり。只だ玆に大に注意せざるべからざるは、裁縫と割烹のことなり。何處の學校にても此の二者に就て敎ゆる所が太だ立派にして各自の經濟と調子が合はざるなり。學校にては牛蒡大根等の料理を敎へず云はゞ新鮮なる鯛のみなるを以て殆ど下手なる割烹店を眞似るが如し。我國にては裁縫とても我輩の家庭位にては古切れを次ぎ合せざるべからざるに、學校にては皆な新らしき切れのみを以て敎ゆるを以て、家庭に歸りて實際の仕事を爲すに方りてその學びしことが甚だ緣遠くなる恐あり。併し學

校にて敎ゆる所も敎師の敎授法次第にて各自の經濟に適合することゝなるなり。この外に育兒法、看護法は皆な何程か知らざるべからず。今日にては此の二者は理論に偏し居れり。之を例するに年若き未だ子なきの亦た老ても子なき人乃ち子を養育せし覺へなき人が育兒法を敎ゆるが如きは、決して適當なりと云ふべからず。子を養育せし覺へなき人が西洋の飜譯法をその儘に敎ゆる育兒法には滿足すること能はざるのみならず却て往々弊害を見ることあり。看護法も亦た然るとながら此は別に資格を論ぜざるべし。而も風俗、生活、經濟の度を異にせる我國にて、西洋の飜譯法に依りて敎へ來れる前の二者は宜しく參酌せざるべからず。思ふに我國の女子敎育は社會一般の進歩に伴はず、而して之を活用する力なきものが敎育の任に在るを以て、よし三年五年學校にて學習するも遂に實用とならざる不都合のことあり是れ豈に遺憾ならずや。亦た躰育に就ては、我國今日の狀態を見るに、我れと西洋とは風俗習慣を異にせるを以て、我れにてはダンベル若くはキウカンは一見不風流となるなり。我れの女子の特長は優美なる所にありて、その活潑なる所は到底西洋に敵せず。躰操も亦た歐洲に行はるゝものを生擒せし故に、學校と家庭とに於て衝突を來すことあるを免れず。學校にては活潑に運動せる女子も、一たび家庭に歸り來れば茶の湯を爲すにも、襖を開くにも手を疊

に附け、また茶を點ずるにも幾度か低頭せるにあらずや。また今日尚ほ或る一部の上流社會には小笠原流の行儀作法は行はれ居れるなり、此等は學校の躰育と家庭の行儀と相容れざる點なり。禮節は西洋にても八ヶ敷も我れにては特に肝要措くべからざるもの。彼國にては椅子に憑り卓子を圍みて應答するも、我れにては疊の上に膝を屈して爲を以て同じく躰操を課するにも風俗慣習を參酌せざるべからず。躰操には今ま一の不都合あり。女子が妙齢まで學校に行き、學校に在る間の躰操は充分なるも、一たび人の妻となりて後は少しも運動せず、また其上に舅姑ある人の所に嫁せば、終日靜座なし居れるを以て急に病身となるなり。予も先年或女學校を監督なし居りしか、壯健なる生徒か卒業後往々病身となるものを見たり。是れ從來能く運動せしものが急に之を廢する劇變より來るなり。西洋にては生徒がその嫁するの後も、學校にありし時と同じく充分の運動を爲し得るを以て、毫も我れにあるが如きの弊害なし、是等も大に熟慮せざるべからざる問題なり。

予は以上にて三育に對する鄙見を大畧述べ盡くせり、その他のことは世の流行論者の唱道せる所に放任し措くも可なり。之を要するに女學校には一部の教師乃歷史、地理、習字、躰操等の教師あるも、教師全躰を見透すべき烱眼達識の教師なし。是を以て往々初めは左に行くことを

習ひしものに、後には右に搖くことを教ゆるが如き不都合なることあるを見る。亦た教育の事に就ては我れにては全躰教育學と云ふ程のものなきも、西洋にてはヘルバルド若くはリンドレー抔の教育書に乏からず、故に彼れより學びしものを把り來り以て日本今日の人情風俗と古來の教育の三者とを參酌配合し、是に由りて兩極端に落ちず中央に立つべき中庸の人物を造るべき教育を爲さざるべからず、而も是を爲せしもの殆と稀なり。是れ予が日本女子教育の爲めに平生慨歎して措かざる所なり。



講義

土佐日記講義（一）

文學士　鹽井雨江

○土佐日記。此の日記は、紀の貫之朝臣が、土佐の國守の任期滿ちて、京へ歸へる道の程の記なり。我が假字もて書ける國文中のいとふるきもの丶一にして、我が文學の上に必ず記憶せざるべからざる文なるのみならず、その行文も、よくすなほに、よく輕妙に、味ふべき趣、習ふべきふしも少からねば、我が國文を知らむとする者は、必ず讀まざるべからざる文なり。貫之朝臣は、醍醐朱雀の二朝に仕へたる人にて、土佐の國守たりしは、延長八年より承平四年までの五年間なりき。父は望行といひて、歌に名ありき。貫之また極めて堪能にして、勅命を奉じて古今和歌集を撰ぶの榮をになひ、一世を動かして平安朝の人丸と稱せられ、和歌中興の祖と仰がる丶のほまれを得たるは、皆人の知る所なり。書もまた稀世の名筆と稱せらる天慶九年病みて歿しぬ。

　手にむすぶ水にやどれる月かげの
　　あるかなきかの世にこそありけれ

とは、其の病床に源公忠に寄せたる詞にして、彼れが最後の吟なりき。男を時文といふ。歌に書によく父の家風をつぎたり。女子には內侍となりて紀內侍といはれしあり。また歌をよくして、父の子たるに耻ぢず。村上天皇の御時、清凉殿の梅樹の枯れければ、天皇、人をして、それに似たる梅樹を索めしめられ、西京のとある家にこれをたづね得て、禁庭に移させ給ひぬ。さるに、その木末に、一紙を結びたり。天皇とて、今こゝに書くなりといふ事なり。かく男子も書く日記を、女子も試みに書くなりといはれたるは、此の時代は、漢學大に流行して、男子は專ら漢文を用ひ、假字文は女子の間に用ひらる丶のみのあり樣なりければ、常は漢文もて書く日記を、今、試みに女子の用ふる假字文にて書き見むとて、かくは、わざと女子の書きたるがやうになしたるなり。殊更に假字文にて書きたるは、朝臣がつとめて國文

を起さむと欲する志よりなるべし。この朝臣は、國歌國文を起さむことを熱心につとめられたり。それは、古今集の序文の中の詞にても知るべし。〇それの年。貫之の土佐を出でたるは、承平四年の事なり。されど、その年を明にいはずして、わざとこれを取りて御覽ずれば、

　勅なればいともかしこし鶯の　宿はと問はゞいかゞ答へむ

と一首の歌を書きつけたり。天皇いとあはれがりたまひて、その家の主人の名を問はしめられたれば、紀の内侍が宿なりきといふは、其一端を知るべき美談といふべし。

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年、志はすのはつかあまりひとひの日の戌の時に門出す。そのよし、いささかものにかきつく。

〇この一節は、一篇の日記の序なり。この日記のいはれを記せるなり。〇男もすなる日記。世間の男子も書く日記といふ事なり。男ものもは女もに對していひたるなり。此の句は「男もすといふ日記」と書ける本もあり。〇女もして見むとてするなり。女子も試みに日記を書いて見むかくいひたるなり。〇しはす。十二月なり。〇はつかあまりひとひの日。二十一日の事なり。〇戌の時。今の時刻にていへば、午後八時頃なり。〇門出す。出立したるなり。〇そのよしいささかものに書きつく。船中歸路の有様をあら〳〵書き記すといふことなり。

ある人、あがたの四とせ五とせはてて、れいの事ども、皆しをへて、解由など取りて、住むたちより出でて、舟にのるべき所へわたる。彼れ此れ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくぐしつる人々なむ、別れがたく思ひて、その日、頻りにとかくしつゝのゝしるうちに、夜更けぬ。

〇此の段より、日記の本文に入るなり。〇ある人。實は貫之自身なるを、前條に出立のとしをそれの年といひたる全じ手振りにて、明に云はずして、かく

ある人といへるなり。○あがた。國司の任國をいふ。「あがたの四とせ五とせはてて」とは、國司の四五年の任期の終りたることなり。國司の任期は、四年間の定めなり。されど、往々期限をのばす事ありけり。貫之は延長八年より承平四年まで、五年間土佐の國司たりしなり。○れいの事。諸帳簿書類の引きわたし事務引きつぎの事など、すべて、國司交替の時にきまりたる事務をいへるなり。「れいの事ども皆しをへて」とは、諸帳簿の引きわたし事務ひきつぎの事など、すべて爲し終りたる意なり。○解由。事務引きつぎすめば、任期中の官稅などの算用も滯りなく濟みたるよしの證文を、後任の國司より受け取るなり。この證文を解由といふ。これを以て、一切の事務の引きわたしの全く濟みたるしるしとするなり。○住むたち。住みたる國府の館舍なり。○わたる。行くといふ事を、丁寧にいふ詞なり。○彼れ此れ、知る知らぬ送りす。彼の人や、此の人や、我が知已我が知已ならぬ人が、我が別れを送り來たれりといふ事にて、人々の我が別れを送り來たれるをいへるなり。○年ごろよくぐしつる人々。この數年の間格別に親しくしたる人々の事なり。○とかくしつゝ。荷物を運ぶなど、いろ／＼と世話をしてといふ事なり。○のゝしる。聲高く言ひ騒ぐをいふ。こゝは、人々のいろ／＼と世話をして、あれよこれよと聲々喧しく騒ぐけしきなり。此の數年來格別に親しくしたる人々は、痛く別れを惜みて、いつまでも去らず。いろ／＼と世話をして、あれよこれよと喧しく騒ぎ立つる間に、いつしか時間もすぎゆきて、深夜になりたりといふ事なり。

廿一日。和泉の國までたひらかにと願立つ。藤原の言實、舟路なれど、馬のはなむけす。上、中、下、醉ひすぎて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれあへり。

○たひらかにと願ひ立つ。和泉の國までは大海原を渡るなれば、殊に危險なれば、和泉の國まで船路の無難ならむやうにとの祈願を神にかけたるなり。願ひ立つの立つは、出立する意にあらず、神に祈願をなすをいへるなり。今も俗に神に願がけするを願を立てるといふ如し。○言實。トキザネと讀むべし。○馬

のはなむけ。餞別の事なり。古のならはしに、人の旅に出で立つ時は、恙なく行きて歸り來よとの意にて、その人の乘れる駒の鼻を、彼方へ向けやるといふが、常なりき。これ、旅行く人を送る時のならはしなりき。それより、すべて旅行人に物品を贈ることをも、かくいひ來たれるなり。貫之の京へ歸へるにつけて、言實が餞別の品を贈りたるなり。馬のはなむけの馬といふ詞によりて、舟路なれどもといひて文なし洒落れたる、おもしろし。○上、中、下。上中、下の人々にて、上中下は身分をいへるなり。かしらの人より下の下部に至るまでのすべての人をさしたるなり。○いとあやしく。皆醉ひ戯れて、平生の有樣と異りたれば、甚だ怪しきさまにてといへるなり。○あざれあへり。あざれは戯れに仝じ。戯れ合へりといふことにて、皆共に醉ひどれになりて、をかしげなるさましてふざけ遊べるさまなり。さて、魚肉の腐敗するをあざるともいふより、それにひきかけて、戯れ合ふをあざれ合ふといひ、さて鹽は腐敗を防ぐ物なるなどの事より文なして、鹽海の邊りにてあざれ合へりとしやれたり。一同に酒のみすごして醉ひ戯れたる事を、しほうみ、あざれなどいふ詞の文によりて、かく面白くいひたるなり。

廿三日。八木の康敎といふ人あり。この人、國に必ずしもいひつかふ者にもあらざりき。これぞ正しきやうにて、うまのはなむけしたる。かみがらにやあらむ、國人の心の常として、今はとて見えずなるを、心ある者は、恥ぢずになん來ける。これは、物によりてほむるにしもあらず。

○この人。この人はにて、八木の康敎のことなり。○國に國の公の仕事に、やがて、課役などにといふ事なるべし。○必ずしも。毎時でも必ずといふ如き意なり。○いひつかふ者。言ひ使ふ者にて、命じて役事に使ふ者といふ事なり。即ち、國司が命じて國の課役などに使ふ者といふ事なり。「この人、國に必ずしもいひつかふ者にもあらざりき」とは、八木の康敎といふ人は、土佐の住民なるが、よしある人にて、國の課役などに、國司が毎時でも必ず命じて使ふと

いふ如き普通の人民にはあらずといふ意なるべし。もとより國府に出仕する官人にはあらず、また普通の住民にもあらず、よしある身分の人といふ事なり。このいひつかふを出でつかふ、或は出でつかはると書きて、國府に出仕する官人にはあらずといふ事にのみなしたる書もあれど、おのれは前の如き說をよしと思ふ。○これぞ。此の人ぞといふとにて、やはり八木の康敎をさしたるなり。○正しきやうにて。八木の康敎の行の禮義ありて正しきをいへるなり。「これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる」とは、輕薄なる一般の風俗の異りて、この八木康敎といふ人は、獨り禮義正しく餞別したりといへるなり。○かみがらにやあらむ。此の詞はやゝ明かならず。○かみとは國司のことにや、神のことにや。これは神にて、やがて、此の國の産土神(うぶすな神)なりとせられたる人もあり。これを産土神とせば、「産土神のみ心ゆゑにやあらむ」といふ事にて、薄情なるこの國人のならはしは、産土神のみ心によれるならむかといへる事となるなり。面白き說のやうなれど、それなりとも定めがたし。また、このかみを國司とすれば、

國民の人情の深き淺きは、これを治むる守の德にもよる事ならむ、故に我が、土佐を去るに臨みて、今は構ふに及はずとてまめやかに餞別もせず國人の情なきは、我が如き不德の國司なりし故ならむといひて、謙遜したる意となるなり。この說の方、穩當ならむか。なほよく考へむ。○今はとて見えずなる。今は用なし、構ふに及ばずとて、まめやかに見送りにも來ぬ事なり。○心ある人。人情ある人にて、八木の康敎をほめて云へるなり。○恥ぢずになん來ける。國の風俗に違ふを恥ぢずして、八木の康敎はよくまめやかに餞別しに來たれりといへるなり。一書には、「恥ぢてなん來ける」ともあり。それならば、薄情なる國の風俗を恥ぢて、獨り禮義を守りて送り來たれりといふ事になるなり。また、「恥ぢずになん來ける」と、すを清みて讀みて、恥ぢて來たれる意と解きたる說もあり。とにかくに、此の一段は、土佐の國人の薄情なる風俗と異りて、八木の康敎の情義の深く正しきを稱贊したるなり。○これは物によりてほむるにしもあらず。かく八木の康敎の餞別したるを譽めたるは、贈物のうれしさによりてほめたるにあらず。

其の人の情の深きをほめたるなりといふ事なり。この一句は、やゝ輕薄めきたる文句なれど、興味を添へん爲めにわざと、戯れたる筆づかひなり。

廿四日。講師、馬の餞しに出でませり。ありとある上下、童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。

○講師。國々の國分寺にありて、其の國の僧尼の事をつかさどる僧官にて、やがて、その國分寺の住職なり。有徳の僧を撰びて任ずるなり。こゝにては、土佐の國分寺の住職なり。○土佐の國分寺の住職が、貫之の歸京するにつけて、餞別しに來たれるなり。○ありとある上下。其處にあつまりたる人々總べてをさしたるなり。○醉ひしれて。酒に醉ひて馬鹿になりてといふ事にて、酒に醉ひて物もおぼえず常の心もなくなりたるをいへるなり。○一文字をだに知らぬものしが。下部などの文字は全く知らぬ者がといふことにて、ものしがのしは、詞を强めむ爲めの助詞にて、別意なし。○足は十文字にふみてぞ遊ぶ。酒に醉ひて、千鳥足になりて、ヒヨロ〳〵としてをかしげにうかれ遊ぶといふ事なり。此の段は、國分寺の住職が餞別に來たりて、皆一同に心地よく醉ひてうかれたるさまを記したるなり。全く文字を知らぬ者を、一文字をだに知らぬ者といひ、千鳥足にて醉ひうかれたるを、十文字にふみ遊ぶといひたる、おもしろき文章の文といふべし。

廿五日。守の館より、呼びに文もて來たれり。呼ばれて至りて、日ひとひ、夜ひとよ、とかくあそぶやうにて明けにけり。

○守。新任の國司なり。貫之のあとに、新に任ぜられたる土佐の國司なり。守の館より云々は、新任の國司の館舍より、書狀を以て、貫之を呼びに來たれる事なり。○呼ばれて至りて、招きに應じて、新任の國司の館舍に至りしなり。○日ひとひ、夜ひとよ。終日終夜なり。○とかく。何にやかやといふ如き意なり。○遊ぶやうにて。心のどかに面白く樂みてといふ如き事なり。○明けにけり。夜の明けたるなり。招きに應じて、新任の國司の館舍に至り、何にやかや

と心のどかに面白く樂みて、其の日をくらし、つひにその夜をもわかしたりといへるなり。

廿六日。なほ守の館にて、あるじしのゝしりて、をのこらまでに、ものかづけたり。から歌、聲あげていひけり、やまと歌、あるじも、まらうども、こと人もいひあへりけり。から歌、これには書かず。やまと歌、あるじの守のよめりける。

　都いでて君にあはむと來しものを
　　來しかひもなく別れぬるかな

となんありければ、歸へる前の守のよめる。

　白たへの浪路を遠く行きかひて
　　我れに似べきは誰ならなくに

と人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。

○なほ守の館にて、云々。今日もなほ新任の國守の家にて、いろ〳〵と饗應して言ひ騷ぎて、且つ、貫之の從者までに、引出物を贈りたりとなり。あるじとは饗應の事、をのこは從者にて、これは貫之の從者をいへるなり。物かづくとは、客に物を贈るをいふ。引出物する事なり。○から歌聲あげていひけり。其の席にありたる人の詩を作る人どもは、聲高く詩を歌ひたりといふ事にて、から歌とは、支那の詩の事なり。詩は支那の歌なればから歌といふなり。○やまと歌云々。主人の新國守も、客なる貫之も、其の他の人々も、和歌を互ひによみたりとなり。やまと歌とは、我が國の歌なり。詩をから歌といふに對して、我が歌をやまと歌といふなり。まらうどとは客の事。こと人とは他の人といふ事。いひあへりけりは互に歌ひたりといふ事なり。○都いでての歌の意は、私は都を立ち出でて、實は君に逢はむと思ひて、來たりたるに、悲しいかな、かく來たれるかひもなく、斯くあふ間もなく、はかなくも君に別るゝよ、誠にをしく悲しいといへるなり。君とは貫之をさしたるなり。來しものをとは、來たれるにといふに仝じ。○かへるさきの守。任果てて京へ歸へる前の國守といふ事

にて、貫之の事なり。○白たへの涙路の歌の意は、斯く遠く恐ろしき海上を往返して、かなしく辛き境遇の我れに似たる人は、誠に君てあるよ。君も我れに似て、かゝるおぼつかなき海上をはる〳〵往返したまふ。誠にいとほしく思ひまゐらすとなり。白たへは白布の義にて、こゝにては涙の枕詞とせるなり。○枕詞なれば、一首の上には別意なし。涙も白く見ゆれば、これを枕詞とす。白たへの雪といふも、雪は白きものなれば、白たへをその枕詞に用ふるなり。誰れならなくにとは、外の人にあらずして君なり。といふ事なり。○こと人のもありけれど。他の人の歌もありたれどといふ事なり。この新舊國守の歌の外に、他の人のよめる歌もありたりとなり。○さかしき。こゝにては、善き秀れたる意にて、即ち、善き秀れたる歌をいへるなり。こと人のも云々とは、この二首の外に他の人の歌もありたれどこゝに取りいでて書きつくる程の善き秀れたる歌もなきやうに思ふ。故に略きて書き記さずといへるなり。

とかくいひて、前の守も、今のも、諸共におりて、今の主人も前のも、手とりかはして、酔言に心よげなる事して出でにけり。

○とかくいひて。別れををしむ事など、何にやかやといろ〳〵言ひてといふ事なり。○前の守。前の國守にて、貫之なり。○今のも。今の國守もにて、新任の守なり。○諸共におりて。諸共に館舍の階梯を下りてなり。○今の主人も前のも。仝じく今の國守と前の國守との事なり。○手とりかはす。互に手をとり握る事なり。今はとの別れに臨みて、互に手を取り握りて、御無事にてよ、また逢ひ奉らむなどとちぎるをりからの有樣なり。○酔言に心よげなることとして出でにけり。酔ひたる舌にて、無事を祝ひ後事をちぎるなど、うれしきことといひて、心地よく別れて出でたりとなり。

百人一首講義（一）

文學士　大町桂月

この講義、世に出でむ頃は、正月の事とて、世間一

般に歌がるたを弄び居るなるべし。歌がるたは實に我國一般に行ける、室内の遊戯也。既に歌がるたが一般の遊戯なる以上は、中等以上の敎育を受けたるものは、男も女も一通りは、その歌の意味を解し居りたきもの也。

余は此趣意にもとづきて、玆に極めて平易に、又極めて通俗に、百人一首を講義せむと欲す。字句の解釋は、唯意味が通ずる迄にとゞめ、餘り細かには詮索せず。即ち學者ぶることをせざる也。又批評家ぶることもせざるつもりなれど、歌毎に其良否を斷言すべし。元來百人一首は世に名高くして、少し文字を知るものは、之を知らざるものなき位なれど、余を以て見れば、眞に巧妙なる歌は餘り多からず。さるに、日本在來の歌人は概して批評眼なく、人丸赤人と云へば、神様のやうに思ひ、万葉集、古今集、さては百人一首などは、皆名歌のみあるやうに思へど、こは不見識きはまること也。而して古來百人一首を註釋せるもの頗る多けれども、大抵字句の解釋にとゞまりて、一々歌を可否せるものなし。これ余の慊らざる所也。余は批評眼あるものにはあらねど、一家の眼識なしとせず。其眼識おぼつかなく、間違ひ居ることなきを保せざれども、飽くまでも責任を帶びて、一々歌の可否を斷言せむとする也。

支那にては唐詩選なり、三躰詩なり、唐宋詩醇なり、撰者が一種の眼識を備へて、古人の作を取捨し、首々皆佳なる選集多けれども、悲しや、我國の歌の撰集は、此の如きもの甚だ少なし。今百人一首の如きも、玉石混淆せり。決して取捨宜しきを得たるものと云ふべからず。余は百人一首に感服するものに非ず。なほ精しくは、一々其歌に就いて言ふべし。

余は百人一首には感服せざれども、歌がるたは最も有益なる遊戯として奬勵する者也。其益とは何だかと云ふに先づ、百首の歌其物の記憶より始めて、敵には何あり、味方には何ありと覺え置くが肝要にて、たとひ一々覺えざるも、早く見出すことに熟し、上の句の頭一字聞けば、早く下の句を思ひ出し、之と同時に手、其かるたに及ぶ。かくて、記憶力を養ひ、注意力を養ひ、精神の活動を敏捷にする也。殊に多人数が一組となる場合には、一人の下手、やがて味方の不利となり、われ、我のものならず、共同心、共公心を起す

の益もあるべし。要するに、歌がるたは花合せやトランプの如き運に待つ所ある遊戯とは異なりて、全く手腕の如何のみによりて勝敗わかるゝものなれば、歌がるたの上手なる人は、氣勝ちたるか、記憶力強きか、注意力周到なるか、情神の働のするどきか、もしくは熱心なるか、何か取柄のある人也。夫としても、妻としても、たのもしき人也。斯く云ふ我れは、極めて歌がるたの下手なるもの也。即ち何も取柄なき男也。

百人一首は、何人の撰びたるものなる乎。藤原定家の撰びたるものなりとは、普通の説なれど、定家が撰びたりと云ふ證據になるべき出處なし。定家は、鎌倉時代以後、歌人には神の如くに尊ばれたる人也。かゝれば、定家の子孫にして、和歌壇を專領せし二條氏、冷泉氏などが、こけをどしに定家の撰と云ひふらしたるものなるべし。然るに今より二百年前、水戸義公の儒臣なる安藤年山、早くも定家の撰にあらざることを看破せり。即ち定家の作に成れる明月記の中に、「定家の妻の父なる宇都宮彌三郎頼綱(後に髮を削りて入道となる)其居る所の嵯峨の中院の障子(當時の障子は、今日の衝立、もしくは唐紙の類にて、今日の障子とは別也)の色紙に筆を染めよと、定家に頼みければ、定家は天智天皇より雅經、家隆に至るまでの歌人、一人に一首つゝの歌を書きたり」とあるを引きて、定家は唯書きたるのみ也。撰びたりと云ふ事なし。撰者は、頼みたる頼綱なるべしと斷言せり。香川景樹も、この説に賛同せり。然れども、頼綱が撰びたりとの事も、此明月記の文句にては斷言すべからざる也。而して明月記には、天智天皇より雅經、家隆に至るまで一人一首の歌を書きたりとあるのみにて、百人撰びたりと云ふ事なし。されば定家が中院の障子の色紙にかきたりし歌は、今日傳はれる百人一首と同じものなりとも斷言すると能はず。余思ふに定家が、中院の障子の色紙に書きたりし歌は、いくつありたるかわからざれど、まづ四五十ありしなるべし。而して其歌は、定家自から撰びしものなるべし。定家は當時第一流の歌人也。其妻の父なる頼綱も、歌はよみたる人なれど、定家に比しては、幾流も下に在り。如何に岳父の威勢ありとは云へ、第一流の歌人に向ひて、我が撰びたる歌を一寸書いてくれ

よと、まるで筆耕者の如くに取扱ふべき筈なし。何か一つ御得意の歌をお書き下されたし。尋で古人の歌の中にて、お氣に入りたるものをも御面倒ながらお書き下されたしと頼みたるにはあらざる乎。而して定家の子孫にして和歌の師範家たる冷泉氏か二條氏かゞ、其歌に蛇足を加へて百首とし、定家の撰なりと言ひふらしたるものにあらざる乎。余は定家の撰なりと云ふ普通の説を取らず、又安藤年山の説をも取らず。

一、天智天皇

秋の田のかりほのいほの苫をあらみ、我が衣手は露にぬれつゝ。

○「かりほ」、精しく言へば、假りに作りたる廬、少しつゞめて、假りのいほ、更に約めて假廬也。俗語にて言へば、假りに作つた小屋也。

○「かりほのいほ」、假り小屋の小屋也。廬を二つ重ねて言ひたる也。一つ重ねて言へば、強く聞ゆる也。然し物にもより、言葉にもよる事にて、妄りに此眞似すべからず。

○「苫を荒み」、苫が荒いから也。苫とは、萱などを編みて蔽ひ物にするもの也。今日も和船には、よく之を用ゐる也。

○秋になつて、稲が實れば、鳥が來て啄んだり、外にも色々稲を食ひに來るものありて、假小屋を設けて、番をせねばならぬ事なるが、もとより假りに作りたる小屋なれば、苫荒く、隨て小屋の中に寢て居るに、苫の隙間から風もふけば、露も洩りて、着物が毎晩びしよぬれにぬれて、實に冷たく、苦しいもの哉。これ一首の意也。

○此歌、後撰集にも天智天皇の作として出て居れど、其調子と云ひ、作意と云ひ、斷じてこれ天智天皇の作に非ず。迂濶なる歌人曰く、これ天皇が農夫の身の上を察してよみ玉へるもの也と。後世ならばそのやうな事もあれど、奈良朝にだに斯る事なし。况んや天智天皇の頃をや。此歌は奈良朝以後の賤しき人の作りたるものなるべし。

○農夫の苦しき様は、思ひやらるれど、要するにこれ實感也。冷たいとも、苦しいとも言つて居らぬだけが、詩らしきのみにて、佳い歌とは云ふべからず。さ

れど、むげに賤しみ棄つべきものにもあらず。もとよりわざ〳〵取り出づべくもあらねど、わざ〳〵棄つるにも及ばず、可もなく、不可もなき歌也。

二、持統天皇

春過ぎて夏來にけらし、白栲の衣ほすてふ天のかぐ山。

○此歌、万葉集には、「春過ぎて夏來たるらし、白たへの衣ほしたり、天のかぐ山」とあり。支那の詩に、「山中無㆓暦日㆒、寒盡不㆑知㆑年」「此地人家無㆓玉暦㆒、梅花開日是新年」など云ふ句あり。この歌と同工異曲也。春が過ぎて花散りはつるも、心はまだ春のやうな氣持がして居りしに、愈五月雨の候もすぎ、土用になりて、天香具山あたり土用干をするのを見るに至りて、心までが、夏めいて來れり。このやうな感じはよくあるもの也。親友死すとの報知來りても、何だかまだ生きて居るやうな氣持ちがするも、之と同じ感じ也。上古とよみの十分そなはらざりし頃は、猶更の事也。然し今日このやうな口眞似しては、虚僞となりて、毫も人の感興をひかざるべし。

○右の如くに解すれば、この歌、捉へ處がちよと面白し。然るに、新古今集には、「來たるらし」を「來にけらし」と改め、「乾したり」を「ほすてふ」に改めたり。この改め方は、よほど無理也。

○栲は、かぢの木の皮にて織りたる布也。其色白し。いにしへはこれにて着物をつくりし也。後には衣の枕詞となりぬ。この歌は、眞に白き栲の衣の意也。白栲の衣は上古はおもに賤しき人着たりし也。「來にけらし」は、「來たさうな」也。

○「衣乾すてふ」、「てふ」は「と云ふ」の約まりたるもの也。

即ち「人がよく衣を乾すと云つて居るあの天のかぐ山」との意也。この後に、「うはさに違はず、衣がほしてある也」の語句を入れて、始めて意味をなす。新古今流義に、言葉を省き、わざとひねくッて朦朧にしたる、巧を弄して反て面白からず。矢張原歌のすなほなるがよし。新古今時代一流の歌人良經の作に、「雲はるゝ雪のひかりや白栲の衣ほすてふ天のかぐ山」と云ふ歌あり。前に衣ほしたり、天のかぐ山」の歌に典故をとり、雪を白衣と見なして、「ほすてふ」の語、

大にきいて、居る也。「てふ」の語は、斯る處に用ゐざるべからず。新古今編者が「衣ほすてふ天の香具山」としたるは、餘り甚しき畧し方にて、「衣ほしたり」の原歌を知らざれば、解し難く、平易を避けんとして、反て小供のかたことに類す。斯る處は、新古今の長所もあれど、この歌の改め方は、たしかに其弊也。

三、柿本人麻呂

足引の山鳥の尾のしだり尾のなが〱し夜を獨りかもねむ。

○此歌、拾遺集には、人麻呂の歌としたれど、誤り也。万葉にも、この歌あれど、人麻呂の名をしるさず。之を人麻呂の作とすること、いはれなき也。

○足引は、山にかゝる枕詞にて、別に意味なし。「尾の志だり尾」、たゞ「志だり尾」にても可なるを強く言はむ爲めに、わざと重ねたる也。「志だり尾」は、「志だれたる尾」也、即ち長く垂れたる尾也。上の句は、長きことを言ひ出でむ爲めに序詞にて、歌の上には、毫も意味なし。山鳥と云ふ鳥の尾は、長きものなれば、斯く長しと云はむ爲めの序としたる也。獨りかも寝む」は、「獨りてまァ寝ることかなァ」の意也。

○こは戀の歌にて、この長き夜を、獨り寝る事か、さてもわびしき事なりとの意也。

○之と同じ考を歌へるもの、万葉集に、四五首あり。いづれも實感にして、美感の醇化せるものに非ず。思ふ人にあはざるわびしさをあらはさむには、他に歌ひ方あるべし。されど調子はなだらか也。又序詞のつかひざまに、力量も見ゆれど、少し滑稽めく感なきに非ず。名歌として珍重すべきものにはあらざる也。

四、山邊赤人

田子の浦に打出でゝ見れば白栲の富士の高嶺に雪はふりつゝ。

○此歌、万葉集に、「田子の浦ゆうち出てみれば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」とあるを、新古今集に斯く改めて出せる也。

○もとの歌の意味は、「田子の浦へ出て、其田子浦から眺むれば、富士山に眞ッ白に雪がふつて居る、實に

見事な景色である」といふ事也。「ゆ」は、「より」の意也。「打出づ」にかゝらずして、「見る」にかゝる也。「打出づ」は、家をうち出づる也。田子の浦より他の處へ打出づるに非ず。田子の浦より他處へ出づるとせば、田子の浦の語が生きてはたらかず。田子の浦と言ひ出す以上は、田子の浦に重きを置くべき筈也。即ち此浦は田子の浦の景色よきことをほめて歌ひたるもの也。

○新古今集の如く改めても、意味はあまり變りたることなし。唯白栲の語、二樣の解し方あり。即ち「白栲の如く雪が富士山に降て居る」一也。これ白栲を雪の形容と見たる也。されど、白栲は單に雪の枕詞に用ゐることあり。こゝの白栲も、句を隔てゝ雪にかゝれるものとして、何も形容せずに、唯「富士山に雪がふつて居」二也。いづれにしても意は通ずれど、初めの如く解すれば、雪が主になりて、富士山が客となれる如く聞ゆ。後の解き方にすれば、富士山が主となる。富士山を主とする方が、面白き也。雪と云へば、白きとはわかつて居る故、もとの歌の「眞白にぞ」の一句は、餘計な文句也。新古今集の編者は、之を「白栲の」と枕詞にして輕く見做したる也。「つゝ」は、玆にては、感嘆の意に用ゐたり。即ち「雪が降つてまア」位の意也。余はもとの歌よりは、新古今に改めた方が、面白しと思ふ也。

○此歌、富士山をもち出したるだけが、多少の風致あり。若し之を改めて、「武藏野ゆうち出でゝ見れば眞白にぞ筑波の山に雪はふりける」とすれば、趣味頓になくなるべし。日本人は、富士山には、一種の趣味を有す。從て此歌、日本人の氣に入る歌也。然し從來世人が感歎する程に、名歌なりとは覺えざる也。

五、猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲聞く時ぞ秋は悲しき。

○この歌、意味はよくわかりたる歌也。別に解釋するまでもなし。鹿が奥山で紅葉の落葉を踏みつゝ妻を戀ひて啼いて居るが、その聲が身にしみてあはれに覺えらるゝ。さらでだに、秋は悲しいのに、其鹿の聲を聞けば、なほ更悲しくなつてくるとの意也。

○「鹿が紅葉ふみわけ」は、空しく想像したるにあら

ずして、現に眼前に見たる景色なりと解する方が面白し。秋ふけて深山一望、錦をさらせる如くに紅葉し、地に落ちて、地も亦錦をしきつめたるが如し。其間には清き溪流もあるべく、巨巖もあるべし。而して更に其間に鹿悲鳴して、山鳴り、水應ふ。暮秋の情景、捉へ得て、面白き歌也。

六、中納言家持

かさゝぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける。

○「烏鵲の渡せる橋」烏鵲といふ鳥が架けて作った橋と云ふ上にて、支那の書物に、「烏鵲河を塡めて橋を成し、以て織女を渡す」とあるより出でたる也。即ち天上の天の川にかゝれる橋との義也。而して内裏を雲の上と云ふより、御殿の御階をさして、天上の橋、即ち烏鵲の渡せる橋と云へる也。
○御殿に宿直して居るに、いつの間にやら御階が白くなりて、霜置きたり。もはや夜あけに程もあるまいとの意也。
○烏鵲の渡せる橋と、典故を用ゐたるは、少しわざとらしく聞ゆ。斯る典故の用ゐ方は面白からず。霜置く頃故いづれ、寒き時なるべし。夜寒をしのびて宿直する有樣も、その人の心も思ひやられて、ひと通りは、趣味ある歌也。烏鵲の渡せる橋とは、家持頃の言ひ方とは見えず。察するに、平安朝の半ば以後の人の作なるべし。

七、安倍仲麻呂

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

○万葉には、「天の原」が、「青海原」とあり。天の原は、天の事、青海原は海の事也。青は色の青きのみ云ふに非ず。大なる事をも言ふ也。こゝの青は大の意味也。天の原と云ひては、月を見るのみが主となりて、故郷を慕ふには緣少なし。やはりもとの青海原と云ふ方が、遙か海の彼方の故郷を慕ふに適切也。「春日なる」は、「春日と云ふ里に在る」の意也。「ふりさけ見る」は、躰を後へそらして見る事也。非常に遠き處を見るに、躰をそらして見るが常也。「青海原ふりさけ見る」に、遙か海の彼方の故郷を慕ひ望むの意

こもれり。「月かも」の「かも」は、感嘆の詞にて、「月てあるかまア」位の意也。

○此歌は、仲麻呂が支那にて故郷をこひしがりてよみし歌也。身ははる〲故郷をはなれて、八重の鹽路の外に在り。さても戀しき故郷よ。其故郷のなつかしさに、遙に故郷の方を望めども、蒼波茫々、一も見ゆる所なく、たゞ見ゆるは、一片の月ばかり也。月の光ばかりは、今も昔もかはりたるとなし。昔し我が故郷の春日に居つた頃は、度々この月が我里の三笠山の上に出て居るのを見た事があるが、今思へば、まるで夢のやう也。今眼前に見る月は、昔故郷で見た月にして、この月を見れば、益〻昔が戀しくなる、益故郷がなつかしくなると也。

○なつかしいとも、戀しいとも云はずして、其意自から文字の外に溢る。海外の羈客の情、實にさこそと思ひやられて、讀者をして感嘆に堪へざらしむ。百人一首の中、此歌の如きは、千古の名吟と云ふべし。唯天の原と改めたるは、惜しむべき也。なまじッかの歌人輩、妄りに古人の名歌を改めて、折角の妙味を損するを知らず。何たる滑稽ぞや。

八、喜撰法師

我廬は都の辰巳然ぞ住む、世をうぢ山と人は云ふなり。

○辰巳は東南の事也。正北が子、東北が丑寅、正東が卯、東南が辰巳、正南が午、西南が未申、正西が酉、西北が戌亥、十二支を八方にわりあてたる也。地球の上に假設せる南北の線を子午線と云ふも、之よりわり出したる也。「然ぞ住む」は、この通りに住んで居るとの意也。「世をうぢ山」は、「世を憂」を「宇治」に云ひかけたる也。

○我れは、世を憂い事に思つて、即ち世を厭うて、都門の塵をさけて、都の東南にわたる宇治山に、この通りに隱遁して住んで居るなり。余は、世を憂いと思うて居るが、今住んで居る山も、うぢ山とて、其の憂を名に負うて居るとの意也。

○憂、宇治の言ひ懸け、巧を弄したれど、いやみなし。別に妙味もなけれど、全躰何となく、すら〲と調子よく、隱遁者らしきよみ方也。

漢文評釋

文學士　久保天隨

阿藤傳　息軒安井衡

阿藤者山口氏之女也、父某爲二飯田侯江戸邸永巷吏一、因亦奉二仕世子一、

古今義烈の女子、もとより其人に乏しからずと雖も、阿藤の如きは、實に少しとなす。况んや、當時昇平日久しく、士風漸く柔弱に流れし世たるに於てをや。而して息軒の此文、氣格渾厚、自ら大家の規度あり、琅琅として誦すべし。余が第一に之が評釋を試むる所以の者、必ずしも徒爾ならず、讀者之に因て多少自己が心性上に射映し、自ら警しむる所あれば、獨り余が幸のみにあらざるなり。そも阿藤が經歷の主腦たるは、眇たる一身を擧げて、全藩の爲にし、侯の嬖妾豐浦(後に若山)を刺せし義烈にあり。故に先づ若山の專房驕横政務に參すると飯田侯が之に惑ひ、朝歌夜飮、頗る荒亂を極めたるとを提叙し、闔藩の士大夫、この一婦人に切齒し其肉を食はむと欲するに至りて、始めて本傳の主人公たる阿藤の身上に反折の來り、以て下文驚心動魄すべき許多の叙事を起す。その冒頭第一、阿藤の出所を提起せしは、傳文自然の體格にして、兼て其父の事にまで及びしは、後段自ら關係あり、伏案となるべき者存すればなり。永巷は史記範雎傳に見え、張守節の正義には、宮中獄也とあれども、必ずしも然らず。漢書高后紀顔師古の注に、永長也、本謂宮中之長巷也といひ、後漢書靈帝紀注には宮中署名也となり。要するに、妻妾の起臥する處といふなり。息軒氏の之を用ひたるは、頗るいかゞはしく思はるゝ所あれども、他に適當の換字なかりければのことならむ。この一段他に特に解說を要せざるべし。

初飯田侯有二妾豐浦者一、美而有レ才、善レ書及和歌一、侯深寵レ之、殆專レ房、進兼二相室一、既而與二于國政一、凡豐浦所レ言、至二黜陟沿革一、莫レ不レ聽用一、權傾二内外一、

この一節、豐浦が侯の寵愛を得たるを叙す。美而有才の一句は、豐浦の豐浦たる所以、下し得て簡切な

り。相室は『御部屋樣』といふ事にして、かいなでの群妾よりも一等上位にあるものなり。黜陟は官位の任免、沿革は制度の變更、この三句、頗る氣格あるのみならず、多少の感慨之に繋がり、閩藩の切齒する所以を伏せたり。今夫れ、男女同權は歐西人の言ひふらせしことにて、余未だ必ずしも其可なる所以を知らず。何となれば、女子は少くとも生理學的構成の一點に於て、遂に男子に及ばざる者あればなり。女子の所天に仕へて一家をなすは、信にアービングのいひけむ如く、亭々たる松柏に纏はれる姫蔦の蔓の如きのみ。故を以て東洋舊時の道德思想を以てすれば、女子は必ずしも智慧あるを要せず、長大の年頃にいたれば、去て男子に仕へ、酒食の事を謀り、愼重恭謹、敢て非法の事をなすべからず。夫の出す所となり若くは父母の憂を遺すなどの事なければ、まづ〱足れりとなすべきなり。故に大賢孟子の母は、「婦人の禮、五飯を精にし、酒漿を汲み、舅姑を養ひ、衣裳を縫ふのみ」といへり。かの生半熟の學問を鼻にかけ、亭主を尻に敷きて得々然たる山の神どもは、決して幸福圓滿なる家庭の主婦たること能はず。牝雞司晨と哲婦傾城とは大それた悍婦の事にして、こゝに記する豐浦の如き、即ち是のみ。後醍醐帝の藤原氏に於ける、唐の玄宗の楊貴妃に於ける、又似寄りの事にして、宮娥の動もすれば毒をなすは、古今東西の史上に顯著なる通患といふべし。

閩藩增之、輿論洶洶、大夫安富主計、恐其生變、乃來江戸、俟召而饗之內寢、內計不謝、辭色怏怏、豐浦竊視久之、賦歌一首、書而贈之、主計受焉而不視、重之他紙以滌鼻、侯盛怒曰、予在焉、而不遜如此、在飯田可知、主計頓首而謝、侯爲霽威、酒既罷、

この一節は、阿藤の事に及ばむ爲の襯染にして、賓を借て主を起すの一なり。「閩藩之を憎み、輿論洶洶たり」といへるは、全篇の大主意にして、直に安富主計の江戸入を起す。大夫は家老なり、內寢は奥御殿にして、もとより君臣相見るべき所に非す、侯の作[illegible]、是に於てか愈よ明にして、主計の謝せずして苦り切たるも、亦た決して無理ならず、忠憤義慨たしかに腹

に一物を蓄へたる狀、さながら見るが如し。豊浦窮み視ること之を久うす」といへるは、陰柔奸智に長けたるを知るべく、「歌一首を賦して」といへるは、前節「書及び和歌を善くす」といへるに照應し、針線の細、一絲紊れず、安富主計を籠絡せむと謀りし、顔に似合はぬ猛々しさも、思ひ知られたり。主計が之を受取りながら、碌々に見もせず、外の紙にかさねて洟をかみしは、何等の痛快ぞ。侯の盛怒は愛妾の爲に發せし者にて、「飯田にありては定めて橫着の事をなすならむ」といひて、主計を責むる、甚だ理なり。而して主計が頓首して謝せしは、所謂始めは處女の如しといへるもの。「侯爲に威を霽らし酒すでに罷む」といへるは、一節を收束して、徐々逼らず。

主計再拜曰、臣來非㆑他、圖藩士庶、怒㆓於豊浦㆒、事將㆑不㆑測、臣盡㆑力諭㆓解之㆒、牢不㆑可㆑破、願君黜㆑之、以解㆓衆怒㆒、則勿㆑論㆓於圖藩士大夫㆒、臣亦與有㆑既焉、若不㆑聽、不㆓敢復降㆑堂、辭氣凜然、

此節賓を借て主を起すの一。主計こゝに至りて言を放ち、傍に豊浦のひかへ居るにも頓着せず、その態度さながら脫兎の如きものあり。圖藩士大夫を以て辭となし、事の重大にして全藩の運命に關するを極言す。一層は一層より剴切にして、詞氣堂堂、而かも猶ほ婉曲の處、君臣の禮を表し、その從容逼らざるは、自ら一藩を脊負ふて立てる家老の口吻なり。「敢て復た堂を降らず」といふに至りては、折檻の朱雲、何かあらむの慨あり。辭氣眞に凜然、風霜よりも、嚴なりといふべし。

侯亦嘗略聞㆓其事㆒、且知㆓其不㆑可㆑奪、即黜㆓豊浦㆒、主計拜謝出、既歸㆓飯田㆒奪㆓其政柄㆒貶爲㆓留守㆒、

嘗て略ぼ之を聞きながら始末を付けざりしは、どこまでものろけ込たればのことなるべし。唯だ主計の志奪ひ難き爲に、いや〳〵ながら之を斥けて、御拂箱となす。誠に思にもつかぬ事どもなり。その「奪ふべからず」といへるは、前節の辭色快快に反應し、拜謝は「謝せず」とあるに對映せり。侯もとより主計を嘲む故を以て、その折角喜び勇んで飯田に歸るや、直に

政柄を奪ひ、家老の重職より貶して、居城留守役となせり、諫言耳に痛く、豐浦の色香を忘れかねて然るのみ。以上五節、之を第一大段となし、この一節、その收結をなし、絶えて散漫に流るゝ弊を認めず。

時侯爲閣老、豐浦姊妹、有爲西城女相者、恒爲侯延譽、以故眷遇優渥、豐浦既黜、恩威頓衰、侯憂之、且不能忘於其色、乃更名若山、復召入宮、百侯之眷遇、駸駸復盛矣、

飯田侯、時に幕府の老中たり、而して豐浦の姊妹は、千代田城の奧女中にして、裏面に頗る權力あり。前には常に侯の爲に善き樣に取り成し、將軍に中し上げければ、その待遇眷顧甚だ渥かりしが、今や豐浦の黜けられしを以て、再び侯の爲に謀らず、飛ぶ鳥を落さむばかりの勢威も、俄に衰へければ、侯自ら憂なきこと能はず。加ふるに妖婦の色、遂に忘れかねて覺ぼされければ、名を更へて再び召し入れ、以て將軍の眷遇を回復せむと謀られたりとなり。侯の私慾を制し得ず、陋心甚しきこと、想ふべし此一節、善く侯の皮肉を刺す、何等の巧手、是れ再び一藩の禍根となりし所以にして、全篇の骨髓なり。

若山之再入宮也、始亦頗謹愼、侯益寵之、至官事當親記者亦使若山代書、居半年所、威權薰灼。殆倍往日、終與夫人鬩、侯爲鎖永巷、不復通聲息、内外切齒、

若山が再び召し入れられ、初に謹愼を裝ひ、やがて國政に干渉するに至る、悍婦の慧才狡智、即ち然るのみ。侯の官事往復の文書を代筆せしめし如き、荒惑迷亂の加減を推し測るべし。「侯益之を寵す」といへるは、前節「其色を忘るゝ能はず」といへるに對應し、官事文書親記の事は、「國政に與る」に反映し、また之を「君を善くす」といへるに受く。若山すでに房を專にして、奧方と睨み合ひ、侯が之を愛する餘りに、却て奧方の居る別殿を鎖し、絶えて聲息を通ぜざるに至る。むかし衞の莊姜、美にして子なく、公子州吁の母ひとり寵を擅にし、上下位を易ふ。莊姜綠衣の詩を作りて、自ら其命のつたなきを嗟せり。その首の一章に曰く、綠兮衣兮、綠衣黄裏、心之憂矣、曷維其已と。副色の正色に勝つは、禮制に非ず、心の憂、自ら

止むと欲すと雖も、何の時か能く止まむ。飯田侯の夫人たる者、亦た此感に堪へざりしならむ。內外切齒は「闔藩之を悄む」といへるに照應して、最も刻深激切を極む。以上第二大段にして、若山の再寵異常なるを叙せし者なり。

阿藤嘗學書及和歌於若山、至此惡其所爲、欲與之絕、乃詣若山房、出其所授法書十餘帖、副之金二分、愉色溫辭、以請曰、妾久蒙恩眷、而資性拙劣、不能有所爲、今亦長矣、不能專從事於此、恐辱師名、請除門籍、若山可之、阿藤旣脫門籍、日夜窺探之、而若山驕橫益甚、阿藤知其必生亂階、決意刺之、

阿藤は元より貞潔の女子、その若山と絕たむと欲せし者まことに、故なり。金二分を貫ひし手本に副へて差し戻したる、用意周到といふべし、その若山に對する次第及び托言は、綽々然として餘裕あり、故に奸智に長けたる若山も、其意を悟らずして、門籍を除くことを許可したりき。而して日夜窺探の結果は、やがて刺殺の志を生ずるに至り、止むを得ずして、之を爲す。その大義を辨し、一身を擲つを辭せざるは、堂々七尺有髯の男兒をして後に瞠若たらしむるものあり。こは第三段にして、愈よ本傳に及び、起頭の一頓と映射し、文章頗る姿趣あり「門籍を脫す」より以下、曲折法を以て之を行りて、氣味自ら深く、絕えて唐突急激の弊なし。

一日白中衣、襲盛服、懷匕首、詣若山房、會女伴群嬉、阿藤曰、少間、願白公事、群女皆散、阿藤分席而坐、徐詰其罪、若山抵頭不服、阿藤詰責益峻、聲色俱厲、若山不能答、起將避之、阿藤足躡其裾、手捉其領、若山號呼求救、阿藤罵曰、奸婦、汝而不死、必誤公家、取匕首於懷、而刺之、

阿藤志すでに决しければ、一日下に白無垢の死裝束を着込み、上には美々しき晴の衣裳を着飾り、先づ若山の房に至る。三句は後段の伏案にして、中衣を白

うせしは、死を誓ふ意を示せしもの。荊軻が秦に入らむとせし際、事を知る者、衣冠を白くして之を送り、軻は因て變徵の聲をなし、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還と歌ひしとかや。余輩の聯想は、先づ自ら此に至らざるを得ず。然れども彼の荊軻や、一旦の任俠より出でしのみにして、中心一片の至誠を欠けり。その咸陽宮中、秦王を刺して成らざりしもの、亦其故なしといはむや。阿藤の如きは、之と異にして、幾日の熟慮、忠節に出でゝ、之を爲す、何のその、岩をも透す、桑の弓、區々一個の奸婦を斃すに於て、何かあらむ。人間萬事、たゞ至誠のみ。阿藤の至るや、腰元ども幾人か集りて、嬉戯の眞最中なり。その「少く間せよ、願くは公事を白さむ」といへるは、阿藤の沈勇を示して餘あり、「少しく間せよ」とは、「しばし御人拂」といふことにして、侍女を去らしむる意なり。侍女すでに去る、サアこれからは此方の者なり、「席を分て坐す」といへるは、其間距つること幾もなく、やがて紫電一閃、懷より迸ろを豫想せしむ。「徐に其罪を語る」より以下六句、會々說き出して、澁滯なく、光景宛として目前にあり。而して此句は「房を專にす」、「國政に與かる」及び「夫人と閨ぐ」等の諸句に反映し、之を包藏して、剩すところなく、讀者摸索の中に在りて、過つところ無かるべきなり。詰責益峻聲色俱厲といへるは、烈婦の面目、儼然犯すべからざる神を傳へたり。苦きを甜りし啞の如くなれる若山が、一言も答ふる能はずして、坐に堪まり兼ね、駈け出でむとしたるは、正理に敵すべきものなきが爲にして、有意無意の中、上文「凡そ豊浦言ふところ黜陟沿革に至り」の多辯喋々と反應して、一層の妙あり。之を逃がしてなるものかと、阿藤が足にその裾をふまへ、手にその襟首を抑へたる、その振舞の捷やきは、自ら是れ一個の霹靂手段、全幅の精神こゝにあり。若山が驚きまどひ、救を乞ふて發せし悲聲は、更に阿藤が猛き心を高め、聲高かに奸婦呼はり、「生かして置いては、御家の爲ならず」とて聶隱娘が三寸の劍は、直にその腹を目がけて刺しこまれたり。こは即ち前節に「決意之を刺す」としるせし一句の眞意を發揮せしものにして、結局至誠止み難きものあるに歸着す、筆力千鈞、鼎を扛ぐるに足るべし。

傳記

以沙伯女王

文學士 中内蝶二

氏なくして玉の輿といひけむ。まだ乳の臭の失せはてぬ垂髫の頃より、はやくも心を青雲の上に馳せ、あはれ、この世に生れ出でたるかひには、一たび王公將相の夫人となりて、天下の婦女に羨まるゝほどの身とならばやとは、氏なきものも、氏あるものも、何れ女といはるゝもの、ひとしくゑがける希望にこそ。

されば天下の婦女のおしなべて、貴きをねがひ、富めるを望むは、深き理想のありてにあらず。優遊を好むがためにもあらねば、逸樂を欲するがためにもあらず。たゞ綺羅をかざり、珠玉をかゞやかして、人々の目を驚かさむと希ふに過ぎざるのみ。おもへば極めて淺はかなる理想にはあれど、貞節をやぶり、淑徳をけがすものゝ多くはこれが爲めなるを思ひなば、世に權勢富貴ほど、婦女の心を動かすものはあらざるべし。

この弱點にうち勝たむことは、いと難き業なるに、身はこれ龍樓鳳闕の裡に人となりて、華軒香車の外には一歩も出でざるべき貴き玉座にありながら、何處のものともわかざる賤の男が奇矯の說を信じて、その企劃を實行すべき費用に供せむが爲めに、身邊を飾れる美珠美玉と捨つるを厭はず、萬乘の位を失うもつゆ惜しとは思はざりし絕世の賢女は、實に西班牙の女皇以沙伯にあらずや。

以沙伯はカスタイルの國王惹溫二世の女にして、紀元千四百五十一年マドリガルに生る。兄顯理四世、父の位を嗣ぎて王となりしかど、性あら〱しくして驕暴のふるまひありしかば、國内の不平黨快からず思ひて、強てせまりて、以沙伯をして顯理の嗣と定めしめぬ。歐洲諸國の帝王、以沙伯が才色の兩つながら勝れてうるはしきことを聞き、相爭うて使を送り、聘を厚うして堂に迎へむことを請ひしが、千四百六十九年、以沙伯は遂にアラゴンの國王非難多の皇后となり、翌年兄の位を嗣ぐに及びて、その領國カスタイルを夫の領地と併せて、西班牙王國を作りぬ。されど、カスタイルの

主權はなほ己が手に握りて、夫が支配せるアラゴンの國とは、政令全く別途に出でにき。

瑠璃の眼、黄金の髮、その容色の世にすぐれたるのみならで、淑徳のほまれ極めて高く、寛仁大度にして、よく民をいつくしみ、學びの才に富みて、政事の道に深く心をつくしゝことは、古今東西の歴史家が、言葉を同うして讃美する所にて、その生涯の經歴をたどれば賞むべく感ずべき行ひ頗る多きが中にも、奇代の偉丈夫閣龍をして、新世界發見の大事業を成効せしめたる英斷に至りては、千載の下なほ髥ある男子をして、後へに瞠着たらしむるにあまりあり。

頃は紀元千四百八十六年のことなりけり、突然西班牙の朝廷にあらはれたる一人の賤の男あり。幾歳の浮世の雨風にさらされけむ、顏色憔悴して、肉落ち骨あらはに、髮は亂れて蓬の如く、衣は破れて荒布に似たり。餓に苦み寒さに凍ゆる乞丐の徒かと見れば一椀の食を乞ふにもあらず、一枚の衣をもとむるにもあらず。さらば如何なる願あるにかと聞けば、われは伊太利の國ゼノアの街に生れたる賤しきものなり。幼き時より舟に乘ることを好みて、久しく航海の業に從ひ、洶瀾の間に日を送り、怒濤の上に夢を結ぶこと二十餘年。廣く古今の地誌と海圖とを渉獵りて、近頃續々發見せられたる新しき土地と照し合せて見るに、世界の廣き、その表面に散在せる陸地の面積、今迄の地圖に示されたるのみとは思はれず。吾等が知らざる未開の土地の、なほこの外に幾何あらむも測り難し。よりて、われ此未開の陸地を發見して、普ねく世間の人々に紹介せばやと、深く心を地理學の研究に潛むること數年なりしが、果して、この茫々として涯もなき太西洋の西端に、未開の陸地の在ることを知りぬ。卿等地球を以て坦然たる平地なりと思ひたまふか、そは誤なり。地球は水と陸とによりて、その表面を被はれたる球狀のものにて、かの橙の丸きにもたとふべくや。一たび纜を解いて西に向ひ、直航して何時まで止まざる時は、遂に亞細亞の東端に着きて、珍らしき禽獸、奇しき草木の、野に充ち山に溢れたる、寶の島を見出だし得むこと、鏡にかけて見るよりも明かなり。疑はしくば博く當時の航海家が記録を讀みたまへ。新航路發見の成績を見給へ。おほ疑はしくば、親しく探検の爲めに赴きたる水夫等が話を聞きたまへ、これ等の新しき土地に殖民

したる人々の報告に耳を傾け給へ。われ等が國にては見も馴れぬ、斧鉞の痕ある木材を拾ひ上げたりと云ふにあらずや。異しき銅色人種の屍の漂着したりと云ふにあらずや。われは徒に據りどころなき空論を吐くものにあらず。如何にもして船と糧とを得て、一たび太西洋の浪を横ぎり、わが説のまことをたしかめむと思ふものから、悲しいかな家貧しくて心にまかせず。さりとて此まゝに年月を送りて、宿志を徒にせむも口惜しくて、此國の政府に願ひて、保護を仰かばやとて來れるなり。いかで我身を陛下に薦めたまへがしと、滔々として言葉よどまず説きたてぬ。

誰か知るべき、此賤の男こそ、新世界の大發見家として、後の歷史に名をかゞやしたる閣龍ならむとは。

世はまだ暗にて、文明の光りなほ弱し。閣龍普ねく廷臣の門をたゝいて、いと熱心に説いてまはりしかど、その服裝のきはめて賤しきが爲めに、到るところの門に拒まれぬ。たま〳〵好奇の心あるもの、少しく耳をかたむくるかと思へば、たゞあきれにあきれて閣龍が顏をうちまもり、希有のことをいふ人もあるものかなと、その願ひをうべなはざるのみか、はては物狂はしき男なりと罵りけり。

あはれ閣龍が熱き志も世に容れられず、絶世の雄圖遂にほどこすべき術なきか。知らずや名玉は瓦の裏に在りても光澤うせざることを。蛟龍はいつまでも池中に潜むべきものにあらず、遂に雲雨のなからずやは。聰明なる女皇以沙伯にぞありける。

以沙伯一たび閣龍を見てより、烱眼はやくも、その凡庸の器にあらざるを知り、その説もとより虚構にはあらざるべしと信じたるものから、如何にせむ、權臣かたくなにして、うけひかざりければ、やむなく牧師の會議に諮りしに、不幸にして、其結果面白からざりき。以沙伯つく〴〵時勢の非なることをなげき、閣龍が心の中をおもひやり、或は勇氣の挫けむことを恐れ、さまざまに心をつくして、その鬱悶の情をなぐさめ、朝廷の中に邸を與へて、賓客の禮をとりて厚くもてなしつ、閑さへあれば、夫非難多にすゝめて、はやく閣龍が企劃を行はしめむことを祈れり。

されど國王非難多は、皇后以沙伯の果斷にして鋭敏なる性にひきかへて、優柔不斷の貴公子なれば、白駒隙を

馳せ、光陰矢の如く飛べども、因循として日を送り、空しく時を遷すのみなれば、首を長うして待ち焦がれたる閣龍はとても、望みのかなひがたきことを知り、悄然として西班牙の朝廷を去り、心も消ゆるばかりに思ひ屈して、たどる足もと危うくも、ラ、ラビダの寺院にさまよひ着きぬ。

かゝるべしとは夢にも知らざりし以沙伯は、閣龍家を出てたるまゝ歸り來らずと、召使の女がしらせを聞きて、驚くこと一方ならず、人を八方にくばりて、その蹤跡をもとめしめける折柄、ゆくりなくもラ、ラビダの寺院の長老より、閣龍を薦むる旨の書到りぬ。以沙伯喜びて懇ろに閣龍を迎へ、己が姑息の罪を謝び、意を决めて探撿隊發遣の計畫に手を着けむとせしも悲しいかな、財政上の事は、非難多の承認と權臣の協賛とを得るにあらずば、恣まに行ふこと能はず。しかも、一つは優柔の君にして、一は頑迷の臣なり。その苦心思ひやるだにあはれなり。

かくて以沙伯は、心ならずも一日二日と空しく過ぎけるほどに、閣龍はもはや忍びがたくやありけむ、斷然この國を去りて、佛蘭西の政府に說かばやと心を決し、竊かに旅の準備を整へて、朝廷の門より足踏み出ださむとせる一刹那、以沙伯より使あり、その旨を傳へて曰く、われ金錢の爲めにかゝづらいて、あたら得がたき丈夫を失はむとせしことをくやむ。この上は、よしや如何なる障害起らむとも、斷じて卿が企劃を行ふべければ、怒りを和げて、しばらくわが朝廷にとゞまらむことを願ふと。

そもアラゴンとカスタイルとの二國は、非難多と以沙伯との結婚以來、同一の政府となりて、西班牙の朝廷を作りしかども、財政上のことは、各々獨立の姿なること、既に前にも述べたる如し。以沙伯は、今閣龍が說をたしかめむとて、探撿の船を送らむとするに臨み、王はもとより意進まず、權臣すこしもうけがはむ氣色もなきに、如何にして其費用を辨ぜむとはすらむ。

憐れむべし、以沙伯は、己が支配せるカスタイル國の歳入を舉げて、悉く遠征の費用に供せむと決しけるなり。これ既に世の常の婦女の、よく爲し得べきことならぬに、これしも猶ほ不足を告ぐるの曉には、己が身のまはりの飾りとせる金銀珠玉を賣拂ふをも、つゆ惜しからじと思ひさだめたるに至りては、その心ばへの

高く貴きこと、深く感すべきことならずや。
閣龍が新世界發見の事業は、まことに絶代の偉功なり。しかも、この大業を遂げしめたるものは、鳥媚羅綺にも堪へざる纖弱女が庇護によれることを思はゞ、天下たれか以沙伯が高恩を謝せざるものあるべき。

(をはり)

豐太閤の夫人

鹽井ふく子

日本の歴史に於て、唯一の偉人と評されたる太閤秀吉に配するに足るべき夫人と云へば、其の人となりは已でに推するに足りぬべし。夫人名を彌々といふ、又八重なりと云ふ、或はゝじめの名はおねしの方と云ひて、後に吉子と云ふともあり。もとは平相國清盛の孫、惟盛が子、平李衛が次男、杉原伯耆守光平が十四代の胤、長房入道道松と云ふものゝ女なりしを、當時織田信長公に仕へて、足輕頭をつとむる藤井又左衞門が養女となりしよし、又一說には、夫人幼きより其の妹と共に淺野又左衞門が家に養はれしと云ふ。何れが眞なるか、或は甲說をとるあり、又乙說を是なりとするあり、眞僞は定めがたけれど、茲には乙說をとりてしばらく、淺野氏に養はるゝものと見なしおかん。

彌々女みめいとうるはしう、心のおきてもめでたく、よろづの業も、才智もすぐれて、國色の聞え鄉中にいと高う、心を傾くるものゝ多きが中に、信長の小性頭前田犬千代深く思ひをかけ、媒して又左衞門に乞ひけるに、淺井氏は大によろこび、ひとり承諾し、やがて、此の事を女に語りけるに。彌々女は如何思ひけん、犬千代に嫁する事を拒みぬ。

當時犬千代と云へば、才勇すぐれたる若者、殊に門閥の家にて、君が覺えもめでたく、容貌もすぐれし男子、拒むはいぶかし、こはたゞ少女心のはづかしうてならんと思ひ、兎角そゝのかせど、なほ辭みけるに、又左衞門は今更に麁忽に約せし事を悔めどせんなし、此の上はかの猿面に語らばまたよき思案もあらんかと、此處に木の下藤吉郞を招きて、事のよしを物語り、御邊が智を以て、我がためによきにはかりくれずやとあるに、藤吉郞はいと易き事と輕くうけひき、何事も我れにまかせ玉へ、よきに量からふべしとて、かねて犬千代とはよき

中、速かにおとづれて、淺野との婚姻思ひとゞまるべきよし、詞をつくして說きもなだめもしたれど、元來剛氣の犬千代、一旦志したる道、たゞに藤吉郎が辯に屈伏すべきにもあらず、ともあれ、なるまじきもとの理由を聞きたる上にて、とかくの返答は申すべしとて、うけひく氣色も見えざるに、藤吉郎は、此のまゝ談判と、のへずして歸らんも面なく、かつは淺野氏が心をも察して、窮計を案じ出し、一時を僞りて云ふやう實は彼の女は、己れとわりなきちぎりを結びたりしを、父知らずして、君にゆるしたり。何事も君が俠氣にゆるし玉ひて、はじめの約をば捨て玉はゞ、奴の大悅少なからずといふ。木の下藤吉郎とは、秀吉がはじめの名にして、其面いと醜く、猿に似たれば、小猿〳〵と字せられ、信長が草履取りより、昨日やう〳〵足輕にとりたてられたるものがと、犬千代はいたくおどろき、去ばし其の面をうち守れば守るほど猿面なり。己れ小ざかしくも我をたばからんとするよ、さやうの猿面にいかで深く馴れ合ふべき、思ふに彼の女他に約せしものあるならん、よし〳〵たばからんとならば、たばかりても見よかし、我れもたばかり信じて、猿面が赤き皮ひんむきくれんものと、かまへし心を色にも見せず、そは思ひもかけぬ事なり、さやうの儀ならば我が婚姻は思ひとゞまるはおろか、僕、君が媒妁となりて、二人が中をとりはからふべしとあるに、さしもの藤吉郎も困じはてゝ、さま〳〵にこしらへ辭すれど、犬千代はいつかな退かず、はては信長公に聞えて事既に決定したり。(一說には、藤吉郎、柴田勝家によりて婚儀をかまへん事を信長に請ひたりとあり)藤吉郎是非なく、事の次第を又左衛門に語りしに、又左衛門もおどろき困ぜしが、今は娘をとかんより外はなしとて、八重女に事の次第を語り、事茲に至りぬ、今は是非なし、御身藤吉郎に嫁すべし、しからずば事安からじ、且つ木の下今は卑賤の身なれど、つら〳〵彼れがつらだましいを察するに、久しく人の下風になびきをるものとも見えず、御身必ず彼れに嫁ぐべしと云ふに、思ひの外に女は快くうけひきたり。又左衛門はじめて安堵して、やがて吉日を撰び結婚の式をば擧げたり。

折りふし藤吉郎が貧しさはたとしへなく、結婚の夕べ、破ぶれたる席に、缺けたる盃を以て汲みかはしぬとぞ。四海浪靜かに治まらんとは犬千代かけても思は

ず、やがては離縁すべし、離縁せば我れまづ猿面を困らしめん、いでや妻女が不快の色をば見んとて、程なく犬千代、木の下の家を訪ひしに、妻女は繩ののれんをくゞり、みづしの業やとり居りけん、たすきをはづして、うや／＼しく出で迎へ、懇ろに媒の勞を謝し、喜色面にあらはれしのみならず、やぶれたる席に居て、なほ夫妻の禮儀を亂さず、主君に仕ふるが如くに、敬ひかしづきぬれば、犬千代案に相違して、己れを愧ぢ、藤吉郎が人となりをいたく感じて、遂に斷金の交りを結びたりとぞ。犬千代は即ち前田利家にて、秀吉が幕下に家康と肩を並べし豪傑なり。さるに、なほその人よりも秀吉をと見拔きたる夫人の眼識、また凡ならずや。

人を見る眼、已でにかくの如くなれば、其才氣の英敏なるは推して知らるべく、なか／＼に當時の諸侯大夫などの及ぶ所にあらざれば、秀吉もいたく愛稱して、万事夫人にはかり、事を决する所多く、軍中にある時も、しば／＼夫人に書を送りて、勝敗を報じ、軍略上の事より、家政家事に至るまで注意する事多く、夫人もまたつゝしみて事をとり、一も夫のためにはからぬはなかりき。實に秀吉が大業をなしゝは、夫人の内助あづかりて功ある所にして、秀吉關白となりける後は、北の政所と稱へて、秀吉愛妾多けれども、みな別處におきて、ひとり此の夫人と室を共にして、裨益する所多かりきとぞ。

成らざるを興すは英雄の易しとする所なれども、その就りしを守るは英雄の難しとする所、されど、政所つねに夫をいましめ、願くは藁席瓦缸の時を忘れ玉ふなといへりとぞ。のち、秀吉猿樂にすさみて、天下の政を怠らんとするや、夫人も共に之を興じ、ひとしく冠りをかぶり、笏をとりて夫と共に舞ひすさびて、婢女が事を申すも知らぬげ、近士がものを問ふも聞えぬげ、ひたすらに舞ひまふ袖をひるがへして、万事を他處に興じすさみぬるに、婢女幾度かとひ、近士かへりてはまた來り尋ぬれど、夫人は省みもせざるに、婢女是非なく口をつぐみて退き、近士手をつかねて、舞の手をながめぬ。秀吉此のさまを見て、大に悟り、げにかやうにすさみては天下の大事も聞えざるべしとて、遂に舞ひまふ袖をたつに至りぬ。夫人の諷諭、げに智慮深しと云ふべくや。

あはれ、困厄の内に夫を助けて大業をなさしめしため

し、もろこしには漢の呂后、我が朝にも源頼朝が夫人、二位政子、みな女丈夫なりと雖も、彼れは嫉妬の念深くして、高祖の崩ずるや、その愛惜せし所の戚夫人及びその子如意、手足を斷ち、眼をくぢき、耳を輝し、瘖藥を飲ましめ、人彘ととなへて厠中に居らしめしよし、慘酷極まるふるまひ、人の中の鬼とや云はまし。之はまた頼朝が猜疑の心を助けて、富士野の巻狩、範頼が根なし事をつけて、血脈の兄弟を殺ろさしめ、夫と共に、最愛の娘が聟を殺す等人情忍びざるふし多きを、ひとり秀吉が夫人は、帷幕の女將と仰がれながら、つゆ猜疑の心なく、秀頼を見る事、己れが生める子に異ならず、淀君以下婢女を遇するに、つゆ間言ありし事なかりしとは、ますゝゝ賢夫人とや云はまし。秀吉もまた淀君以下愛妾多きが中にも、決して夫人を堂より下さず、睦じうもてなし玉ひ。殊に夫人、人を見る目のいみじく、加藤清正如き忠直の徒をいつくしみも、推擧もせしかば、福島、淺野、黒田をはじめ、有力の大名の服從するもの多く、政所が婦徳は口に高きに、淀君は猜疑の心いとつよく、ねたましきまゝに、石田三成、小西行長等の姦諛の徒とはかりて、あさましきふるまひをも聞えけるにつけても、牝鶏のあしたは家のわざはひをなすと、むかしのひじりの敎へしも思ひよせられ、もし我と淀君と威權を爭はんには家の亂れ、やがては天下の大亂のはしともなりぬべし、もしさあらんには、太閤が功業も空しく、民また塗炭にくるしみなん、たゞ何事もとり己れが心を正して、かつて、狩野法眼元信が畫きし青柳の糸のやさしきすぢに習はんにはしかじとて、ひ風吹き柳の風のまにゝゝなびくさまの畫の聚樂城中二の丸に張りつけありしを召しよせて、居間の障子にはらせ、座右のながめとして、善惡につけても是非につけても、一言の言の葉をも出し玉はざりしとぞ。實にありがたき賢婦人、貴夫人の品位、ますゝゝ高しとや云はまし。小野のお通が淨瑠璃をつくりしも、此の政所がつくらしめしにて、かやうの事に心をやり、偏に人の議論におづからじとの思召よりせし事ぞとかや。慶長三年、秀吉の薨ずるや、髮をそりおとし、かねて夫人がつくらしめ玉ひたる鷲峰山高臺寺に入り、湖月院と稱へて、行ひすまし玉ふ後も、秀吉がいまはに我がなからん後には、徳川氏と交りを結び、兩家爭ふべからずとの遺言を固く守り、且つ秀頼が爲めにも、彼れと爭

はんは不利なる事をはかり、家康、秀頼を京師に招きたる時も、淀君は其の變あるを疑ひて、やらじとかまへしを、湖月院すゝめて之を遣はし玉ひ、且つ股肱の臣加藤清正、淺野幸長等をして弓銃を擁して固く護らしめ玉ひぬ。家康が姦謀遂に如何ともする事能はずして、秀頼つゝがなく大坂に歸りたり。あはれ、淀君をして此の夫人たらしめ、猜疑の心あらしめず、夫人と心を一つとして、賢人の徒を擧げもちゐて、秀頼が近士となし、秀吉が遺志に背かず、徳川氏と結びて、時をはかりなば、豐臣氏は二世にして亡びざりけんを。

夫人、年、八十餘歳、寛永元年九月十六日かくれさせ玉ひぬ。その御靈屋は高臺寺の中にありて、千年の雲のたなびくも尊く、園中に櫻のふりたるあまたありて、春毎に咲き匂ふ色は、高く朝日のかげにかゞやき、秋は萩の花いみじう咲きこぼるゝ露の色も情ふかく、その御靈屋の長押には、三十六歌仙及びその和歌のものしありと聞くもみやびにて、夫人の心のおきても見えて尊しとも尊しな。

學術

裁縫の衛生

學校衛生顧問
主事、醫學士　三島通良述

裁縫は、女子の手藝の中で、最も必要のものである、之を知らなければ、殆んど女子として世の中に存在を許されぬほどのものである。故に女子たるものは、殊に高貴の御方や、又は勞働のみを職とする者の外、いかなる日でも針をもたぬ日はありますまい。それほど必要のものであるから、學校に於ても之を敎へ、家庭に於ても之を習はせます。女紅場や藝妓の學校に於ても、裁縫は必修科とされてあります。女と針とは、過去如何なる因縁のあるものか實に寸時も離るべからざるものである。それでかほどに深い因縁があつて女子の身の周りを離れぬ裁縫であるから、女子の生涯中に、此が其影響を蒙ること實に大なると云ふべしです。果

して然らば、裁縫に依つて女子の身體に蒙るべき害を、未萌に防ぐの方法を講ずるのは、極めて大切の事である。然るに此れまで世間で、裁縫に關する衛生の事を論じたものはまだ無いやうです。そこで私も未だ十分に之を研究したとは申されませぬが、多少の經驗がありますから、茲に少し說を述べて、諸子の參考に供へて見やうと思ひます

之を裁縫衛生と云ふのは、餘り業山すぎますから、題は裁縫の衛生として置きました。それで先づ裁縫に關する大體の事から論じまして、あとで各個の點に及ぼさうと思ひますが、此所に述べますのも、固より裁縫に關する緊要の事のみで、決して之を以て、論じ盡したと云ふのではありませぬ

第一　裁縫は(學校に於ては)坐してさせたものか
　　腰掛けてさせたものか

此の問題は、數年來、度々諸學校長などから索ねられたものである、ところで、私は先づ目下のところは、坐つて居て、前に机を置くと云ふ仕方が宜しい、と云ふ答をして置いたのである。其理由を少し述べてみませう。

凡そ年少の女子を育てるのに、腰掛なり椅子を用ひて倚坐させるのと、疊の上にちやんと坐わらせるのと、衛生上から視て、孰れが利であるかと云へば、無論腰をかけさせる方がよいのです。此は女子に就てのみ、論ではない、男子でも同じことです。何故なら、其本人の身長に適した腰掛に倚らせれば、姿勢も正しくなり即ち天然ノ體勢、生理的の體勢をたもち得られますから、呼吸も滑らかになり、血液の循環もよくなり、起居動作が自由輕捷に出來るから、新陳代謝の作用が十分に出來て、自然に美なる體格に發育することが出來ます之に反して、行儀よくすわらせるものとすると、下肢は零度の鋭角に曲げられ、殊に足を重ねて其上に臀を載せるとすると、體は自然と前方に屈し、脊柱は後屈して、終に脊柱後屈症を起すに至り、呼吸血行共に妨げられ、起居動作は、遲鈍となつて、爲に大に身體の發育を害します。本邦人(殊に女子)の下肢が短くて、下脚が弓なりに曲がつて、跗が內側に曲がつて居るなどは、恐らく此の坐るのが大原因になつて居るのでせう。優美などと思つて居る內曲に歩くのは、一つは衣服の裾が重く厚く、且つ下肢を卷いて居る爲であるが、下肢や跗

の曲がつて居るのも、大關係があるのです。故に内曲の女は、下脚が畸形であるのです。畸形を優美だなどと思つて居るのは、所謂茶人の思想です

さて倚坐と坐わるのとの間に、それほど明らかな利害の別があるのに、なぜ裁縫（殊に學校に於ける）のみは、坐わる方がよいと云ふのかと、かう切り込んで來るに違ひない。ところで、私が裁縫だけは、すわつて前に机を置いてやらせやうと云ふのは、實は止むを得ずかうしやうと云ふのである、さらさら之を以て最も良い仕方だと信じて居るのではない

本邦の家屋の構造は、申すまでもなく、疊敷で坐るやうに出來て居る。西洋造りと云ふのは、實に稀れだ。それで、女子は家庭に於ても、常に行儀よく坐つて居る方が多いし、殊に裁縫のときは、必ず坐つてするものに極まつて居る。故に之を習ふときから、能く此の坐つて裁縫をする姿勢や、方法に慣らして置く必要があると云ふたら、或は其點に於ては、讀書でも書字でも、同じことではないかと云ふ議論が出るだらうが、私は、此れは裁縫とは違ふと思ひます。なぜなら、讀書や書字は、學校に於て腰掛けたままに習らつたとて、之を坐つてしても、別に少しの不便を感ぜすにやれるし、又女子に於ては、此等讀書書字の爲に費やす時間は、家庭に於ては實に少ないのですから、從つて其影響するところも大きくない。裁縫は之に反して、一の手藝であるから、習ふときから其姿勢や方法を一定して置かぬと、若し手勝手が違ふと、非常に不便を感じるから、豫め敎しへるときより、其家庭に於て行ふのと、同樣の姿勢方法をとらせる必要がある。そして、女子が一家の主婦となつた後でも、裁縫の爲に費やす時間は、比較的多いから能く正しい姿勢や方法を習はせて置かぬと健康上非常に利害を異にするのです。右據の次第で、私は裁縫に於ては、家庭に實行さるる方法と同じに、坐らせてやるのが、目下に適したものと信ずる。今より後、衣服や住屋に變化を生じたときは、無論其方法も之に從つて進化さるるに違ひない

第二　裁縫用の机

裁縫は坐つてするを良とするが、必ず前に机を置かなければならぬ。此はどう云ふ理由かと云ふに、凡そ物を見るには、眼と物との間に、一尺二寸（三十五センチメートル）の距離が必要であるのです。若し細かな物

を見るときでも、一尺より近寄せぬが宜い、之より近寄せて物を見るときは、極く瞬間はとにかく、眼の勞れることが甚しいのみならず、近視眼となるものである。故に文字を書くときは勿論、書を讀み、手工をなすときも、必ず眼と物との間には、一尺二寸の距離を置かねばならぬ。そこで裁縫のときも、前に机を置かぬと、自然手がさがり、從つて頭も、上體も前に屈むで、脊柱は後屈（猫背）し、爲に健康上に諸種の害を蒙るから、之を防ぐ爲に、前に机を置かなければならぬのです（拙著『生徒姿勢の枝折』を一讀すべし）

京都府高等女學校に於ける、年年の調査を見ても、脊柱屈症の多いのは、裁縫專修科の生徒であります。それ故、私は數年前、該校の校長に話をして、前机を置くやうにさせました。校長は、私の説を用ひて、先づ前机を用ひる組と、之を用ひぬ組とを作つて、試して見たところ、身體檢査の結果に於て、之を用ひた方が、著しく脊柱後屈症に罹つた者が少なかつたので、遂に全校の生徒に、裁縫のときは、前机を用ひさすことに致しましたと云ふ事です

さて此前机は、同時に裁ちもの、縫標をつけること、布を擴ろげることなどの用に供し、之にかけ針立を附設してもよいが、兎に角先づ縫物臺の用をさせるのであります。それで裁縫時に於ける姿勢を正しくする、と云ふ大なる利益があるのです

裁縫用の机の高さは、書字用の机と同じにすることは出來ません。なぜなら普通の机の高さだけにすると、裁縫をするのには、少し高すぎて手の動きを妨げる虞があるから、之を幾分か低くせねばなりません。そこで私は、裁縫用机の高さを、凡そ左の通りに定めました

尋常小學校兒童（十年前後）用　曲尺七寸
高等小學校兒童（十年以上十三四年）用　曲尺八寸
高等女學校生徒（十三四年以上）用　曲尺九寸

此九寸のもので、大概大人の分も宜しからうと信じて居ります。尤も殊に身長の高い婦人や、肥滿の人は、一尺位にせねば適せぬこともあるか知れません。此高さは、孰れも膝が、らくに机の下に入るを度としたものでありますから、膝が入らなければ、此の入るだけの高さのものを、用ひねばなりませぬ

机の幅や長さは、其實用に便利のやうに定めれば宜し

い。机の板の厚さは一寸以下が宜しい。其足の付け方などは随意です。若し之に懸針立を作り著けるときは、之を關節作りとするか、又は差込み作りとすれば宜いと思ひます

第三　針函とかけ針と

針函の構造に、ヌ諸種ありますが、私は京都邊に多く用ひられる、針刺を有する懸針立が附て居るのが、便利だと思ひます。此懸針立は、伸縮することの出來るやうになつて居ますから、之を用ふる女子の身長と、其用とに應じて、懸針の高さを調節することが出來ますから、自然前に述べた猫背を防ぐことが出來ます

東京邊で多く用ひられる針函には、此構造がありませぬ。それでかけ針は、常に疊へひきかけて致すことになつて居ります若し之に著て居る紐を、加減するやうにでもしたら、多少宜しいか知れませぬが、それでも、迚も懸針立を使用したときのやうに、甘い工合に、眼と物との間に適當の距離をとり、且つ姿勢を正くするとは難いです。なぜなら、懸針立なら、縫ふ物が凡そ水平に引かれて居るけれど、疊へ引かけた懸針だと、斜に下方に引かれる爲に、不便を來たすことは免かれませぬ

懸針立で、一寸と膝の下へ、其臺足を差込むやうに出來て居るのがあるが、此も宜しい。それで此分であると、前にも申した、針函付の懸針立と違つて、伸縮が出來ませぬから、懸針の紐を、上中下三ケ所に著けて置いて、以て身長や其用に應じて、高低自在に使用し得らるるやうにせねばなりませぬ

第四　針刺

針刺の作り方は、衞生上に大なる關係があります。殊に其内容物に、注意せねばなりませぬ。針刺の内容物として、最も普通に用ひられる物は、女の拔け毛であります。此は油を含んで居るから、針が鏽びぬと云ふことで、珍重されるのです。ところで、此拔け毛も、清潔のものであれば、敢て差閊へはありませぬが、先づ其んなのは稀れで多くは餘程不潔のものであります。それで其中へ刺して置た針の尖には、諸種の不潔物や、有毒物が附著して居る。依つて若し其針を皮膚に刺すことがあると、只少しの出血のみで濟まぬで、時として、瘭疽のやうな病を發し、切開せねばならぬやうなことになる

故に、若し拔け毛を針刺の内へ入れるのみなら、一先づ

強い曹達水の中で能く煮て、之を洗ひ乾かし、後再び少量の油に浸してから、入れねばなりませぬ。これは隨分面倒であるけれど、止を得ませぬ。内容物として其他に好物があるかと云ふに、孰れ彈力ある纖維の物でなければなりませぬから、私は先づ、新らしい「フラネル」「羅紗其他の毛織物の細屑が、宜しからうと思ひます。其他動物の毛も用ひられますが、此だと又曹達煮が必要になつて來る。夫故植物性のもので「パンヤ」「ツバナ」「木綿花などを用ひた方が宜しからう。其他にも好物がありませうが、此は今思ひ出し得ませぬ

夫から此等の物に、油を浸ます必要がある、即ち針の錆を止める爲に、尤も油氣が無くも、一度一度に能く針を拭ふて置けば錆びませぬが、此は云ふべくして、行ひ難いそれ故、矢張り油を浸まして置く方が便利である。其油は鑛氣のないものが宜しい、即ち椿の油、胡麻の油、食用「オレーフ」油などを、成るべくは一度煮立て、之を少量に用ひれば宜しからうと思ひます。尤も此針刺は、使用中古くなつたり、不潔になつたりしたときは、速に新調せねばなりませぬ

第五　篦とチヨークと

布に標を付ける爲には、今日では篦を用ひて居ります。此にても大なる差間へも害もありませぬが、其標を能く認め得る爲即ち、眼の勞れを幾分か防ぐ爲には、白絲か「チヨーク」を用ひた方が宜しからう。白絲は從來用ひて居るところではない、裁縫の正規の手續であらうけれど、其代り多少餘分の時を費やす虞れがあるので、略式では篦を用ひるのでせう。其代り篦標は、見誤り易いし、又見惡いと云ふ缺點がある。それ故其代りとして、裁縫用の「チヨーク」を用ひた方が宜しからうと思ふのです。尤も日本の布地の中には、「チヨーク」標の、あとから脫ち惡いものがあるかも知れませぬから、貴重の布地などなら、白絲標を用ひれば宜しい。此は衞生上重要の事では無いけれど序ですから記して置きます

第六　針創と瘭疽と

針を餘計に取扱へば、取扱ふほど、夫だけ多く針の爲に創を蒙ることがあるは。免かれぬ譯です。それも不潔の物が少しも、附著して居らねば、何の心配には及びませぬが、若し眼に見えぬほどでも、毒物が附著して居る

と、其爲に指の尖などに、瘭疽と云ふ腫物を發します。そこで此病を發する場合を數へて見ると、其主なるものは左の通りです

一　針自身が不潔であつたとき
二　針刺が不潔であつたとき
三　裁縫が不潔であつたとき
四　手が不潔であつたとき

一の針自身が不潔であると云ふは、不潔な物を縫つたとか、不潔の針刺に刺さつてあつたとか、不潔の場所に置いてあつたとか云ふ爲に、針が不潔であると、其針で刺した創が、瘭疽になる。昔から、錆針で受けた創は、治りが悪いなど云ふは、錆針の多くが、不潔である爲からである。故に針は、孰れの場合でも、用ひる前には、成るべく一度清潔の布などで、拭ふが宜しい

二の針刺が不潔ではならぬことは、前に申しましたから畧します

三の裁縫が不潔であると云ふと。よし針は清潔でも、之を縫ひもて行くうちに、針が不潔になつて居るから、此で創を蒙ると大事になるのです。故に縫物は、必ず洗濯して、日光で乾かした後にせねばならぬが、物により、假令ば綻を縫ふと云ふやうな場合には　さうは行かぬから、此際には、特に注意して、怪我をせぬやうにせねばならぬ

四の手が不潔であつたとき。此は、針も清潔、縫物も清潔であつても、裁縫をする手が不潔であつては、此が爲に針も不潔になり、縫物も不潔になる恐れがある。よし此等の物が不潔にならずとも、手に創を受けたときは、矢張り其不潔物が創の中へ入つて、病を發しますそれで、創は針の爲に蒙ることが最も多いけれども、又鋏や懸針の爲に蒙ることもある。そして其結果は同様です

針の刺創のほかに、又針の踏抜きをすることも度々あります。此は針を粗末にして、落して置たり、待針を抜くのを忘れたり、衣服の中に針を落して忘れたりするなどより、生ずる怪我でありますが、此は中々針の刺創位のものではない。時とすると針が全く、體内へ入つて、抜くこともどうすることも出來ず、數年を經て、足へ踏抜いた針が、肩から出て來たと云ふやうな事もある。此等はまだ宜しいが、踏抜た針が、中で諸種な悪業をして、三四年も患らつて、入院療治をしたやうな例もあ

る、又其爲に命を取られた例もある。實に聞ても、身の毛のよだつやうな事があります

此害を防ぐ爲、裁縫に於ては、之を始める時分に、針の數を改め、終ふときに、復た改めよと敎しへてあります。ところが、女と云ふ者は、細微の點に氣が付く癖に、此んな必要の事には存外不注意てある爲に、自から禍を招くのてす

針て受けた創も、毒さへ入らなければ、少しの出血がある位て、直きに癒りますが、若し少しても毒物が入つたが最後、其所に膿をもつて、瘭疽となります。此は非常に疼痛のあるもので、夜も眠られぬほどてある。そして、之を捨置くときは、時として指のみならず、段々中の隙を傳つて、下臂までも毒を及ぼすことがある。此云ふ場合には、稀には、下臂を切り落さねばならぬやうなことが出來します

瘭疽は、必ず之を切開しなければ治りませぬ。決して散らすなど云ふことの出來るものてはないから、若し此病に罹つたら、必ず外科醫に賴んて、切開してもらはねばなりませぬ。尤も切開するには、一定の時期がありますから、此は醫師に問はねばならぬ。そして切開すれば、疼痛は立所に愈ります

瘭疽になるのを防ぐには、針で刺した時分に、先づ其所を、十分に口で吸ふのです。其後、成るべくは五十倍以上二十倍位の石炭酸水で洗ふ、若し石炭酸の無いときは、煮沸水か或は淸淨の水で能く洗ひ、其後へ英吉利絆瘡膏(絹絆瘡膏)又は即効紙を貼り、其上を白綿布で締つて置くのです。それほどにしても、後にズキズキ痛みそして、腫れて來るやうなら、多くは瘭疽になるものと思つて、早く醫師の療治を受けなければなりませぬ

裁縫の衞生に就て云ふべきことは、此外にまだ裁縫時の姿勢のことも、もつと委しく云はねばならず、又洗濯張り物などに就ての、衞生上の注意もあります、其他服地の事、衣服の裁方の事など、澤山ありますけれど、餘り長くなりますから、茲には先づ、此まて人の注意を缺いておつた、主なることのみを述べましたのです。此以外の事も、機があつたら、再び述べることに致しませう

(終)

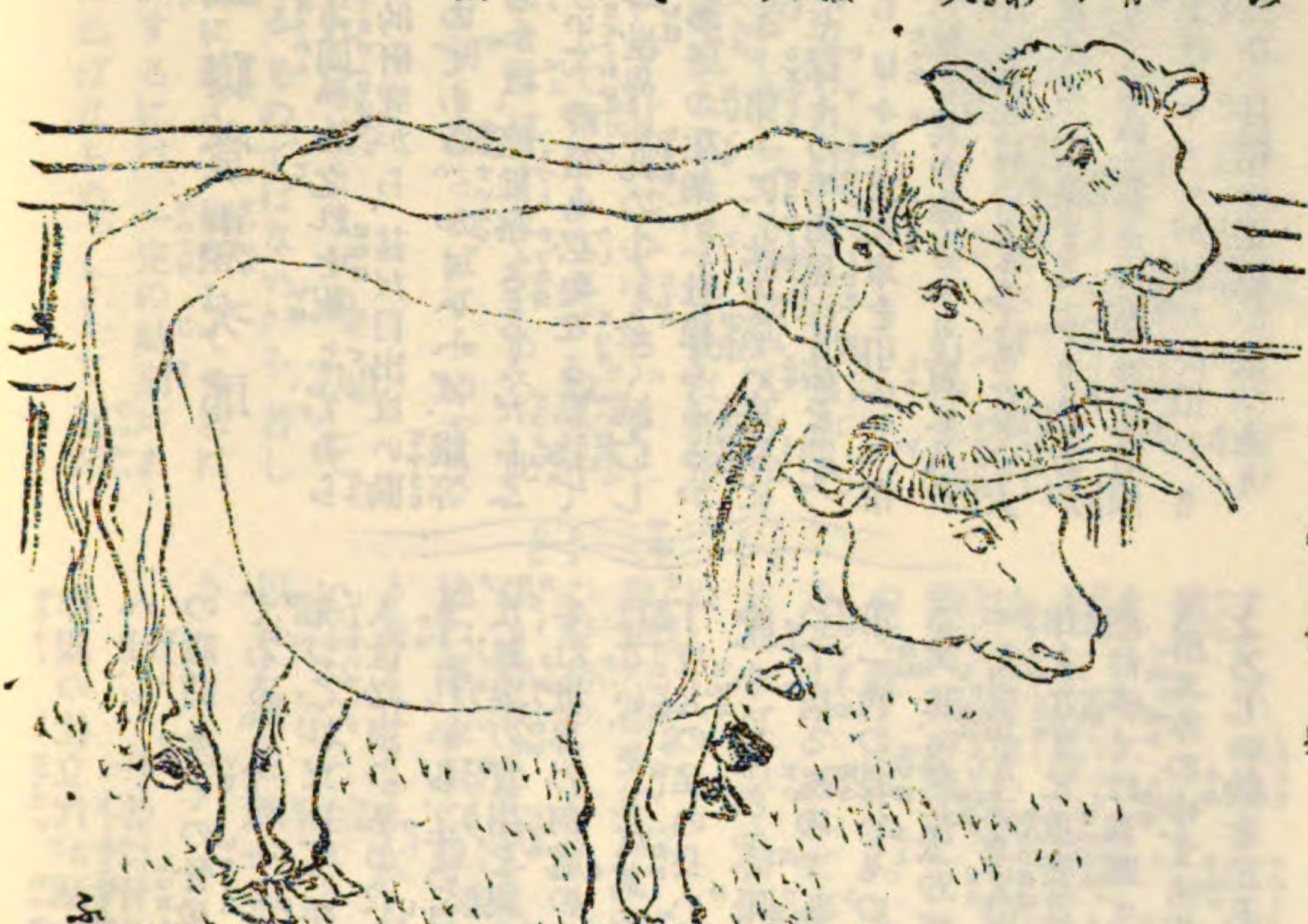
牛の話

女子高等師範學校教諭　藤堂忠次郎

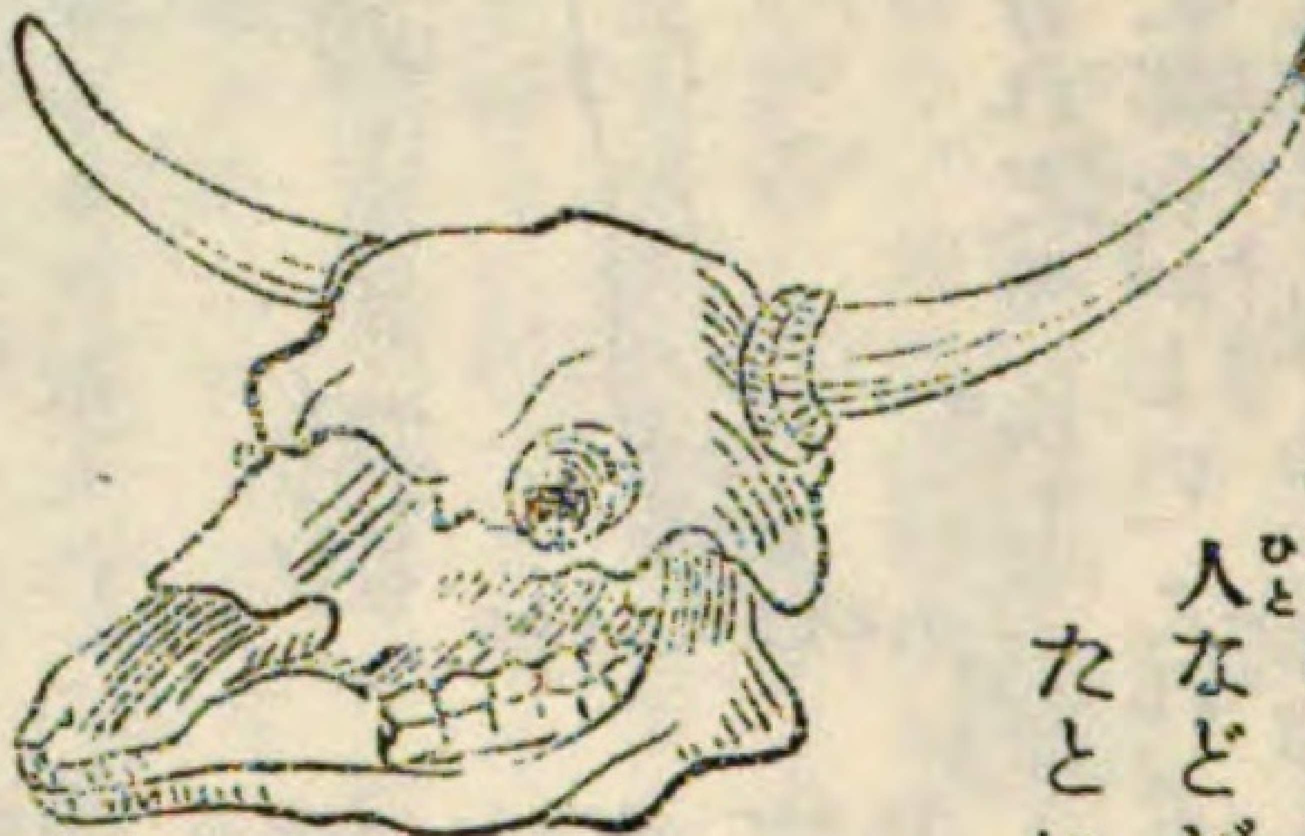
今年は牛の歳とて、色々の方面から之れを祝ふてあらふが、我は牛其の物の自然的研究から、甚だ目出度い動物として深くこれを祝ふのである。かくいへば、孃等は牛が何故に目出度くあるかは、略推察さるゝだらふが、如何にも牛は世界に於いての最も必要なる動物であるからである。假りに今世界に此の牛が全く滅亡したと考へるならば、如何に多くの生業が、杜絶らるるか殆ど計られない程であらふ。第一に、此の廣い東京にある幾十軒の「いろは」乃至様々の牛肉屋は、店を閉づる外はなからふ。それから、は々早天に車を引いて、市中をかけ廻る牛乳配達は、忽ち其の車さへも質に入れるようになるだらふ。靴屋、鞄屋はいふまでもなく、大工場の機關が車の帶革がなくて、廢業するより仕方があるまい。まだ其ればかりでない、我々の常食する米麥や菜の類が暴に相場を上げ、マッチが甚だ高價のものとなり、石鹼の相場が狂ひ、砂糖の正價が飛び上り、洋服の仕立代が滅方に高くなるであらふ、何ぜかといへば、これ等は皆牛骨から多くの肥料、多くの燐、多くの脂肪、多くの骨炭、多くの衣服用釦子などを得るからである。今は一々こゝに之を説明する暇もないから、先づこれだけで、牛の如何に實用の多く死生ともに人世必須のものたるかが、分かつたであらふとして置きこれから、牛の自然的研究から、如何にして此のよーな無限の實用を與ふるかを説くとせう。

牛は世界の何處の果へ行かうが、これを見ないところはない、そして其の變つた種類も實に夥しいもので、丁度犬の足の長いものや、短いものや、躰の大きいものや、小いものや、毛の長いものや、短いものや、顔の尖がつて居るものや、圓いものがあるよーに似て、これにも第一角の長いものと短いものと又全く無いものとがある外に、甚だ太つて重荷などを運ぶに適して居るものや、乳房が大きくて乳のみを取るによろしいものや、農作をなすに重寳な躰のものなどある、一躰日本の固有產は多くは眞黒で洋種に比べると一般に躰が小くある、日本の中でも但馬や羽前の國などでは割合に性のよろしい物を產し、之れを食用するにも、神戸牛、米澤牛

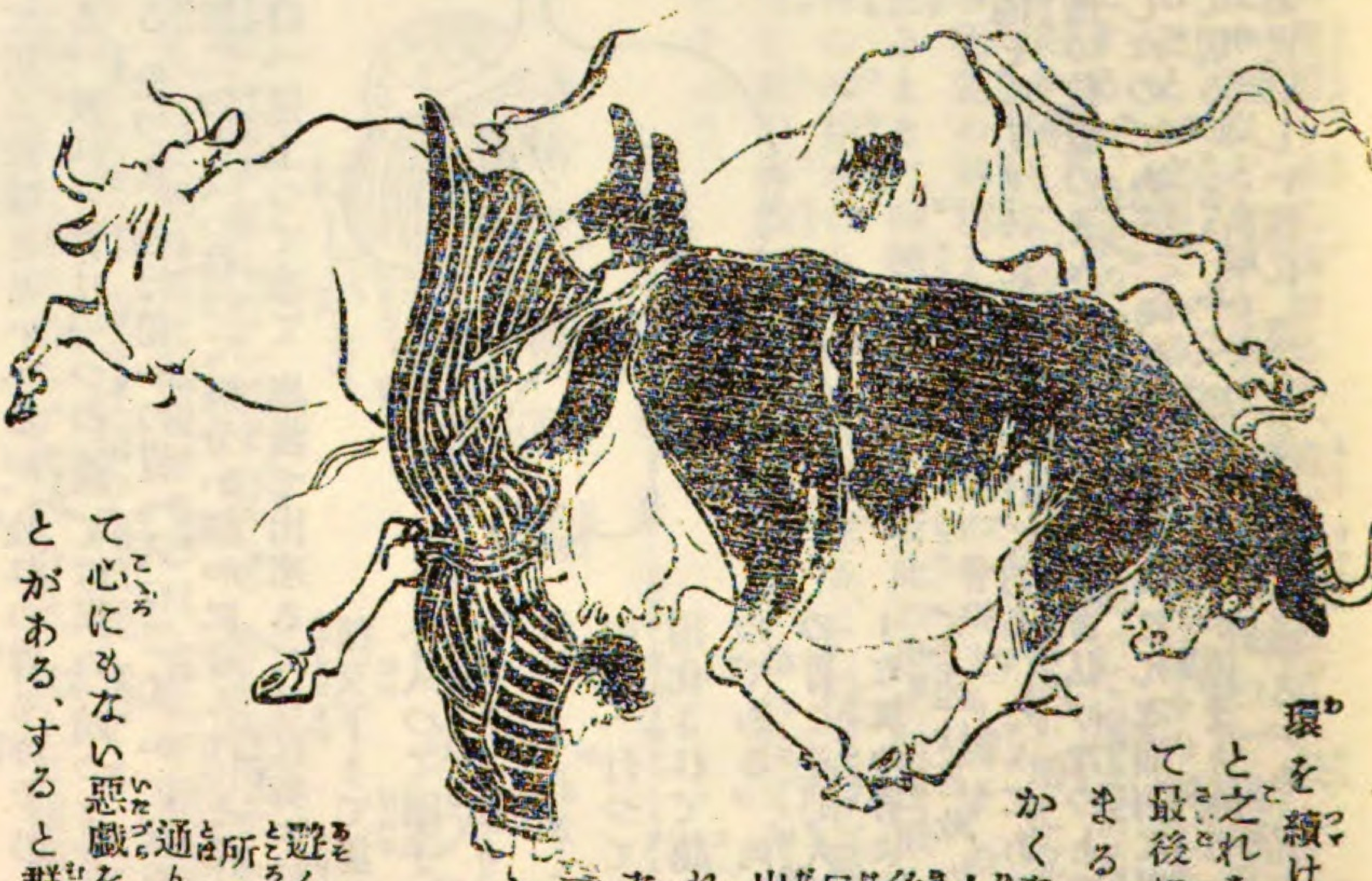
と稱へられて、此の二國のを良品とするのである。抑も牛といふものは性質が温和であるといふは、そーなければならない理由があるのである、彼れは躰が大くて且つ太つて居るから、擧動に不便な所があるばかりでなく、彼れの齒が只物を喰ふのみに止まつて、虎や獅子のよーに、之れで以て敵を噛み殺すといふことは出來ない、第一に鋭い牙（動物學では之れを犬齒といふ）が見えない、それから前齒（動物學では之れを門齒といふ）の上顎にあるものもない、最初に物に噛み付くには、どうしても此の牙と前齒とがなければな



らない、だから我々は此の點に取りては安心で滅多に噛み付かれることはない、奥齒（動物學では之れを臼齒といふ）は甚だ扁くて、眞に臼のよーな形をして草を揉み潰すによろしい、それで牛の齒列は都合上顎に奥齒が六枚づゝ、下顎に前齒八枚奥齒六枚づゝあつて、合計三十二枚ある譯である、人間と其の數は同じであるが樣子が大方違ふ。然らば角のある理由が立たないではないか、何故にこんな温和なものに恐ろしい角があるか、それは温和であるから却つてあるのである、温和といふことは一方には怯懦といふとを意味して居る、齒の鋭くない

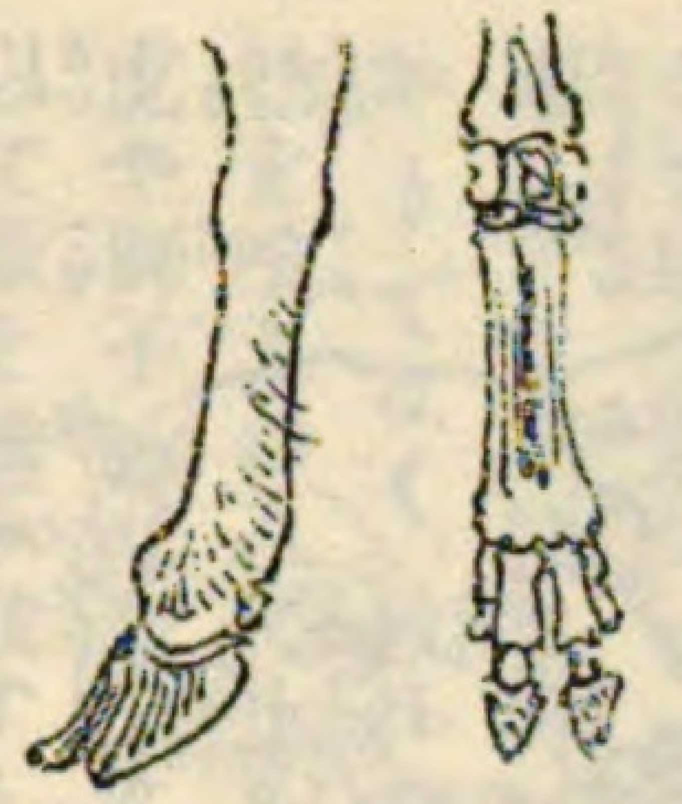


所から、虎獅子のような敵を只避けることばかり考へてゐる、然るに體が重いから兎角思ふよーに行かないから、そこで必死となつて防ぐより外はない、その時にその角が用をなすのである。實にその角は皮膚の堅く變じたもので、中には少しの空洞をもつて、極眞中には骨の突き出たものが支となつて居る。隨分人などが、此の角に觸れて、腸が飛び出たといふ例がある、中々恐ろしいものである。就いては今、牛の性質を談す必要がある。彼れは常は甚だ靜かで、能く人に從つて色々の用務を辨ずるが、若しも不意に動かざるか、或は食物をも與へずして酷く使ふよーなことがあつたならば、忽ちに暴怒して、そのすさまじき有樣は譬へよーがない程で、先づ最初に跳ね出せば、一度大きな環を造つて遠巻きに人の周を驅け走つて元の處へ一寸止まる、續いて第二の環を造つて同樣にする、その環は前のよりは少し小い、それから第三第四第五……と

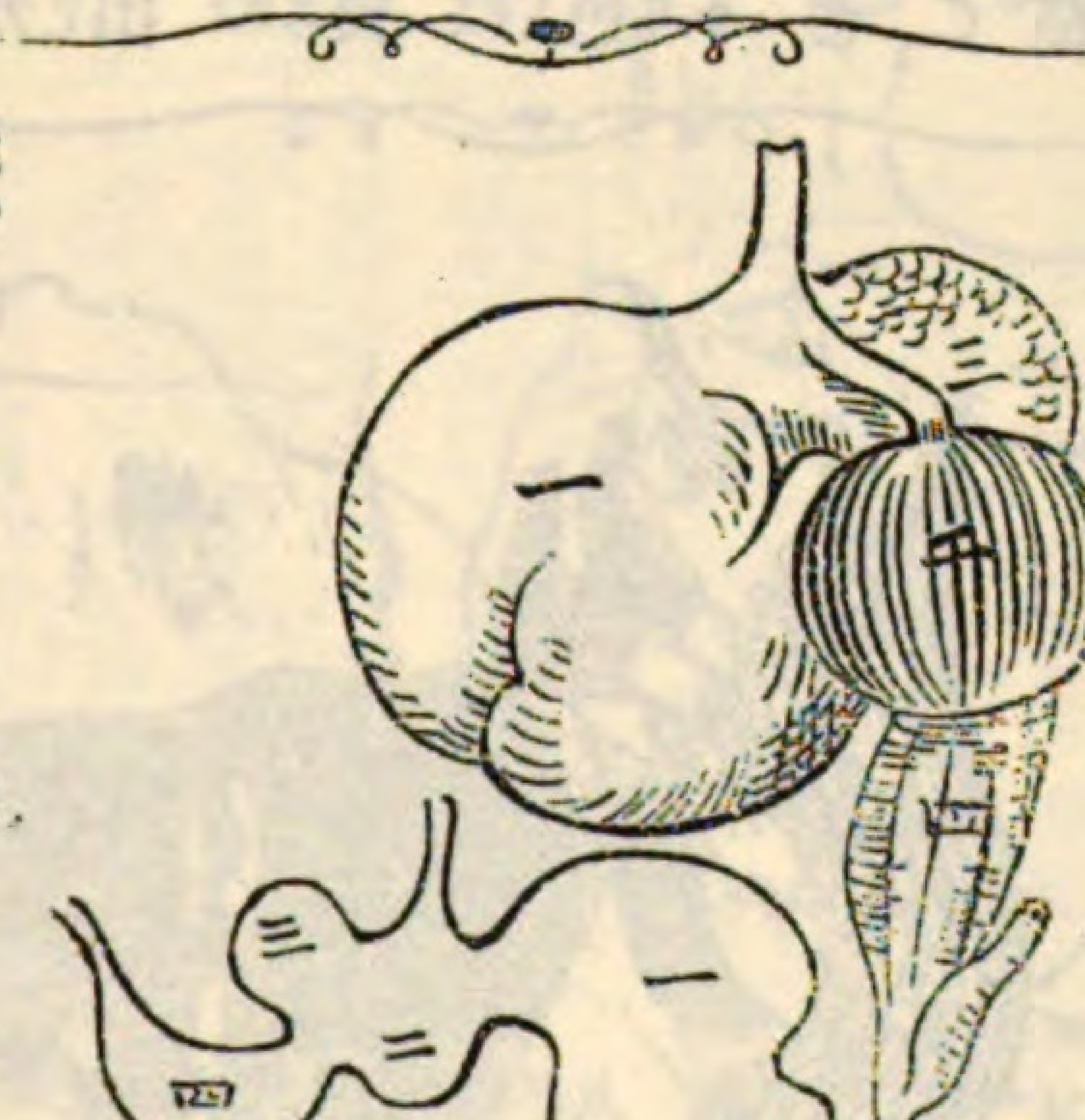


環を續けて、段々と之れを小くして最後に人に迫まるに至る、かくなつては人は甚だ危險で逸早く逃げ出さなければならない。又多くの牛が牧場で遊んで居る所を、一人通りかゝつて心にもない惡戯をしたことがある、すると群をなし

て居る牛は、怒つて實は恐れて、各々角を振り翳して其の人に迫つて來た、ア、其の人は今や多くの角に觸れて、アハヤ無慘に殺されよーとする九死の場合に、猛然として群牛に向つた、而かも手と足とを交る〱地に着けて、いはゆる顚回をなしつつ進んだには、多くの牛もアッケに取られて、痛く驚き怖れ、四方へチリ〱バット逃げ開いた、その間に幸と其の人は死地を逃れたといふことであつた。



牛はこのよーに怒ると爪を以て地を蹴立て丶驅けるのは丁度馬のよーである、その爪は大きいけれども、決して鋭くはない、寧ろ厚く扁くて地を蹴るに都合がよい、これを蹄といふ、足の先端に二つ宛あつて即ち趾の二本づ丶あることを表はして居る、中には懸蹄とて外に猶二の小い爪をもつて居るのも多い、これは四趾あるを表して居るのである。本來は四趾あるのが正しいので、二趾あるのは其の他の二趾を段々の間に失つたのである。牛に蹄や角のあるは、即ちその性の怯懦であるのを表して居る證據ともいへるが、彼れの胃も亦そのよーである。彼れの胃は一つの嚢ではない、四つより成つて居る、先づ食物は第一の胃へ入つて、柔かにせられ、次に第二の胃へ移つて幾分か細かにせられ、それから一旦口へ逆上つて來て、奧齒で出來るだけ反芻され、然る後又下りて第三の胃へ入つて團子のよーに小さく切り分けられて、それから第四の胃へ行つて充分に消化されて腸へ行くのである。此の第四の胃こそが人間のよーな眞の胃に當るので、他は皆此の爲に準備をなすものに止まるだけである。こ丶にある圖は自然の位置のま丶のと、これを解き弘げたのと二つを示したのである。それで何が故にこんな面倒な胃を持つて居るかといふと、恐ろしい敵が迫まり來るかも知れぬ世話しい間に、草などの食物を取るから、殆ど之れ



を咀嚼す暇がないので、先づ兎も角急いで、呑み下して置いて幾分か消化し、然る後機會を待ちて口へ反芻するのである。今は皆悉く人に畜はれて、其れ〳〵安全に生活して居るけれども、昔し猛獸の間に居つた形見で、未だに此のよーな胃を殘して居るのである、丁度第一二の胃が、口で咀嚼する代りをするよーなものである。

こゝで少々、牛の產物から製造する話を、簡單に語るとせう。其の產物中最も用途の廣いのを牛革とする、我々が若し其れを牛より剝ぎ取つたまゝにして置けば、とても之れを使用することが出來ない、何となれば日を經るに從つて硬くなると、熱湯に觸れると容易に熔けてしまふからである、そこで革を鞣めすといふ製造業があるのである。鞣めすとは、要するに日を經るも長く柔かになつて居るよーにし、且つ熱湯に逢つても容易くは熔けないよーにする方法である。それには革に單寧といふ澁を加へるのである、單寧は楢、櫟などの樹皮に多いから、通例之れと共に水に漬けて長く置けばよろしい、長ければ益々善くなるので、往々二ヶ年間も漬けて置くといふのである。但し皮は其鞣めす前に一旦暫く水に漬けるか、或は硫酸などに浸して其の表皮や毛などを取り去り、又石鹼で洗つて脂肪を扱き取ることが必要である。又牛の骨は種々の細工や彫刻物にするが、最後の殘物は之れを燒いて炭とする、これを骨炭と稱して、砂糖を白く奇麗に漂白する用に立てる、即ち粗製の砂糖を溶かして此の骨炭より濾すのである、然るときは砂糖中の汚物が皆此の炭に吸ひ取られて純粹の砂糖水のみが濾されて來る、これを煎じ詰めれば白き粉の砂糖が出來るのである。これ位で牛の話は切りませう。

（完）

理科叢談

空氣の話

女子高等師範學校教諭　岡田みつ子

はしがき

皆樣が日々家に居らるゝ時でも、外を步行せらるゝ時でも、目に觸れ耳に聞ゆるものは、實に千差萬別數限りもありません。例へば家の內に居つても、此頃のやうに寒いと、火鉢に必らず火がある。其上に鐵瓶がかゝ

つて、湯が沸いて居るでせう。柱には時計が獨りで、チク〜針を動かして居ませう。又一歩家の外に足をふみ出せば青々した空が直ぐ目に入るし、冷い風が身に染みませう。其他羽子をつく女の子、紙鳶を上げる男の子が見えれば、又走つて行く車の音、出てゆく汽車の笛も聞こえるでありませう。それから又皆樣は、目の及ぶかぎり水と天ばかりの海岸に立つて、ドウ〜と岸をうつ波の音を、聞かれた事もありませう。また、晴れた夜に空を仰いて、無數の星の輝いて居るのを、眺められた事もありませう。是等の事を見たり聞いたりして、皆樣は何と思はれましたか。火鉢に火があれば暖い。紙鳶が上るのは、あたりまへと、かう考へられたでせうか。海に行けば波がある。夜になれば星が出る、とたゞさう思はれたでせうか。人といふものは妙なもので、今此處に是迄見た事もない、聞いた事もない奇妙至極のものでも、不意にくると、誰も一樣に其何ものであるか、如何して出來たものであるか、其を知りたがつたり、見たがつたりするもので、其くせ、日々時々見聞きする事に、種々奇妙な事のあるのには、慣れてしまつて、一向不思議とも何とも思ひません。が、少し立ち入つて、一躰火が熾ると云ふのは、如何いふのであらうか。如何なわけで波がたつのであらうか、とかう考へて御覽なさい。どうも不思議だと思はれませんか。しかし之には其れ〜皆理屈のある事で、よく其理由を知れば、怪しいことも奇妙な事もないのであります。それならば皆樣は、何故だか其理由を知りたいと必らず思はれるでありませう。此等の理由を話すものは、即ち理學といふものであります。

理學といふものは、何だかむづかしい、面白味のない、ものゝやうに思うて居る人もありますが、只今申したやうに、平常自分たちのごく手近にある事や、目の前に起こる事の理由を話す學科でありますから、ごく大切なもので、決して面白くないといふ筈はないのであります。容易い事から始めて、だん〜深く入れば、入るほど、一層高尚な、一層面白味の深い處へも行かれるので、天地の間にあるさま〜の事を、之によつて皆知る事が出來るのであります。

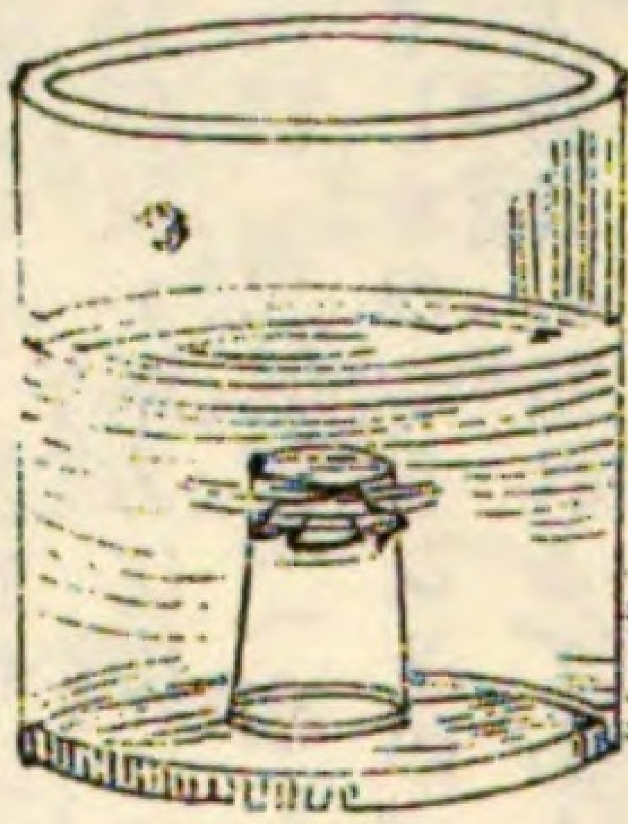
それを女子は理學なんど知らなくともよい、などいふ人や、思うてゐる人が、もし有つたならば、其は大きな間違であります。女子だつて男子だつて、自分達の

周圍にある事も知らず、自分達の住んでゐる此自然界の靈妙な事も悟らないでゐたならば、實に人間たる價値がないといふてもよいではありませんか。まして之を學んだ爲に得る利益は、たゞ色々の事柄の智識をうるばかりでなく、これを上手につかひ、うまく働かして、世の中の進歩を謀る事も出來るのでありますものを。でありますから、是から次々ごく手近い事から御話いたしませう。

空氣の話

○必要　まづ空氣から始めませう。我々人間其他の動物は空氣がなくては生活して居られないといふ事は、皆樣すでに〱御存じの事でありませう。もし空氣がなかつたならば、どうでありませう。我々御飯を三日や、四日食べずに居つても、直ぐに死にはしませんが、もし空氣が僅か二三十分なかつたならば、動物は皆死んでしまひます。いやそればかりではありません。火も燃える事が出來ません。植物も成長する事は出來ません。尙其上に、物の音も傳はりません。光も散じません。でありますから、山が崩れやうが雷が鳴らうが少しも分りますまいし、あのうるはしい青空も、夕やけの景色も見ることは出來ますまい。

○存在する場所　とかういふに、大切な空氣は、一體如何な處にありますかといふに、それはまた、何處にも在ります。我々の口の中にでも、袖の中にでも、山の上にでも、坑の中にでも、至るところとして無い處はないと申して宜しい。通常我々が空虛だと申す處には皆空氣があるので、實に我々にとつては幸な事であります。その空氣がどこにもあるといふ事を一つ試めして見ませう。



一つの空虛のコップをとつて、其内の底へ小さい紙をはつて、之を倒に水の中へすつかり入れます。そうして引き上げて、内の紙を見ますと、コップは水の中にすつかり入つたのに、内の紙は濡れて居りません。之は何故でありませう。即「コップ」の中には空氣があつて、水と紙の間をへだてゝ居つたからであります。

○空氣の海　このやうに地球上何處にでも、空氣が

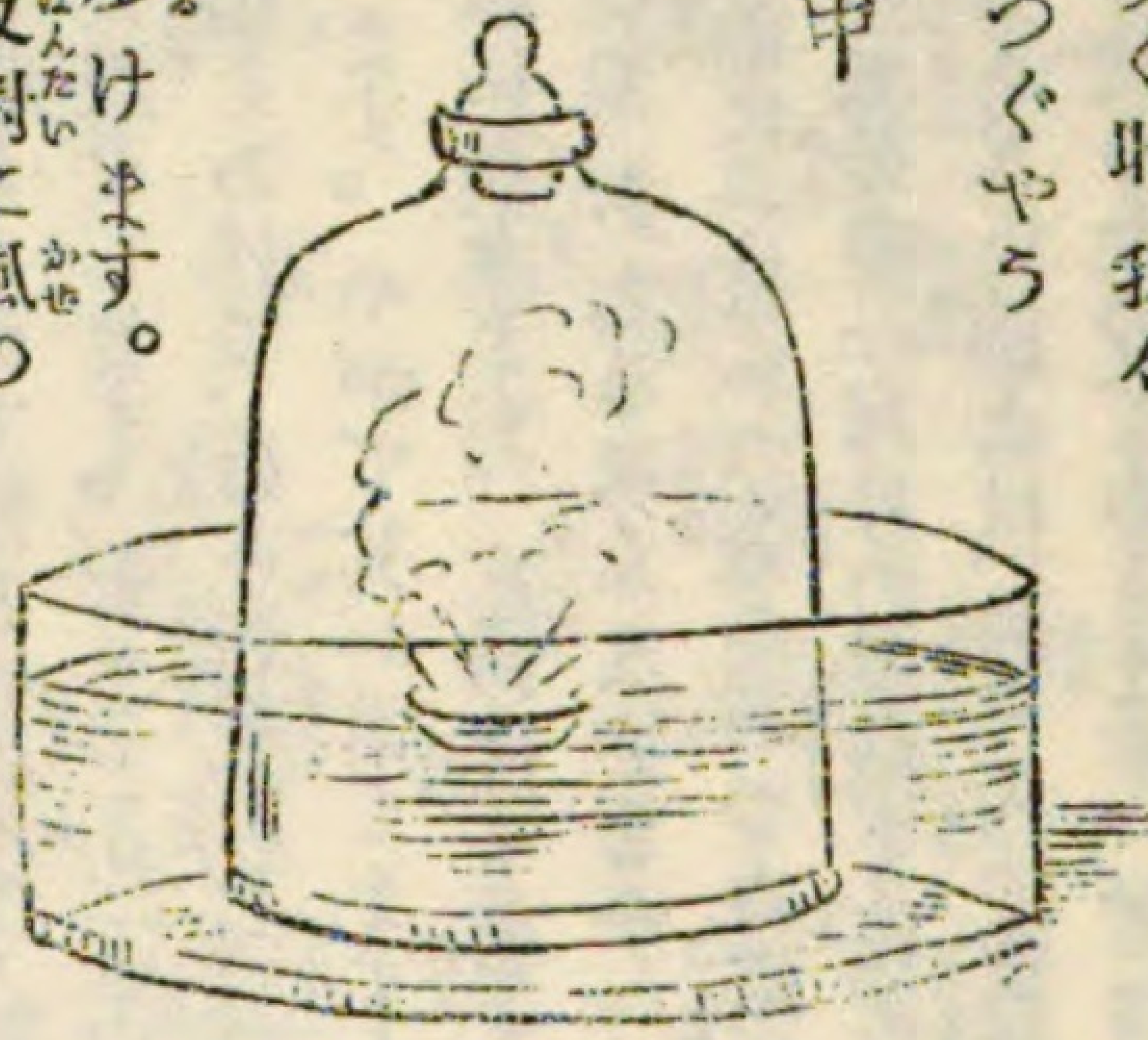
ありますから、言ひかへて見れば、我々動物は空氣の海の中に住んで居ると云ふ事であります。數多の魚が水中を游泳いでゐるやうに、鳥は羽でもつて空中を游泳いてゐるのであります。海老や、蟹が海の底に這つてゐるやうに、人や、獸は空氣の海の底に這つてゐるのであります。しかし空氣の海の廣い事、深い事は、水の世界どころではありません。水は地球の面積に四分三を占めて居て、一番深いところでも二十里あまりであるといふ事を御聞きでありませう。處が空氣の海は、丁度卵の黄身を白身が包んで居るやうに、地球全躰をくるんでゐるので、其深さは五十里より少くないといふ事であります。ですから、海の景色は高大である。凄愴であると申しますけれども、空氣の海は廣く深いだけ、其處に起るいろ〳〵の事も、もつと奇異で、もつと驚くべき事があります。

○氣躰なること　空氣は大切であるといふ事と、何處にあると云ふ事は前の事で御分りでありませうが、一躰其空氣とは何ものでありませう。傍にあつても目にも見えず。味もせず。臭もせず。又邪魔にもなりません。奇妙なものではありませんか。之は氣躰と申して定まつた形もない、又定まつた容積のないものであります。そうして動きやすいものでどこへでも、場所さへあれば、行かう〳〵として居ります。でありますから、一つ物をのければ、直ぐ其處へ行きます。人間が息をする時には、肺がふくらんで、明き場所が出來るものですから、直ぐに其處へ行きます。又我々始終空氣の中を歩いてゐますが、つひに邪魔になつた事がありません。之もやつぱり我々がずつと歩けば、其處だけ空氣が兩方に排いて通してくれますし、通つて仕舞へば、再び其處へ來てふさぐからであります。これがもし水のやうなものであつたならば、一町あるくにも大層骨が折れるでありませうが、誠に都合よくなつて居ります。

○風　しかし如何な時でも、空氣は目にも觸れず、耳にも聞こえないか、と申しますと、そうでありません。皆樣が團扇を御使ひなさる時、身躰にさはるものがありませう。通例風が來ると申します。あれは即空氣が運動したのであります。あのそよ〳〵渡る春風も、吹きすさう凩も、理科的に申しますと皆空氣の運動に他ならないのであります。

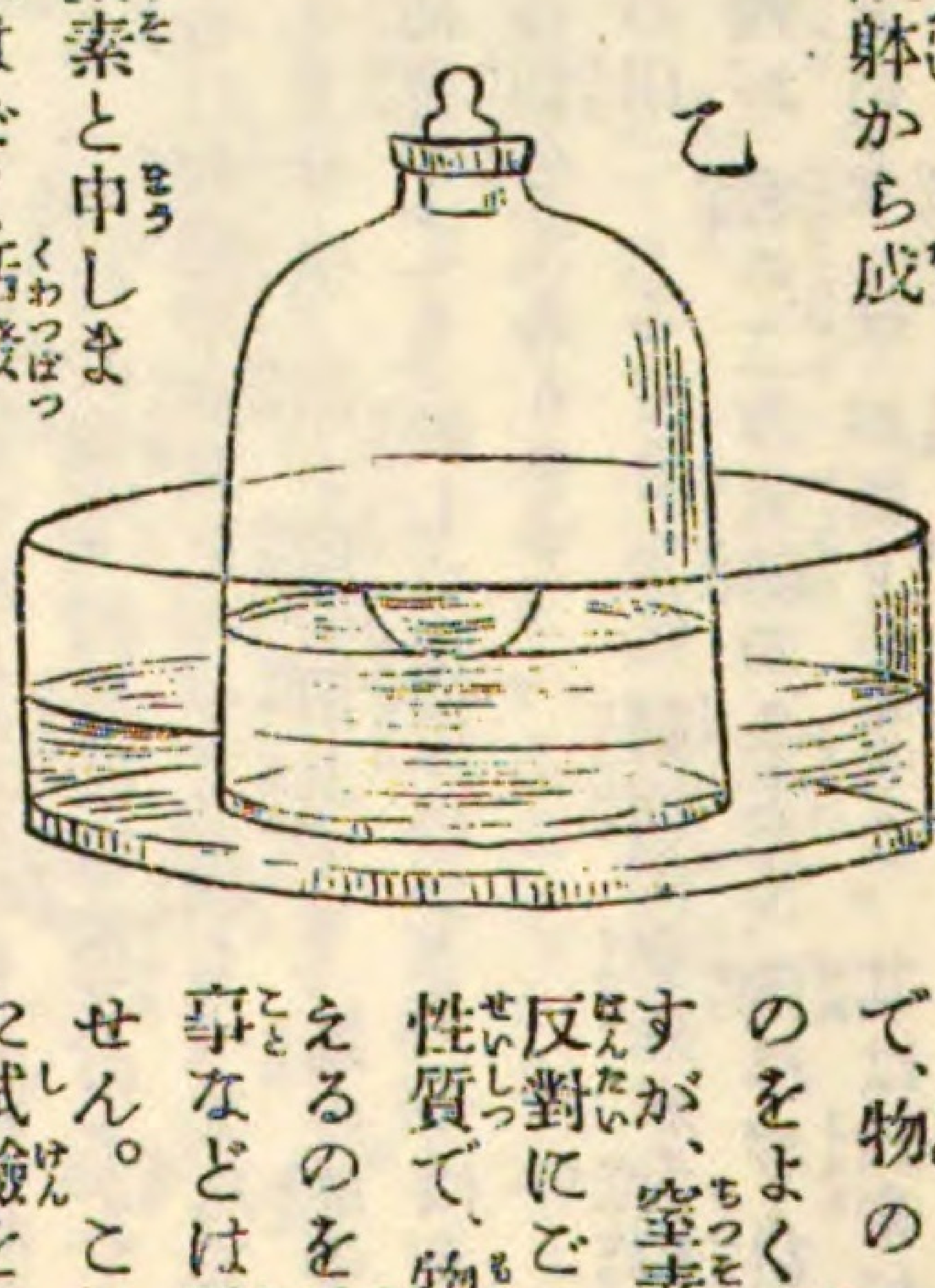
かやうに空氣か運動をはじめますと、いろ／＼の働きをするものであります。水の上を帆船か進むのは、如何いふわけでありませう。これ即風が船を押すからであります。帆はたゞ風をうける爲で帆があつても、風がなければ船は進みません之と同じやうに、風がうしろから吹く時、我々が傘をかつぐやうにして、歩きますと、傘が帆のやうになつて、早く歩けます。其かはり反對に風の來る方へ、傘をやれば、風が向ふから押しますから、なか／＼歩きにくいのであります。其運動が一層烈しくなりますと、其働も一層ひどくなります。強風とか、烈風とか申すやうになりますと、丁度惡鬼か夜叉でも狂ひ出たやうに。陸では忽ち砂を飛ばせ、石を走らせ、或は喬木を折り、大厦を破り、海では山なす大波を起こさせて、大船巨船を玩具のやうに自由にいたします。ふだん運動しないで居る時には、すみれの花においてある露もこぼさず、青柳の糸も亂さないほどおだやかに、やさしいのに、一度ふるひ立ちますと、此の樣な事もいたします。

甲



○成分　空氣は氣躰であつて、無色、無臭、無味のもので、ありますが、たゞ一種のものでできて、ゐるのではありません。之は二種の氣躰から成つて居りますので、其一つを酸素と申し、一つを窒素と申します。酸素はごく活潑な性質のもので、物のもえるのをよく助けますが、窒素は其反對にごく鈍い性質で、物のもえるのを助ける事などは致しません。これもまた試驗をして空氣が果して二つの氣躰から成り立つて居る事を御見せ申しませう。室内で蠟燭に火を點けますれば、燃えるのは皆樣よく御存じでありませう。でありますから、空氣の中で火は燃えるものであるといふ事は、いはれます。そこで、

乙



一つの器に水を盛りまして、其に小皿を浮かせておいて、燐といふごく燃えやすい物を豆粒ほどの大きさにきつて、其小皿にのせて(甲)圖のやうに、ガラス鐘をかぶせます。そうしておけば、鐘の内の空氣は水にさへぎられて、どこへも出ることが出來ません。そこでガラス鐘の蓋をとつて熱した針金で燐に火を點けて、すぐにまた蓋をします。すると見てゐる間に燐はキラキラした焔をあげて、白い煙を出し、パチ〳〵音をさせて、燃えます。やがて其が消えますと、鐘の中は白い煙で一ぱいになります。この煙も暫くすると皆水にとけてしまつて、あともなくなります。すると次に氣の付く事は、前に一ぱい空氣のあつた處に、水が上がつて、丁度鐘の五分の一だけの容積を占めてゐます。ですから燐のもえない前とは、鐘の内の氣躰の分量が、水の上つただけ減つたのであります。では殘つたものは何でありませう。見た處でけちつとも空氣と違ひませんが、試みに之に火の點いた蠟燭をいれて見ませう。入れますと火は忽ち消えます。すれば之は空氣でない事は分ります。即ち空氣の物のもえるのを助ける性をもつてゐる部分は、すでになくなつて、燃えるのを助けない部分だけが殘つたのであります。なくなつたのは酸素で、殘つたのは窒素であります。

この試驗によつて、空氣が酸素と窒素から出來てゐる事も分りましたし、またこの二つの氣躰の混つてゐる割合も、知る事が出來ます。即ち水の入つたゞけは酸素の容積で、殘りは窒素でありますから、空氣が五升あれば、其中の一升は酸素で、四升は窒素なのであります。この割合は何處の空氣をとつて、調らべて見ても、かはりはありません。高い山の頂上でも、坑の底でも、賑やかな都會のでも、淋しい山里のでも、やはり酸素一、窒素四の割合であります。

〇酸素の用　さてまへに動物に空氣が大切だと申しましたが、右の二の氣躰のうちで、何れが入用なのであるかといふ疑が起りませう。其は酸素が入用なので、凡ての動物は之を吸ふて、生きてゐるのであります。酸素は動物の躰の中に入つて、炭素といふものと結び付いて、炭酸と申すかはつた氣躰を作ります。それからまた、空氣は火の燃えるのに入用だと申しましたが、之もやはり酸素の力によるので、例へば竈などで薪が燃えるといふのは、空氣中の酸素が、薪の中にある

炭素といふものと結び付いて、やはり炭酸を作るのであります。ですから、火をよく燃やすのには、空氣がよく入るやうにしなければならないわけであります。ストーブを焚いても、下の口をよく開けておかないと、火がよく燃えません。また火鉢に炭をついでも、灰がすつかりかゝつてゐたりなどして、間がすいて居ないと、よく起らないといふのも、皆このわけであります。之によつて七輪を煽ぐのも、釜の下を吹竹で吹くわけも御分りでありませう。其と同じわけで、もし火事でも出した場合には、窓の戸など明けないやうに、火に早く物をかぶせて仕舞へば、大事にならないで止む事もできます。

○窒素の用　右のやうに酸素が動物の生活するのにも、火の燃えるのにも入用ならば、何故空氣は酸素ばかりでないのでありませう。用のない窒素が多くあるといふのは合點がいかないと思はれるでありませう。其理由を御話しませうならば、酸素といふものは、まへにも申したやうに、其性質が大そう活潑で、烈しくて、其ふれるあらゆるものに働かうとしてゐまして、非常に物をもやすのを助ける働が強いから、通例空氣の中では燃えない鐵のやうなものでも、酸素ばかりの中だと燃えます。でありますから空氣の酸素ばかりとしたならば、火が一度燃え出したならば、薪どころではない、ストーブほど燃え出しませうし、燈火をつければ、ランプが油と一しよに燃え出すといふ工合に、抑へきれない早さで、いろ〳〵のものが燃えて〳〵世界中火燄につゝまれるやうになりませう。

其で其働を極よくする爲に、窒素が混じてゐるのであります。之で見ても天地の間に無用のものはない。何か用のあるもので、あるといふことがわかります。實に酸素ばかりでもいけませんし、さればといふて窒素ばかりであつたらば動物はしばらくも、生きてゐる事が出來ず、兩方相待つて始めて都合よくゆくので、性質のはげしい酸素と、性質ののろい窒素と混つて極よく火も燃えるし、燈火もつくし、呼吸も出來るので、あります。

空氣の成分の重なものは前の二つの氣體でありますが。實際はこの他に分量は少ないが諸種のものが混じてゐます。即ち炭酸水などゝいふやうなものがまじつてゐるのであります。動物は酸素を吸ふては炭素を空

氣中に吐き出しますし、また火が燃える時にも炭酸が出來るものである事はすでに御話した通りであります。

○炭酸　動物が炭酸を吐き出すものであるといふ事をたやすく、試めす法があります。それは石灰水をコップに入れまして、ガラスの管の一方を其中に入れて、今一つの方から息を吹きこみますと、石灰水の中に白い色の濁りが出來ます。之は人の肺から出た炭酸と、石灰と結び付いて炭酸石灰といふものができたのであります。

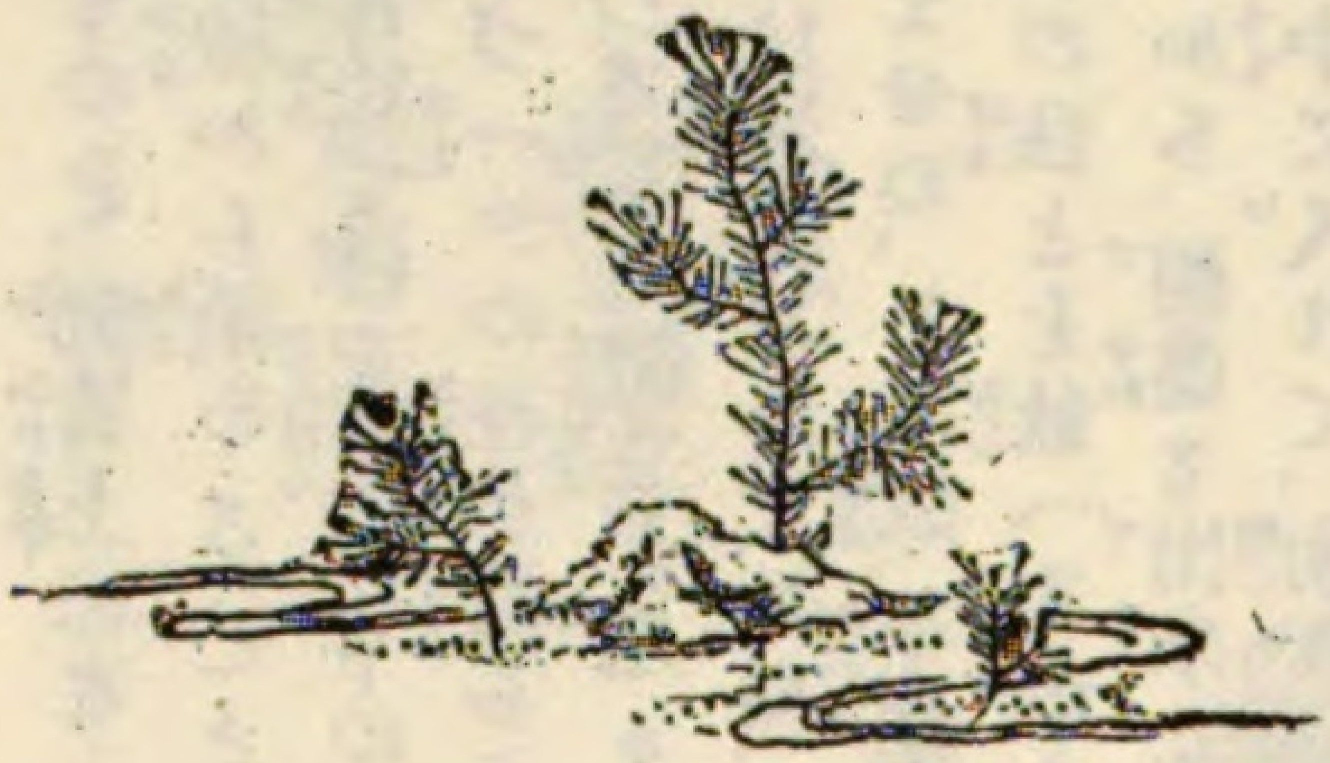
之と同じやうに、平たい皿に、石灰水を入れて空氣中に晒しておきますと、數時間たつうちに、液の上かはに、薄い膜ができます。これは空氣中の炭酸と、皿の中の石灰と、結び付いたのであります。

之に由て見ますと、閉めきつた室の內に長く多人數で居つたり、夜寢る時に夜具を被ふつて寢たりすれば、其室內の空氣や夜具の中の空氣はだん〳〵酸素の量が減じて炭酸が多くなりますから、害のあるわけで、氣を付けなければならない事であります。



しかし時々刻々、すべての動物が吐き出す炭酸の分量は、非常なものでありますから、世界中の空氣は炭酸が滿ちて、酸素がなくなつて仕舞ひさうなもでありますが、自然といふものは實に都合よく出來てゐるもので、炭酸の使ひ道がチヤンと出來て居りますし、其上に始終酸素を新しく供給するやうにまで、なつてをります。それは即ち植物がするので、恰も我々に酸素が入用な通りに、植物には炭酸が入用なのであります。植物の葉は呼吸をつかさどる道具であつて、葉にある無數の孔から、空氣中の炭酸を吸ひこみますと、日光の働で、それをこはして、自分に入用な炭素だけ躰中にとつて、あとの酸素だけはもとの空氣中にかへすのであります。是でもつて動物は植物に大切な物を與へますし、植物はまた動物に大切なものを與へます。動物が空氣をわるくすれば、植物は之を清めてくれるのですから、家の近くに樹木のあるのは、人間の身躰の爲によいわけであります。

しかし一寸考へて見ますと、世界は動物と植物とよい工合にくばられてはをりません、幾千年も人の行つた事もない、深い森林ばかりの所もありますし、またロンドンや東京のやうな人間ばかり多い處もありますから、或處は炭酸の量が非常に多く、又ある處は酸素の量が非常に多いといふやうな事が、ありそうに思はれますが實際はそうではありません。まへに申したやうに空氣は動きやすい性質がありますから、始終あちらこちらに動いて、よい様に入れまぜになつて仕舞ふのであります。



技藝

造花科

女子職業學校造花科教員　伏見藤三郎君述

當校で造花を創めましたのは、明治二十年の秋の頃からでありまして、その節私が大坂から聘せられ、此造花科の教授を擔當致しましたが、しかし其頃の技術は實に拙きものにて迚も舶來製には及びません、そこで私は及はずながら一奮發したいと云ふ考へで厶りましたに、當校長にも頗る御熱心にて、是非研究せよとのことで、色々便宜を與へられ、或は工業學校などからも理化學の大先生が御出でにて、天然の色澤につき、藥品の調合を御調べ下さり、尚ほ自からも種々研究致しましたるに、追々とその効果を得まして、今日にては如何なる植物にても、まづ思ふ様に造ることが出來る様になりました、それで日本では大坂の英と云ふのが、造花には上手なので厶ります、宮内省などでも始終英

の製花又は舶來ものを、御買上になつたそうで厶りますが、近年は此學校から納めることが出來る樣になりましたそこで、當校では天然のもの即ち實物を手本と致しますので、まづ一ッの花を造らうと思ひますには、一々其花を解剖して其の組立を見ますから、いくらか植物學も知らなければなりませぬ、又た染色の方法も承知せねばなりませぬ、それ故、生徒などにも植物學の大要と、色の配合の法とを敎へながらこの造花を敎へております、それから、圖畫も出來なければなりませぬから、之も敎科の中に入れて、初めは線を引くことから、段々に天然の物を寫生して、造花の手本にすることが出來るやうに敎へます、

さて、此の造花は昔はそれほど用ひませぬが、只今では大層に需用が增しまして、室内の裝飾もの簪又は、記章、帽子飾といふやうなものに用ゐる樣になりました此の學校では大抵生徒が自分で材料を持つて參り、それを拵へて持つて歸るのでございますが、宮内省其他貴顯紳士から常に御注文がございます故、それを生徒に拵へさせ中々忙しき方で御座ります、外國へは櫻の花を大層に輸出いたしますが、只今でも數百本製作にかゝつております、

それから、花の方はまづ造り易いのでございますが、葉の方は大層むづかしうございます、(蘇鐵の造花を示し)此の蘇鐵は一旦叡覽に供へましてモウ七八年も經つたのでございますが、色も變らず一寸見ては實物と違ひません、御手元から是迄御注文になりましたものゝ内、珍らしい物は、萬年青、蘭、蘇鐵、岩杜松つくしなどで、隨分御賞めに與かつたことがあります、此樣なものは中々、工風物でございまして、規則通り習つたからと言つて出來るものではなく、天然を見て工風を造らなければなりませぬ

それで、極く大仕掛に拵へませうと思ひますと、隨分器械には何百圓と云ふ資本が要るのでございます、此の學校の生徒には學校に備へてある器械を使はせてあります、此器械が無くても出來るやうに、其法を敎へて寫生させます、即ちバラなればバラの瓣なり、葉なりを一枚づゝ取つて厚い紙に貼付けて、其の形に切り、實物にならひ彩色し、二三の鏝を使つて拵へます」

それから用ひます器械は、極く初めは餘り澤山は要りませぬが、筋鏝、西洋鋏瓣の鏝が大中小と、それから、ビ

ンセット手拭位でございます、(即ち圖の如きもの)進むに從つて道具は段々殖えて參ります、それから櫻でも何ても瓣を一々切つて居つては、手數が大變でございますから、之れを器械で打拔きます、則ち其の形に打拔く器械が出來て居て、幾枚も布を重ねて置いて打拔くのであります、それ故、菊は菊の打拔き、櫻は櫻、椿は椿と皆別々に

女子職業學校の造花科



出來ておるわけで、中々一通り揃へるのは容易な費用で御座りませんから、普通のもの丶外鋏で切つて花を造くる事も敎へるのでございます、

造花に用ひます布は、寒冷紗の上等、絹、絖、天鵞絨、スレッキ　チクシ、キヤリユ、などでございます、

又た造花に使ふ大躰の繪の具は、此位でございます、

グリーン、オーラミン、マゼンダ、ヨーシン、スカレット、フロクシン、ローダミン、ブローン、セルリン、レモンエルロー、

それから、初學者には、梅が一番簡單でございますから、それを大畧申上けませう、

梅の花は、寒冷紗をオーラミンに、グリーンを少し入れて染めます、それから瓣の二通の形を打拔いて大の瓣の鏝と中の瓣の鏝と二ッで、梅の瓣の形に圓味を付け、蕚の上に大きい瓣を初め五枚付け、次は互ひ違ひに五枚（ヒメ糊にて）又其の次ぎと、段々に小き辨を入れ十五六瓣付けてにほひ（雌蕊）を入れます、

それから、蕚でございます、此蕚は市中出來のものを使うて差支ありませんが、特別に極く上等と云ふのになると、蕚も一々形を切り色澤等も實物通りに拵へなければなりません、又ニホヒも上等になると、同じく實物通りに一々作ります、即ちカタンに色を着けて、糊を引き長さをきめ切つて、それを蕊にします、上等になればさうでございます、さう云ふのは、此の花の瓣が寒冷紗でなく、絖とか、羽二重とかで造ります、臺灣から參りますツーソーと申しますものを遣ひますと、實物の樣に見えます

蕾の製り方は、雁皮の中へ綿を丸くして入、眞鍮の細きハリガネにて結び、糊を蕚につけ、其中に以前の蕾を入れます、それから、枝なり簪なりに付けます、

實物の枝に花をつける時には、極く細い三ッ目錐で穴を開け、糊を付けて挿します、枝が細きときは花の柄が後へ出ますが、それはアトで剪み取つて仕舞ひます、又實物の枝なきときは、提灯のヒゴを紙（薄美濃のドーサ引）グリーン、マセンダ、オーラミンの三色にて染めたる紙即ち枝の色になりたるもの）にて捲き枝を拵へます、簪は大抵鴉色焦茶などの色のカマ糸で纒めます、

白い梅は先づ唯今のやうにして造ります、紅梅も造り方は同じでございますが、色だけが違ひます、紅梅に使ふ繪の具は、フロクシンとローダミンを合せて色を着

けます、薄くとも濃くともそれは自由になります、

（つゞく）

裁縫科

女子職業學校裁縫科教員　金子銅子述

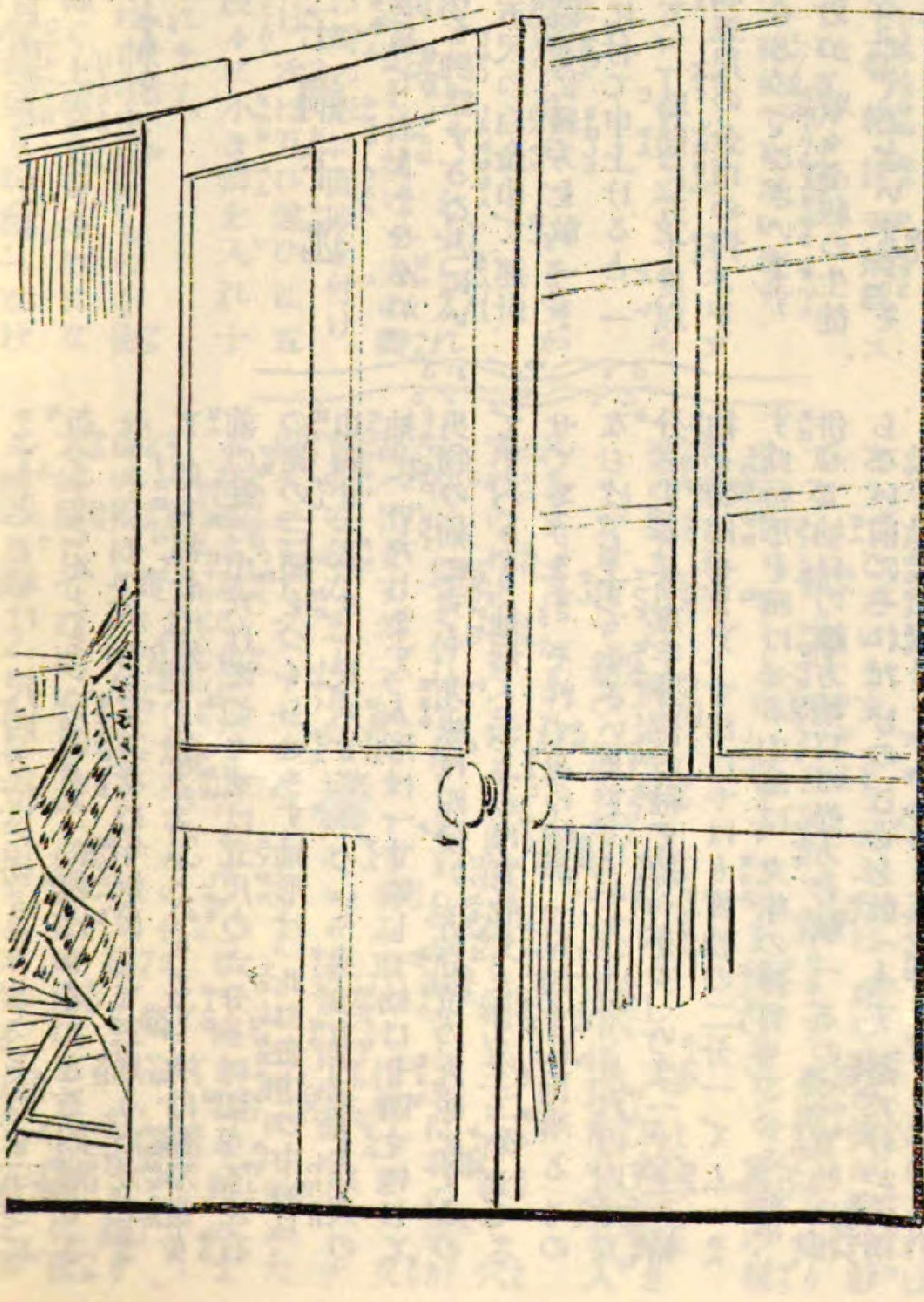
裁縫のことを詳しく述べるのは容易でありませんが、只その實際生徒に教ゆる筋道だけを御話することにいたしませう　そこで、最初には、巾五尺の白金巾で、運針、マツリ、千鳥返し縫、裙形、袖形と段々に縫方を教へます、いま申しました種類の中運針に付て申上けると、一尺の布に一分五厘位の、針目を以て、一時間に五十度以上縫へる位に練習させます、最初五尺の金巾の内より一尺四方程に二枚にして練習させるのでございます、運針は時間を限つては致しませぬが、時々全級の生徒を集めて一時間位その早さを見るのでございます、それから、運針が終りまするとマツリといふのを教へます、それは白金巾五尺の中を一尺五寸四方に切りまして、それの二方をマツリ、それから二方を千鳥懸いたします、返し縫は一尺四方位に切りまして、それを三つに折つてとんとミシンのやうに縫はせることを四通りさせます、それから、又其次は半返にして三通りいたします、即ち都合七通りさせるのであります、次は裙形當り前の衽の巾だけに切り丈は五尺の六分一に切りて左右の裙の三組をつくらせます袖形は、此白金巾の中から、巾四寸三分丈一尺六寸に裁つて、男の方の袖を綿入の袖にいたします、人形は一寸にして袖口を四寸にして男物の袖にする、丸味は四分か、五分位の丸味にするのです、つまり袖形と云ふのは實物大きさの二分一でさせております、それで男の袖が一尺四寸に出來るものならば、七寸でございます、巾が九寸位と見れば四寸五分とする、丁度半分位の袖を拵へます、いま一ツ女給袖を縫はせます、寸法はやはり實物の二分一でムいます此袖形を縫はせる主意は、丸味の練習もさせる爲め、併せて袖口の絎方袖口の懸方を教へるので、實物に掛らない前にそれだけのことを教へます、是だけが大巾五尺の白金巾用ゐて出來上がる成績でございます、それだけを一番初めに順序を以て教へます、
此學校では、順序を追つて教へますけれども、併し裁縫

懸けますから、今度は初めてそれを持つて自分の前掛を拵へます、詰り私共がしめて居る斯う云ふ前掛では順序が必らず極つて居るものでございませぬから、課程細目の中で出來得るだけのものは、順序でなくとも宜しいと許してあります、けれども、あまり熟練せぬものは、難しいものを持つて來たときには、此方で斟酌してやさしいものと取替ることがあります、つまり手が出來得られる者であるならば、順序でなくても宜しいから、持つて來て細目だけのものを、一學期間に縫るやうに奬勵をして居ります、それから

西洋形大人前掛

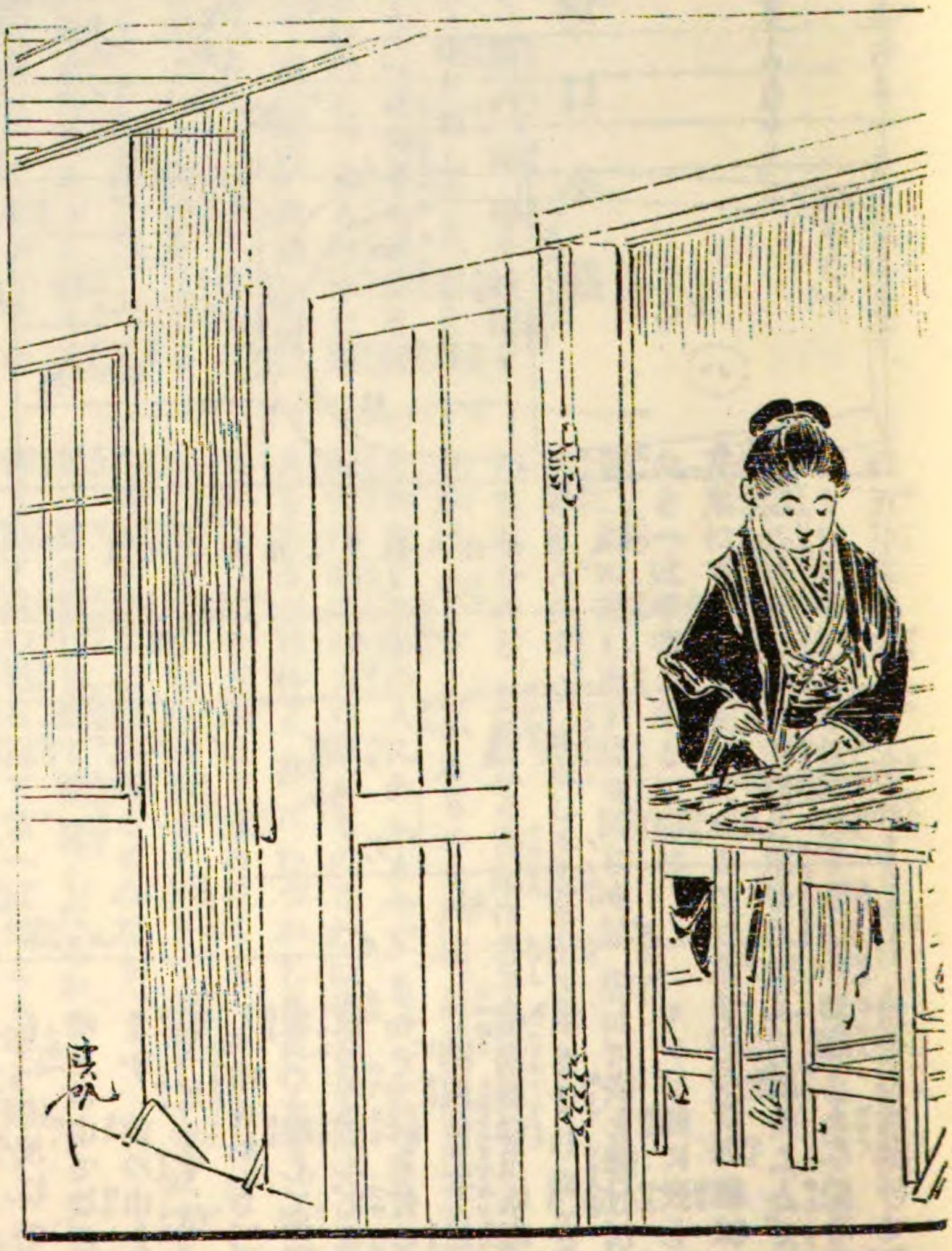
を縫はせます、當校の生徒は多く白い前掛を

女子職業學校



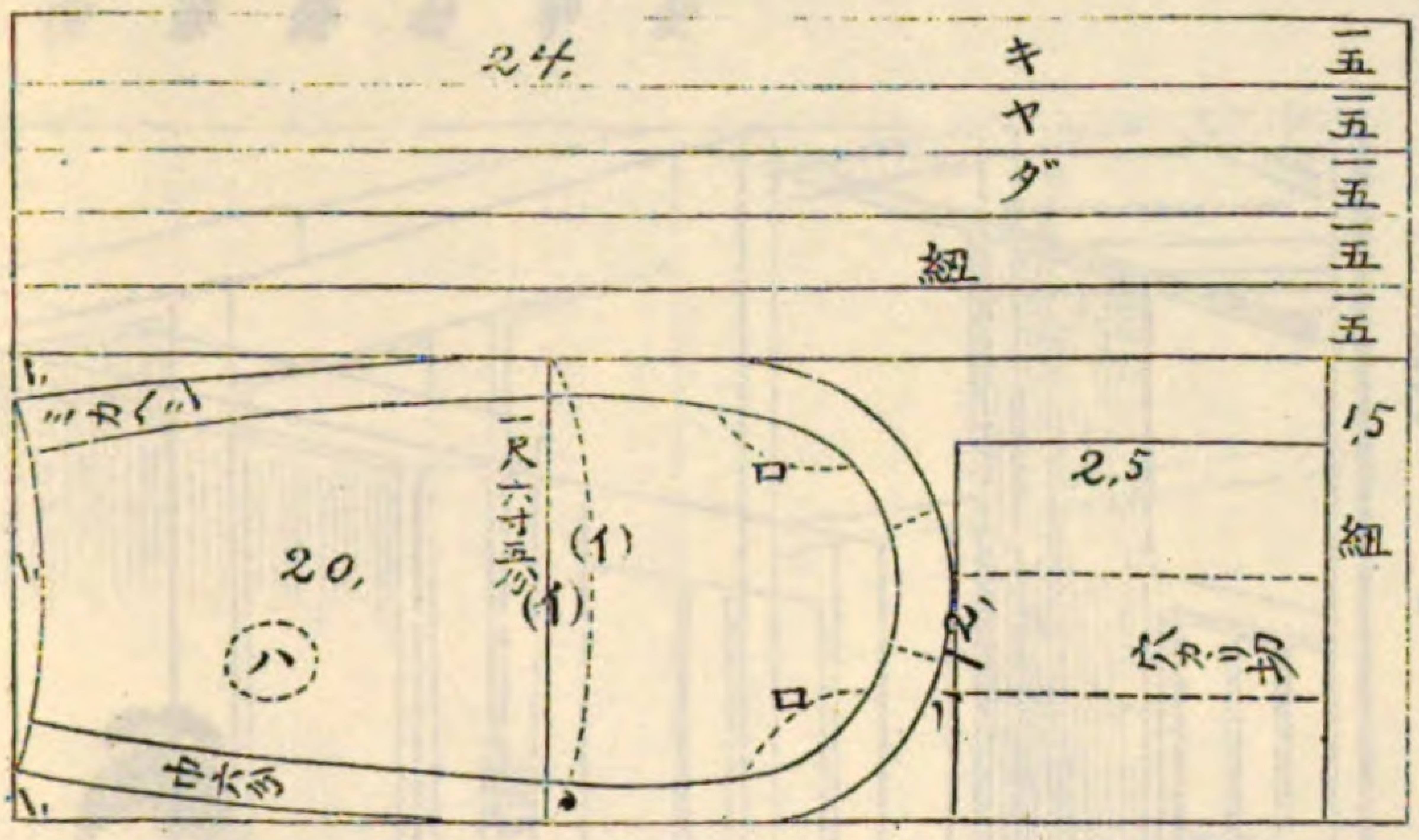
懸けますから、今度は初めてそれを持つて自分の前掛を拵へます、詰り私共がしめて居る斯う云ふ前掛でございます、（實物を示す）そこで大概一ヤールのキヤラコから、巾一寸五分位のものを五ッ裁落すのでございます此内三ッをへりとなし二ッをひもと致します其次ぎに大概（ハ）の全躰を自分の入用の丈だけにいたしまして、此巾（イ）を大概一尺六寸五分位にするのでございます、（ロ）の所は三寸か四寸位で丸味を取り、次ぎに（ハ）の周圍を五六分の巾に切て仕舞ふ、之れが見返しになるのでございます、一番先きに縫初める時には、一寸五分に切りましたのを、三ッ縫合せ其縫込を両開きに為し、マツリ付けま

の裁縫科教室

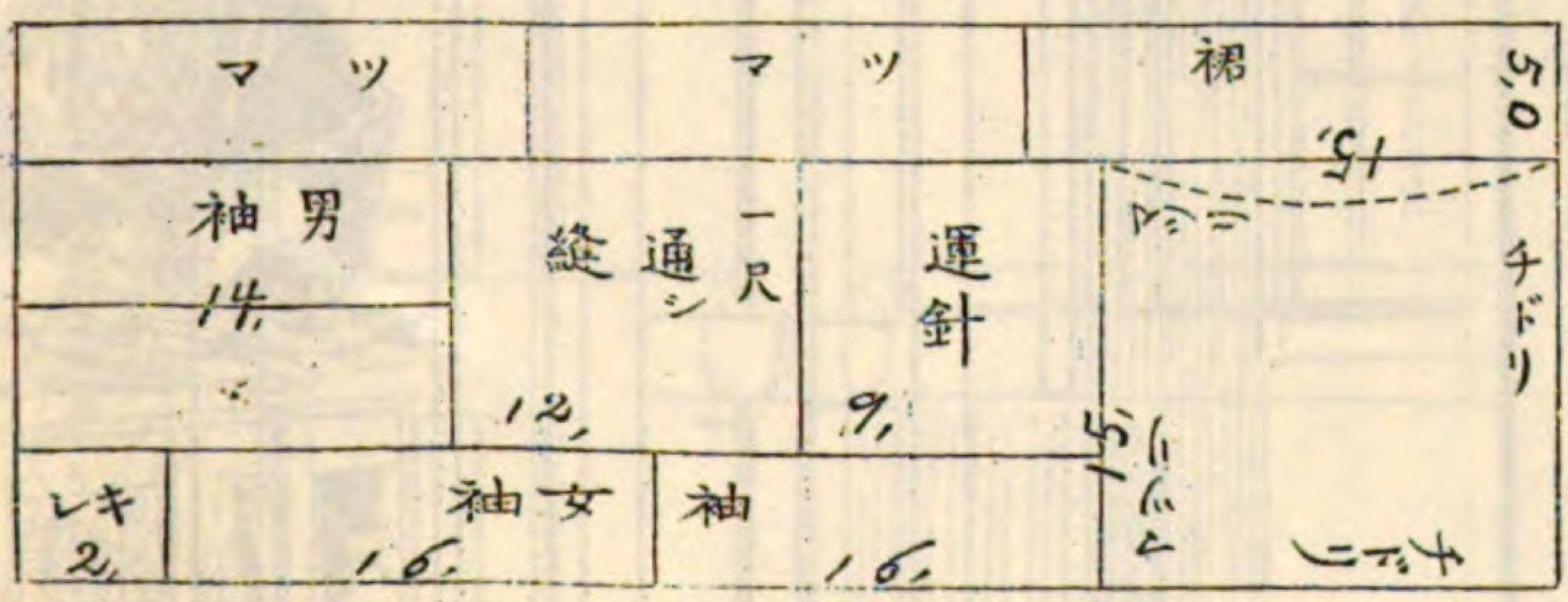


す、それから此邊のへりを三ツ折りになし、それをマツルのでございます、それから、此切れの眞中に印を付けて、マツリ縫せぬ一方の（へ|りを、中央より此左右に細かに縫ひ後、糸を縫ひしめし（ハ）の部の裏がはに縫ひつけ、その上に見返しの六分巾に切りましたのを付て、（此切は（ハ）の周圍を裁切りましたのでありますから、（ハ）の周圍と中央の所を、大概一寸位縫込み長さをそろへ）三枚共に假縫をして置きまして後、返し針にて縫、それより、見返しにて縫込みをくるみ、へ―りを折て、（ハ）の表の方にかりにぬひ、それより返し針にて縫付ます、これが縫上りましたらば、今度は（ハ）の上の巾でございます、前の巾を大概一尺一寸位とし、中央から三寸程づゝ離して三分位づゝ摘んでさうして、紐を付るので御座ます、紐を付た所は又唯縫て置きまして、さうして表を紐付だけミシン縫に致します、ミシン縫はかへし縫のことでござります、紐の両端とは唯締けて置

西洋形前掛裁ち方



五尺の金巾より裁ち合せるもの



く、それて前掛だけ出來上つて掛けるやうになります、

（つゞく）

書法指南

野口小蘋

南宗の書を學ぶには四君子とて、蘭、竹、梅、菊の四種を以て初めとす。先づ初學として蘭を習ふなり、書を學ぶには用筆用書必要なり、用筆とは最初專ら運筆を練習し腕を以て筆を送る事をつとむべし。古人用筆を論じて筆ニ行紙上一須ニ以レ腕送レ之不レ當下但以ニ指頭一挑剔上といへり、先づ蘭を書くの正格なるものゝ起手一筆次に一筆を加へ、二葉交はりて目の形の如き間隙を生ずるを鳳眼といふ、又一筆を加ふ、これを破鳳眼といふ、筆をたつるに蟷螂肚、鯽魚頭、なと其他各法ありと雖も省略す玆に寫し出す處の蘭は正格なるものに非ず、きわめて畧したるものなり、先づ此第一圖について示さば濃墨を以て葉を書き、其墨を洗ひ去り淡墨を蘸し、皿にて混和して、筆尖に纔の濃墨をつけて花を書く、蘭の花は五片なれ共、中の左右より抱ける花片を前にして外にうけたる三片を後に作り花の中に點をほどこす、これ點心なり點心は濃墨を用ゆみだりに點ずべからず、花葉はもとより點心に至るまで意を用ひて作るべし、たとへば草書を作るに同じ。

第二圖に寫し出す蘭も同じく簡畧にしたるものにて、正格に入らず、何故正しく書き出さゞるやの論なきにしもあらねど、正格なる書蘭は芥子園畫傳等につきて見れは、委しくわかるものなれば、只墨の濃淡花葉の書きかたを初學の人にわかりやすきやうにしめすのみ、蘭竹は初心の人の學ぶものなれば書き易きやうに思ふ人もあるべけれど、甚だむづかしきものなり。蘭のかきかた三圖や五圖にて盡さるゝものにあらねばこゝには二圖を出すのみ四君子を飽まで練習して手に入らば花卉何を作るも出來得るものなり。

第三圖の畫竹も到て簡畧したるかきかたなり、こゝに作り出す處の竹を以て言へば竿より筆を起すへし、若し二竿を書かんと欲せば一竿は太く一竿は細く一竿は墨を濃に一竿は淡にすべし、上竿より筆を起すもあり、下より筆を起すもあり、用墨は濃ならず、淡ならざる墨

を筆に蘸し筆尖に濃墨をつけて、濃淡の分るをよろしとす、腕にて筆を送るべし節は八字下抱、乙字上抱これ節を畫くの法なり節は濃墨を用ゆ竿成りて枝を着く鹿角枝、魚骨枝、鵲爪枝、わり枝は濃墨ならざる方よろし、竿枝全く成りて、葉を畫く一筆片羽、二筆燕尾、三筆个字、分字、驚鴉、落雁、飛燕、破双个字、破分字、疊分字、の布葉式あり葉を畫くには前なるもの濃く後なるもの淡く畫くべし桃葉柳葉に似たるを忌み孤生並立を忌み餘は省畧す活動して筆々生意あらんと簡要なり

第四圖の畫竹もきはめて畧したる畫きかたなりかひ摘みて言へばこれ魚尾法なり金魚尾、飛雁、交魚尾、双雁、等の式あり此圖々竿を添んとせは前に言ひたる畫きかたと異なる事なし葉のかきかたは用筆分字と異なり叉字の如きを忌み又井字の如きを忌む、其他忌む事われと畧して言はずよく練習すればおのつから竹の姿態を得るものなり

書法指南

多田親愛翁　口述
齋木寛直　手記

私の流義は世尊寺流といひまして、流祖は權大納言行成卿であります、一躰此の世尊寺流といふのは、弘法大師の流れを引いて、道風佐理などゝいふ斯道の達人から行成卿に至り、茲に始めて此流が出來たもので、二代目は參議行經公、三代目は權中納言伊房公と順序に之れを傳へて、後奈良天皇の享祿年間に、正二位行季卿が其十七代に當りました、世に名高い御家流は、實に世尊寺流十一代行房朝臣から分れたものである、恁ういふ系圖に就ての事は、何れ折を見て委しくお話しするとして、茲には是れ丈にして置きませう。

さて此の書を學ぶといふには、私共の世尊寺流にも、入木初學式といつて、筆道の事を記した、先づ手習手引草といふ様なものがあつて、之には一通り初學者の心得と成るべき事を記してあるが、私は今此のお話しをするに就ては、自分が會得した事柄、是れ迄に自分の研鑽した處を段々と述べやうと思ふのである。

夫れから手本の事でありますが、手本は昔の能書の人の正しきを習ふべしといふ事に成つて居るが、是れはやゝ上達した上ならば、古人の肉筆なり摺本なりを習ふがよいが、突然に達筆な古人の手本にかゝるといふのは初學者には、何うも入り難い事であるから、是れも暫時私の手本と極めてお話しよう。

私は順序として流儀の事も、手本の事もお話したから、此れから書を習ふといふ事の仕方を述べませう、最も其前に机の事を一寸お話して置きたい、机は自分の小手の長さと同じ高さに作るのが法で、其れより高いものに成ると、運筆に不自由である、是れも道具の一つであつて、何うでも宜いとは言はれないから、殊に茲に注意を致します。

さて、第一は卓がゝりといつて、机に向ふ時の用心、先づ着座の事から書はなければ成らない、即ち着座には机と己れの躰との間を、握り拳二つ丈けを隔つる處に定めて、兩方の足首を左右に開き、眞中に臀を下す、躰は決して斜にしては成らぬ、何處までも正しくせねば成らぬ、躰が曲れば小手が曲り、小手が曲れば筆が曲る、筆が曲れば文字が曲るといふのは、是れ自然の道理なので、躰を正しく、腕を正しく、筆を正しくして、文字を正しく書かなければ成らぬ、躰が定まると共に、心を安んじ氣を平らかにするのが肝要で、古人も心正しくして筆正しと述べられてある。

次は硯へ水を注ぎて墨を磨る、墨は磨るといふのよりも研ぐといふ心得がなければ成らぬ、力を用ゐずに輕く靜かにする、力を用ゐれば墨色が顯はれない、靜かに研げば墨が細密におりて、誠によく色艶が顯はれる者である、其れで其の濃淡は書き物に依つて別があるとして、常の手習には濃と薄いの中が宜い、次に筆を執る、執筆の法は、筆の鋒を除けて氣管の眞中を、拇指と食指にて執り、氣管は中指の爪際に置き、其中指と無名指と小指との三指は、恰かも一指である如くに爪先を揃へ、ソシて實指虛掌といつて、掌に卵を握りたる程に心得、左の握拳が右の脇の下に入る丈に肱を張り、左手を机の上の紙の左の角へ置き、後手本に依つて文字を習ふ。

此の手紙の見方に付て、殊に注意を要するのは、手本の字の一畫を見ては一畫を書き、一點を見ては一點を書く事は甚だ宜しからざる事で、手本に向つては、其字を

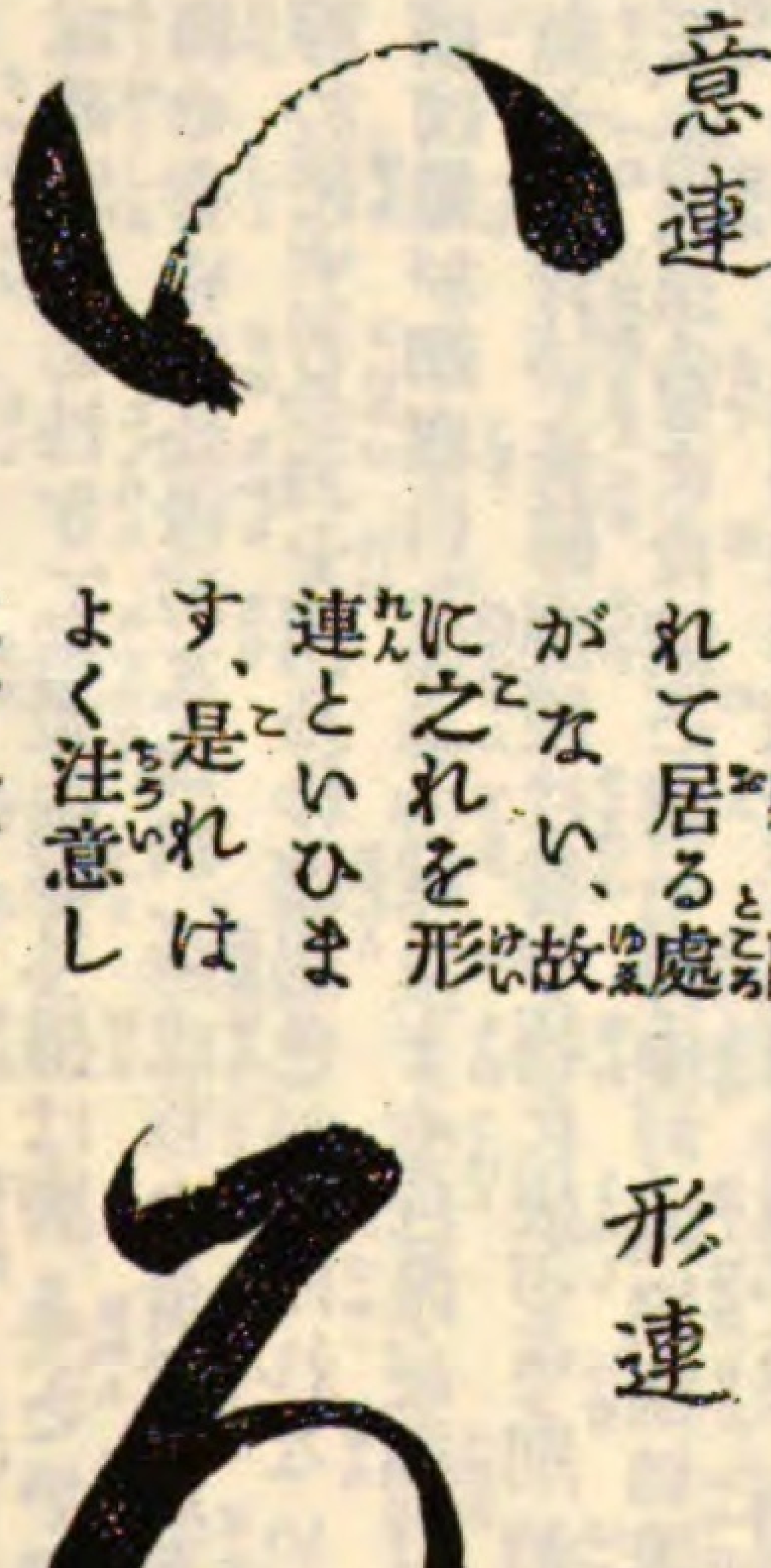
最初目で習ひ、次は心で習ひ、次は手で習ふ、目で習ふといふのは、手本の字を能く〳〵見明らめる事で、心で習ふといふのは、其見明らめた字の、筆意の在る處を心に會得し、茲に始めて手で習ふ事になる。

手で習ふといふのが即ち運筆の事なので、運筆にかゝる前には先づ己れの呼吸を調べなければならない、是れも呼吸が狂へば筆鋒が亂れるからなので呼吸整はずして筆鋒狂へば決して眞文字を得る事が出來べき者でない、されば呼吸を調へるといふ事はどうするかといふに、口を結むで舌を上顎に付け、鼻で呼吸をする、是れは僧の座禪をすると同じ仕方である。

是れから次が紙當りで、紙當りに就ては注意は強からず弱からず其中間を以て扱ひ、譬へば水の上に指を以て字を書くに、其水の動かざる樣に扱ひ、筆をたぶ〳〵と染めて、筆を浮めて書く心持にならなければいけぬ。紙當りの心持はかうと極めて、そして運筆の方には別に心得がある。即ち次に示した一の



字を書くにも筆を下してから筆を留むる迄には、峻、疾、遲、澁といふ四の變化があるので、最初の筆を付けた時が峻といつてつよめに、次の疾といふ處からはやめに、遲とある處に到つておそめに、澁とある處はしぶらせる、また假名の初めのいろはのいの字でも、左の一畫より右の一畫に移つて、其の間、躰は離れて居るが、是れは圖に點線で示した通り、意は續いて居らなければならないので、



是れを意連といひます、ろは躰の離れて居る處がない、故に之れを形連といひます、是れはよく注意しなければならない、譬へば松の字を書くにも、偏と旁と意聯に成つで居ないで、偏は偏、旁は旁と、意が異つて仕舞

つては、木と公と別々の字を合はせた様なものに成つて、字といふ性格が無くなつて仕舞ふ。最も是れは我が流の筆書の上の事であります。

書法の話

坂正臣

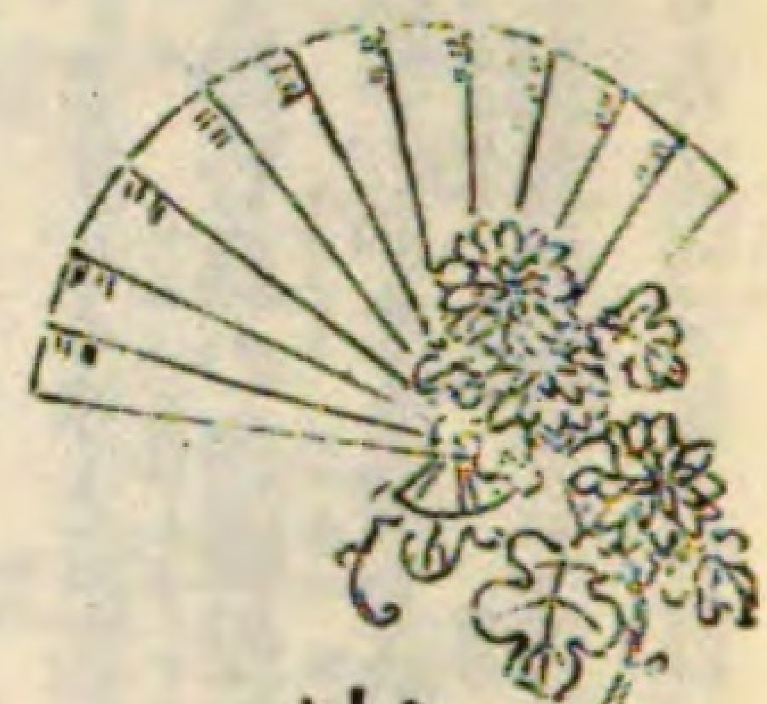
私の道樂は歌と書とで有ります。兩方ともに下手でありますが、歌の方は是からますます勉强して、死ぬまでにはあつぱれ名人と成りおほせるつもりでありますが、書の方はもう近い内に廢めてしまはうかと思つて居る位な事であります。尤も是までとても、私は書家でござるなどゝいふやうな、大きな顏をした事は一度もありませぬ。然るにこの下手な私の書を、世間では相應に用ゐて下さると見えて、かけかけといふ人の多いには、自分にも實に不思議とおもふので、乃ちこの女學世界にも私の書を一枚づゝ挿むやうにとの注文を受けました。斷つて見た。聽かれない。私は太陽贊成者の一人である。所が今日まで一度も贊成の實を擧げたことが無い。心中大いに飢ゑて居て、おして斷る勇氣が出ぬ。止むを得ず一枚書きましたら、つゞいて運筆法とか何とかを述べよとの事で、ますます困却仕ります。

私は六歲から十三歲まで、村の手習師匠の家で、大橋流とかいふ字を習つたばかりで、それも眞黑な手習雙紙に、所々水をこぼして師匠の前へ持つて行つて、へい習ひました。おゝよしよし。位な事で其頃は過ぐしましたので、書家にならうなんのといふ量見は、その頃から今日に至るまで一度も持つた事はありませぬ。書道樂をはじめましたのは、やうやう玆十年前からの事で、申さば斯道の青二歲。本心に立返つて考へて見れば、中々人の手本なんか書かれた義理では無いのであります。處がその私に頻にかけかけといふ人が有るのは又どうした譯か、實に不思議だと其所をもよくよく考へて見まするに、書家だの名人だのと言はれる人の字は、とかくへんてこな讀み悪いやうなのが多い。わが子を書の專門家にするではなし。差當りの用を足させるには、まづくともよみ易い手本を習はせやうと。まづこんな邊から來るのであらうと覺りました。

此の考へがもし當りましたならば、私の爲にあまり名譽てはありませぬけれども、安心が出來ます。得意でかく事が出來ます。私はほんの速成を要する人の爲にかきます。私の手本を習つて書家にならうなど丶思ふ人は、勿論ありもすまいが、万々一あるならばそれは大へんなあやまりてあります。書家の字は美術的である。私の字は實用的である。茶碗に譬へて見たら、書家の字は抹茶々碗、私のは茶漬茶碗でゞもありませうか。しかし書家といはれる人の中には、馬鹿馬鹿しく天狗なのが有るもので、ちよつと人の字を見ても「ラ、此は字になつては居らぬ」など丶言ひますが、此の詞は甚だ高妙な見識から出て來るやうに聽こえますけれども、其の實笑ふべきもので、抹茶々碗が茶漬茶碗を見て、これは茶碗では無いと言ふやうなものであります。尤も點が足らなかつたり畫が多かつたりしたら、それは字になりかねるのもありませうが、下手上手で字になるのならぬのといふ事はありませぬ。

私どもは和樣も漢樣もすきてあります。和樣では行成卿が一番にすき、漢樣では義之が一番にすきであります。勿論兩方とも中々眞似も出來ませぬが、只好であります。行成卿だらうが誰だらうが、和樣と唱へる書風は、皆義之から出たのであるから、義之さへ習つたら、行成卿と肩をならべるやうに、假名でもかけるだらうと思つてやつて見ても、中々いかぬ。是は習ひ方が足らぬからだからと、義之かきの大先生に書いてもらつて見ても、やつぱり感涙を流すやうな假名は出來ない。して見ると假名は全く別物と思はれる。假名はどうも行成卿がうまいと思ひます。細くてしやんとして居てさうして味がたつぷりと有つて、あゝどうもたまらぬであります。女子で以て書家にならうといふ方は、これをお習ひなさるがようござります。女子の漢樣はいけませぬね。





小説

玉椿

花圃女史

床にかけ花のわびすけも、水おげやおしかりけむ、其儘にしをれて殘るは幾日にか成つらむ、一日二日と手を折れば、うたても憂日のつもりにけるかな、五日目といふ今日までも、夜は二時の鐘きくまで、晝は四時頃の車のとゞろき、もしやと胸にひゞかせて、いつ方の誰が家へたれと睦ばむためにとか歸り行なる人のうしろで、さらずとは思ひながら、おと追ふ心にもなりてふらふらとおもてへ出づれば、ヲヤ奥樣と甲走りたる聲に呼かけしは、いつもまはりの髮結なり、どうもしばらく御無沙汰を恐れ入ました、と見わぐらるゝもはづかしき、獨寢の寢くたれがみ、いかに主人の夜がれかちなる頃とはいへ、女の身のたしなみも忘れて、眠ぶらぬ夜をつめば、勞れに頭いたみて、かきあげむ手櫛も物うく、肩これは衣だにかへず、浴衣かさねたるしどけなさを、何とか人の見ていふらむ、とつゝましう襟かき合せて、さらばと髮結をうちに請ずれば、おなたこなた見まはして、澁面つくりながら聲はさりとしもなく、オヤ〳〵お煙草盆も、御蒲團も、みんなおんな所に御片付に成ましてサ、ホンに御家に御歸り遊ばせば、おのふく〳〵した上へ旦那樣で入らつしやらうものを、何所にどうして入らつしやると申す事か、十日計りも御見え遊ばさぬといふ、噂を聞けば御人の事のやうにもなく、腹も立まする、御宅のなどは、文明とか、開化とか御口におつしやりながら、此頃になつて御はじまり遊ばしましたので御座いますとネ、マア御交際も御座いませうが、おまりでは御座いませぬか、われ〳〵しきの事は、一々に御噺しにも成ませぬが、宿がかへる時分だと思へば、無理な工面をしても、好な物でも買つて置きます、さすれば向ふ

も土産に菓子などかつてくる事も御座いますのサ、ほんとに助け合つたり相談しあつたりする、下等社會の者は、下女の焚く御飯を据ゑさせて、めしあがつて、旦那樣の御かへり時分には、小說本によみはまつて、チヤ何時御歸りとうなづく樣な、御挨拶をなさる、書生上りの奧さんの、御存じなさらぬ苦勞もある代りに、情合も中々あるもので御座います、それも亦御子でもあれば、よいも、わるいも、たゞ子可愛して、まぎれてしまひますけれど、御子でもないものは、たゞ家の中を這ずりまはつて、針箱の前に、もみうらひねくつて御出の計りが能でも御坐いませんから、旦那の御機嫌をとつたり、何事によらず助けあふ樣に遊ばすのが當世の奧さんですとサ、當世とやらの奧さんはマア中々むづかしいもので御坐います、とネと己が息子を、某官立學校へあげて學資金を得む爲の內職髮結と、此近所にかくれなき辯々者なればか、滔々と辯じ終れる時、髮もやがてゆひ上られにき。髮結の歸りし後も、まだ鏡臺を立はなれず、合せ鏡にとみかうみすれば、朱色の手柄もはづかしき三十近くの此年迄、子なき身の膝の邊り物足りぬ心地して、まぎるゝものゝなき憂き身は、今更に歎くとも及ばじ、此家に腰入れしてより七年計りの春秋を、去年までも睦まじく、花に紅葉と手とりかはして遊びありきしは、はなれぬ蝶の夢のまなりけり、まことよ、親子兄弟・いづれ親しからぬはなきが中に、夫婦は一世の尤も大部分をしめて、一つにむつびくらしぬべきものなれば、ことに心をも用ゐつべきもの なりかし、所をへだて不知しられぬ年月に生立て、年たけはじめて後見もし見られもしつる間なれば、なにはの蘆、伊勢の濱荻、ふし揃はぬも葉をすかせ、われと角めだつ枝ためて、心とかれにそふやうに、はかりぬべきは、女のみにはあらざるべきものを、思ひ淺瀨に立身ならんには、くねれるはくねれるに任せて、おもはぬ方に這ひろがるを、今更に穗わたのあたゝけき心なしと、恨むははたまた、たれの罰ならむ、よしいにしへの、今川、庭訓女大學の敎は世にふるされたれ、女の身の掟として動かすべからぬ操の大方は、盡されたるぞ東西かはらぬ人情なるべき一度

嫁して夫に隨ひなんには、ふとしたる事の行ちがひに、あらぬ方にはふれはてむなどいともあさましかるべし、はた又其人、よしなき幸を、もたる身にて、先にましたる榮を見むとて、寐覺〳〵にかきかぞふる思ひ出艸は、今の幸よりも、昔の憂だになつかしう思はざらんや、貧にまけ、憂にたへずして、我心の弱きをあざけられながら、われより閾を越え立出たるは、さながらつかあなを出し蛆虫の、こなたの草にすがり、彼處の木によりて後、とび立蝶の眉つくろふ方もなく、はては鷄などに、ついばみ去らるゝに似たるは、彼方其後時を得て、逢見むに覆水の歎、心からなせる結果とあぢきなからむ、いで女は處女としても、妻としても、たゞひたすらに思しのべ、しのぶはかたきならず、我增長をたゞ矯めむ計りの業なるものを、思ふにまかせねばとて、此上なき耻のやうに、此上なき苦のやうに思ふは、みな淺はかなる心の奥のみえ透たるなりけり、もし此淺き心のまゝに任かせなんには、いかに、きだすぎたる身の化粧、事ともなきに門邊の物見に行かふ人目もはぢぬ、芝居寄席と家をよそなる、隣の噂出入人の品さだめ、多くはあさ〳〵しき女のすなる事なりとよ、われもこゝに嫁ぎてより、かく思ひつゞくる事々の中に、いづれも非として、うたるゝ點なき身ならむか、さても相擇び、意氣相投じて、こゝにきつるより、朝は出勤を送り、夕は歸りを待て、其日〳〵を送りつる、餘り單純に平凡なる月日を經つるかな髮結のいひけるやうに、子といふなぐさめ艸のなき身は、ことに心を盡して、浮世の風にもまれ、風潮に流れむ身の、梶とり侘る折々は、心をも推して、一しほなぐさめてむものを、男の事は女のしらぬ事として、空耳を走らし、われはわが見わたすもせまき家の内を、いかなる世界とも思ひて、過しつるは、男の目より見ば濱の眞砂の數にもあらぬと、喋々といひたてなどする、さこそは心の外ならめ、うたてきかな、昨日までも、今日までも、たゞ今迄も、人をば恨み思ひつる、みなわが行ひの、わが心得の、かひなかりしなり、いかに夫の、一夜二夜あけて、むなしき夜床にまどろまずとも、女のしらぬ、否々女の聞をうれしとせぬ、公業のいそしき

時もありけむを、ひがむ心に胸のみもえて、たま〳〵歸らせたまふも、よき顏に出むかへられぬは、我家なりとてたれも居心たのしかるべき、かまへて〳〵これよりは、さるけはひだに見せまじよ、昔人の眞實なる、遠き旅路にある夫に、影膳すゑてかしづきぬと、ぞいふを、われはいかに、一日歸らせたまはねば、はやわすもしからむとて、しとねは片よせ、膳部にのぼすべきはとゝのへずして、ひたすらに歸らせたまへとのみぞまつ、髪結のさかひにも劣れる身の振舞なり、われよりしか心付ほどなるを、夫はいかに何と見たまひけむ、かくとゝのはぬ妻なればか、來ん年も目のまへなるに、何方にいかさまにして、とつく〳〵と歎息をつきて、いな思ふまじ思へどもかひなし、身をのみせむるぞよき、今のわが身のつとめは、何時夫の歸らせんとも、さしつかへぬ樣に、又他よりして、あるじなき宿の亂のはしさを、わざけられぬやうにあらまほし、と思ひなりては、夕日のかげに窓の鳥かげも心かゝりとなりて、箒を手にとりてそこら掃き清めむとする時、我川たしに行きし下女の、立歸りたるを、よき所へ、とく歸りこし、勞れたらめども、魚や〳〵一走り、八百屋へも行て、と命ずれば、目をまるくして、めづらしき御客樣もや、とおどろき顏なるを、はや、旦那樣の好ませたまふ寄鍋ものせむ料にといへば、ヱ旦那樣が何時御歸りにと、そこら見まはすを、まづまづとく買ひてこよ、と追やりて、居間の机をかき拂ひ、火鉢に火をとりて、湯わかしをかけ、茶器をとゝのへ、われも手はやく身しまひして さて今更に何をたのみに、物狂はしくもかくさまに騷ぞき立てむとかする、と又茫然と考へにしづむ程に、臺所には下女の はや料理にいそがしく、立働らくさまなるも、歸らせたまはむがまことならんには、いかに嬉しからまし、張合もあらましものを、下女の手前も恥かしなど、思ひ續くるほどに格子カラ〳〵とあきて、カラリと杖のおかれたるは、七年越、一日もたがへず、聞なれし音なり、夢か心の迷ひかと、聞耳たつれば、コト〳〵と沓ぬぐ音のいよ〳〵それにたがはず、さてはと俄に上氣して、かけむかはむとして又立もどり、鏡の前に身つくろひして、用もなきし

とゐを又うらかへし敷なほし、とゞろく胸を抑へつゝ、襖ソロリとあくれば、かなたも我家ながら入わづらひし出あひがしら、ふと顔見合せてはじめて見し人の心地しつ、兩手をつきて、御歸り遊ばせといへば、鼻しろみたる夫は、襟かざりを手まさぐりにしつゝ、一かゝへ抱へし書物を、妻にわたして、今日は年内に仕舞はねばならぬ役所の用事で、太田も今に來るといふから、とさも歸宅しつるをいひわけらしく、ずつと居間に通れば、いつにかはらず、蒲團しかれて、塵もなく、人まちかほなるさまなりけり、そこら見廻しつゝ、衣服をぬげば、巨燵に暖めし小袖に、フラネルの單衣かさねて、うしろにふわときするに、外の寒氣を取かへして、いつ縫直しけむ しつけつきたる大島の羽織も、おもき計におぼゆる意外のさまに、まご／＼しながら、さすがに心地よくて、火鉢にむかへば、颯々と松風音づれて、湯氣立むかふに、衣服たゝむ妻の顔を、机の邊にうちそろへたる留守中の新聞紙、書状のかさなれると、かはる／＼見比べて、身にもつもる罪をかきかぞふるさまなり、されど、互ひに言かはすつてもなくてそむきがちなる妻の衣服片付おはれる頃、下女はおそる／＼一禮して、言付られたるまゝに、膳部持出でぬるを見れば、いつにかはらぬ種々の上に、このめるものをさへさしそへられつ、いよ／＼手持なき夫は、たゞ頭をなで、頰をなで、灰かきならす、強て心をしづめて、けふは濕氣とやら、思ふやうなるものは御座りませねどゝ、飯椀とりわげて、給仕せんとするに、一昨日、昨日の宿醉も、今日の役所の繁忙にみな消て、空腹のかをりもこのましく、箸とりあげて、今日はいやに寒いの、と今更ゆくりなくいひかけたる一言は、いつもかくして待つらむ妻の心しらひを詫言葉の千万言にかふるなるべし、俄のまふけの中にも床の花の枯れたるは取去られて、さしかへられし玉椿、此室内の暖氣にゑみひらけたるが、げに其千代かけてかはらぬ色をちぎるべうこそ。

古情人（上）

内田魯庵

東京からは廿五六里で街道筋を四五里引込んだ僻地である。名所舊蹟といふては無いが、山もあり、川もあり、天狗が棲むといふなる大杉の木立もあり、甍落ちて梁に蝙蝠の隱る丶古伽藍もあり、喧しき梭の音に鄙歌の洩る丶賤が伏屋もあり、水チヨロ〳〵石五つ六つ忍音を通はする細き流もあり、何年前かの出水に流落ちて憐れを留むる橋杭の趾もあり、さては渡船場、水車小屋の詫びて笑止しき風情、五年前に偶と遊んだ折の記憶が今だに忘れられないので、爰の一石一水を借りて來ん春の展覽會の競爭製作を工風しやうと思附き、左も右くも四五日逗留してスケッチを取らうといふ考で繪工の七ッ道具を引脊負つて出掛けた。

滊車を下りてから四五里、行く〳〵川縁の景色の面白さにスケッチ五ッ六つ取りて閑どり、目的の村に着いたは三時過である。木立深く籠めたる鎮守の祠寂びたる、見渡す涯なき田面の水枯れて寒き、葉を震ひたる林の哀れに物淋しき、衣を褫がれたる案山子の風に搖ぎて嘆ち顔なる、小丘を脊負つて建てる大盡の嚴めしき長屋門と並べる穀倉の白壁の夕陽に映ひて凄じき冬の景色は自づから裏悲しく索漠として身に浸みるやうであつた。

桑園の間を縫ふて一町ほど行くと、脊のヒヨロヒヨロした松原があつて、此松原を拔けて堤を越すと米俵より大きな石の轉々する河原である。名にしあふ關東の大河は二十間ほどの幅で二條となつて流れる。常は此通りな河原であるが、霖雨數日すれば忽ち一町餘りの川幅となつて川沿の立木を根こぎにし川原の大石を押流し、堤を破つて汎濫すれば數里を一面の海と變じて家屋を浸し人畜を亡ぼし其處此處に災害の傷ましき名殘を留めてゐる。三百年來代々の役人が治水に勞らされて堤防修築の紀念に建てられた碑石が此河畔に四五ヶ處あるさうだ。

河原を一町ほど行くと堀立小屋があつて、渡守の爺さんが跨火をしながら西日を脊に受けて怠屈さうにバク／＼燻かしてゐた。浮か／＼と石を飛越えつ其傍まで來た自分を見ても無言で一向顧眸きもしなかつた。

『渡しかい？』

『はァ、最う少し待たッしやい。三人ばかり來ると出しやすァ。』

『俺ァ船へ乘るンぢやない』と笑ひながら答へつ、此邊の景色の勝れたるに見惚れて我知らず停立つた。

渡守は怪訝な顏をして、繪具匣を肩から釣し三脚を小脇に抱へたる自分の異樣な扮裝をジロ／＼見てゐたが、

『旦那は繪を書かッしやるかネ？』

『むゝ、俺は繪工だ。如何して解る、感心だナ。』

『旦那のやうに匣を脊負つて來る繪工が澤山ありやすァ。此樣な面白くもねェ景色が繪に書くと妙ェと見えてノウ、東京から繪工や寫眞屋が毎日のやうに來やすァ。』

『澤山來るかい。ふうむ、好い景色だからナ。俺も四五日逗留して此近所を方々書いてく所存だ。』

『四五日逗留さッしやる？』と渡守は不憫な顏をして『此樣な景色を書くに四五日も閑を潰さッしやるか成程書工は閑人の商賣でがんすナァ。』

『はッはッ、四五日位は何でも無いサ。隨分一つ繪に半年や一年掛る事もある。』

『半年や一年．．．』と何を馬鹿を吐かすといふやうな面附でジロリと見やりつ、バクリ／＼と地切の臭い奴を燻かしてゐた。

『此近所に旅籠屋は有るかい？』

『之から二里先の宿にはありやすがナ、貴方が泊らッしやるか、』と言掛けて意味ありげに眤ッと自分の顏を見、『貴方は繪の方ぢやァ名人でがんすかネ？』

『俺かい、はッはッ、評判の名人だナ。俺の書いた書は一枚百圓で賣れる。』

『一枚百圓で賣れる――調戯べェ云はねェで』と渡

守は半分茶にして火鉢の縁をコツ〳〵、叩きながら、『貴方が全くの名人なら私相談する事があるダ。』

『如何な相談だ。俺の繪を一枚呉れろか。百圓儲けやうッてんだナ。』

『馬鹿ア吐かねエもんだ。私、無酬は頼まねエが、貴方が四五日逗留するといふだから相談するダ。土地には旅籠ッてものは無エし、村の若エ者が女ア買ひに行く達磨茶屋が一軒あるけんど、喧ましくッて仕樣が無エ。第一汚なくて迚も東京の衆には辛抱出來ねエだから、それよか私が隱居家を貸して上げべエと思つて…………ホーラ、……』と伸上つて彼方を指しつ、『向ふの小高エ丘に、大エ榎のある直ぐ傍に小ッぽけな家がある。あの家でがんす。自慢ぢやアねエが、東京の大工が建てた座敷で、大盡樣の座敷に負けねエ普請でがんす。あの家を貸して上げべエ。五日でも六日でも十日でも一ケ月でも半年でも一年でも逗留してエだけ逗留さッしやい。其代り私、書いて貰エてエものがあるだが……』

只見ると河に臨んだ崖の上の榎の影に洒落た構作の家がある。遠目で判然とは解らぬが四五年前の普請らしく此邊の百姓家とは趣味を異にしてゐるやうである。河原の堀立小屋で寒風に晒されつゝ一錢二錢の渡し錢で其日を送る渡守の親爺の持家としては餘り立派過ぎるので自分の耳を信じ兼て、

『あの家かい、あの榎の蔭の家かい？』

『あの家でがんす。私、此樣な汚ねエ扮裝してゐる貧乏人でがんすが、あの家は東京の衆に見せても恥かしくねエだ。大盡樣の座敷だつて停車場前のお茶屋の座敷だつて及ぶこッてねエ……』

『汝の家かい？』と自分は不思議に思つて危げに尋ねた。

『私の家でがんす。』と渡守の老爺は得意げに鼻うごめかしつ、『あれは東京の旦那が別莊に建てたのも仔細あつて私が貰エやしたダが、私には勿躰なくて大抵人に貸して置くだ。左も右く貴方にお貸し申すから遠慮なく逗留さッしやい。其代り私頼がある……』

……』『景色が好さそうだナ？』と自分は老爺の言葉を半分しか耳に入れなかつた。

『景色が好ェか惡いか私には解りましねェが、東京のお客樣は悉皆褒めるダ。此位な景色は何處にもありましねェと。』

『爾うだ、一寸つと類の少ない景色だ。併しお前は好い場所へ家を持つてる。東京の贅澤な野郎に高い家賃を取つて貸したら好い金儲が出來る。』

『いんにや、私、錢を取つて貸すのは嫌ェだ。渡し船は私が商賣だから無賃ぢやァ船へ乘せ申さねェが、家の方は私の氣に入ッた人なら無賃で貸してやる。私ァ旅籠商賣でねェから家を貸して錢を取つちやァ心が濟まねェだ。』

『すると俺は無賃貸して貰へるンだから汝の氣に入つたと見えるナ。』

『氣に入るも入らねェもねェ。貴方には私、頼があるだから……』

『はッはッ、俺の書が所望と仰しやるか宜し〳〵、書いて進ぜやう。』

『はァ、私、既から頼みてェ繪があるだが、漫遊の乞食繪師には頼みたくねェし、貴方は氣性が面白くて名人らしいから……』

『名人らしいは恐れる……』

『いんにや氣性が捌けて名人らしく見える。繪は不手か上手か私には見たッて解んねェが、貴方の氣性が氣に入つたゝから……』

といふ時、糸立草鞋穿の五六人の旅人が來たので、小屋に立て掛けた竿を取つてヤオラ起上りつ、

『そんならお客樣、貴方は先へ行かッしやい。いんま御坐らした道を戻つて、松原を西へ行かッしやると、右りの方に石の地藏樣がある。此地藏樣の角を曲つて繩手道を小半町行かッしやると次第に爪先上りとなつて山路に掛る。坂の中途の左り手の竹藪を目標に左りへ折れて上らッしやると圃があつて百姓小屋が一軒ある。此處の奴が喜平次といふて私の隱居家を預けて置

くだから、河原の德平爺から聞いて來たと云ふたら案內して呉れべエ。私、五時に渡船を終うから、日暮に行つて貴方の都合の好ェやうに計らうダ。えェかネ、喜平次といふ奴に河原の德平爺からと私の名を云ふダ可ェかネ……』

と念を押しつゝ渡守の親爺は竿を持つて出掛た。一行の旅人は船へ飛移ッて待遠しさうに此方を見てゐえ。

(中)

左も右くもと渡守の爺の敎ゆるまゝに覺束ない道を辿つて行くと、果して喜平次といふ百性があつた。齢は四十餘りの朴實らしい男で自分が唐突の案內を一向疑ふ色もなく、手に持つ鍬を棄てゝ親切かに自分を管待しつ、氣輕に先へ立つて小半町ほど離れた渡守の隱居家へ嚮導べした。

外構は脊の低い建仁寺垣で、小やかな枝折戸を入ると中は芝生の掃庭で木振の面白い梅五六本を栽へたゞけである。築山泉水の結構は無いが天然の眺望の勝れたのが何より趣味ある。座敷は八疊六疊三疊の三間であるが、木材の撰擇から造作まで、成程德平爺が自慢した通り、此界隈には珍らしい普請である。

人の住まぬ家ゆゑ萬づに掃除が行届かず、座敷の隅〱には塵埃が積つてゐたが、惣じてケバ〱しき都風を嫌つて佗びたる構作を旨としたのが頗る面白いやうである。然るに猶ほ不惻なは床に抱一上人の業平東下りの幅を掛け京燒の鴛鴦の香爐を螺鈿の臺の上に置き、違棚には元祿風の陶人形と古代蒔繪の手匣を飾付け、椙間には四條風の田舍の風景の額が掲げてある。如何にしても渡守風情の物數寄とは思はれず、以前は東京の某紳士の別莊であつたを貰ひ受けたと最前の物語に聞きたれども、夫にしても斯の如き器具家什の備れるは誠に奇怪の限てある。

案內者の喜平次は一向無口な男で、ゆるりと御休息なさいましと言置いて歸て了つた。自分は恰て人質

に取られたやうな氣がして、暫らくは樣に突立つたまゝ茫然としてゐた。斜陽に反映さるゝ冬の山の木の葉を震ひて薄ら寒く、崖下を流るゝ川瀨の音の滔々たるが耳元に鳴りて滿目荒涼たる景色は徐ろに身に浸徹る心地がした。

軈て四五十分も經つたであらう。喜平次は衣服を更へて老女房と一緒に茶器と飯器とを準備して來た。女房は喜平次と全じ四十恰好の實直らしい女で、案內知つたる臺所から八寸の膳に六兵衞擬ひの茶碗を載せたのを持出し、己れが携帶した玉子燒と香の物の皿を添えて自分に薦めた。

『お客樣のお口には適ひますめヱが、』と愛嬌ある笑を浮べつゝ『間に合せに準備しましたから、德平伯父さんが來さしつたら澤山御馳走がありますべヱ。』

『イヤお手數だッた。』

『お茶を喫りませ』と喜平次はまめ〳〵しく藥を煎じたやうな茶を注いで薦めつ、『德平どんは今夜急用が出來て隣村へ行かッしやるので今夜は罷り出られねヱ

と老妻が言傳つて參りやした。』

『あァ、爾うかい。飛んだ御厄介になる……』

『お客樣は麥の飯は喫りましねヱだらうが……』と女房は飯を盛りながら、『米の飯を準備すべヱと思ひやしたが、何分急場で間に合ひ申さねヱで。』

『麥飯結構と、』自分は山盛の茶碗を取りつゝ箸を持添えながら、『田舍へ來ると此麥飯を喰ふのが樂みだよ。』

『旦那樣はお口前がお巧手だ、』と女房は良人の顏を見つゝ打笑つた。

『眞箇だよ。米の飯が喰ひたけりやァ東京に在る。御馳走を喰ひに田舍に來たんぢやない。』

『そりやァ爾んなものでがんせうが、東京の衆へ鹽の辛ヱ無味いものを上げるのは氣の毒でなんねヱ。』

『俺は爾うでない。拙な東京料理を喰ふよりは田舍は田舍らしく鹽の辛い奴が好い。喰物ばかりぢァない、家なんぞも爰の座敷のやうだと立派過ぎて田舍に在るやうな氣がしないよ。』

『此家はお前樣、村の二百石の高持の大盡樣の座敷よか立派でがんすからナ。村中どころか此位なお座敷は東京のお茶屋さァ行つても御座りましねェと東京のお客樣ァ云ひやした。』

『爾うヽ、東京にも澤山は無い。中々金子の要つた普請だ』と云ひつヽ一杯目のお代はりをして、『德平といふ親爺は渡船の船頭をしてゐるが、中々財產があると見えるナ。』

『どう致しやして、德平伯父さんはお客樣、渡船の番人でがんすもの、矢張私らと同じ貧乏人でがんす。』

『ふむ、貧乏人かい。貧乏人が這般な立派な家を持つてるのは餘程妙だネ。東京の旦那とかに貰つたと聞いたが、如何いふ仔細で這般な立派な家を貰つたのだネ？』

『それは貴方、長物語がありやすサ、』と女房は丸盆を膝を突きつヽ云はう乎云ふまい乎といふ容子で自分と喜平次との顏を見較べてゐた。

『汝は復た要らぬ事を饒舌りくさる、』と喜平次は苦い顏をしつ女房を嗜めた。

『面白さうな咄があると見えるナ、』と自分は笑ひながら、『知つてるなら少と聞きたいもんだ。』

『私ァ知りましねェ、』と喜平次は膠もなく、『貴方德平爺から聞かッしやい。德平爺は此家が自慢で、俺が此家は神樣のお宮と全樣だ。根性の汚ねェ奴が一と足踏込んだら罰が中ると云ふ位でがんす。』

『大變な家だナ、俺なんぞは罰が中りさうだツイ。』

『尤も種々來歷がありますがナ。私らァ精しい事ァ知り申さねェから……』

と喜平次は話しともなささうな容子であるから、自分も根强くは尋ねず、其まヽ夕餐を終つて、此村の四方山の物語を聞きつ、七時過ぐる頃に喜平次夫婦の設けて與れた臥蓐に入つた。喜平次夫婦は戸鎖りをしつヽ歸つて了つた。

さらぬだに旅寐の夢は安らかに結びがたきを、况してや人の棲まぬ家に唯一人取殘されたのだから、扁に訪るヽ風が無くとも、天井に荒れ騷ぐ鼠が無くとも、

中々沈着いて睡られないのは當然である。

段々夜は更けて寂寞が森然として身に喰込むやうで、枕許に脱棄てた洋服の衣兜の小さな袂時計の音すら聞える。で、此座敷には不似合な小汚なき五分心ランプの薄暗き光明の外に無數の魑魅魍魎が潛むやうな氣がして凄しさが一層骨肉に浸徹つた。

元來餘り物恐れせぬ方で山中の無住寺に暮した事さへあるが、此晩は何となく胸騒ぎがして、ウト〳〵する間も何物とも知れぬ異形な怪物が身邊を往きつ戻りつするのが眼前に仄つくやうな氣がして如何しても易〳〵と睡付かれなかつた。

何事につけて越方行末の憶出さるゝは旅寐の常で種々の事思ひ浮ぶる間に、偶と五年前此の村を旅した時の樣々が胸に浮んだ。猶だ學生籍に列なりし頃とて芋の蔕へたも御存じなき連中仝士打伴れて鹽原に遊んだ時であるが、何れも浮世を茶にして天才で候と肩で風を切る美術家のお揃ひだから放言高論は魯か今考へれば顏から火の出るやうな惡戯謔をして得々としてゐた。此處の村は此奥の瀧を見物して往返りに素通りしたゞけで不憫に茶咄の種を一つも殘さなかつたが、鹽原では一行一人として恥の搔捨てをしない者は無かッた。連日連夜ダラシなき酒に醉ふて放吟亂舞し、隣室を騷がして幾度か宿の者に注意されては猶だしも、末には出て行けと云はぬばかりの仕向けに一同憤然として袂を拂つて出たまでは好かつたが、何處の宿も何處の宿も客が一杯にて斷られ、福渡から畑下、門前、古町まで流れて到る處敬して遠ざけられ、恰度夜の十時頃一同途方に暮れて青息を吐きつゝ漸とこさと門前の荒物屋に泣付いて物置仝樣な汚ない二階に有附いて氣量の惡るさ加減今考へても腹筋が捩れるやうである。相原のXか雲井に近き御方の御夫婦が御微行と知らずに御道筋に摺違つて『畜生奴！』と叫んで駐在所の巡査に大眼玉を喰ひしも憶出せば悄氣たさまがあり〳〵と見える。牛原の駱駝が今こそお父さん顏をして眞摯臭つてるが、筋向ひの二階に逗留する某長者の娘とかに馴れ〳〵しく近附いた擧句ヅー〳〵しくも袖を引張

つて見事に跳付けられ附添の女に嚴しく談じつけられた一つ咄は同窓の寄集ふ折節牛原の厚顔をギウと凹ませる奧の手である西山の瓢箪が門前の外湯で浴客を湯氣に上らしたといふ自慢の瞽女節は今猶ほ巴黎の旅窓に日本の粹を慢りつゝわりや如何に、アカデミィの學士も之には我を折つて降參するが價値はある。

人の上ばかりでなく自分も思掛ない罪作りをした。宿の內儀の親戚とかにて夏中手傳に來りし娘、年は十八九で左して美人といふではないが人目に附き易き愛嬌の丸顏があつた。同行の誰彼も內々袖を引張つたらしいが、常は女に淡泊な自分もツィ旅の戯れに抜駈をやつて、無骨男が案外上首尾な功名を遂げた。尤も巧に人目を避けた上に此道に掛けては三歳子に等しき自分の事とて誰しも氣が附かず、到頭口を拭ふて何喰はぬ顏をして了つた。

自分は戀には冷淡である。まだ今日まで戀の眞味を理解しないのである。勿論人の自然の情だから萬更知らないでは無いが、實は頗る高く棲つて容易く自分の戀を女に許さないのである。鹽原の宿の娘とて戀したわけでなく唯だほんの一時の出來心であるから東京に歸つてからは全く忘れて了つた。斯ういふと如何にも薄情らしいが、又慥に薄情と云はれても是非が無いが、對手は浮萍の誘ふ水に任する田舍娘で、座輿の轉び寐が分相應、昨宵會ふた男を今朝忘るゝが習ひであるから眞實らしう契つた情を夢よりは儚く忘れて了うがお互ひの都合で罪にはなるまいと自分で辨解した。で、人にも語らず、自分の心に秘めてゐた。尤も折に觸れて憶出さぬではないが、一と月二タ月と經つ中に段々と薄らぎで、終には心の秘密簿からさへ帳消されて了つたのである。

然るに今夜其時の戻りしなに通り抜けた此村に假寢して不思議に偶と憶出した。今では丸髷を載せて抱く子に乳含ませる女房振笑止しかるべしと、昔し嬉しき首尾を見て語らひ合ひし私言など憶起して我知らず微笑した。自分は昔しから移ろひ易き女の情を輕侮みて、直ぐなる竹の節に比へる操は歌人が仇なる理想で、

女は鉛の溶け易きが如、紅の褪め易きが如、假初の翫弄には適してゐるが、迚も男子が一生の伴侶なる價値がないもので、今までの夫婦の關係は畢竟不完全なる社會の不完全なる習慣に本づくものであると、猶だ種々議論もあるが、大略此意味で無妻主義を取つてゐたのだ。で、此見地から婦人を見たから所謂賢女貞婦の如きは都合宜き境界に住したる僥倖見で自分の眼には何等の價値が無かつた。況してや分別も庭訓もなき田舍者に貞操の有らう筈なく貞操にまれ不貞操にまれ子を產む義務さへ濟ませば女の道は足るもので田舍娘に貞操は荷の勝つた逆德である。

が、斯うはいふものゝ憶出せば、愈々跡らうといふ前の晩我が膝に泣頽れて忍び音に搔口說いた娘の風釆は今でも眼前に仄つく。若し此淚を迸しらす愛の永へに盡きざる泉を一と度男に獻げつる上は命掛けて他し男の汲取るを許さゞるほどの、昔しの淨瑠璃や小說に有るやうな女がまッこと此世にゐるものならば面白からうが、白粉臭き目に物言はする活きた女は今啼いた鴉が彼方向けば直ぐ笑うて媚を賣るが常である。

偶と昔しを憶出したまゝ繪工の地になき屁理屈を捻くりつゝ、何心なく薄暗き座敷の隅を見ると、朦朧とした人影が見えた。五分心のランプが油燼きかゝりて仄暗くなつた時スル〳〵前に進んで自分の枕邊に音もなく座つた。只見ると靑醒めた顏の若き女が綠兒を抱へて自分を見てニヤリと微笑した。

思はずあッと聲を上げて頭からスポリと夜具を被つて、冷水を浴びせ掛けられたやうにガタ〳〵慄上つた。暫らく經つてから秘ッと顏を出して枕邊から四邊を見廻したが怪しき人影は何れへか消えて了つた。漸く縮んだ手足を伸ばしつ腹這になつて隅から隅まで眼を据えて見廻したが、怪しき物の影は更に認められなかつた。

『ちよッ、馬鹿々々しいッ！』と獨りで力んで自分の腕を叩いた。

其途端にサアッと衣の物に觸るやうな音がして次の間の襖の隙からスウッと幻のやうな形が抜出した。

自分はぞッと身柱元から戰慄して肩をすぼめ其まゝ仰ぎ見るを得なかッたが、直ぐ傍に怪しき人が座して青い顏に凄き微笑を含みつゝ自分の顏を覗込んでゐるやうな氣がして、今にも此幽鬼に憑殺さるゝかと思ふと悚然として氣を喪つて了つた。すると暫らくして左右から蹴返すものがあるのでハッと氣が附くと繪に見た牛頭馬頭が雲を突く如き形をして碎くるばかりに自分の手を握んで何れへか引立てやうとする。其傍には子を抱いた若い女がサメ〴〵と泣いてゐた。自分は引立てられまいと爭つたが、力なき繪工の我が爭で地獄の魔力に敵するを得べき。忽ち虛空高くスル〳〵と攫はれて猛火焰々と焰えたる雲上の車にドンと投込まれつ隱々轔々たる車輪の四方に廻ると共に五躰燒爛れて自分は唯だ一握の灰塵と化して了つた。すると天の一角より一道の光明を生じ忽ち六合に瀰蔓して刹那に金光世界を現じ、我を一塵と化したる火輪車は何れへか影を潛めつ五彩の雲に包まるゝ觀音薩埵が自分の枯骨を瑠璃壺に納れて抱き給ひつ赫灼として眩きばかり尊げなる慈悲の姿を中空に現はし給ふに、是まで覺えざる隨喜の念油然として迸しりて合掌禮拜した。すると何時の間にか段々と菩薩の御顏が變つて來て自分の枕邊に泣きつる若き女ノ靑ざめた顏となつた。思はずアッと聲を上げると忽ち夢は破れて身の本のまゝの臥蓐に埋まつてゐた。夢現の境こそ定め難ないが、滿身の冷汗シットリとして肌着を濕し、恰も大呵責に會つた後の如く渾身が勞れて綿のやうになつた。恰度折から東が白み掛つたので、ムク〳〵と起上つて椽の戸を開き、まだ薄暗き上に骨身に浸徹るやうな寒さの中を部屋から部屋へと家の內を運動し初めた。

すると忽ち眼に附いたは隣りの間の佛壇で、神代杉の板扉が半ば開いてゐるを何氣なく覗くと、金色の本尊佛が中央の壇上に結迦趺座し給ふ前に二器の位牌が竝んで、其前に白銅の臺に插みたるカビネの寫眞が飾つてあつた。只見ると綠兒を抱きたる若き女の寫眞で、何如やら記憶があるので、手に取つて能く〳〵覩ると、斯は思ひきや、思ひきや自分が一生に一度契りたる

鹽原の宿の娘であつた。

自分は餘り意外けなき邂逅に暫らくは夢に夢見る如く茫然として立縮んで了つた。

（下）

まだ日の挿込まぬ中に德平爺は、ハサ〳〵、庭口から入つて來た。

『お客樣、最う起きさッしやッたか。私ァ猶ず深夜だんべェと思つて來た、』と會釋しつゝ自分の尋常ならぬ顏色を見て、『貴方、顏色が能くねェだが如何かさッしやッたけい？えェ、寒いからだッて、そんなら好ェだが如何かさッしやッたかと私心配したダ。喜平次の奴め、火でも早く持て來れば好ェだに、氣の可かねェ和郎だ……』

『どうでがんす、貴方、眺望は好ェだし、座敷は奇麗だし、之から貴方、少とは不自由でなんねェが、汚ねェ旅籠よか面倒でェなくて居心が好かんべェ。』

『むゝ、中々凝つた普請だ。床の間の懸物から置物、悉皆凝つてるナ。』

『はァ、私らには解んねェが、東京から來る客人にでも褒めやす。私らには勿躰ねェと云ひやす。』

『眞箇に勿躰ないナ。』

『はッはッはッ、勿躰ねェ筈でがんす。東京の立派なお殿樣が建てた家で床の間の懸軸や置物もお殿樣の所有だもの、立派なわけでがんす。』

『悉皆貰つたのかい、甘い事をしたナ。』

『はァ、家ぐるみ悉皆貰ひやしたが、甘ェ事をしたか甘くねェ事をしたか解んねェだ。』

『如何いふ因緣で貰つたのだい？』

『私の娘がお世話になつたお殿樣で、娘がおッ死んでからお殿樣から娘の紀念に頂戴しやしたので……』と云ひつゝ次の間に立ち、軈て自分を悚然とせしめたる寫眞を持つて來て、『貴方にお賴み申してェと云つたのは此寫眞を油繪とかに書いてお貰ェ申してェのて。』

『ふーむ、』と云ひつゝ、故と何喰はぬ顏をしつ寫眞

を取った。東京のお殿樣とかの世話になつたと聞いて幾分か自分の罪業を減じたやうな氣がして、『何時死んだのだネ?』

『去年の春で、來年は三週忌でがんすと云ひつゝ、德平爺は萎れた調子で、『それに就いて哀れな話がありやす。』

恰度喜平次の娘が持つて來た緣の取れた箱火鉢を引寄せて抱へて、左も右くも一度の契を結んだ女の後談が聞きたさに熱心を面に現して、

『如何いふ話だネ?』

『之は貴方、私が一人娘で、死んだ嬶の遺見でがんすして卯の毛で突いたほどの傷も附けねエで大切に育てやしたが、十八の年に死んだ嬶の妹で野州鹽原の温泉場の荒物商に嫁つてる者が尋ねて來やして、私の口から云ふと自慢らしいが此寫眞見ても解るだが這般な山家には珍らしい十人並勝れた女でがんすから、叔母奴が惚込んで云ふには兒さんお賤ッ子を夏中俺が家へ遣しなさらんか、東京からお客樣來るだから賑かで厶麼に面白かんべエと云ふだ。私ァ實は手離したくなかつたが、可愛い兒には旅をさせろで親の手許にばかり置いて世間を見せねエも利益になんねエし、第一外の田舍と違つて東京の衆が金を費つて行く場所だから娘に見せてエし、と思つて叔母に伴れさして遣りやしたが、今思やァ夫が惡るかつたダ。』

『小娘と小袋とは油斷出來ねエと能く云つたもんで……』と德平爺は深く一朝の油斷を後悔するやうな語氣で、『孫兒だ孫兒だと思つて甘やかした娘が、貴方、鹽原へ行つてる中に情夫を拵エたダ。尤も叔母の奴さへ何時不義をしたか知んねエといふだから私らは離れてゐて知らう筈が無エ。夏の終末になると、鹽原に在ても面白くねへだから東京へ奉行にやつて吳れろと娘から手紙が來やした。私ァ何にも知んねエだからどうせ聟を貰う前には最少と行儀を仕込まなければなんねエと思つて、早速鹽原から呼んで村の者で東京の下谷御徒士町で綿商賣をしておる高島作藏ちう仁へ娘を頼んでやり申した。貴方、大それた咄で、情夫の跡を追掛

けたのだとは私ァ氣が付きましねェで高島作藏に賴み込みやした處が、作藏どんも親切な仁で堅ェ家を索して奉公さして吳れやした。處が貴夫、私やぶッ驚愕やした。娘は何時の間にか情夫の胤をおッ娠んでゐたダ。』

『えッ、姙娠した？』と自分は思はず愕然とした。

『はア、私は、ハァ魂消やしたネ。でがんすから追々月が重なつて來る、奉公は出來なくなる、閑を貰うて作藏どんに泣付きやした。私ァ寧そ歸つて來いと云つてやりやしたが、娘は面目なくて歸られねェ、何と云つても情夫に會はねェ内は歸らねェと駄々を凝ねやすんで、作藏どんも深切者でがんすから爾んなら世話をしてやるべェ、若ェ者が怎麼な心得違ェをしねェもんでもねェと、親切に面倒を見て吳れやして、何しろ情夫を搜すべェと毎日〳〵大ェ腹をした娘を伴れて作藏どんのお內儀樣が東京中を歩きやした。』

『ふゥむ、解つたかい？』と自分は我知らず嘆息を吐いた。

『解りましねェ、東京の廣い處で解りッこはねェ。尤も名前住所も解つてますので第一に搜しやしたさうですが、所詮女を騙くらかして孫兒まで拵ェて棄てるやうな薄情な野郎が眞實の住所姓名を名乘るわけが無ェだから何時まで搜したつて解りッこはねェ。其內に貴方、產の氣が付いて安々と玉のやうな男の兒を產みやした……』

『ふゥむ、』と自分は思はず深い嘆息を吐き、恰も地獄の宣告に服するやうな氣がしてぶる〳〵ッと慄上ッた。

『貴方、如何かさッしやッたか、』と德平爺は不思議さうに自分の顏を覗きつ、『顏色が好くねェが、眩暈でもしやすかい？』

『なァに何とも無いよ、』と答へたが、自分は恰も錐で揉まるゝやうな氣がした。

『そんなら大切ねェが、時候が好くねェだから、』と德平爺は心配さうに、『朝飯喰ふて腹を拵ェると好ェだが、喜平次の奴め何を躊躇してけつかるだ。私、一寸く

ら催促して來べエ……』

『先ァ好いよ、飯はゆッくらで好いよ』と自分は起ち掛けた徳平爺を止めつ、『腹は少とも減つておらんからネ。』

『そんなら最う少し待たッしやりまし。米の飯を焚いて味噌汁を拵エろと云つて置きやしたから手間が取れるだんべエ。はッはッ、米の飯に味噌汁は山家ぢやア御馳走でがんす。』

『其兒供は今でも壯健かネ？』と自分は第一に其消息が聞きたさに追立つやうに尋いた。

『それが貴方まだ種々混雜んだ話がありやすが、手短かに云やァ兒供を抱へて何時までも作藏どんの世話になつてもゐられねエし、乳婆奉公に出たらと勸めたものもありやしたさうですが、兒供が可愛くて里子に出すのは厭だと剛情を張つて、何でも自分の乳で育てなけりやァ父親に合つた時申譯が無エと云ひやして、畢竟は放縱でがんすが、作藏どんが人が好エから無駄飯を喰潰してやした。其内に直ぐ近所の立派な華族樣の中働きに世話をして貰エやした。小兒は作藏どんのお内儀樣に預けて近所だから折々暇を見て乳を飲ませに歸りやした。處か貴方、其お殿樣が娘かお氣に入つて、何でもお妾樣に差上げろといふ事つて、作藏どんはお出入のお邸だから嫌だつていふ事は出來ねエ、娘は一端言換した情夫に濟まねエと剛情を張りやしたさうですが、何しろ十萬石のお家柄でがんすから妾手掛と云つても氏なくて玉の輿とやらだと勸められ、自分も兒供さへ手許で育てる事が出來るならと漸とこさの事で納得しやした。それでも殿樣は仔細の解る方で情夫に棄てられた事も兒供のある事も御承知づくで、夫から貴方、間もなく爰にお別莊か出來て娘は兒供と一緒に暫らく住つてやした……

徳平爺は田舍者の諄々と一つ事を繰返しつ長々しく物語つた。其大略を搔摘むと娘のお賤は殿樣のお氣に入つて月に二度づゝは必ずお通ひになつて警察署は高貴の方を保護する爲め特に此別莊の近くへ駐在所を設け、村人はッィぞ聞かぬ例にお賤を尊んで、奥樣と崇

め奉つた。元來此僻遠の地に別莊を設けたはお賤が父、の德平を安樂に過さうといふ考で殿樣に願つたのであるが、撲實一遍の德平爺は相變らず渡守をして娘の世話になるを承知しなかつた。

『運か不運か解りましねエが、娘は先づ安樂に暮しやした……』

然るにお賤は此上なく世話になつた作藏への義理に迫られて據ろなく殿に身を任したのであるが、一度言換したからは縦令男が不人情に棄てたにしろ此方は飽くまでも義理を立て通さなければ女の道は立たぬと信じ、迚も操を破つて人の妾となつたからは再び男に見ゆる面目なきも、兒供だけは私生兒と輕侮まれぬやう立派に育て上げて生の父に渡したいと思つた。夫まででは身を殺した氣になつて何事も兒供の爲めと辛抱して、何年の後生の父に邂逅ひ首尾よく親子の名乘を濟ましたなら其時は操を破つて他し男に見えた言譯の爲め自害して果てやうといふ覺悟であつた。然るに天は此貞婦に幸ひせず、是程に苦勞して育て上げやうとした兒供は去年の春忽然ヂフテリヤに罹つて敢なく死んで了つた。掌中の玉空しく碎けて母親は殆んど狂氣のやうになつて啼き悲んだが、到頭兒供の葬式を濟まして初七日の夕崖下を流るゝ水に身を投じて兒供の跡を追ふて行つた。

『貴方、私は決して泣きましねエ、』と德平爺は握拳で眼を拭ひつ、『何も彼も前世の約束でがんすから私は決して泣きましねエ。私のやうな這般な譯の解らねエ親爺に么麼して娘のやうな女の道とか人間の道とかを知つてる者が生れたかと、私や人に褒められる度に嬉しくてなんねエ。お殿樣も娘の心根が不便だと仰しやつて別莊を悉皆其まゝ下すつて娘の後世を弔へと有がてエ思召でがんす……』と云つて暫らく途切らしたが忽ち顏を上げて口惜しさうな調子で、『世の中に鬼とも蛇とも喩へやうのねエ奴ツて、此樣な貞實な娘を騙した奴だれい……』と切齒をした。『人間の皮を被つた畜生だ!』

『貴方、娘の寫眞を油繪とかに畫いてやつて下さい。

私、其給を飾つて、本尊樣に觀音樣でも拵へて此別莊に祀り込む考だ。齢を老つて兒供はなし、娯樂は何にもねエから、正直な奴に渡船の株を讓つて私や此別莊に隱居して、頭をクリ〳〵坊主に剃つて切めて娘の後世安樂を弔つてやらうと思ひやす。』

と德平爺は涙に濡んだ眼を瞬たきつ聲を呑んで了つた。

自分は恰も死刑の宣告を受けた罪人のやうに惻然として眼を閉ぎつゝ首を垂れてゐた。

＊　＊　＊　＊　＊

自分は快く諾して一端歸京し、給具其他を準備して近日再び其村に行き、お賤が靈位の前に悉く懺悔しつゝ一生の心血を濺いで其肖像を作る心組である。されど唯だ此一事にて夫としての不信、父としての不慈を償ふべくもあらねば、此顛末を明かにする懺悔文を書きて我が罪惡を報すると共に我と仝じ不德者をして後の過失なからしめんとする。且つ自分は桑門に入つて朝夕お賤及び我が子の靈に仕へて我が罪を償ふと共にお賤母子の後世を營まうといふのである。猶ほ此餘談に就きては後の懺悔記を見よ。（をはり）



家庭



家政學の範圍と婦人の本務

塚本はま子

家政學又は家事といへる名の世に起れるは、僅かに十數年このかたにて、その以前には、女學校の課程にすら、斯かる詞あるを知らず。されば世人が、往々家政學の名をきくも、其の何を敎ふべき學科なるかを疑ふものの多きも、元より怪しむべき限りにはあらじ。されど又、家政學とは經驗と熟練とによりて、普通の婦人が、家庭にて取り賄ふ衣服、食物の世話、下女下男の指揮のみのやうに考へかく熟練の手腕を要すべき事柄なるを、たゞ机上にてのみ敎ふる事、片腹痛き限りなりと、一概におとしむるは、眞に口惜しき次第なれば、學校にまれ、新聞雜誌にまれ、家政學を說くの必用あることわりを述べん。

人は男女の區別なく、朝夕見もし聞きもする事情は、自然に目とまり心動く傾きあるものにて、果ては興味さへそはりて、研究したき心地も起るものなり。かの髮形にのみうき身をやつす少女の、途行く人の髮形に心とまり、遠征する夫の留守もる夫人は、午砲の響にも胸安からずと聞く。されば、建築家が建築物に目をとゞめ、歯科醫が人の口腔のみ氣にかくるも、皆その專門なる業務に、熱心なるあまりならん。己れ等も亦、家政學といふもの學びたるよりこのかた、家庭の事としいへば只ならず目のとまりて、批評すとにはあらねど、斯くはあらまほしきもの、かうはすまじきものといふやうに、衣服、飮食、住居はもとより、苟の人の應接、衞生、育兒の方法に至るまで、させる注意をむくるにはあらねど、おのづから目に映り、耳に聞こゆることゝちせらるれば、たとひ家庭といふ事の、いまだ念頭に浮かばぬ小女なりとも、學校の敎科として、又は新聞雜誌として、常に多少の刺激を與へおきなば、物にふれ事に當りて、おもひいづる材料ともなり、考ふる種ともなるべし。されば、よしや、料理法、洗濯法といふが如き、實驗的

熟練の必要ある事がらなりとも、疊の上の水練に似たる誌上の議論、机上の講義にても、目に觸れ耳にいらぬには增さるべし。おのが實驗に照らすも、一度料理法を學びたる食物は、何時如何なる所にて味ふも、こはかくして料理せるならん、こはかく料理せざりしならんと思はれぬ事もなく、理論にせよ實驗にせよ、わが腦にとゞまれる記憶は、いつまでも去らざるものなれば、ことに家族の待遇に關する心得、婢僕の取扱方、親戚、知己、朋友との交際はいふまでもなく、經濟、看護、育兒、敎育の方法等に至るまで、何れか學べる効果のなきものあるべき。さるを世の酷評家は、家政學を學べる者の、悉く家政に精しからざるを捕へて、「見よかの學校は家政科に重きを置くにあらずや、然るにかの卒業生が家庭の有樣は如何に」と、これまことにいはれなき批評のみ。學校の敎科は、もとより家政的智識の必用を說き、研究の方針を敎へたるに過ぎず、よしや料理の實習あり、洗濯の實驗ありとも、そはたゞ熟練を要すべき方法の手ほどきをなせるに過ぎじ。何ぞよく十年二十年の間、朝夕家庭の主宰として、衣食の爲にのみ奔走せる、老練の夫人と比べ得べき。その劣れるはことはりにて劣らざりせば不思議といふべし。されば、學校の敎育ならずとも、かりそめの雜誌にても、かゝる事述べたる人ありきと、事に當りておもひいづる者あらば、滿足なる結果にて十分目的を果せるならん。ゆゑをもて、誌上の空論とおとしむる人の譏を少時は忍びて聊か家政に關はれる談話を載せんが爲、こゝに家政學の範圍を說くべし。

まづ家政學とは、理科のうちなる生理、化學などを主なる材料とし、修身、作文、習字より數學、物理に至るまでの、あらゆる學科の應用とも見るべきものにて、苟しくも一家を整へて、幸福なる家庭とし、兒女をよく敎育して、立派なる將來の國民を作る爲に要する、總ての智識はみな此のうちにいるべきものなり。されば一家の幸福を保たんが爲には、第一家内平和にして、家長は完全なる内助者を得、舅姑は滿足なる介抱を受け、他の家族も夫々適當の保護、監督を受け、婢僕は悅服して働くを要し、第二家族の健康を全うする爲に、衣食住の智識を備へ、日常の衞生に注意し、病氣の看護、應急の所置に熟する事肝要なるべく、第三　譬へ家内平和にして、家族みな健全なりとも、應分の資產なく、日夜生

計に苦しまば、幸福とはいひ難く、衣食足りて後禮節を知るとさへいへば、かくては個人としての務も、公共に對する義務も、果たし得ざるべければ、常によく經濟に注意し、勤勉にして資産の增加を謀り、節儉にして浪費を避け、經費の豫算を精密にし、負債を恐れ貯蓄をなし、帳簿を整頓し、過去に照らして將來を誡しめ、第四、社交を圓滿に保ち、人道を完うし、一家の幸福を保たんが爲、交際法に熟し、普通の作法を心得、書信贈答の禮儀を知り、啻に親戚、知己、朋友の間のみに止らず、社會の公安を維持し、國家の秩序を亂さゞらんやう心かくべく、第五、兒女の敎育を完全ならしむる爲、胎兒の保護より、分娩前後の攝食を怠らず、生兒の體育はいふまでもなく、德育、智育の總てに渡りて周到なる家庭敎育を施して後、初めて婦人がその職分たる、齊家育兒の二大本務を全うしたるものといふべし。この全躰に關せる智識は、普通敎育を豫備とせる、家政學なる應用學科によりて、初めて學ばしむるを得べし。

かく述べ來たれば、婦人が小學校より、高等女學校に至るまでに修むる總ての普通學科は、齊家、育兒の心得と、方法とを研究するの材料たるに過ぎざれば、詞を換ふれば、女子の普通科は、悉く家政學の豫備科ともいふべし。今試みに表としてこれを示さん。

一家の平和を保つべき智識を養ふには
　修身　作法等
家族の健全をはかるべき智識を養ふには
　生理　衞生　化學　物理　動植物　鑛物　裁縫等
經濟的智識を養ふには
　數學　物理　裁縫等
社交を圓滿に保つべき爲には
　修身　作法　國語　習字　地理　歷史　唱歌　外國語等
育兒及び家庭敎育を完うせんには
　生理　衞生　化學　物理　動植物　鑛物　修身　作法　國語　習字　地理　歷史　數學　圖畫　唱歌　裁縫　手工　外國語等

この他、體操遊戲の如く、體育を主とし、規律、秩序の觀念を養ふ學科は、齊家育兒の任務を帶べる婦人には、殊に必用なるはいふまでもあらざるべし。

されば家政學の範圍は、家を齊へ兒女を敎育する爲に要すべき智識の全躰を含める ものと いふべくして、

獨婦人にのみ必要なるにあらず、男子といへども人類として世に立つ限りは、家を齊へて幸福にし、兒女をよく敎育して、將來の善良なる國民をしたつる義務は免るべくもあらざるなり。たゞ婦人にのみ家政學を說き、家事を講ずる必要あるは、その天性多くは溫和綿密にて、家人の保護監督に適し、衣服飮食の世話はいふも更なり、金錢の出納、來客の應接等に至るまで、一もその長技ならざるはなく、加ふるに男子は多く外に在りて、社會の爲に働く者あり、國家の爲に盡くす者あり、あるは官職を奉じ、學術に盡し、あるは軍務に從ひて遠征し、殖產に熱心にして東西に奔走する等、各々その身をその職に專らにして、家事を顧み、兒女の敎育を司ること能はざるもの多ければ、分業の法に基き、婦人は內を守り、その責任の全躰を負ひて家事を整理し、兒女の敎育に任じ、家長をして內顧の憂ひなく、專ら職務の爲にその心力を注がしむる事、いはゆる本務にして、眞にしかるべき事といふべし。

食物の獻立

溪流女史

主婦が家族の健康を保つべき爲に、衣食住に關する智識を有つべき必要ある事は、前に既に述べぬ。しかして衣食住の何れが、最も人の健康に大なる影響をもつべきかと問はゞ、何れもその食物なる事は疑をいれざるべし。「命は食にあり」といへる俚諺も、よく眞理をうつせる詞にて、譬へ不潔なる衣服をまとひ、不攝生なる住居に起臥すとも、一日二日にして俄かに生命を失ひ、病患を引き起こすには至らざるべきも、食物はこれに反し、一塊の肉、半匕の汁にも、貴き生命を失ひ、健康なる身躰を損ふ例も少なからず、よしやさまでの害とはならざるも、食物不良の爲には、自然に胃を害し、腸を弱め、營養を不足にする事は珍らしからぬ事にて、世に行はるゝ病患の十中の七八は、食品の撰みかたよからざると、食物調理の不完全なるに起因すときく、まことに恐るべき事どもなり。さればまづ、家族の健康を保たしむる責任をもてる主婦は、家庭に盡くす務として、第一に食物の事柄を研究し、三食の獻立をも、十

分叮嚀に考ふべきなり。

まづ獻立をする前に、人躰の營養としては、如何なるものが最も適當なるべきかを考ふる事は、必要ならん。人の身躰は水、蛋白質物、脂肪、炭水化物、鑛物質の五成分にて構成さるゝものなれば、その營養としてとるべき食品中にも、水、蛋白質物、脂肪、炭水化物（含水炭素ともとなへ澱粉、砂糖の如きものをいふ）鑛物質を含むべきを要す。併しながら、この中水は一見しては水分なきが如く思はるゝ米粒、麵麭の如き食物にすら、二割乃至四割以上を含むものなれば况して他の鳥獸魚肉、野菜、根菜の類に至りては、人躰の必要を滿たして餘りあるまで含めるが上、湯茶その他の飲料をも併せて用ふるものなれば、別段に注意して供給する要なく、鑛物質も亦、全く含まざる食品は稀なれば、水と同じく注意する必要を見ざるなり。たゞ蛋白質物、脂肪、炭水化物の類は、いづれの食品中にもあるにあらず、且人の生存生活に重き關係をもてるものなれば、その一をも全く缺かば、殆ど生存する事能はざらん。ことに蛋白質の如きは、たゞ體力體温を保ちて生活の機能を營ましむるのみならず、心意と身躰との活動に伴ひて、消耗する身躰各部の諸機關を補充し、構成する爲に用ひらるゝものなれば、常に特別なる注意を要すべきはいふまでもなく、身躰の生長する小兒の時代、又は病後痩せたる身躰を恢復せしめんとする時期より、姙娠中等は殊に必要を覺ゆるなり。脂肪と炭水化物とは、その成分も似よりて、炭水化物不足の時は、脂肪これが代用をなし、炭水化物の餘れる時は、脂肪に化成して、身躰の各部に蓄へられ、いはゆる肥滿の人となるものなれば、互に相融通するを知るべし。つぎに蛋白質物は如何なる食品に含まるゝか、脂肪はいかに、炭水化物はいづれにとこれを調べおく必要あらん。

蛋白質物は、主に動物性食品、例へば鳥獸、魚介の肉及び牛乳、雞卵等に含まるゝものなり。植物性食品にては、豆類、小麥、大麥、胡麻等の種類、その他これらのものより製出せる豆腐、豆腐皮、味噌、醬油、麩の類及び嫩芽、もやし類には、割合に多量に含まるれども、もとより肉類、雞卵などとは比較すべきにあらず、ことに或學者の如きは、同じ蛋白質物にても、人躰の營養としては、動物性食品に含まれたる物の方、遙かにその價値增さるべしと論ずるものすらあるをもて、その成分のみ

にては定めがたし。

脂肪も亦、動物性食品に多きこと、普く人の知る所なるが、植物中にも胡桃、落花生、胡麻類、豆類などは多きかたならん。

炭水化物(含水炭素)の中、主なるものは澱粉にて、糖類及び糊精はさのみ主要ならずといふ。澱粉を含めるは、植物性食品にかぎり、殊に多く含めるは根菜類中、藷類、百合、慈姑等とす、五穀類、豆類及びそが製造品はこれに次ぐべし。砂糖の類は、甘味ある食物には、大概含まれれども、亦植物性の食品に多く、動物性の食品中には、僅かに乳汁中に乳糖を見出すのみ。

この他食物として用ふべき者のうちにて、最も注意すべきは、繊維を多く含める者なり。繊維は成分よりいへば、炭水化物と等しけれども、他の營養品とは反對にて、全く不消化なる者にて、たゞその消化せざるのみならず、他の食物の消化をさへ妨ぐれば、その量多ければ多きほど、營養の價値を下げ、身體の害となるものなり。以上述べたる所によりて、略必要なる食物の成分も分かり、又これを含める食品も知り得たるべければ、次に獻立の心得を擧げん。

(第一)營養の價値あるものを撰むべし　前に述べたる如く、われ等の身體は食物の良否によりて、强壯ともなり得られ、羸弱にも陷るべきものなれば、日常なるべく、營養分に富める物を撰みて用ふべきなり。かの纎維質多き胡蘿蔔、牛蒡の類のみを食し、たゞ口腹の餓を醫やして生存し得れば足れりとするが如きは、以て身體の活動を活潑にし、氣力を增し、元氣を出し、勝を世界の競爭場裏にまで得んと望む人々の、甘んじて採るべき策にはあらざるべし。聞く車夫、馬丁の如き勞役に從事する輩にありても、よく走るべき必要ある日は、雞卵を啜り牛乳を飲み、或は肉類を食して、その準備をなさゞれば、終日よく勞働に堪ふる事能はざるものなりとぞ。苟の身體の活動すら、猶かゝる關係あるを知らば、心力を煩はし、腦漿を絞る人々にありて、などか食物の良否に關係なからん。かの心痛の爲に痩せ衰ろへ、心神過勞の爲に顏色蒼白となる者の珍しからざるを知らば、いかに心意と身體が密接なる關係あるかは會得するならん。されば激務に堪へ、至難なる研究に從事する人々も、亦よく食物を撰むべきなり。されどこゝに困難なる事は、蛋白質物を多量に含む食品は、多

くは高價なるものに屬し、生計の度の低き者には、十分これを用ふる事を得ざるが如し。されども亦世俗に美食と稱ふる美味芳香の物、必ずしも滋養の價値多きにはあらずして、前に說ける滋養成分だに多ければ、譬へ鰮にても秋刀魚にても、營養上の價値よりすれば、撰む所なかるべし。澱粉質の食品にても、纖維質少くして、營養分多く消化し易きを撰むべし。

(第二)消化の良否を考ふべし　食物は如何に滋養に富み、營養の價値ありとも、その身體を養ふべき量は十分に消化して、消化器の內壁に分附せる血管中に、吸收せられたる部分のみに限るをもて、たとへ滋養分に富める食物にても、消化せざる物は無益に體外に排泄さるの損あるのみならず、徒らに消化器を損ひ、不慮の病氣を引き起こす基となるに過ぎじ。さればよく家人の健否を考へ、特にその消化器の有樣、運動の多少等によりて、撰むべきなり。されども又健全なる者までが、常に消化器を損なはん事を恐るゝの餘り、極めて消化よき食物のみを用ひ慣るれば、却りて消化器の抵抗力を弱め、たま／＼少しの不消化物を食するも、直ちに胃を損なひ、腸をいたむるに至るべき事、猶は他の諸機關が使用せざればせざるほど、弱まるに同じかるべければ、これも亦注意すべき事がらなり。

(第三)食品の配合に注意すべし　各種の食品は、何れもその含める成分に異同多少ありて、或物は蛋白質物に富み、或物は脂肪に、また他のものは澱粉、砂糖等に富めりといふが如く、おの／＼一樣ならざれば、これを適當に混合して、日々の食物とし、身體諸機關の構成補充を完うし、體力體溫を保ちて、生活の機能を活潑ならしめんとするには、前に擧げたる營養成分が、一定の標準に從ひて供給さるゝやう、食品の配合をせざるべからず。されどもこの標準なるものも亦、人の心身の活動の多少により、男女老幼の差別につきて、皆同じからざるものなれば、この研究は最も困難なる事ならん。今次に示す、食品の營養標準量は、さきにわが大學に教授の勞をとられし、博士ケルネル氏が實驗上より、本邦人の食用すべき、蛋白質物、脂肪、炭水化物の量を推定して、算出せられしものなり。

(左表中の一瓦は凡そわが二分六厘六毛六七に當る)

	蛋白質物	脂肪	炭水化物
中等の一男	一〇〇瓦(二七匁弱)	二〇瓦(五匁强)	四八〇瓦(一二八匁)

勞力者	女	七七、(二〇匁强)	一六、(四匁强)	三八四、(一〇二匁)
激働者	男	一二三、(三三匁)	三〇、(八匁)	五〇〇、(一三三匁)
安逸者	男	八五、(二三匁强)	二〇、(五匁强)	三八五、(一〇三匁强)

右の表中、中等の勞力者の欄内に擧げたる如く、男女によりて營養標準の異るべきは、激働者 安逸者とも同じけれども、凡そ推し量り得べきをもて畧したるなり。かく營養標準を示したれども、蛋白質物百グラムの供給をせんには、如何なる食物を如何ほど用ふべきかは、解し難かるべきをもて、次にはおのれが嘗て食品を秤量し、二三の分析表によりて算出せる、獻立表を擧げて參考とせん。尤もこは中等の勞力者を標準とし、中等の生計にあはして、なるべく廉價にして簡單に料理し得べき、惣菜を擧げたるものなれば、價を惜しまず手間をかけなば、一層よき獻立とならん。

(甲)肉類を加へて獻立せる表

	蛋白質物	脂肪	炭水化物	纖維
(朝) 米飯‥(白米四合)	瓦 三七、九二	瓦 〇、六〇	瓦 三八七、二四	瓦 三、二四
澤庵漬‥‥(凡七切ほど)	〇、七〇	〇、〇五	三、〇〇	〇、七五
清汁、小蕪菁(小、三個ほど)	〇、八〇	〇、〇五	一、四〇	〇、三五
煮豆(黑豆)(小皿一杯ほど)	一二、〇九	五、四九	六、六〇	一、一七
(晝) うま煮 九面芋‥(小塊一個)	三、三六	〇、三六	三〇、八四	一、四四
蓮根‥(長さ三寸ほど)	一、七〇	—	三、七〇	〇、五〇
慈姑‥‥(中、六個程)	四、三〇	〇、二〇	二四、四〇	〇、五〇
(晩) すき燒 牛肉‥(五十匁餘)	三九、八〇	一五、四〇	〇、五〇	—
葱‥(白根一本)	〇、七五	〇、〇五	二、一五	〇、五五
すりいも‥(つくね、半個)	二、九〇	〇、一〇	一四、七〇	〇、八〇
營養分合計	一〇六、三二	二二、三〇	四七四、五三	九、三〇

(乙)魚肉を加へて獻立せる表

	蛋白質物	脂肪	炭水化物	纖維
(朝) 米飯‥(白米四合)	瓦 三七、九二	瓦 〇、六〇	瓦 三八七、二四	瓦 三、二四
澤庵漬‥(凡七切)	〇、七〇	〇、〇五	三、〇〇	〇、七五
三河島菜漬‥(凡一莖ほど)	〇、二八	〇、〇二	一、二〇	〇、四四
味噌汁‥‥‥(汁椀二杯)	五、四三	一、七九	三、九九	一、六五
豆腐(汁のみ)(一挺の三分ノ一)	六、〇〇	三、一〇	一、一〇	〇、一〇
馬鈴薯(蒸煮)‥‥(中、三個)	三、七五	〇、二五	一八、〇〇	三、五〇
(晝) けんちん汁 九面芋(小半個)	二、八〇	〇、三〇	二五、七〇	一、二〇
蘿蔔(長さ一寸)	二、一〇	—	一一、一〇	〇、五〇
胡蘿蔔(長一寸)	〇、六五	〇、二〇	三、七〇	〇、五五
油揚(半枚餘)	六、四八	五、六一	〇、一五	〇、〇三
(晩) 鮪のさしみ‥(一人まへ餘)	三四、二〇	九、〇〇	—	—
菠薐草、浸物‥(六株ほど)	二、三〇	〇、三〇	一、七〇	〇、六〇
營養分合計	一〇二、六一	二二、二三	四八六、八八	一二、五六

（丙）鳥獸魚肉を全く加へずして献立せる表

	蛋白質物	脂肪	炭水化物	纖維
米飯……（白米凡四合）	三七、九二（瓦）	〇、六〇（瓦）	三八七、二四（瓦）	三、二四（瓦）
沢庵漬……（凡十四切）	一、四〇	〇、一〇	六、〇〇	一、五〇
三河島菜漬…（凡二茎）	〇、六六	〇、〇九	一、〇五	〇、六六
（朝）味噌汁……（汁椀二杯）	五、四[illegible]	一、七九	三、九九	一、六五
甘藷（汁のみ）（長さ一寸程）	一、四〇	〇、二〇	二八、八〇	二、五〇
煮豆或は納豆（小皿一杯）	二〇、一五	九、一五	一一、〇〇	一、九五
（昼）甘煮　生麩…（ちくわ麩半本）	一三、二〇	〇、二〇	一四、五〇	〇、二〇
蓮根…（長さ二寸ほど）	一、二八	〇、〇八	八、一八	〇、六〇
青芋…（中、五個ほど）	一、〇五	〇、〇八	八、七八	〇、四五
（晩）煮つけ　蘿蔔…（輪切五切）	二、一〇	―	一一、一〇	一、五〇
油揚…（一枚）	八、二一	七、一一	〇、一九	〇、〇四
清汁　豆腐（一挺の三分の二）	六、〇〇	三、一〇	一、一〇	〇、一〇
營養分合計	九八、八〇	二二、五〇	四八一、九三	一四、三九

右の甲乙丙三種の何れも水分と鑛物質の量は分析表中より省けり。

以上三種の献立表につきて、營養量を算出し、これを前に示せる營養標準の表のうち、中等の勞力者なる男子の標準と、比較すれば次の如し。

	蛋白質物	脂肪	炭水化物	纖維
營養標準	一〇〇、〇〇（瓦）	二〇、〇〇（瓦）	四八〇、〇〇（瓦）	―
甲	一〇六、三三	二三、三〇	四七四、九三	九、三〇（瓦）
乙	一〇二、六一	二一、二三	四八六、八八	一二、五六
丙	九八、八〇	二二、五〇	四八一、九三	一五、三九

この表中、最も注意すべきは、蛋白質物の量と、纖維の量なり。甲、乙の二つはさしていふべきものなけれども、丙の如く鳥、獸魚肉を全く用ひずして、殆と標準に近き營養量を得んとすれば、なるべく植物性食物中、纖維少きものを擇めるにも關らず、多量の纖維を含むに至れり。かゝる食物は下等の勞働者に在りては、大害あるまじけれども、中等の勞働者には、消化不良の恐なきにしもあらねばよく注意すべきなり。且右の表は生の食品より、算出せる量を舉げたれば、調理の際には幾分か消耗もすべく、又醬油、砂糖等にて味をつくる時、增加するもあるべければ、標準量との少しの差は、介意するに足らざるべし。

《未完》

姿見かゞみ

水原翠香

夫れ、女子の容貌を作ることは、昔も今も萬國一般にて、我日のもとの古代、五ッ衣に緋の袴の雲上なるより、今の下ざまの、丸髷島田、又、西洋婦人の、束髪に香水を薫らせ、寶石の指輪、光粲然たるも、野蠻國の婦女ゝ、頬に黥するも、其國風の差は有りとも、婦女として、流行を逐ひ、新粧を競ふ情は、共にかはる事なし、天地間何れの處にか、是を放棄して顧ざる國あらむや、士は己を知る者の爲に死し、女は己を愛る者の爲に形つくるといへり、女の容貌を整へずして、人に向ふは、失敬也、されば、日々に、容貌は必す造るべしと雖も、注意周到ならずして、徒に流行に走り、我容貌に適不適も考へず、又は裝飾をのみ事として、日も猶足らず、家事を怠り、家族の衣服の如何をも思はずして、自己一身の美服を飾り、有るが上にも得むと欲するが如きは、共に過不及を免れず、裝飾の事は、啻に身體を飾るに止らず、玄關座敷の飾、床の掛幅、置物、扁額、挿花、敷物、又洋風の椅子、高机、窓掛等より、其他の諸道具、茶、煙草、菓子器の種類、酒飯の器具に至りては、枚擧に遑あらず、是皆主婦たる女子の司る處、其物品の善悪可否、時と所に依りての、適不適を、辨へ知らざるべからず、又席の掃拭ひより、庭園の掃除の仕方に至る迄、たとひ雇人多くありて、自ら手を下すに及ばずとも、主人公は、外の勤に隙なく、不在勝なるものなれば、主婦たる者、常に監督して、注意せざれは、不行屆の事多く、臨時の來客に、赤面する事ある也、然るを、座敷の事は、旦那の持場、我が知る處に非ずとし、掃除は婢僕の受持也と、任せて更に意に介せず、只顧自己の身を飾るをのみ專門とするは、藝娼妓、圍妾輩の心にして、苟も一家の主婦たる價値なき者なり、其外、來客を饗應にも、美食珍味よりも、其器物の取合せを雅にし、麁物番菜にても、其盛り方を綺麗にして出せば、大に、客人の感賞を得る事あり、裝飾の美といへるは爰也、利休居士の極意も、是に外ならず、されば、茶道を學べば、是等の趣味も自然に悟らるゝなり、今是等の事をも網羅して、すべて裝飾にかゝる事ども、次第を逐ていはんとす、先姿見鏡を操返して、化粧の事より始むべし。

身たしなみの事

女は夫に寢貌を見せず、朝は疾く起出て、髪形を繕ひ、衣服を整へ、而て後、夫にまみゆべしといへる敎あり、身分によりて、厨事を爲し、又、兒に乳を哺もする時は、さも爲難きことなれど、成べく注意して、常に心掛け。朝は第一番に起出て、水を汲み、火を焚付けおきて、手早く嗽ぎ、貌手足を洗ひて、身を清淨にし、紅粉は施さずとも、髮の亂を正し、麁服たりとも、着樣を直して、自惰落にせず、帶を正敷結び、いかなる塲合にも、行儀を崩さゞるを以て、女第一の嗜と爲す。然るを、身には流行の綺羅を飾り、頭には瑇瑁金銀の櫛簪を挿して、指には金剛石を輝かせ、一身惣て高金を擲ちて、是見よかしと誇り貌なる人の、座作進退騷々敷、口に卑猥の言語を吐き、高聲に笑ひ狂へるなど、華族紳士の夫人令孃として、有間敷事なるを、いかなればか、近頃は、觀劇塲音樂會等にて、さる夫人令孃の、折々見かけらるゝは、其家庭の程も推量られて、いと淺間しく、其身柄の重きほど、親夫の名譽を損なひ。惹て日本帝國の國辱ともなるをや、中々に、葎の宿に襤褸をまとひながら、温雅貞淑の態度ありて、言語も優なるは、いかなる人の零落せしにかと、奥ゆかしくも、好もしけれ。

○身嗜とは、第一に、身を清潔にし、垢つき汚れぬを專とす、髮化粧にかゝりて、時間を費す事に非ず、又美服を着、時の流行におくれぬ事にもあらず、麁服にても、其着樣を正しくし、汗染み汚れたらば、速に洗ひ、綻ひを早く綴り、寢衣と晝服とを別ち、立働らく時には、必上套と前垂とを着け、事畢らば、速に脫去り、兎に角、怠惰なるべからず、家に浴室あらば、毎日浴すべしと雖も、中以下にては、錢湯へ行なれば、日々は爲難くとも、一週一度は、怠るべからず、浴せざる日には、必宅にて湯をつかひ、白粉薄く施し、髮の亂を搔上げ、衣服を正しく着て後、日々の用事に取かゝるべし、是等の事、惣て幼少より仕習ひて、何事を爲るにも、手敏捷く隙を入れぬ樣に爲べき事肝要也、爲樣に依りて、幾時にも出來、又諄々すれば、一時間餘を費すとも、思ふ儘には成らぬ也、此身拵の遲速は、習慣と心掛の如何に有り、女見十歳に餘らば、其一身の事は、何事も母姉侍婢の手を借らず、すべて自らなさしめて、學校に通ふには、時間に遲れぬ樣、手早く爲るを習慣となさしむれば、嫁して後、大に身の德と成なれば、眞實女兒の爲を思ふ母親

は、爰に反りみて、幼少より、其爲方を敎へて、自らなさしめ、始のうちは手傳ひて、漸々に習はすべし、髪化粧、及び衣服を着る等の事、其功拙はさておき、誰とても白痴に有らざる限りは、爲し得る事なれば、敢て成人を俟て後、學ぶべき程、六ヶ敷事にも非ぬを、如何なればか、世間の母親、女兒を愛する餘り、何一ッなさしめず、嫁期に及ぶ迄も、身支度と云へば、髪を洗ふより、結ふは勿論、白粉を塗り、衣裳の出納、携帯品迄取揃へてやり、背後より被せて、衿襟を揃へ、帶を結び、取散したる脱捨の跡片付迄、侍女の勞を執り、正身は、殆ど、木偶の如くにて在ながら、何某と氣隨我儘をのみ云ふを、母は當然の事の樣に心得てか、其身の多忙を厭はず、女兒の爲に盡すを、母の勤と思へるにや、甚敷僻事也、かくては、慈悲が仇と成り、嫁して後、家事に逐はれ、子を育るに煥なく、容態を取亂して、身嗜する暇なし、よし暇は有りても、今迄何事もせし事なければ、爲方拙くて、意の如くならず、徒勞の時間のみ費して、物事不整頓の儘にて、人前へも出ねばならぬ事となり、他人の誘笑を免れ難きに至る也、翠香も女兒は三人迄もてり、皆幼少より爲習はして、十三四に及びては、晴なる時と雖も、唯多少の注意はせしかども、引搆へて身化粧や、衣裳着の世話をやく事はなかりき、或時、兩國の井生村樓にて琴のさらへあり、師匠への義理に出席させしが、中程にて、衣服を更る時、例の事なれば、別に世話もせず、傍にて知人と談話しつゝ見て在りし、折しも、他の弟子傍輩なる女兒の、我兒よりは三ッ四ッも年上なるが、共に着更んとて來れる處に、折悪くも、其母親何か用事有りとて、下より呼ばれて、下り行たり、女兒は既に帶を解き、衣服を脱ぎかけて有り、やゝしばし待てども、母來たらず、母在らねば、着更られずとて、待佗しさに、他人の中をも憚からず、帶解ひろげの儘にて、幾度か揩梯段の口に至り、手摺に依りて下を覗き、しきりに母を呼立たり其不躰裁云ふべからず、やう〳〵の事に、母の歸り來るを見るより、其遲かりしを、腹立罵れは、母も又、人に引留られて要談ありしを、暫し俟たりとて、何かわりと叱り、互ひに口小事をいひ〳〵着更させたり、是を眼前に見たる人々、我女兒の音をもさせず、暫時の間に、獨り着更たるを、殊の外に賞せられたりしかど、是何も我女兒が、他に勝れて賢きには非ず、只幼少より習慣の事なるのみ、誰にても、然育てさへすれば、然るべし、敢て賞

するにも、誇るにも足る事ならぬをや。

髪の事

昔より、髪形と稱して、第一に人の目につくは、髪也、されば、女は髪のめでたからむこそ、人のめにつくべけれと、徒然艸にもいへり、其濃き、薄き、生際のよしあし等は、天性なれば、是非なけれども、造り方にて、其幾分を補ふべし、先額際の薄く、蜂谷の拔上りたるは、見よき物に非ざれば、出來得る限は、作らざるべからず、有功の髪生藥も、なきにあらねば、試みるべし、然れども、白晝に、生際に藥など塗たるは、見苦しければ、毎夜寐る時に用ゐて、朝手水つかふ時に、洗ひ落すべし、扨髪の結やう、昔も今も種々沿革あり、古代の大すべらかしより、中世の風はさておき、徳川氏時代の、奥女中が結たる椎茸髱は、禁裡官女の押へ髱をまねびて、少しく風を替たる物なり、いづれも、其鬢を大きく出して、鬢裏をみせたる結方なれば、顔の白粉に榮えて、一段よく見ゆる也、然るに、下ざまにては、審美など云ふ點に、注意する人稀なれば、殊に東京は、江戸の昔より、何事も轉遷早くして、女の髪の如きも、我十二三の頃、江戸の錦繪、艸草紙などにてみるに、殊の外に、根を高く取りて、少し俯きなば、髷は前にころび落ぬべしと、思はるゝ程なりき、夫より漸々と下りて、果は又、首筋元に根を取りて、髷は頭上へ這登る如き形勢と成しかと思ふうちに、又いつとなく上り來る、一高一低、四五年宛にして、我一代にも、幾轉變せしか數ふべからず、世の流行は、兎まれ角まれ、我拘はる處に非ず、美と云ふ點より許せんには、髪の結方は、其人各々の容貌に似合やうにするに有り、假令流行なればとて、其貌に不合格なる時は、天稟の容色を、二三等も下りて見ゆる事ある也、其大概をいはゞ。

○背の高き人は、根を低く取りて、髷は頭に密着たるいてう返し、潰し島田等、丸髷ならは高くすべからず

○面長細おもての人は、鬢をゆたかに出して、是も根の低き方よしとす。

○平面にて、頬のふくれたる人は、鬢を餘り出すべからず、されど又、引詰にすれば、頬いよく\脹てみゆる物なれば、其よき程を考ふべき也。

○大貌の人、貌をちいさく見せんとて、髪をちいさく結へば、益々其面の大きさ、めに立つ物なり、是は反對に思ひ切りて、髪を大きく結ひて、假髪の如くすれば、却

りて貌ちいさくみゆる物なり、演劇舞踏などに、大人が童子に扮には、其身より餘る程、大きく衣裳を仕立て、是を肩上し、腰上して、全く小兒に大なる衣服を、縫上して着せたる、恰合釣合を取るが故に、大人も童子の如く見ゆる也、是と同一理なるを知るべし。

○脊の低き人は高き人の反對に、髮も根を高くし、丸髷も高く、島田も高曲にすべき也。

○額の凸たる人は、前髮を大きく取りて、成べく前へ照して結へば、其幾分を見消すべし。

○額の生際ごく、富士形に詰りたるは、よき物なれど餘りに狹小にて、俗に猫額と云なるも、又過て及ばざるに同じ、薄毛あらば少しく剃上げて、前髮を出さぬ樣に、うしろへ引詰てゆふべし。

○前髮の薄きは、近ころ新發明の假髮あり、毛筋立にて横より割りて、中にはさみて結ふべし、又前髮の、横に斜曲癖付たるは、湯にて能くなほしたるのち、結ひたる中へ、毛髱をよき程の大さに丸めて、横より差入れ筋立にて、見えぬ樣にときつけおけば、惡癖なほるなり。

○前髮の取やうも、又、髮ノ根の上り下りの如く、我若かりし頃は、丸くとるが多かりしが、其後次第に細長くなりて、果には、髮の薄き人などは、恰も蜻トンボウの留れるかと、思ふばかりに成りぬるが、又漸々に大きくなり、此四五年中は、額より逆鮮に取る事となりぬ、髮の濃き人は、さして搆ひもなき樣なれど、薄少なき人は、前頭の大部分を、前髮にのみ取られて、鬢いよ〳〵薄く透て笑止也。

○近頃は、少女の前髮を、小鬢より平めに大きく取事はやり出しぬ、是は堂上方の風の移りたるにて、兒髷よりおこりて、他の髷にも及びたるなり、此前髮の取方は、誰にても、貌をよくみする物にて、かの▽よりは、餘程よろし、然れども、蟀谷の處ノ抜上りたる生涯は、小鬢より取れば、毛の立つ故に、彌薄くみゆれば、極細く薄く目立ぬ程に、毛筋を丞がきて繕ふべき也、（毛筋の出方秘傳あり附な作る處に云へし）

○兒髷は、近頃の流行なれど、其兒の人柄によりて、大に適不適ある髮にて、誰でもとはゆかぬなり、元來此髷は、禁裡の童男の御髮なりしを、後世には童女にも結はせ給ふより、次第に押廣がりて、今は下ざまの女兒も我劣らじと結ふ事となれり、然れど、雲上高尙の造り方なれば、是に結ふには、第一に、品位ある貌かたちな

らざるべからず、然るに、卑しき相貌に、見髷を結ひ、剰へ、身には双子木綿の衣服に、唐縮緬の細き帯を、尻の上にて貝の口に結びて、卑猥なる言語なるなど、頭ばかり貴人の假髪を被りたるが如く、宵似合ぬのみならず、其卑貌、憎らしくさへ見ゆるぞかし、見髷に結ぶ程ならば、衣服も夫相應に、衿を白にし、袴をはかせ、友染ちりめんの被風などきせて、優美に扮装たせ、詞づかひも態度も、全くの淑女貴人とみゆる様に有りたきものなり。

○洗髪に、西洋櫛を挿て、さばきとし、又は、前髪計を結ひたるも有り、或は首筋元一ッ結ひて下髪としたる、此造りは、十二三歳迄の、髪も未長からぬは、隨分に愛らしくよき物なれど、成人して、髪長く延ての後は、宜からず、髪の末亂れ易く、おのづから摺切などして、髪を損ずればなり、品のよき束髪は結ふべきなり。

○束髪の我國に流行し始めし頃は、根一ッ結ひて、くる〲と捻り、縄を巻たる如くして、上に糸網をかけて留たる物にて、趣味も何もなき、不躰裁なる物なりしが、其後幾變遷して、今は前髪を、耳の上の處より分けて、ゆたかに結ひ、額上へ、日本流に出し、後部計を捻りて海老の尾の如く、左右へ輪を出して、京阪地方にて、梳髪の銀杏髷と稱するものゝ如し、是は和洋折衷にて、前を別にするの故に、根も自然と高くならず、前髪と髷とのつり合よければ、貌移りもよくて甚よろし、物事何にても其好處を取り、惡處を去りて用ゐるならば、眞の佳なる物と成る也、誰が考案かは知らねど、何に付けても斯こそあらまほしけれ。

○前にも記せるが如く、世上の流行は、年を逐ひて轉々すれど、各々生れ付の貌形は轉じがたし、長貌をよき程に縮むる事もならず、平面を丸くも爲し得べからず、されば、先鏡の影と相談して、我貌に相應せる造り方に爲べき事を忘るべからず。

○婦女の髪形を造る事、概していへば、東京人は甚麁放にして、藝娼妓輩を除く外は、大かた拙也、かくいはゞ、下町邊の婦人達、腹立たまふべけれど、世間を廣く見て知る人ぞ知る、惡口に非ざる事を、唯流行を逐ひて、人に遅れじと我勝に爭ひて、其事の是非可不可を分別する程の、見識あるは稀なり、髪は髪結に結はすれば、其日は美なれども、是を能く繕ひて、保つ法を知らず、翌日より損じて、三日も經ば、鬢亂れ、髷ほつるゝも、平

然として、其儘大道を行て、恥とせず、却て、鬢のほつれは、意氣とか、わだとか稱して、誇る人さへあり、色を專らとする、新柳あたりの美人ならば、或は然らむ、世間普通の容貌ならば、亂さず整然たるこそよけれ、凡世に優れたる美貌は、いか樣の事をしても、夫が却りてよくみゆるもの也、それよしとて、疑似するは、西施が顰に倣ふとて、心ある人の嗤ふ事也、髪ばかりにあらず、容態も、裏店の下等社會はおいて論ぜず、今日中等の生活する家の妻女兒にして、猶家にては常に卷帶し、親夫の前をも憚らず、しだらなき姿して、長火鉢の前に、煙艸を吹くなど、すべて遊所者の爲る事を、例の粹とか、嬌態とか思ふなるべし、京坂にては、髪粧飾をば、女子第一の嗜とする習慣なるが故に、幼少より、此に心を盡す事大方ならず、妻君令孃は勿論、下婢迄も鏡臺を持たざるはなく、毎朝の課業として、湯をつかひ、鏡臺に向ひて、化粧し、髪を繕はざる者なし、老女と雖も猶然り、かるが故に、粧飾の事は、東に比して西の方優りたり、然る替に又、此一件に、時間を消費する事甚敷惡弊あり、たとへば、下婢に何方へかの使を命ずるに、答辭とゝもに飛出すなどは思ひもよらず、先部屋に入りて、髪を撫つけ、ろくにもあらぬ貌に、眉刷を採りて、鼻の頭白く叩き付け、衣服を着直して、帶を結ぶにも鏡を見て、前後を幾度も撫廻し、又解きては結び改など、自己が心の澄むまで、とやかくやと、念に念を入れたる上ならでは容易に門外へ出る事なし、東京人より之をみれば、只呆れる外あらず、京坂の下女は、決して急用の間に合はざる也、下女猶然り、况や、少し氣隨なる妻君女兒の他所行は、中々の大騷にて、殆家内を引搔亂して、半日を費して漸々に遝出る也、京坂の女子とて、百人が百人皆かゝるには非ず、東京の婦女も又、悉く裝飾拙也と云には非ねど、押ならして公平に評する時は、かやうの婦人多しと申まで也、されば、東京の婦女には、今少し注意の周到を希望し、京坂の女子には、淡泊に手早くして貴重の時間を消費せざらむを勸告する所也、（未完）

家庭と音樂

三輪田眞佐子

家庭は、道德の源なると同時に、亦人生快樂の源なるべ

きものです、故に、一方に庭訓を以て、人道を實踐するをつとめ、他方に、高尚有益なる悞樂を家庭に於て作り以て外事に、奔走して、疲れて歸る良人を慰め、傍ら子孫をして有害なる、酒色などの俗樂に念を絶つやう、勤めねばなりませぬ。

そも／＼、玆に、おのれの悞樂と云ふは、精神上の高潔なる、道德的の快樂を指し、決して肉躰上の野卑なる不德的の快樂を、指すのではありませぬ、蓋し、精神的の快樂には、種々あるも最も普く男女を問はず、老若を撰ばず、將た、貴賤を通じて、共に樂むを、得るものは、音樂である、されば音樂と、家庭とは、この、關係より離るべからざるものでありませう。

音樂とは日本にも支那にも、夙に存する、人生に、高尚なる快樂を、與ふる道である、英語にては、これを、（ミュージック）と云ひて、各國に盛に行はれます、思ふに、これは、偶然ではありますまい、されど、音樂は恰も利器のごときもので、これを以て、家庭を亂さしめ、甚しきは國家をも、亡ぼさしむるのであります、故に、音樂を家庭風致の具となし、國家隆盛の器と、なさんには、これを、研究せねばなりませぬ。

孔夫子の、（樂に成る）と、いはれたるは、善良なる音樂は欠くべからざるを示したることであります、之に反して、墨子の、（非樂の論）は、不良の音樂は、人生を毒するを、述べたるものであります、西洋にも、希臘のころは、音樂を道德の一部分と、見たるやうです、されど、近來の、（スペンサー）等は、敎育上、音樂に重を、置かぬやう、思はれます、これは、亦、理由がありませう。

されば、家庭に於て、音樂を利用する上に於て、注意せねばならぬものがあります、それは、至誠の心であります、元來音の震動は物理的のものである、これを、人々の心に、感受するは審美の高尚なる情であります、實に至誠の心なくして音樂を弄するは、僞戯の心となりて道德ではありませぬ、おのれ、嘗て、音樂學校に於て、講話せしものを、文章に綴り、音樂新誌に掲げたるものがあります、今その中の一節を玆に出だす。

假りに、音樂家にして、至誠なく、而して、操行正しからず、遂に世の惡嫌する所となる者あらんか、如何に其の技巧みに、其の音、精しきも、焉ぞ、人を感ぜしむるに足らんや、これに反して、至誠の德具はらんか、萬有感應の理に由て山岳も爲に哭し、海波も爲に穩かなら

ん、昔希臘の樂人「オーヒユース」が樂を、奏せば、草木、岩石、及び、河水までも、爲に動きしとかや、吁、無情の物質、尙、且つ、然り、况んや、有情靈智の人をや、孔子齊に在して、樂を聞き、三月肉の味を知らざる如き、佐野の城主天德寺が、琵琶法師の樂を聞き、泫然膝を濕せし、如きは音樂の本面目なり。

音樂は、斯くの如き、力を有するを以て、洋の東西、時の古今を問はず、少しく志ある者は、必ず、之を愛して、嗜まざるはなし、之を嗜めば、取りも直さず、宇內、至誠に感化せられ、自ら、純白の心となり、高尙の行となり、雅致の風となる、左れば、音樂は文明の花にして、一國の命運と、消長を共にするものなり、孝經に曰く風を移し、俗を易ふるは、樂より善きはなしと、信に然るなり、世、尙ほ、音樂を以て、單に逸樂的のものと思ひ、殆と、無用視するものあるは、其の眞髓を知らざればなり、若し夫れ音樂、毫も其本躰を誤る事なくんば、寒燥無味の世をして、快味を與へ、汚がれたる人心を、潔め、泣くものを慰め、怒れるものを、沈め、力をも入れずして武き丈夫の心をも、和げ、目に見えぬ、鬼神をも、憐れと思はしめ、貴賤の別なく、長少の隔てなく、共に笑て、天を樂み、人間の生存は、斯くこそあれと、謂ふべき限域に進歩するを得ん、亦快ならずや。

次に、撰ぶべきは、樂器である、我が國には、中古に於て箏、琴、及び琵琶などが、行はれました、勿論これは、悲曲にて、亡國の音を、負ひて居ります、されど其の俗を離れたる點は、頗る高尙なるものと、思はれます然るところ、寬文年間に、琉球より、彼の三味線が、傳りまして一時、總て他の音樂を壓倒しました、更に、これが、至誠なき、俳藝の輩に、專用せられまして、いよ〳〵、淫聲となりました、故に、今日は固くこれを、家庭より、排斥して、箏及び（ウオルガン）（ピアノ）等を以て、家庭の音樂とせねばなりませぬ。

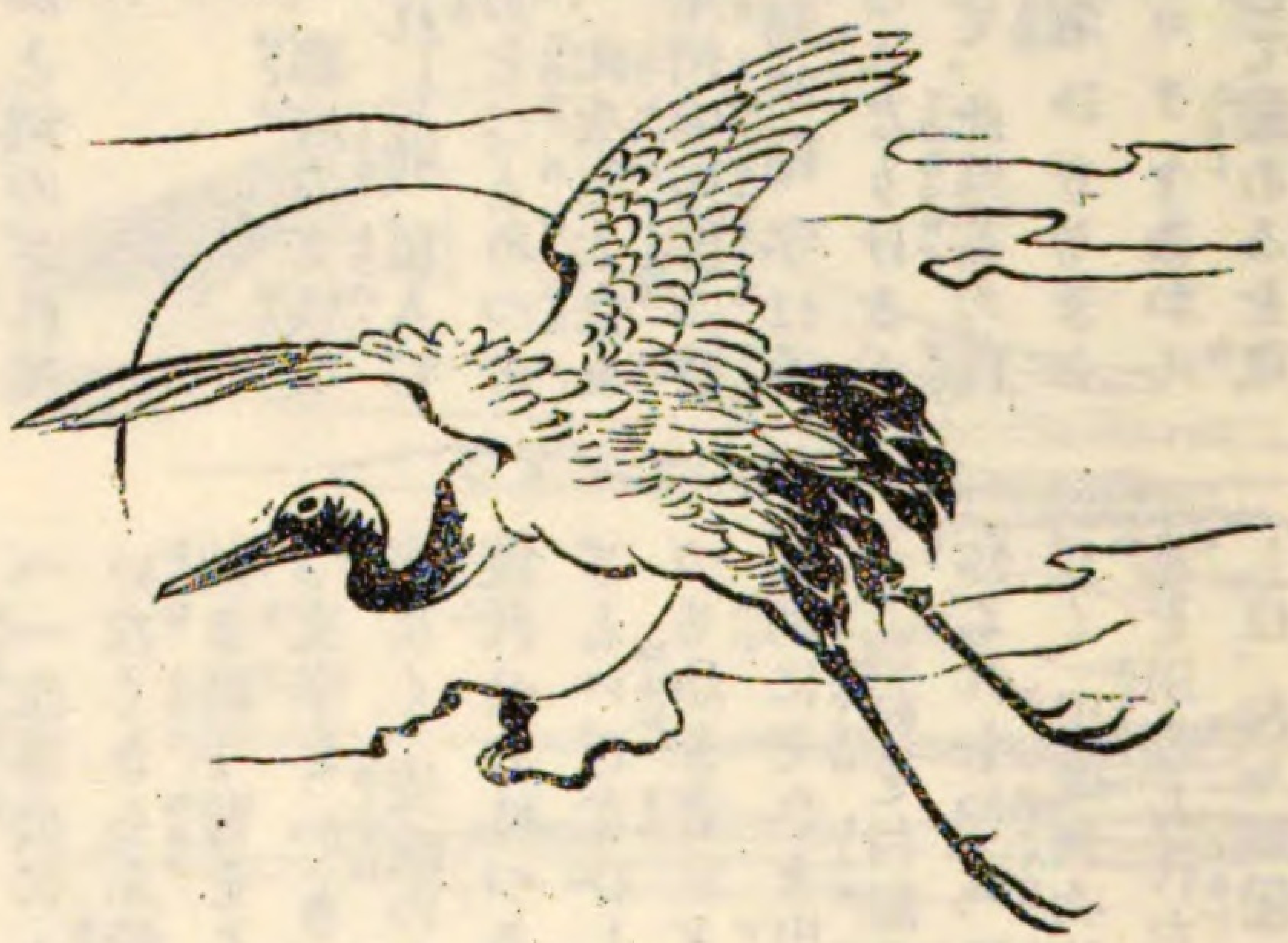
おのれは、家庭に於ては、孜々、汲々として勤勉する、家風を養ふ必要あると、同時に、亦、和氣靄然たる、餘裕あるを望みます、彼の明月、金波を流し、淸風、綠葉に渡る趣味が、人生に必要なるがごとく、家庭に韻致を與へ、雅味を加ふるものは、音樂が、なくては、理想の家庭が、實現せられますまい。

雜録

夜半の埋火

花園女史

昔をしのぶ老の物かたりは、若人の耳かたふけて聞かまほしき業なりかしとは、人にもすゝめ聞えながら、われは物にまぎれて打過ぎつる程に、年のまふけもとゝのひたり、いざやとつどふ埋火の邊りには、思ひおこす事どもゝ多きを、我父のふとかたり出たまふ節々に、つね思へるを思ひ出でゝ、去ば、生立たまひしより今日迄の見聞を、いかで、かいつまみかたり出たまはらばや、とても、今日より年たちし二日三日、遊びくらすべきなるを、夜がたりに延行て、しろうなる



火桶の灰の、かいつゝりても見まほしき、といへば、父は頭を左右にして、否、事のつひでにふといひ出むは、其時たゞ、思ひ出しまゝなり、いかで、我生涯の七十は、古來稀なりとかいひて、人生のながき部分をしめぬとも、本來、青雲にのりて天翔らむ事を、こひねがへるとにもあらず、蹉跎多くして、見等にかたり聞けんも、脊に汗をおぼゆる事ぞ多き、さるあらたまりたる事はいはずもがな、おきねおきねと逃目をつかひたまふを、しひてをしすゑて、それもよく心得て侍り、さればこそ、見聞せさせ給ひし事をとは申せ、たゞ田邊の家のはじめより、今にいたれるを聞かしたまへ、我見等の物心つきて、とひ聞かむに、よくも知らざらんには、よし其家の事ならずとも、術なき事や多からむ、いかで〳〵とゆるすべきもあらぬけしきに、苦笑したまひつゝ、なにとかいひ〳〵て、はては高座に据ゑたりけりな、いでや、公の事には、我外交談をよみ見つべし、まして、母

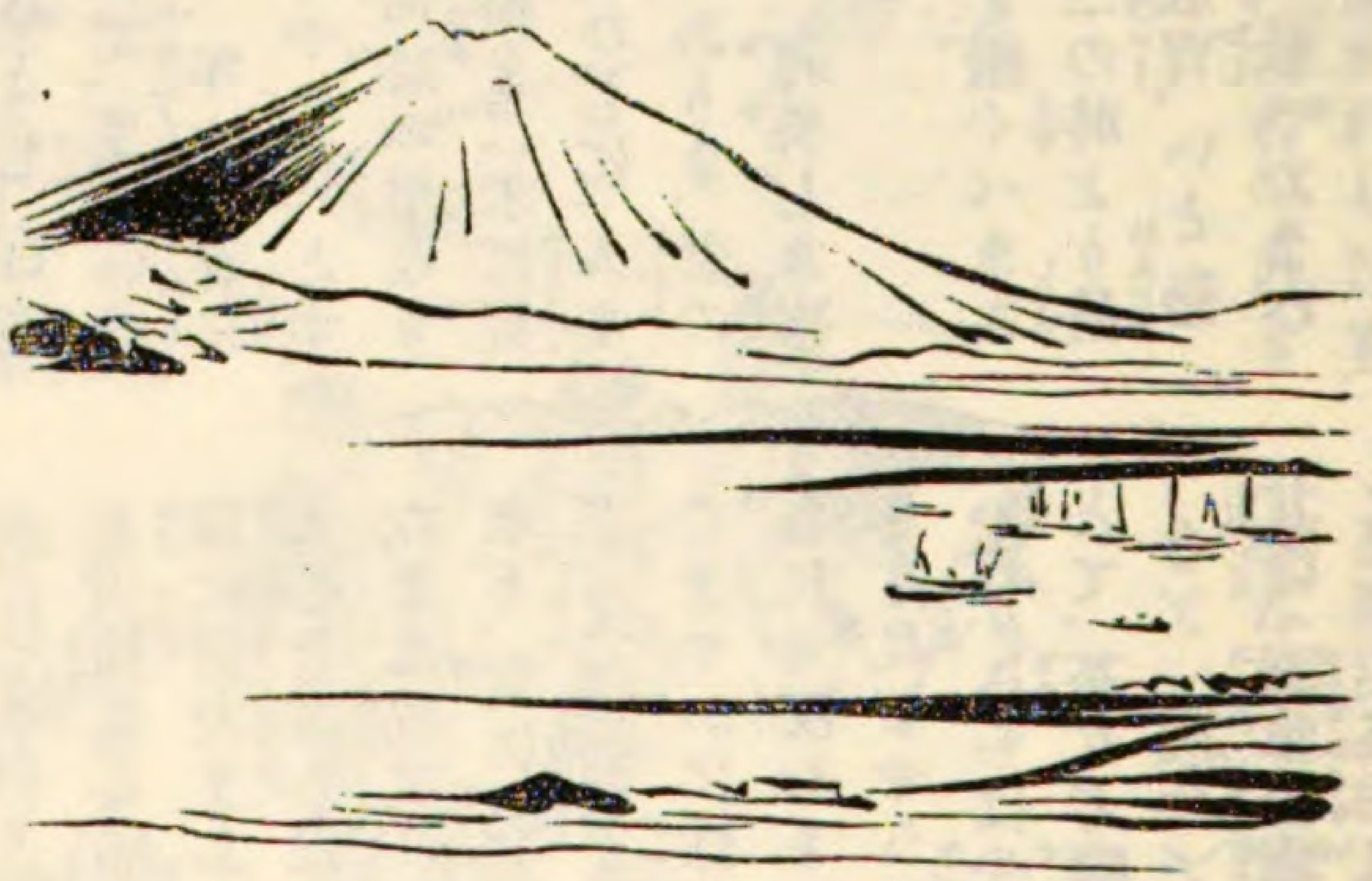
のうとき事なれば、これらはかたらずもがな、年波のよせてはかへすより〳〵に、みるめも多きもしほ草の一種二種を、かいあつめ味ひなば、をかしきふしの數の子も見出ざらんや、これも新年の一興かと例のざれてぞ腰をすゝめたまひぬ。

（二）　鋤かれし小田

遠祖はいひ傳へられたる事もなしとぞ、幕府の支族なる越後家に仕へつるが、主家封を沒せられし時、浪人して江戸に出て、與力の株を買ひ、代々與力をつとめつる其初代、名を次郎太夫といふ人ありけり、此次郎太夫より下りて五代目、田邊克忠の嗣として、尾州海西郡の醫士、村瀨厚英の一子を迎へつ、それぞ村瀨誨輔字は季德、號を石庵とて、多少は人に知られつる人なりける。村瀨家は、尾張三河伊勢に名醫としられて、此厚英の代には、ことに輿をもて遠き所より迎ふる者ひきもきらず、行きて病を診し、不治なりと見れば、コリヤあかんナアとて藥をあたへずして去る、はたして驗あるを見て、あかん樣と人よぶ、それよりおのづからの家號となりて安楠山といひならされつ。田邊家に一男三女あり、長男は夭折し、長女を楠子とよぶ、御本丸溶姬御付御吳服間に仕へ、一生嫁すことなくして終る、次女熊子、同じ與力の息子を養子としつるに、三ッ栗の中はなれ〳〵に成もてゆきて、遂に實家へかへしつる後、某家へ一生奉公にとて仕へぬ、此人性剛にして負くる事をいたくきらふ餘りに、何事も人の言葉を用ゐぬ癖あり、幼き時手習をこゝろみさすれば、い文字を左に曲げて、ヾ文字をかき、敎を容れず、年たけて後も、此癖を直す事なく、安政の大地震に、其仕へし邸の屋棟燒落ちて、燒死せられつるも、例の强情に、人の逃出る時、いざいざといざなひしを、聞かせたまはざりしに因れりと、いつも幼き者などには、此上をいひ出て、强情のよからぬ例にぞひき出づるなる、されば三女鎭子に家をゆづり、誨輔を村瀨家よりむかへしに、此人とくに名を世に知られしかば、著書には村瀨を署しぬ、名は新次郎と名づく、田邊新次郎太夫の意をとれるなり、著書の中、尤意を用ゐられたるは、淸名家小傳なれども、世に問はれしは、たゞ四冊のみ、其料として集められたる、今なほ家に藏したるなり、編輯せられしは續八大家文讀本、本朝六家文粹、（內宋潛溪は未脫稿）淸には朱竹垞文粹あり、猶魏叔子、侯雪苑など、稿を脫せず、其儘家にひめお

けり、畫も少しは嗜なまれつ、友とし親しかりしは、佐久間象山、渡邊華山、海保漁村、東條琴臺、羽倉管堂、賴山陽、などあり、山陽よりは外史の事につきて、評を乞ひ、敎をもうけつる書狀數十通今も藏しあるなり、新次郎に二男あり、長男を孫次郎太夫の意にて孫次郎と名づく、次を定輔といふ、これ太一の幼名なり。

家は下谷西町にあり、土藏附八間、地所三百五十坪、組屋敷の區なり、大番與力より、御留守與力に榮轉せられしより、組屋敷の事なれば、其地所も家居も、代りなる人にわたし、これまで從僕の部屋として門側にありし家に、いさゝか建增してこゝに暫時すみつきぬ、後、昌平學校の敎授方出役となり、又晩年、富士見御寶藏番となられつ、富士見御寶藏番とは、御天守番と並びて、拜謁以下の士人の榮職にして、幕府の晴れの式禮ある時は、長上下にて出頭し、酒饌をも賜はりて、萬拜謁以上の待遇あり、當時御褒美場所としてほまれと人のしつる役なりし。



長男孫次郎は、家の業なる漢學をきらひて、砲術を好み、西洋砲術を下曾根金三郎といふ師につき習ひて、講武所開かるゝに當り、敎授方出役となる、大御番花井氏の姪女を娶り一子あり、長男を朔郎といひ、今の京都大學敎授工學博士田邊朔郎、長女を鋭子といひ、今の東宮御造營杖監片山東熊の配なり。

かくして家の有樣は百人餘りの弟子あり、上よりたまはる扶持もありながら、昔よりの貧は經濟の巧ならぬにいよいよさしまさりて、いつも不足を生ずるより、明朝（書躰）の判下を一枚百五十文づゝにて、下谷中町の書肆岡村屋へ賣り内職とせられつ、前面より見れば剃立たるかしらの如く、後方の頂の方に小さなる髷結ひて、ふく／＼とにこやかなるに物たりぬさまは見えぬながら、いつも／＼この板下をかき

つとめられたるが、今も日につきたりと、昔しる人々はいひつたふ。

百人の弟子とこそいへ、盆暮の報酬は、小菊一〆、半紙一束、又は目錄ならんには、二朱位をさだめとし、百疋二百疋などいふは、百に對して一の割合にて、まづいつも一人二人位なれば、何の補にも成兼ねて、年々の暮には、餅つく代にさしつかへ、とやせむ、かくやせむ、と主婦なる鎮子は心をなやめたまひしなり、何時の事なりけむ、殆困じつる時、ふと商人の、門の柳を二朱に賣りたまはすや、繭玉にせむ料にすなると乞ひしに、人々よろこびて、こを賣り漸餅の代を得し事ありき、昔の事は、今の目より見ば、何かと窮屈にして、可笑しき事も多きぞかし。

次男なるわれは、先文字を好みて、家の業を繼ぐべきさまなるより、親のおぼえもあしからず、十三の時より昌平學校へ通學す、これ迄の事、すべて母の敎育、いと懇なりき、漢籍の句讀、手習、みな母の心つけ、敎へたまひしなり。

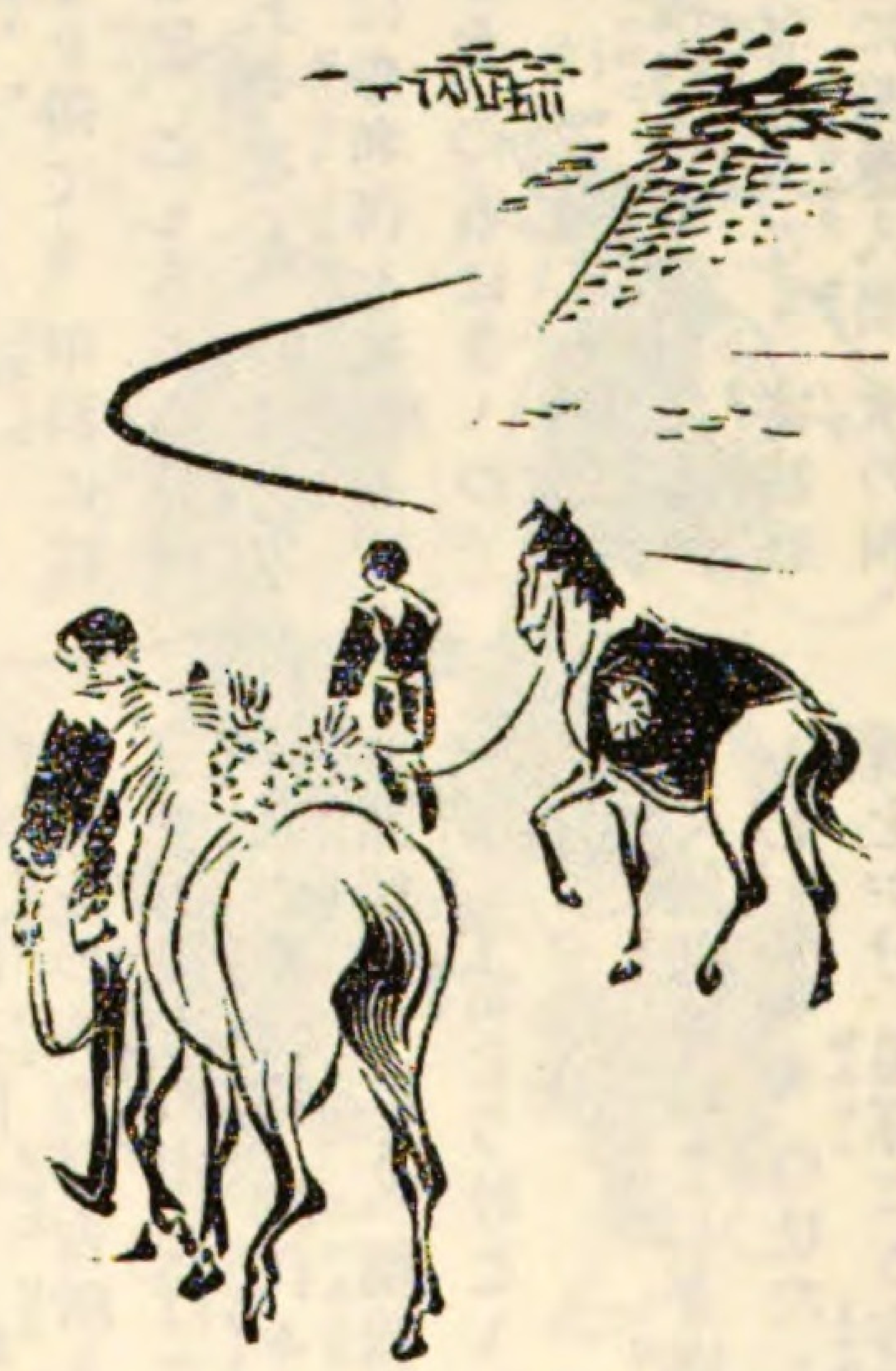
母も又、ふくよかに肥へてなつかしき人さまなり、人を慈しみたまふ心深く、幼き者を愛して、途上にても袂より菓子などとり出て、餘念なく子供等の遊ぶさまを見たまふを、老て後は樂しとしたまひき、されば召使ひし者などの、徳になつきて、今も生殘れる老人老女などの、しば〳〵此上をいひ出でゝ人にも敎へ艸とぞすなる。姉なる楠子の御殿より下り隱居所に主婦よりも勢猛に居たまふにも、いとよくつかへて、あなたこなた一人心を盡したまへりき、かく他人にも、慈愛の心をよせたまふ程なれば、我子はことにいつくしみたまひしなり、實に見おほし立んは、もとより兩親の責とはいへど、父の物事おほらにして外に出勝なるに比へて、母のこまやかに膝下におきて心をつくるは、いかに兒等の身にも泌むらむ、されはこそ、よき母のもとにはよき子をも見るやうなれ、女のつとめもまたかたきものなるかな、さらば先、こゝにて一やすみして、又かたり聞むとて、茶など啜りたまふめり。

(二)　生たつ早苗

其頃、三味線堀へ百五十坪の邸を拜領す、こゝにうつりてより、塾生など置く、月謝三分のさだめなり、五人置く時は家の都合よしなど、人のいふを聞つる事あり。十八の時、昌平黌學問吟味の時、甲科及第す、同時に

皮弟せし人廿七人ありき、甲科には永井岩之丞、(後主水正介堂)妻木傳藏、(賴矩田宮といふ)宮本久平(小一の親)田邊太一の四人なり、學問吟味の開かれしは寛政の頃にて、一番初めに太田直次郎(蜀山)の名のありしをおぼゆ。

學問吟味の豫ましをかたらんに、なほこちたけれど今の學校などの試驗よりも科こそ少なけれ、面倒なる掟おほかりき、定信公のさだめたまひしものにて、五年目〳〵に行はる、我受けつるは嘉永戊申の年なりき、こゝろみに出し者、百四五十人の中、甲科四人をはじめ、乙科廿三人、褒詞數十人なりし、こゝろみの場を五場に分ち、初場は小學内篇外篇の内二題づゝ辨がきにす、(辨書とは章意題に出し一章の意を畧して解しかく意)次を字訓、(題中にある字を訓釋す)三を解義(本文を假名でかく)四を餘論、(題につきての自分の意見)二場は四書各二題づゝ・三場を五經、各二題づゝ、四場を歷史、十七史、左傳、國語、通鑑綱目を加へたものにて、一を和解といふ、題の本文を和らげてかくなり、一を問目といふ、三國で孔明の他の人物はたれなりや、といふ樣なる意問に答ふるをいふなり、これも一史につきて一題づゝあり、五場は文章論策、各一題、漢文でかく、こゝろみにつくものは、當日早朝に學問所に出づ、平服なり、平服とは、今の通常禮服、上下なり、目見以上は、次上下、袴肩衣、上下以下は、麻上下にて、各々こゝろみにつく時、參考書持參して出頭す、其書物は一度試場の役人に渡す、此書物を學問所教授方出役、御目付方立合の上あらたむ、子細なきを見て、本人に引わたす、燈はなくして、日光を以て書終るさだめなれど、遲れし人は、迎への者の提灯にてかくもあり、おと片付け未だ爲し終らずなどいひたてゝ、かき終るなり、かき終りしは、順を追ひて、試場の役人に渡す、役人は學問所勤番なり、うけとれるを取まとめて、教授方へ



渡す、教授方は纒めて儒者の列坐の所へ出て讀む、儒者これを聞て許をなす、許は上上から下下まであり、およそ九等なり、初場の小學の二題とも、下下なるはあとはよみさしてしまふなり、下の中からかぞへて下の中なるを一寸とす、尺をつみて二尺以上になれるを、甲科とす、二尺以上は乙科なり、文章科は此うちにいれず、されど文章科に出ぬものは、二尺以上を得ても、甲科にはなりがたしとぞきく、かくして五日間、こゝろみの日はあれども、毎日ならず、日を隔てゝあるなり、時は大方三月頃にさだまれるごとし、第一は參考書を持參せずとて、役人など賞しあへりしといふを、のちにきゝつ。

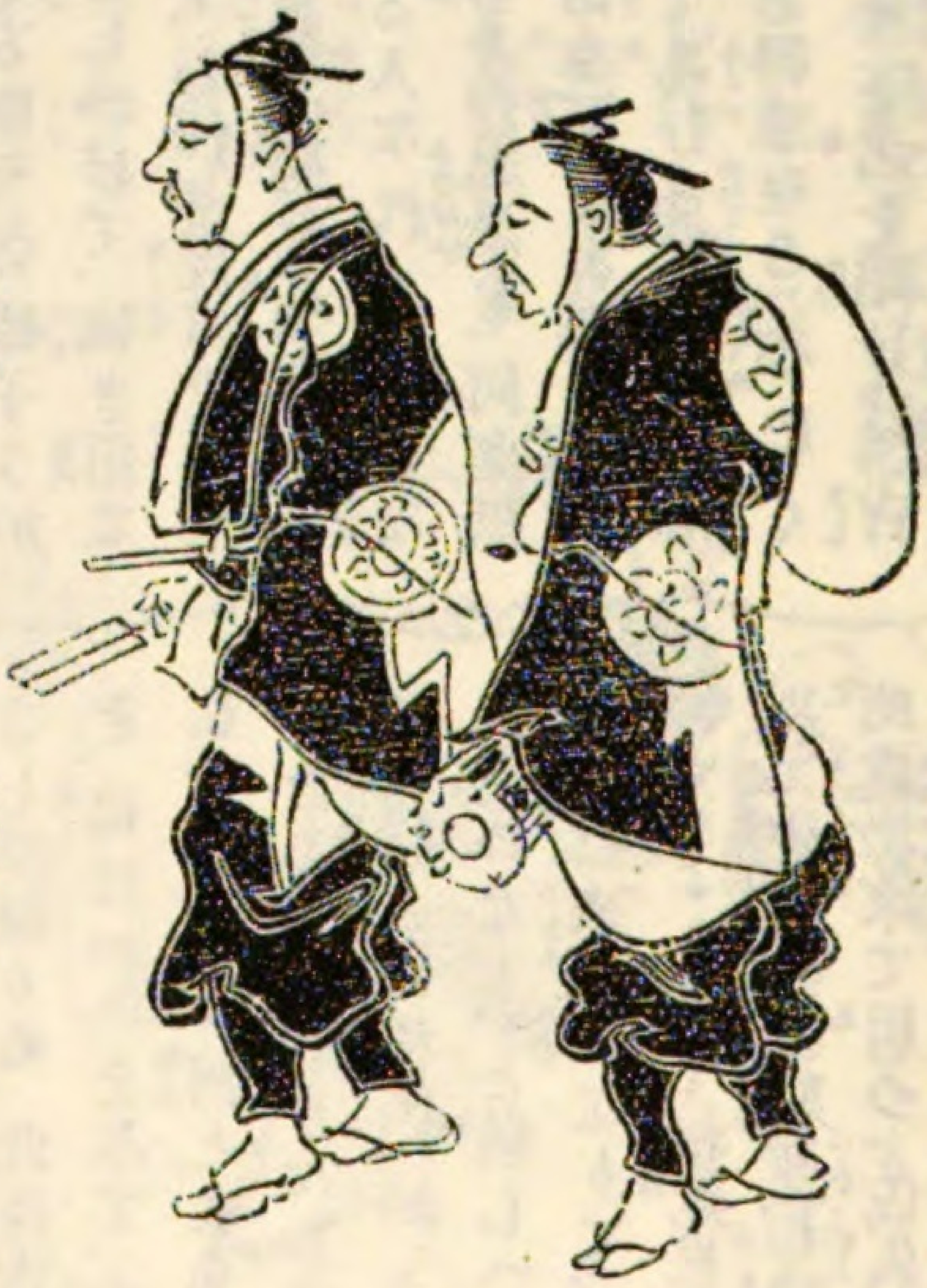
學問所の稽古人の事をいはんに、こは二組にわかたれたり、一は寄宿の稽古人にて、こは校内に寄宿して賄をもらひ、稽古すると、一は通學の稽古人なり、寄宿寮は三棟にわかたれ、南寮は八疊、次に四疊八間、次の四疊は、高位の人家來を置爲に供へしといへども、のちにはこの定めなかりし、中の寮は八疊計を、十間、北寮も同樣、南寮、中寮は御目見以上の人の寄宿所にて、北寮は以下のものの寄宿所となれり、南寮中寮合せて頭取といふものあり、北寮には世話心得といふものあり。

通學には、中寮の上に二階あり、此二階に通ふなり、二階にも御目見以上以下の區別あり、以下の場は三間、一間は廣間にて、輪讀、會讀の便に供ふ、大方は教授方出役會頭として出づ、毎日こゝに開らかるゝ輪、會の讀講などに、たま〳〵は儒者の出席する事もあるなり、北寮の上に二階あり、此二階は、より合席の者、即ち三千石以上の人の稽古所とす、これは四と九の日にあり、必三千石以上は出ねはならぬさだめなり、四九の外には、林家の編輯物、御代々の實記、日本の地誌など調べ編する詰所となれり、編輯するものには、以上以下の者まじりて、手當をうけこゝに出勤す、御實記地誌調出役など稱ふ。

かく階級やかましき場所なれば、何くれとなく秩序たゞしくとゝのひたるが、御目見以上の部屋の隅に目鏡をかけ、温厚なる容貌、正しき居すまい、何となく目とめらるゝ、五十餘の老人、いつも書見に餘念なきをしば〳〵見かけて、たれぞと人にとひたりしに、彼田舍源氏の著者なる、柳亭種彦、高谷彦四郎とぞいふ、見かけによらぬを、いと可笑しくおもひたりき、此人この時小十人組の役なりしなり。

其他、稽古所といふものあり、稽古所には毎朝願ひて素讀を習ひにくるものあり、教授方出役教授す、一六の日は、稽古所に講義あり、儒者つとむるなり、三八には寄宿の書生の試業あり、これは寄宿生儒者の題にしたがひ講釋をす、又座敷講釋といふものあり、これは四九の日平常の稽古人の外、たれにても聞に行かるゝより、番衆などはつとめにして是非聞に行ことゝなれり、毎月十日には隔月に詩會文會あり宿題あり、當座あり、參會しつるものには、饅頭の菓子出づ、これには諸生寮の生徒もあづかれるなり諸生寮は諸藩より修業に出てをる者の集まれる寄宿舍なり、これには賄なくして、諸生の中より人撰されたる舍長には、御手當を上よりたまはる、現存の重野安繹、南摩綱紀、などは予が通學の頃此舍長なりし人なり。

聖廟の入口に、御高門といふあり、こゝに日講ありて、教授方出役つとめ、袴だに着すればたれにても聽事をゆるさるゝにて、日々二十四五人の聽聞者あり、毎年素讀吟味ありて、以上以下も出づ、以上は甲科なれば、丹後縞三反、乙科は二反、以下は甲銀三枚、乙は二枚を賞とす。



これ等なほいひもて行くまゝに思ひ出づる事も多かれど、先づ大方はかうやうなる事と思ひね、その中に、今も惜しとおぼゆるは、折々我家に音づれなどしたまふ木村芥舟翁は、學問吟味にて、初場小學の一科にてすでに寸、八寸にのぼれり、めづらしき人なりとて、人々その人はいづくに、いかなる人ざまならんなど、取沙汰されたまひつれど、文章科に出たまはざりし故甲科になりたまはぬは殘念なりし。

其頃、兄孫次郎、二條の城の在番の宿割を申付られ、道中連なければ、予もともにとて、京坂見物をかねて行き兄城に入りて、後一人大坂へ行、伊勢へ參り尾張へ行て、親の實家をとひなどして、仲仙道の關が原へ向けて

行く時、御嶽の立場茶屋にて、大雨をさけて休みしに、向ふより黒紋付の着衣、しとゞに濡れて、さしたる大小いかめしく、瘠形にて菊石の大なる顔の、何となくおそろしきが、袖袂など此立場の前に立休みてしぼる、さながら忠臣藏の定九郎を目の前に見る樣にて、此方は廿にも滿たぬ若年なれば、片隅にうちひそみ、樣子うかゞふ程に、彼方は馴々しく床机にこしかけて、強き雨なりし、御身は何方へと行かるゝにや、われも江戸をさして行なり、さらは太田川にて、彼泰鼎の碑を見たまひつや、泰鼎といふは、此土の有名なる人なれど、狹量なるは彼碑を見てもしられたり、か計りの風景を、何處無山秀、何地無水流、借問東西客、有此山水不、とあまり過たるにはあらずや、われはかく、直して見むとぞ思ふ、借問建碑者、曾知東西不、いかに〳〵と得意なる心にくき人の振舞なるかな、誰ならんと、そと名を聞けば、吉田寅次郎とぞいふ、われはかくと名のりぬるを、吉田は聞て、石庵先生の御子息なりしよ、こは失禮をしぬ、さらば、ともにこれより江戸にゆかむ、藤森弘庵佐久間象山のもとをとはんとて行なりとて、是より途をともにす、森田節齋よりおくられしとて、後醍醐帝大和吉野、賀生の御所の竹といふを杖につき居たり、宿につけば、日記をかき、寐に就く前に、刀引ぬきて、おまたゞひ打振り、うちふる事、一夜もたがふ事なし、江戸に出て、鷄聲か窪の酒屋にて酒をのみ、再會を約して別れ、吉田は番町の齋藤彌九郎の家をさし、われは三味線堀の宅をさして歸りぬ、此後吉田しば〳〵我家へとひきたれるを、母はかいまみて、吉田といふ人、まことに人物の樣にはあれど、何となくあやしきさまあり、若年の者の、つきあふまじきたちの人なれば、心せよ、物の是非をよくも辨へぬ程に、かゝる人につきあふは、きはめて危ふきものなり、と敎しへ給ひしを、氣勢にてやしりけむ、其後は來ずになりて、吳服橋なる鳥山新三郎の宅などにて、より〳〵相見し事ありき、其年亞米利加よりはじめて使節彼理來りし時、浦賀へ見に行きしに、早吉田も此處に來て居つ、佐久間象山と同伴せし樣なり、何事をも疎にせず、心用ゐの深き人かな と其時は思ひしのみなりしが、後に罪を得て死しぬ、これを最後の面會として、今なほ松蔭神社など神とてあがめらるゝ人に、親しうしつる語り艸となりぬれど、母のかねて人をしる明ありて、交際をとゞめたまひしも、いや高き慈愛をく

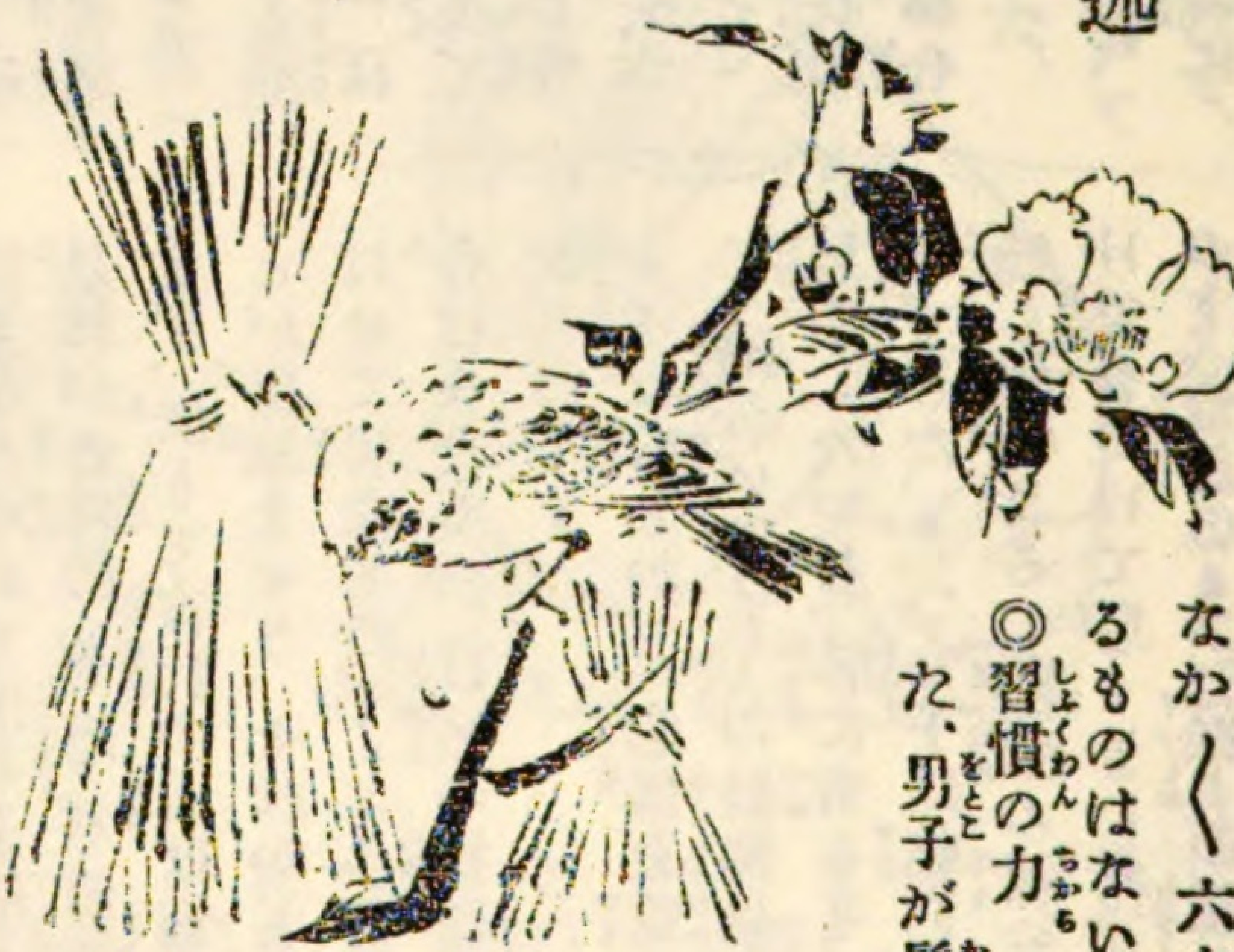
りかへしてぞ思ひ出づるなるぞと、父は今なほ其上をしのびたまふさまなりけり。

女子の服装

下田歌子女史述

此頃女子の服装を改良せなければならぬと云ふ聲が、大分盛んになつて參りました、私はまだ新案とてはありませんが、少しく女子服装の沿革をお話して、其の改良を希望しやうと思ふのです。

◎歴史調査の必要　社會が改良進歩するに伴つて、總ての物も改良進歩しなければならぬとは、今更言ふまでもないことであつて、女子も今日の如く躰操をしたり出歩く樣になつては、昔の樣に家の中にばかり居るときの服装では、迚も適當し居ると云へない、從つて其改良を促すやうになるのは、勢の然らしむるのである、所で物は歴史が最も大切であつて、新案の服を定むるには、必らず服装の沿革を調べなければならぬ、一躰眼の習慣は最も恐るべきものにて、この習慣を追うて思想も關聯し來るのである、されば新案は一時世間から歡迎さるゝことは少しも無くて、却つて甚しく惡まるゝものである、特に風俗などはなか〳〵六ケ敷いもので、是れほど困難なるものはない。



◎習慣の力　私の小兒のときであつた、男子が髪を切り、洋服を着ると、私の親なとは、惡く考へて乞食坊主と云ひ、また筒袖を着ると大工左官のやうで、甚だ見ともないと蔑んでおつたのである、女子の風俗も其通りで、眉を落し、齒を染めることを廢したときは、宮中の女官達は、泣くやら何やらして大變な騷ぎであつたが、今はこれと反對で、齒を染め眉を落すものは、丸で氣違ひのやうにいふてゐる、此の樣に習慣の力は餘程強いものであつて、なか

〳〵侮ることが出來ないから、風俗などは特更ら歴史を能く取り調べなければならないのである、

◎衣服の要素　そこで衣服の要素としては、衞生、經濟、容儀の三を數へなければなるまい、衞生には何程適當であつても、容儀を傷けるやうでは何んにもならず、隨つて何程經濟でも、衞生容儀の二點に應ずることが出來なくては、少しも經濟とはいへない、されば、改良の御手傳ひたる習慣に關聯する思想よりして、輕便であり、經濟でもあり、衞生に適當し、容儀を損ぜざる物を送らなければならない、さて新案に就ては、前に云つた通り、一時は批難攻撃があつても、眼の習慣に依つて、ずる〳〵と漸を追うて變るものであるから、此に我國女子服裝の沿革を述べて、將來の參考とするのは都合上餘程宜いことゝ思ひます。

◎女服の沿革　古女子の服裝を取り調べるのに、最も困難なるは、どうも確かな證蹟の無いことで、特に奈良朝以前は實に材料に乏い有樣でありますが、私の持つて來ましたのは、重もに古社寺その他の集めましたものです、猶ほ太古の服は漸く歴史家に判つて來た樣ですけれども、其の材料としては一もないのです、然しながら最も慥かだろうと思ふ所は、其の筒袖であつたと云ふことで、これを證據立てるのには、古代の墳墓陵墓等の中から出る土偶とて土の人形がありますが、是れが奇躰にも悉く筒袖を着て居る形に出來て居ります、依りて古代の人は筒袖を着てゐたものと言ふことが出來ませう、それから襟ですが、襟も今日の樣に合はせて居たものでして、その合せ方は、手を右から左へ合はせたのが自然の樣に、矢張り右から左へ合せて居たものです、

女子は昔しから、容儀を重んじて居たものでありまして、隨分いろ〳〵の裝飾品を付けて、其の容儀を保つて居ましたから、躰に着るものも澤山あつて、なか〳〵見事でした、まづ女子は裳を着けて居ましたが、太古は極く短いまるで前垂の樣なものを、腰の所に前半身だけ卷きつけて居りました、それから又た「おゆひ」といつて、恰度いまの靴下の樣なものを、膝の下から穿いて下の裳を卷きつけて居るのです、此の當時は頗る裝飾にのみ意を凝らしたもので、首にも頭にも種々の寶玉奇石等を飾り、特に「おゆひ」には曲玉だの鈴などまで付けて居りました、髮は無論下げ髮です、また「おすび」

といふて紙又は麻にて編んだものを頭から、スッポリ、と被つて、前に合せ、加之に後ろへも長く垂れて、非常に長く引きずつたものです、是れには「ひれ」と云ふものが付いて居て、兩肩から長く後ろに垂れて居ります、此の「おすび」は裝飾にもなるが實用にもなるもので、先づ禮服と中から以上の生活をして居るものを除いては、大概是れも手拭又はカンカチーフの代用でした、今から一千百年ほど以前、即ち弘仁の頃の衣服の畵を見ますと、唐の明朝以前の畵と大した違ひがない樣でありますから、當時の服裝は、彼の國から取つたものてはありますまいか、

猶ほ「ひれ」のことですが、是れは歷史にもあります通り、小夜姫が夫を呼ぶときに、「ひれ」を振つたとありますが、今日人を送るときにハンカチーフを振るのも、或は此の遺風ではありますまいか、兎に角「おすび」か漸次變化して中世の裲襠となつたものと信せられます、



御覽に入れますは奈良朝時代の服裝で、前にお話したより餘程變つて參りました、髮は三ッ輪に結んで其上に冠を戴きましたが、是れから櫛と簪だけとなりました、それから桓武天皇時代になつては、婦人の服裝が最も華美を盡した極點と言ふても宜いでせう、恐らく今日まで此の時代ほど衣服に金額をかけて、贅澤な風俗をしたことは在りますまい、

先づ裳の縫目には悉く細い銀線を縫ひ込むだり、所々に金だの、眞珠などを付けて居ますが、此の短冊の樣に後ろに垂れて居りますのは銀で出來て居ります、さりながら、この樣に衣服に澤山な金額を掛けた割合には、髮の飾は甚だ粗末で、太古は髮の飾に美しい花抔を指したものですが、此の時は「髮上げ」と言ひまして、髮の眞中を一寸上げて一本の簪を指した計りですから、一番髮の飾りは粗末でありました、尤も是れは平生で大禮の時は別段です、次に靴は目下支那婦人の穿いてるものと、略ぼ似寄つたものを穿いて居りました、

扨て此の時代の上流婦人は、家にばかり居て、殆んど外出などすることなく、重い衣服を着てゾロ／＼と、家の中だけ歩いて居りましたから、偶々外出でもする時は從者に長ひ御蓙を持たせまして、是れを地上に敷きながら、其の敷いた上だけを歩いたものです、此の樣な結果は上流女子の躰格を非常に惡しくしました、其の證據には婦人の早世が非常に多かつたので判りますが、實に弱いと云ふとは、此の時の上流婦人の標本になつた樣であります。

普通の人の習慣として、善かれ、惡かれ、上の方を見傚ふと云ふことは免れないことで、此時も世間の誰彼が上流に成りたい、上流に成りたいといふて、衣服を初め總ての動作を上流に眞似て居りましたから、婦人躰格の脆弱は、單に上流婦人のみに止まらないで、遂に一般の婦女子にまで及ぼしました、此の樣でありますから、世間は弱い方を上品と思ふ樣になりまして、「御果物手ばかり觸れたまひて」とか、「はかなくきこしめす」とは何のことかと申しますと、御承知の通り、



御飯を澤山に食べないと云ふことなのです、此の桓武天皇時代から、一條天皇時代は、弱いながらも、まだ宜しい所も御座いましたが、其から以降は、最も甚しくなりまして、仰山な衣服を着て多くのではなくて、衣服を連れて歩いて居ると云ふ方が、適當で御座いませう、申上ぐるまでもなく、食物は無論少なかつたのであります。

桓武天皇時代から、一條天皇時代までの間は、弱いながらも上流婦人の往來が頻繁でありましたから、まだ宜う御座いました、一條皇后の行啓の時は、婦人は騎馬で御供をし、男子は「さしぬき」で馬に騎りました、又た御鷹狩の時なども、貴婦人は隼だの弓を持ち、犬を連れて騎馬で野を驅け回はつたものです、此等は京都御所の常住の間に在る襖などに、此の畫が必らず書いてあるので能く判ります

桓武帝より源平の亂に至るまでは、衣服の甚だしく隆盛を極めた時代でありまして、極言すれば衣服が日本婦人を束縛して居ると言ふても宜しい位でした、

平安遷都以降今日に至るまでの上流婦人の服裝は、殆んど變化する所なく、同一の形狀にて推し進むで來ましたのは、皇統一系の日本であればこそでせうが、平安時代も、昨今皆樣が御承知の通り、東宮妃殿下又は梨本宮妃殿下が御婚儀のとき、御着用になつたものと同じ物を着て居たのです、

德川家時代には、內袴を付けて居りましたが、此の內袴は餘程古くから、用ゐられたもので御座いまして、紅の練絹で出來てありました、貴婦人が野遊などを爲さる時は、ゾロ〳〵と砂の上を曳ずつて步いたもので、能く畫で御覽になりましたろう、是れは慣れない間は足で地に垂れた所を踏みますが、慣れるに隨つて足で裾をハネ上げながら、容易く步める樣になります、(是れより女史は德川家時代に用ゐられたる十二單衣の實物に付て、詳しく說明せられたれども圖なければ略す)德川家三代將軍家光公時代までも、京都の上流婦人は、鎌倉時代の髮形を存して居ましたが、關東より京都へ御入內杯がありましたれば、京都は自然と關東に風靡せられて、德川家婦人の眞似をする樣になりました。



鎌倉時代の武家は裲襠を着て居りましたが、足利時代には「かいどり」となつて袴は穿きませんでした、然し足利の中頃からは次第に變つたのです。

以上は上流婦人に就てのみ申し上げましたので、民間には右の樣な風俗は全くありませんでした、そこで賤い女子の服裝は太古から見ますと、多少の沿革はありますけれども、先づ大した違ひはありませんで、細袴即ち「たッつけ」の如きものを必らず穿いて、重もに跣足でありました、

德川家以降は、次第に昔の風俗が無くなりましたが、寛永の頃には、紫の足袋を穿き「かいどり」を着ずに細い帶のまゝで、外へ出たものです、尤も明曆頃までは、まだ町家の禮式などには、下げ髮で「かいどり」を着て居りましたが、袴は全く廢されて終ひました、……東北地方には古風俗の幾分を殘し居る由なり、以上申上げました通り、德川家以前は、色々の形狀を爲した袴を、時代に應じて穿いて居りましたが、夫れから以後は袴が廢されました故、細い帶では見惡いと云ふので、廣い帶を締め、隨つて帶上げなどを強く締める樣になつたので御座います



さて今日の時世は、奈良朝時代と異つて、文明の世であるから、必らず夫れに適合する服裝を作らなければならないと云ふ考へで、私の長く奉職して居ります華族女學校では、早くから袴を穿かせることに致して居ましたが、此の頃は何所の女學校でも袴を用ゆることになりました、私も二十年來袴を穿いて、帶を廢して居りますが、然し漸く我慢して世間の風潮に逆いながら、力踐躬行しました爲め、今日の隆盛を見る樣に到つたのは、實に喜ばしいことと思つて居ります、しかしかう云ふと、私共が大層な見識を持つて居る樣ですが、實は御所の女官の袴を眞似たので御座います、

私は裝ひには一向構ひ付けない方でありますが、矢張り何所かに、見得と云ふものがありまして私の初めて袴を用ゐました頃は、外に誰れも穿いて居るものがありませんから、餘り生意氣に、學者らしく見へはしまいかと感じられまして、學校から歸りますと、早々袴を脫いで終いました、それですから、學校以外に參るときは何時も、袴を穿かずに帶を締めて參りましたから、急な用などのありましたときは、大急ぎで宅へ歸へり、御飯も食べずに出掛けました程で御座いました、さて、袴は第一に經濟であると云ふことを思はなければならない、先づ帶が入らないのと、衣服の損

傷が少ないのでも容易に判定し得るのである、第二に衛生と云ふ點からも、第三の容儀と云ふ點からも、今日の所、誰れ一人として異存のある御方は一人も御座いますまい、そこで或る醫者が、私は筒袖にしたら衛生にも經濟にも可いから、ドウかモウ一ツ考へないかと勸めましたが、私もまだ思ひ切つて其所までは出來ないのです、……と女史は下女の語り草を引き來つて、容儀の點より筒袖の女子に適當せざる服裝なることを仄かせり……又私の出來ないことを皆樣に御勸め申すのも、如何と思ひまして是も差控へて居ります、兎に角、今日の急務は、外國婦人と立交つても恥かしくない樣な文明的の服裝を造ることであります、私にはまだ新案とては無いのですが、略ぼ前申上げましたことに依つて御察しを願ひます。

江湖叢話

錦衣公子



世界第一富める後家

方今全世界中に於て最も富める寡婦といへばまづ智利國のセノラ女なるべし、同女の財産は二千萬磅(二億萬圓)と註され、智利及び秘魯の銅山を司配するのみならず其の所有の船舶は以て優勢なる一艦隊を造るに足るべく、其の所有の葡萄園は五千エーリル(約二千町歩)に亘り、ロータといへる都府の地所は全躰自己の所有なりといふ、而して此の寡婦が一ケ年の總收入は約五百萬磅)五千萬圓に上り、其家に役する所の婢僕は百六十名にして、其内單に庖廚にのみ立働らく所の料理人のみにて二十人あり、其料理頭の取る所の給料一ケ月二千五百弗に上るといふされば此の女主人が一身の爲めに奉ずる所ろの調度も頗

る莫大にして春夏秋冬の差別なく、毎日三度づゝ衣服を着代ゆる爲め數名の婢女附きりにて奉仕し、其の遊樂と情閑に供する別莊は無慮二十餘箇所にしていづれも國內風景佳絕の地に置かる、扨て其女主人が一度其別墅に屐を移せば、其の費用は實に萬を以て數ふ而して女主人が娛樂とする所は音樂と小禽の飼養にして其の道樂の爲めに費やす所ろの用途の大なる、いづれは善盡し美盡しきはみにして、其の珍玩する樂器の如きは概ね皆珠玉を以て鏤め、風琴一基の價十萬磅に上るといふ、殊に其の飼養する禽鳥は邸內に一大園苑を設け此所には世界各國に產する珍禽奇鳥を蒐集し飼僮十五人、園丁六名を以て之を飼育保管せり、中に就て一双の鸚鵡あり、是れは女主人が曾て歐洲漫遊の際、佛國巴里府より購ひ歸りたる稀代の名禽なるが、巴里より紐育を經て智利國に携へ歸るまで是の一小禽の爲めに要せし所ろの費用實に五百磅(五千圓)に上りしとの實話あり、以て其の豪華の一斑を知るに足るべし。



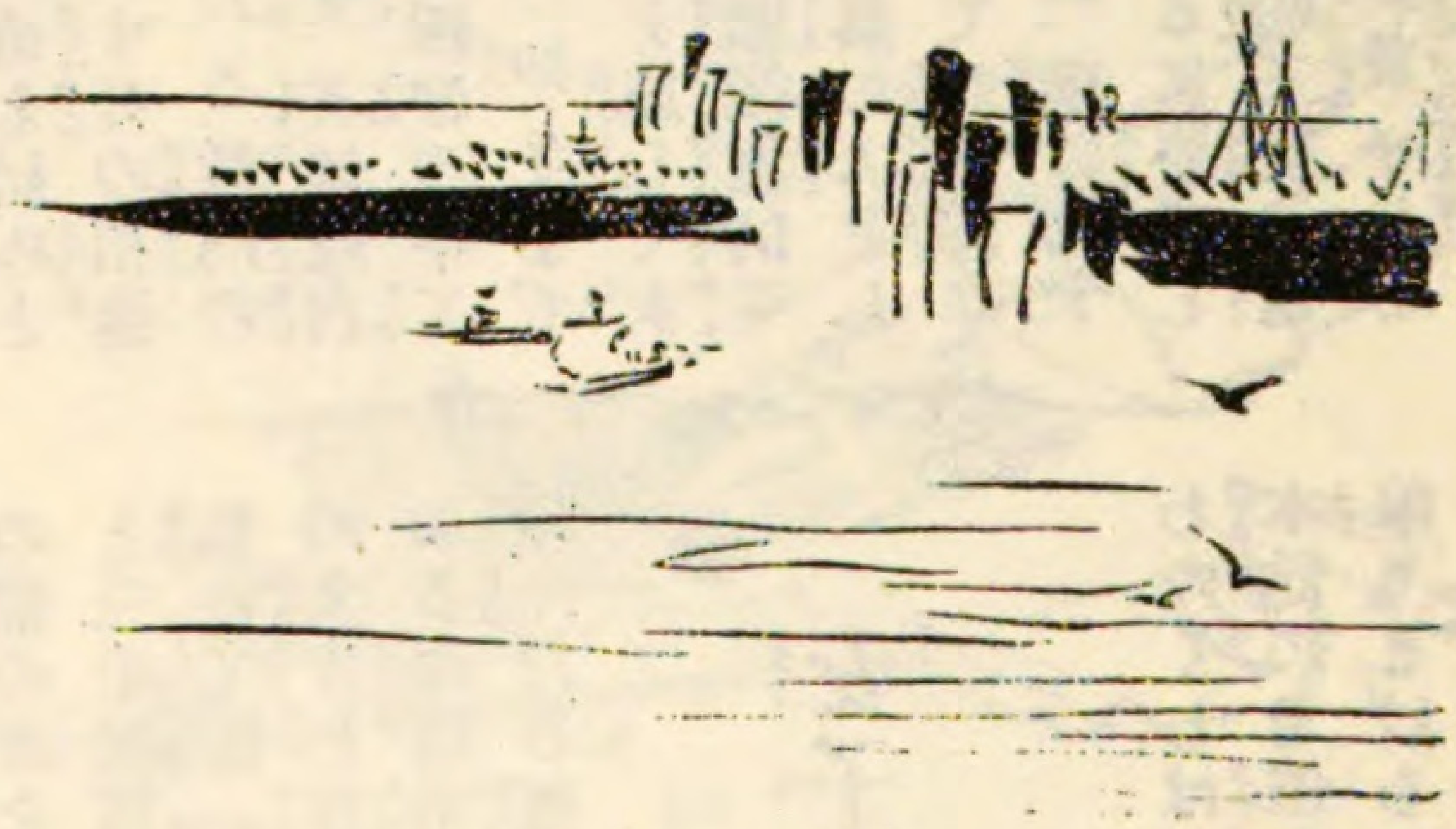
歐洲女王中の美人

歐洲各國の宮廷內は美人の淵叢なりとの稱あるが、其の各宮廷內中、最も美人の評判高きはセルビアのナタリア女王なるべし。女王の人をして最も恍惚せしむる點は、其の如何にも形よく刻める如き頸脚と、その端正なる姿勢にして頸脚の美くしき、ミロの刻めるビーナス(愛の女神)のそれに彷彿たりと稱せらるゝ程なり、扨女王が斯る頸脚を有し、又いつにてもかゝる端正の姿勢を有せる秘術は蓋し何人も學び難きにあらず、女王は每朝宮殿の庭中に出でゝ水甕を頭に戴きつゝ運動を取らるゝの例なるが這は啻に頸を整ふ爲めのみならず、又其の姿勢を端然たらしむる爲め著るしく品格を增さしむべきものなりと、されどそは決して女王の新工夫にはあらず、セルビ

ヤ國一般下等社會の婦女子は若き時より頭に物を戴つゝ歩行するの習慣を有せるなりと、而して氏の風俗は單にセルビヤのみならず中央亞細亞の各地我が隣國の朝鮮婦人も亦其の頭部に水甕を頂きつゝ運ぶの習俗なり。

李鴻章の夫人

東洋の豪傑、四百餘州の大人物として其の名聲世界に轟く李中黨は單に支那政府の代表者として高名なるのみならず、又其の財産に於ても世界有數のものと稱せらるゝなるが扨其夫人は亦非常の贅澤家として優に世界的交際社會の群に入るべし。同夫人は今年五十八歳の高歳なるに拘らず、天然の容姿秀麗なるの故にや將た其の裝飾に善盡し美盡し萬事萬端金に飽かせて飾ふ故にや其の見掛は三十前後とも思はるゝ程なり。扨て其の邸宅は言ふまでもなく豪奢華麗を極め夫人の身邊は常に各種の佳禽、乃ち孔雀、鸚鵡、鷄鵡其他の山禽、水禽に圍繞せられ、從僕侍



婢凡一百人、常に夫人の坐邊に侍して何時にても夫人の頤使に從ひて行爲するまでに馴らさせたり。扨亦夫人は非常なる衣裳持にして一度び其の邸内の衣裳庫に入れば歐洲諸國の富める皇后宮媛達の間にも容易に見る能はざる美服、佳裳は、幾百個の篋に藏めて積み重ねられ、最上最美の絹を以て製せし上衣二千領、袴一千二百餘、最も美はしき毛皮を以て製せし革裘五百餘點を藏せりといふ。這は先年支那に遊びし英國の某旅行家が其地を蹊みて記せし觀光談の一節なり。

六十萬圓の翫具

ウキリアムケルピーと言へば米國有類の富豪なるが此頃同家の愛孫にて當年七歲なる幼童の爲め態々新調せし翫具を何ぞと聞くに、一隻の軍艦なり、其軍艦は全體純銀を以て造られ其の長さは稍々二尺三寸、幅七寸餘、高さ之に適ひ構造頗る緻密のものなるが、扨之を造りたるは紐育著名の飾職にし

て、五名の職工毎日附きりにて一年餘の歳月を費し、始めて出來上りたるものゝ由なれば、其の精巧美麗眞に眼を驚かすに足るべし。先づ其構造の一斑を言へば、甲板上の裝飾悉く純金を鏤め、裝置の大砲を始めとして錨、鎖、端艇其他の船具總て實際の物と寸分の相違なきまで巧みに模造し、其の艦尾に備へ附たる數門の大砲は何れも黄金もて造り、帆檣、煙突風受、其他艦內の構造、器械の備へ付に至るまで一々微細緻密の手工を施し、甲板上に駢立する人物（士官水夫）の如きまで皆實物に依つて之を模し之に金銀銅の象眼を施して衣服の彩色を示し、佩劍、勳賞等に至るまで皆顯微鏡的手工を施したる細工の、巧妙精緻に至つては眞に人をして驚嘆巻舌せしむるものありといふ。而して此贅澤なる翫具を製作せし實際の費用何程といふに、確に六十萬圓を要せしといふ、今若し此の翫具を造るに要せし費用の船舶を造らしめば、優に一千噸の商船三隻を造り得べく、一個の小兒の翫弄品に六十萬圓を費せしといへば米國人の富はさる事ながら、亦隨分物好千萬といふべし。

猫の皮の肩掛

世界に於ける肩掛の王とも稱すべき最も珍稀の什を所有するものは英國ノルサンバランド侯爵夫人なり。該品は元と佛蘭西のチャーレス十世の所有に係り波斯産の猫の皮を以て製したるものにて此の一枚の肩掛は元と三千五百疋の猫を屠殺し此の小動物の或る一部分を集めて繡製したるものなるが、其廣さは二丈四尺四方の大さを有するに拘らず、之を疊みて壓迫する時は大なる珈琲茶碗の中に入れ得るといふを以て實に珍什の珍什たる價値を知るに足るべし。

女子教育上の所感

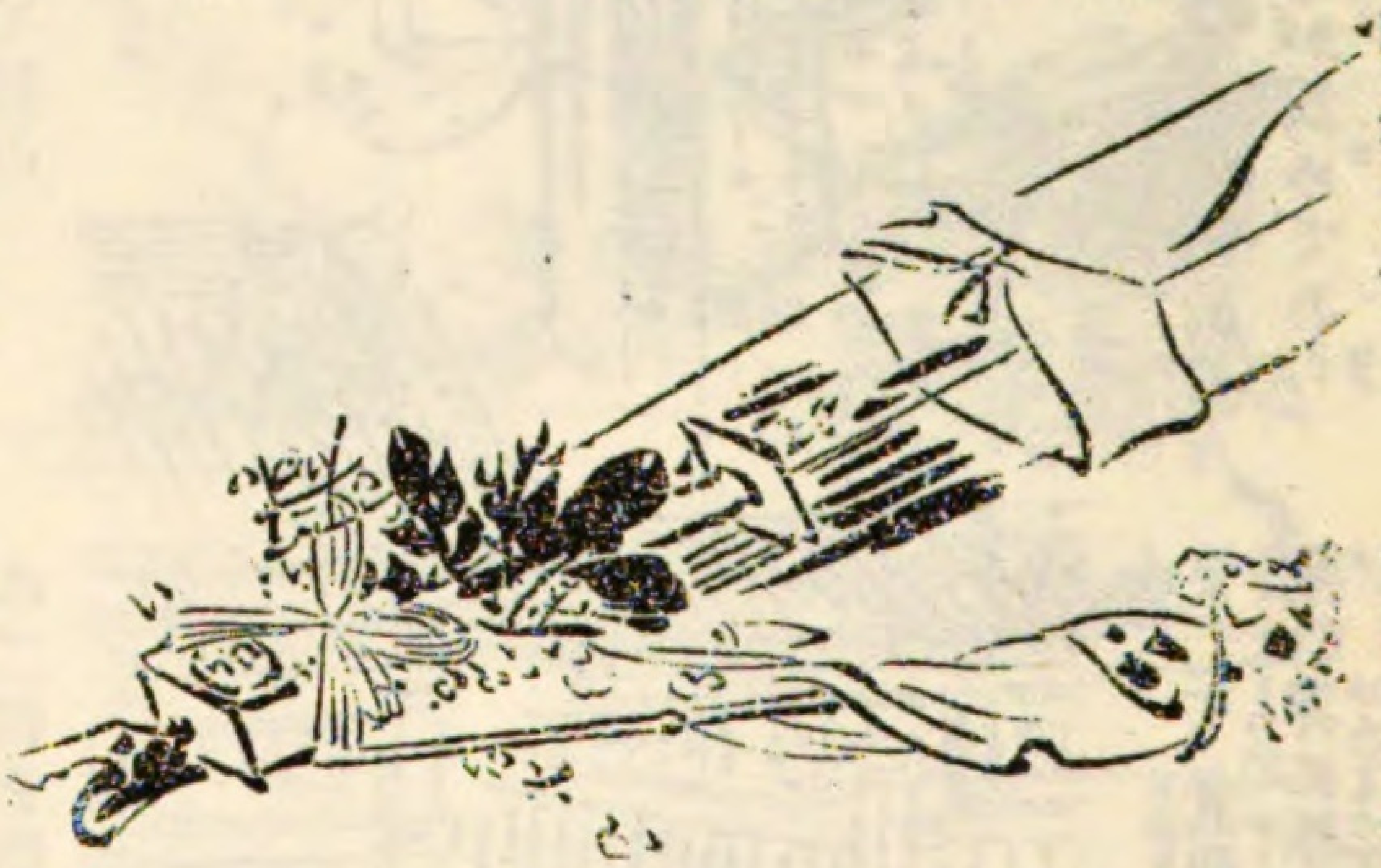
苦米地日東

わたくしは、編輯局の一記者でありまして、これから、本誌にも筆を染むるつもりでありますが、何分學淺く筆もまはらぬものゆゑ、皆さんを益しまた喜ばせ申すは、夢にだも望みません、只何事にもあれ、社會の事業には献身的に盡くそうといふ微衷は有つておりますから、本誌の爲めにも及ばずながら、充分骨を折つて見た

いつものであります、それには何分皆さんの御賛成と御助力を得なければ、成功の出來ぬことゝ信じまするから、皆さんは、斯道の爲に盡くすといふ觀念を以て、充分御眷省の榮を賜はらんことを懇望いたします、

そこで、這回は初刊のことであるから、何がな珍らしき事をと思ひましたけれども、元より頭腦鈍腕のわたくしなれば、よき智慧も有つておらぬのに、歳末歳首の多忙に追はれ、何ンにも出來ませぬが、女子教育上のことに付いて、頭で靜かに考へたことだけ、述べたいと思ひますから、生意氣いふナとお饒らずに、チトまア御覧下さいませ、

さて、女子教育の必要なることは、今更喋々の言を費やすまでもない、これは、世の教育家とか、道德學者の唱ふるのみならず、兵力を以て全歐を靡かした奈翁一世さへも、女子教育の必要を説かれたるは、皆さんも御知りでありませう、これは、主として國家の大事を爲すべき人傑か、一



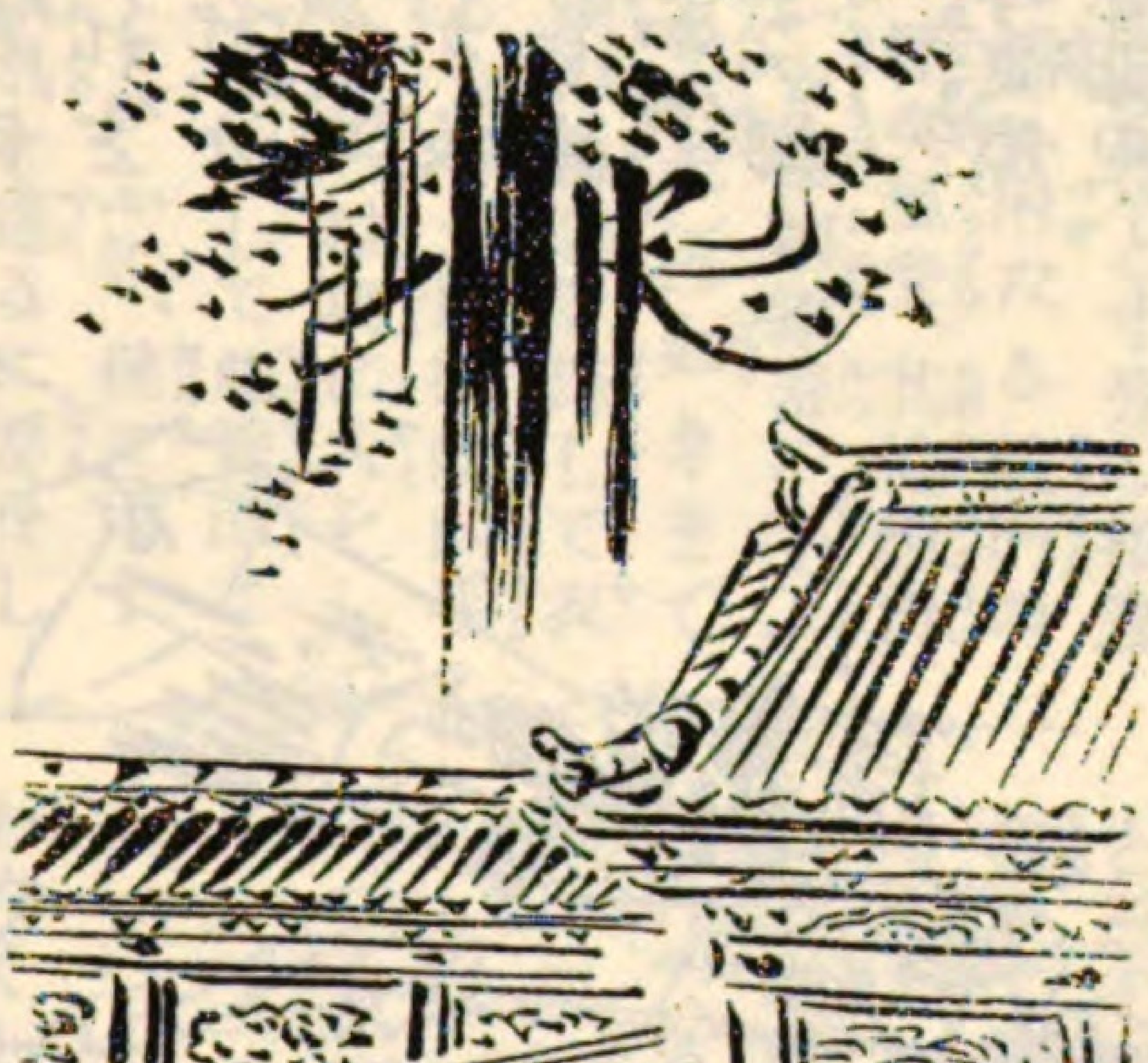
時は母親の纖手に育せられたるものだから、國民の母たるべき婦女子の責任が重い、といふより感じた覺悟でありませうが、兎に角に、今日の世は昔日とはちがひまして、百般の教育が普及せられてありますから、女子の教育を盛んにして、將來の良妻賢母を養成しなければならぬことは勿論である、しかし今の時は、公私女學校も簇々として增設せられ、當局の施政家も、實際に鞭を執る教育者も、皆此に目を着け力を致たすやうになりましたから、わたくし共は、慷慨熱に浮かされて妄りに嘆くのではないが、その教育の大躰を包括して、一應の意見を述べたく思ひます、

思ふに女子教育においても、男子教育と同じく、智德躰の三育を重んじなければなりません、世には隨分新奇を衒ふことを好む人もありますが、眞理を含める説ならば、強ち其説の新舊を問ふの必要はないと思ひます、されば、女子教育にも此三育を併行せしめなければなりません、而

して此三育は、たとへば五德の三脚あるが如く、若し一脚を失へば其用を爲さぬやうなものである、故に女子教育の完全を助するにも、智德躰の三育を併行せしめなければならぬと、信ずるのである、さて其の

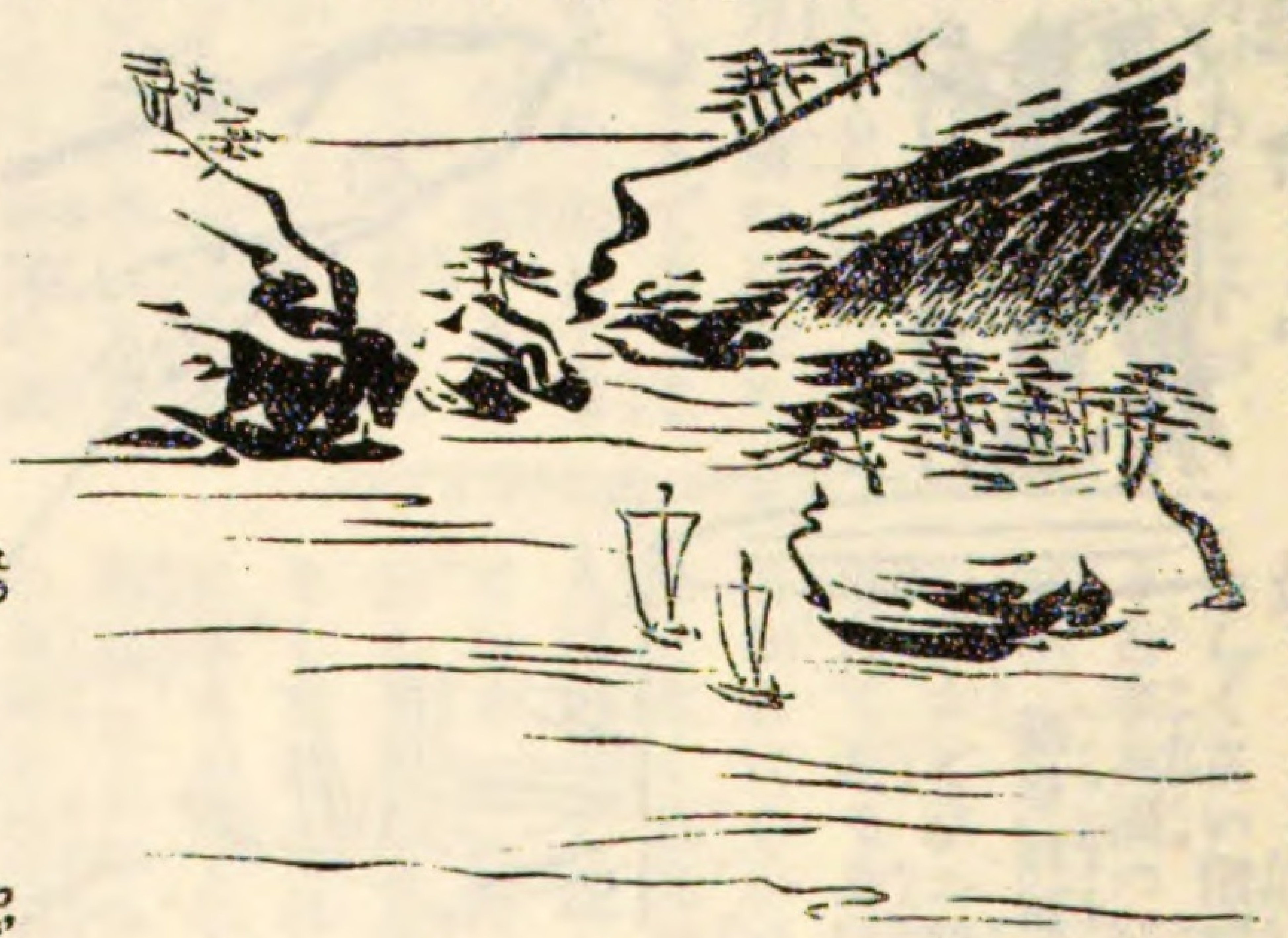
◎智育

はいかむ、思ふに、我國の婦人はこれを歐洲の婦人に比して、智力至て薄弱であると云はなければならない、國門洞開の當初は勿論比較も出來ぬほどであるが、以來漸次進歩の勢に向ひ、方今では大分婦人の智力も高まつて來たやうであるけれども、まだ〳〵今日の程度では滿足することが出來ぬ、否滿足せしむること能はざる狀態なるをいかにせむ、而してこれが重なる原因は、我國に於ては、概して婦人の智力を重要視せざりしが爲めであらうかと思ひます、さらば、婦人の智力は男子に比して薄弱なるか、社會に於て何等の効果を呈する能はざるか、否决してそうでない。人間の智力は男女の二性により



て其用途をこそ異にすれ、社會が婦人の智力をも要することは否認が出來ない、まして婦人の事業男子を凌ぐも劣らざるが如き史蹟あるをや、秀逸の才は男女の二性を問はざるものである、皆さんこれを歷史に徵して御覧なさい、西洋にてはミス、フロレンス、ナイチンゲールは戰塲に赴きて病人の介抱に斡旋せられた、フォーセット夫人は經濟書を起稿した、ゼヴォンス夫人は夫の遺稿を輯綴した、マーシャル氏も夫人と共に勸業理財と稱する書を著した、またミル氏も夫人の佐けを得て婦人女子壓服論を著し、婦人の地位を高め、當代の思想に大なる進歩を與へたるとなどありまして、其他にも例は多いことである、また我國でも巾幗社界に學者少くない、今その一二をあぐれば、紫式部は源氏物語の大册なる本を著し、また清少納言は枕草紙を著した、共に千古得がたきの好著で、永く國文の模範として世に傳はれるなど、我國のことは皆さんが

よく御存じのことである、要するに我が國に於ては、古來婦人の智力を重んぜざる慣習がありまして、これが確かに婦人の智力を高める事が得なかつた原因であらうと思ひます・一躰東洋に於ては、婦人の地位が低く、至て無勢力の姿なりし事實は、婦人の智力を輕視した所以であるかも知れません、何にせ婦人社會のためにはお氣毒千万の次第てわる、さりながら、それは昔の歴史を回想したる話で、今日では世の文明と共に婦人社界も改良せられまして、其智力も高まつたとの事でありますが、しかし、まだ〱輕々しくそうは言へないのを遺憾と思ひます、何んとなれば、女子教育は普及されたと言ふもの丶、都鄙の間に大なる差異があるとの事でありますれば、天下多數の婦女は無敎育なりと言ふも、強ち酷だと言へないやうである、さればとて、極端に女子の智嚢のみを富ますべき意味の主張はしませんが、我國の程度ではまだ〱進歩の餘地が多いことを信じまする、文明の婦人たるものは、内に在りては家庭を治め、外に在りては社會事業に與かる位の智力を具へなければならぬ、故にわたくし共は、婦人の智力養成を奬勵せよと唱ふるのである、次ぎに



◎德育

はいかむ、婦人の道德的品性を高むるには德育の効に待たなければならない、而して此の道德的品性は男女を分たず、人間として必要なるものなれど、わけても婦人には切要のものであつて、若し婦人にこれなくんば婦人の美性は何によりて認むることが出來ませうか、だから婦人にして智なきは尚恕すべきだが、德なきに至ては殆んと取るに足らないのである、しかり婦人の道德的品性を涵養することが極めて肝要であるが、我國の敎育者は古來いかなる主義を以て道德的敎育を婦女子の頭腦に注入しましたか、わたくしの管見では、彼等敎育者は極めて狹義の道德を以て

女性に適當のものと思惟したやうである、かゝる風の敎育を受けたるに我國の婦人は、貞操といふことを以て、無上の道德と思ひゐるやうな事實がある、貞操は道德なり、婦人の本務は貞操さへ守れば足れりとは、久しき間我國の婦人社會に因襲せられた觀念であらう、然るにこれは偏見と言はなければならない、何んとなれば、貞操は婦人道德の一部に過ぎぬので、其消極的行爲に屬するものである、婦人の道德範圍はこれのみに限らない、社會に於て善良の行爲を爲し、即ち慈善事業の如き事に盡力するも、これ婦人道德の積極的行爲ではあるまいが、文明婦人の道德は、廣義の道德を標準とすべきは當然である、歐洲に於ては、此種の風は婦人社會に行はれてゐる、然るに我國にては此點に於て至て遲れを取つてゐる、尤も近年歐化思想の普及と共に、婦人社會の面目も一新したやうではあるが、しかしまだ〳〵幼稚



の域を免かれぬと思ふ、婦人は男子の附加物でない、奴隷でない、箒掃手でない、婦人の自然的性格はかゝる不幸なる、賤劣なるものでない、家庭を整理するは勿論婦人の責任だが、尙ほ其他にその天才を伸ばし、社會事業に貢獻するは差支ない、否そうしければならぬ、かくの如きは婦女子に過分であると云ふ舊念をば棄てゝ、寧ろ其任務を完全にするものであるといふ觀念を有たなければならん、何時までも、室內籠居の風習を脫せなかつたならば、日本の婦人は低度の女性たるを免かれぬであらう、故にわたくしは、第一に婦人道德に對する見解を新たにしなければならぬと云ふことを主張したく思ひます、右に述ぶる所は固より婦女德育に對する一つの意見に過ぎないが、しかし重なるものと信ずるのである、その次ぎに

◎躰育

はいかむ、日本人種の歐洲人種に比して最も劣れるは、

身躰の矮少輭弱であることは、何人も首肯する所でありませう、そうして殊にも婦人に於て最も甚だしき差隔を見る、歐洲の婦人などは、身躰が強大であるからして、随分氣魂よく物事にも耐え得る躰力がありますが、之れに反して我國の婦人は至て劣等の躰力を保てるのみである、思ふに身躰の劣弱なるほど人間の不幸なることはない、なぜなれば、身躰の強大なるは人生最後の勝利を得べき資力で、若し身躰が劣弱であらむには、いかに其任務を盡くそうと思ふても、躰力の續かぬため中途にして癈止しなければならぬことゝなるでありませう、何んと悲むべきことではありませんか、而して唯に其任務を盡すに於てのみ、身躰の勝れるを欲するのではない、若し身躰のかよわき婦人にして子を設けたならば、其子も多分は劣弱の躰質を具ふることは、父よりも母親の性質と躰力は、其子に遺傳すると云ふ衞生上の原則に由るも明かである、此の如きわけで以て未來の國民が作られ行つたならばどうでせう、我國の國民は躰力優勝の人種となることは未來永刧出來ることでなからうと思ひます、されば、婦人の躰力問題は、獨り婦人それ自身に關するのみでなく、人種改良とも云ふべき大問題であるといはなければならぬ、さて、我國婦人の身躰劣弱なるは、いかなる原因に基いたてあらうか、これは、我國の婦人は思想が開けず、躰育上よろしくない慣習があつたからであらうと考へます、見よ古來我國の婦人は、イヤニ奧深き室内に籠居するを好み、細身蜂腰を以て品よき風采と思ひ、却て身躰強健の婦女をばお轉婆などゝ冷笑する風がある、此の如き風にて毫も身躰の劣弱は大なる不幸であるといふことを知らなつかつたのである、一躰我國婦人の風習は、何んとなく意氣地がないやうである、御覽なさい英國婦人は何うでありますか、彼等は餘程有爲の氣質を具へておる、これはアングロサクソン人種で、シヴアレーと云ふ男らしき天性を自然に有つておるからだとも云ひましたが、それは人種柄でもありましうが、何にせ羨艶に堪えぬことゝ思ひまする、しかしこれも畢竟身躰の劣弱なるからでありませうから、先づ以て我國婦女子の身躰を改良し行かなければならぬと主張するのであります、

文苑

和歌

大磯十首の内　侯爵夫人伊藤梅子

鴫立澤

しぎたちし昔のさまはしらねども
いまはたさびし夕ぐれのあめ

なにがしの寺に曾我兄弟の像を見て

ふる寺にふるき姿をのこしをきて
すそ野の露ときえしひとはも

化粧の井戸

つゝゐづゝ井筒は今ものこれども
むかしの人はかげだにもなし

駒止橋

ものゝふの駒止ばしをとめくれば
むかしおぼえてくつわ蟲なく

蓬萊園十首の内　男爵夫人末松生子

かつらどの

月清しながめもすゝしかつらどの
風にゆらげる八十のしまやま

手向の森

行ずりの袖にみだるゝもみぢ葉を
たむけの森にいざやたむけむ

いはずの浦

口なしの色うつくしきはなを見て
いはずのうらと人やなづけし

みなし子石

池の面にともゝなくして一人たつ
みなしご石のかげあはれなり

おばしまの小簾まく袖の涼しきは
夏なきいほのしるしなるらん

をり〳〵草十首の内　男爵母堂西升子

誰ひとりおほしたてねどわが窓の
そともの竹はなほく生にけり

うなばらに風たゝぬ日は釣ふねに
のりて見たくもおもほゆるかな
ますらをのかばねも動く心地して
あきかぜさぶき草のはらかかな
何事ももむかしにかはるわれがごと
よにすたれ貝海士もひろはず
あくた川あくたにまじるうき草も
時にあひてははな咲にけり
ながれての末は知らねど浮くさの
花さくときもある世なりけり

新年梅　　中島歌子

新らしき年の立枝に咲にけり
物におくれぬうめのはつ花

早春梅　　同

おり立て貝ひろふ日はいつならん
春まだ寒きそでのうら風

新年鶯　　田中みの子

谷の戸をいつ出にけん新玉の
とし立つ門に鶯のなく

山春月　　同

しかすがに霞みそめけり春もまだ
若草山のゆふ月のかげ

清少納言　　庭田長子

玉だれのをすの外山に降りつもる
雪に光をそへしきみかな

牡丹　　徳太寺治子

青葉のみしげれる庭に深見草
ひとしほあかぬ花の色かな

梅花處々　　佐藤艶子

こゝかしこ梅の便りのきこゆなり
いづこを先にまづ行て見ん

春暮　　中村禮子

十はたとかぞふる石の音のして
小雨しづけき窓のうちかな

玉　　同

たぐひなき玉とはいへど手にとれば
思はぬきずも有世なりけり

曉燈　　同

夜しらぬ都大路も曉の
軒のほかげは淋しかりけり

新年　　森田妙子

新玉の年たつ空にまふ鶴の
友よびかはす聲ののどけさ
市田豊子

新玉の年の初ゆきふり出ぬ
羽根つきやめてかるたとらまし
淺井てつ子

門松に羽根とまりぬと少女子の
はらふま袖の衣のいろ／＼
佐藤順子

七草もすぎて心も靜まりぬ
友がりとひて歌がたりせん
小杉蝶子

きそひつゝかるたにふかす少女子の
心はうきも思はざるらむ
中村文子

年ほぎに訪ひこし人を引とめて
かるた遊びのむれにしひつゝ
中島峯子

若水に千とせの影を祝ひをれば
のどかにうたふ庭鳥の聲
田中たを子

立かへる年始の長閑さに
心もともに新たまりつゝ
坂井鶴龜子

馬車大路ゆきかふ音さへも
勇ましげなる年の初空
片山柳子

追羽子に音もゆかしき庭の奥に
かるたの聲もきこえける哉
土屋五十子

睦まじくゐやも正しく打集ひ
年の始めを祝ふ今日かな
遠山直子

新玉の年の初日をあふぎつゝ
君の八千代を祝ふ今日かな
遠山定子

諸共にみなおしなべて祝ふらむ
のどけくあくる年の始めを
石川照子

年立つと思ひなしにや大空の
景色さへにもあらたまる覽
酒井壽美子

新玉の年の立日のけふのこの
樂しき心つねにしもがな
有賀晴子

年立ちて物あらたまる朝ぼらけ
變らぬ富士の高嶺をぞ見る

千とせの聲（一）

子爵夫人 諏訪晴子

千とせまで世に住吉の松が枝の
みどりを友と君榮えませ
子爵夫人 板倉正子

かげ高き園生の松を友として
いく萬代の春をむかへむ
大塚伸子

高砂の松の千とせをためしにて
君が榮えや久しかるらむ
高木富子

園の内の木立のなかに目にたちて
榮ゆる松を友とせよきみ
日下靜子

春毎に色そふ園の松が枝は
千代經ん君が友にやある覽
大河内桂子

春ごとに色そふ野べの若松を
老いせぬ友と君や見るらむ
大村八代子

こけむせる巖の上の老松に
千代も榮えむ色は見えつゝ
鈴木ふゆ子

木枯

ときはなる松のこずゑもかれんかと
思ふはかりにこからしのふく
鈴木ちよ子

筆

わかおもふこゝろのあとをのちの世に
のこすも筆のちからなりけん
辰野すま子

庭霜

くれなゐもみとりも見えし庭なれと
けさはひとへに霜のかくせる

水鳥　　山本てる子

朝日さすいけに羽たゝくをしとりは
うきねの夢もいまはかさむらむ

さよふけて霜やおくらん水鳥の
上羽をはらふ音のひまるき　　中野たつ子

湖冬月

すはのうみまたき氷るとおもひしは
月のひかりのさゆるなりけり

山路霜　　加藤悦子

奥山のみちのしはくさけさみれは
霜のはなこそさきわたりけれ

閑庭殘菊　　同

門とちてよにましはらぬわか宿は
きくもうつらふいろなかりけり

山家友　　同

世にありて心へたてしやまかつも
今はしたしきおけくれのとも

寄竹祝　　鈴木德子

ときはなるまつとならへて君か代の
ちよのためしに竹もひかまし

山家友　　大橋夏子

山さとはすみよかるらむわか友は
みやこの家におとづれもせぬ

冬川　　同

ちりうきし木々の木の葉のいろ／＼も
ひとつにこほる山川の水

閑庭殘菊　　中野たつ子

おくしもに色もかはらて庭の菊
ちよのかたみとさきのこりけり

山路霜　　同

のほりゆく道芝しろしけさはまた
山さとひともふまぬ霜かも

雪中竹　　鈴木千代子

ふる雪にみそのゝ竹はなひきおひて
千代の花さへさきいてにけり

歳暮忙　　同

としの內も指をるほとの日かすにて
たゝ何ことも手につかぬかな

落葉深　　吉岡もと子

ときはなる松のはやしにもみちはの

にしきおりいたす山おろしの風
前田せつ子

あれはてし家居のあたりすきて見れは
古井もわかすつもる木の葉に
高崎てる子

おちつもりはらふ人なきもみちはに
ゆくへもしらぬ山のしたみち
關洲子

谷水もなかれさりけりちりつもる
みねのもみちにせかれ〳〵て
安塲わけ子

はこね山むかしの道をわけくれは
おちはにうつむせきのいしすゑ
稻葉壽子

落葉ふくよはのあらしやつよかりし
あをきもましる庭のおも哉
坂寄みつ子

忍ふ世をへたての垣はやふれても
おちはぞ道をせきとめにける
青岡よし子

新婚の祝に

松竹のちよのちきりやこもるらむ
いもせの山の深きたにまに
柳谷末子

わか竹のえたさしかはすちきりこそ
千世にさかえむねさしなりけれ
坂寄みつ子

ひなつるもやかてすむへくみゆる哉
ちよをならふる松のしたかけ
秋山とし子

かはすらん君かちきりは高砂の
松の葉いろのときはならまし
平佐ふみ子

くれ竹のときはのいろにならひたる
君かちきりはちよもたえせし
中村とき子

岩かねのけふすみそむるましみつの
なかれはちよにたえしとそ思ふ
安塲わけ子

かけにして共にきくらん高砂の
まつふく風のちよ〻はふこゑ

新体詩

夜半の梟

鹽井雨江

一

何にの嘆きを　なげきかね、
なくや、梟、　かなしげに、
うきよもねむる　さ夜中に、
汝れのみ、獨り　ねもやらで。

二

嵐も雨も　たまらざる
汝れが宿りの　つらけれや、
杉のとざしも　あれがちに、
松葉が軒も　ひまあらみ。

三

忘られがたき　思ひねの
さめてこらへぬ　涙かや、
つきぬなごりを　限りにて、
別れもはてし　伴れありて。

四

思ひもかけぬ　山住みに、
すまぬ恨みの　涙かや、
捨てがたき世の　思ひゆゑ、
世を捨てはてし　汝れにして。

五

思ひのかぎり、梟よ、
泣きてきかせよ、汝が嘆き。
おなじみ山の　さ夜枕、
こゝもねられぬ　伴れなりや。

六

語るかひなき　世の中の
ね入るが程に　起き出でて
獨りしのぶの　汝がなげき、
思へば、ゆかしき　限りよな。

七

きこえぬうき世の　外にして
ひとりも泣かむ　心から
思ひ入りにし　我が山の
伴れとこそきけ、汝が嘆き。

八

なけや、かなしき　梟よ。

楽しきうき世の　もののねに
病みもはてたる　我が胸は、
悲しき音こそ、慰さむれ。

和　文

歳の暮

大和田建樹

一

足を空にて行きかふ市人は何のためにか忙がはしげなる。送らるゝ年むかへらるゝ年。いづれも同じ夢の世に。彼を惜しみ此を待つもいとはかなし。

二

大路を見れば。家毎に松たて注連引きわたして。餅つく音こゝかしこに響く。さはいへ人の心嬉しからずしもあらず。神代の春さへ歸りこん心地して。

三

蜜柑は花よりも赤く。玉子は雪よりも白く。店先に積みかさねられて。客山の如く取りかこめり。歳暮の祝に送らんとてならし。一とせ惠み受けたる人に送らんとてならし。翁は早咲の梅一りん手にして其前を過ぐ。

四

旗竿を肩にして歸る書生あり。干鮭を手にして行く下男あり。人も車も走れど追はるゝ年の暮に。少女のみ羽根を軒に上げたりとて兄を煩はす。

五

寺の入相は響きぬ。入日のかげは森を別れぬ。心ぼそし今年もわづか七八時間になりぬと思へば。さるにても蕎麥あたゝめて事なく暮れぬる過去をや祝はん。

六

來れ妻よ子供よ。打ちつれて上野の花をも見たり。もろともに墨田の月をも見たり。春秋の昔がたりせんもたのしからじやは。姉なる子の書よむ内に入りぬると。弟なる子の片手の指もて我年をよみおぼえしとを。今年の出來事として神の御まへに謝す。

宮城御移轉記

佐々木信綱

明治二十二年一月十一日といふに、我が大君は大御代の千世田の宮に御わたましせさせ給へり。年ごろ赤坂

なる假宮によろづ事そぎておはしましつるを、高きいやしき心あるかきり畏こみ奉りて、あるはたからをさゝげあるは宮木を運びて、とく宮つくりはてむ事をねぎまつりしかど、うへにはさしもいそがせ給はず。たゞ國をとまし民を豐かならしめん事のみひたふるにおもほし召したるは、難波の宮の昔にも立まさりていとありがたきわざになん。しかはあれど海の外の國々とまじはりて、み國の光をかゞやかすべき時にしあれば百の司人たち心を合せておきてをおこなひ、よろづのたくみどもも日に月に怠りなくつとめはげみし程に、二十一年十月に至りて、内外のかざりまでもこと〳〵くとゝのほりて、天つ日嗣のとこ宮と定め給はんにたらはぬ事なくなりにしかば、そがいたづきを空しうなさじとて、速にうつろはせ給はん事をおもほし立たせ給へるなるべし。二日ばかりさき立て、まづかしこ所を渡し奉らせ給ふ。歳はたちぬれどまだ冬の末にしあれば、大方雪あられがちなる頃ながら、此日は空もうらゝかに霞み渡れる心地して、神のみ心もゆかせ給ふらんといとたのもし。うへきさいの宮にも、大庭におりたゝせ給ひて見奉りおくらせ給へり。御跡先に騎兵あまたしたがひ、式部職の人々おごそかにもり奉りて、御はぐるま二つ御からびつ三つばかりひきつゞき渡らせ給ふ御さま、いとかう〴〵しう貴し。遷幸の日は殊更にのどかにて、空には塵ばかりの雲だに見えず。朝日花やかにさし出たるに、大みけしき一しほうるはしう、御二所御車にめさせ給へば、みこたちおとゞ達をはじめ、宮内司かずを盡して御供つかうまつれり。樂隊の聲いさましう、みかど引出るより新宮に入らせ給ふまで、御道すがら老たる若きをとこをみな山の如くに重りて、拜み奉る。中にも學校の生徒等は、一しほ清らかによそほひつゝ、御車の過させ給ふほど、君が代の唱歌をうたひて祝ひ奉れるさまいとめでたし。十時すぐる頃おはしましつきて、やがて供奉奉迎の人々にみたいめあり。おの〳〵いはひの大みき給はり、萬歳を呼びかはす聲どもいと賑はし。かくて少しのとかになりぬる夕つかた、宮と共にこゝかしこ御覽じ渡しつゝ、おのが、渡殿のほとりについゐたるを、老人は寒からぬ所こそよかめれとのたまはせて、飛香舍のおまし近う座をたまはり、すひつをさへゆるさせ給へる御惠のほど、かしこしなどいふもおろかなり。年月御あたり近うつか

うまつりて、御いつくしみをかうぶりなれたる身にも、こたびの仰ごとは更に忝けなさのおきどころなき心地するにつけて、この新宮どころとこしなへにさかえ、この君が代あめつちと共に久しうおはしまして、萬の民を撫いつくしませ給はんこと、此老人をあはれませ給ふ如くならんことを祈り奉るになむ。

うつります千世田の宮の宮柱
ゆるがぬ國のもとゐなるらん

旅の命毛

旅の命毛は、三枝茅淵刀自の書けるものなり、刀自名は斐、字は子章、茅淵は其號、一號は清風、文化中堺奉行たりし土屋紀伊守某が室にして、土屋の邸は小石川江戸川町にあり、其の前なる江戸川の流を茅が淵といへるをもて、やがて號とはせしなりとぞ、博く和漢の學に渉り、漢籍にては、經史諸子百家の書、又和書には物語歌集の類、目をふれざるものなく、其著す所、此書の外、曹大家女論語解、枝氏家訓、列女傳拾遺和泉日記などありて、詩歌文章もいと多く、すべて一わたりの博士口あくべくもあらず、傍ら絲竹の道にもおぼつかなからず、殊に琵琶はその得たるすぢなりければ、堺に在し頃は、折々わたくしに京に上り、上達部殿上人の許にも參り通ひ、それより秘曲ども授かりし事もありけりとぞ、人となり打見たるさまは、こめきおほどかに、もて志づめたる人なりしかど心いと猛くをゝしかりけりとぞ、女論語解は余先年乙骨氏より借得て一わたり讀みたりしが、女性の著としては、誠に愛づべきものなりき、和泉日記は、土屋氏堺在住中の日記にて、文化四年の四月より、同じき六年三月十六日迄の事を記したるものゝ由、岡本況齋が書ける隨筆難波江に見えたり、此旅の命毛は、文化四年四月五日江戸を立ちて、十九日堺に到り着く道の記にて、夫人は片山賢氏の筆記に依れば天保十五年、即ち弘化元年甲辰より十餘年前身まかられし人の由を記せりと、中根香亭氏の手抄に見えたれば、天保の初年までは世にありしなり、人柄のほど文の上にもあらはれて、つよくをゝしく、男の書けるものゝ如く、げに和漢の學に渉れるさまは筆のさまにて明かに知らる、此書寫本にて世に多からず、且誤

寫多くしてほと〱讀むにたへざるところ、、、も少からず、されば今はばかりなる人の廣く世に知られざると、又さばかりなる文の永く誤を傳へん事のいとほしく口惜しければ、細かに校正して此の雜誌に揭ぐること〻はなしつるなり、

因に云、土屋氏は後留守居となりて八十餘迄奉務し、紅裏許されたる人なり、茅淵刀自の墓は淺草海禪寺にありとの由、片山賢氏の記に見えたり

中　邨　秋　香

天さかるひなの住居に、世をうしと思ひをりたる嫗あり、心はやう世はなれたれど、さすがにうからやからの多くて、そむきもはてゞとし月を送る、龍の智あるも醢となり、龜の靈なるもまた刳をのかれず、生あるも智あるもおろかなるも、ほと〱の浮沈いかでのがれむや、泥土にまみれ俗風にそむ習ひなれば、身のいさぎよきをもほりせば、榮ゆべきをも思はず、雲漢を攀ぢず世途にも委せず、むなしく中間にまよひて、志の終へさるをかなしむ、文化四ッのとし夏のはじめとみにいづみに下るべき日ちかうなりぬ、身を雲水になしはてんは月比のほいなれど、か〻るべき旅路のほどにいざなはれんとはかけても思ひよらざりき、そも人のすなる道はちゞもゝち多けれど、孝にまさるはなしと云ふなるを、こたび既に八旬の親をのこし捨てたり、とゞまりてけうせんとすれば、かへりてそのこ〻ろにそむきぬ、况んや親友骨肉分離して後會期はるかなり、心茫々として前途しるへからす、後程わきまへがたし、涙を掩ひて鄕里をわかる〻、只夢とのみかきくらし、ふる雨に袖の雫をまし、行路心情ともに平かならず、げにも買生魏國を離れ、王粲荊夷にむかふ、せめて脚を勞し杖をほしいまゝに、せば、いさゝか慰むかたもありなんを、こは〱しきもの〻ふ左右をまもり、前後の從者太刀を帶びたり、腰輿のくらきにおしいれられて、日のひかりことに薄し、さすがに女憲をおもひて聲をだに出さず、ほけ〱しきこ〻ちにも、命のたえやらぬ程は古きをまたひみやびを好む癖ありて、簾をかゝぐることなけれど、少しく峯の雪をあふぎ、濱の月をのぞく、人は見て榮とせんも、こゝろはひとへに囚れ人にことならず、四人も言ふことわり、いへばこたふる習なるを、是はとふことの葉もなく、こたふる人もなし、寞然たる無人城とやいふべき、をしからぬ命のさすがにをしければ、

夢まぼろしのやうにてもたまのおりなんほどは、四方の氣色見んはせめての心やりなるべしとのぞくとすれば目もきりふたがりて、いづちとも思ひはかれず歸りこん日を思ひつゝ秋ならねども、袖のみ露けし、せめてと思ひし送の人にもわかれぬ、なにとかやいふ宿にとまれど物もおぼえねば明くるおした出たちぬるほども知らず、われかの氣色にていづちゐて行らんしらず、けふはきのふの雨にて渡りのとまるべきなど、げすどものかしましうのゝしる聲きこゆれど、いかなる川ともきゝしらず、花水橋と云ふにいたりて、雨はじめてはれて富士の峯こゝよりよく見ゆと人々のめずる聲に、すこし人ごゝちいできて常にこの山なんてめたきものに思ひしみにしを、けふよりわかずながめんと、それを力にて物なども見いれつ、げにふる里にてはるかに見しはものゝかずかは、萬山連りて瀉ぐがごとく削るがごとき山々のおのづからなるけしき、木立のほのかなる目も及ばれぬほどなる中に、これはいともものどけき天津空よりひときは志ろう清げにてみがゝれいでたる、げにひとの國にもまたならふもののおらじかしとなん見ゆる、もろこし人の山々をいひならべたるが、峨嵋より高きはなく、天都より秀でたるはなく、太華よりさかしきはなく、終南よりたくみなるはあらずと、いひたれどこれはその姿のしかくねく〵しきにはあらず、誰なりけんこの山をたとへておほみまへにしろきみそたてまつりて、高御座におはしますらんやうぞといへりしは、むべなりけり、おほみくにのふりはげにかくぞと覺えていとかたじけなし、

雲わけて思はぬかたのはれ間より
ましろに見ゆる富士の白雪

とばかり有て、おほ山といふにたちへだてられて見えずなり行く、いとおかずくちをし、雨はれたれば思のほかに道はかゆきぬとて、大磯のすくに着きぬ、申の時ばかりなり、こゝちやゝさわやぎて卯月のいつかにふる里をいでゝ、けふはむゆかとしりぬ、旅のこゝろもまだならはぬほどなれば、人々いたくかうじつとてとくふしぬ、

(未完)

女學世界の發刊を祝す

新潟縣高等女學校長　柏倉一德

方今朝野の別なく、教育振興の聲は東西に返響し、其影響は學制の調査となり、學令の改正と爲り、就學の督促と爲り、漸く革新の氣運に向へるか如し、是れ國民が教育の必要を自覺し、三十餘年の朦朧たる睡夢の中より醒覺し始めたる徵候にあらざる乎。而して今や出版社會にて有力なる博文館にて、『女學世界』を發刊し、教育振興の潮流に乘じて女子の學海に帆を揚げたるは、教育の爲め國家の爲め慶賀に堪へさるなり。殊に我國二千餘萬の婦人の爲め、歡喜の情を表するに躊躇せるなり、願くは日本婦人に忠實にして輕跳ならず、浮薄ならず、以て國家の福祉を增進せんとを希望せさるを得す。今明治卅年の統計を觀るに、小學々齡兒童中、男兒百人に就き就學者八十人の割合なれども、女兒は百人に就學者僅に四十七人に過ぎず、故に日本女子の過半數は、今以て盡く無教育に放任せられ居るなり、其女子中等教育に至りては之より太甚しきものあるなり、是れ我教育上の一大缺點にあらずや。試に我國從來の弊風を觀に、男を先にし、女を後にするは上下一般の陋習にして、今日と雖も猶未た免るゝこと能はざるか如し、故に異日男女智識の懸隔を生し、將に言ふへからさるの弊害を釀成せんとす、是れ余か深く憂へ且懼る所なり。今若し女子教育の切要なるを知んと欲せは、吾人自ら其身を反省するに若くものなし、吾人少く其幼時を回想せよ、吾人が幼稚なる時に方り、如何して生育せしぞ。余が知覺なきの時に方り、余が五感を練習して諸物を識別するの智識を與へしものは何人ぞ。又余か呱々として哺乳を索る時に方て、彼醫員に代り衞生に注意し、余が身體の健康を保全せしものは何人ぞや。又余か頑愚なる時に方り、余が本性を誘ひ、余が良心を開發せしものは果して何人の手に出てし乎。斯の如く懇篤なる教養を得て、斯くまでに吾人の生育せしものは、知らず誰の賜なるぞ。以上の諸問を起し來らば、吾人は必ず言はん母なりと。實に兒童幼時の教育は母の手に外ならさるなり。是れ其婦人の天性、愼密温和、慈愛忍耐の諸性に富めるは男子に勝る所あれはなり。然らば則ち造化は婦女に命するに、恰も其子を教養し家政を管理する任を以てするが如し。然るに現今人の妻たり母、

たるの人を觀るに、稍々摸範と爲すへきものなきに非すと雖とも、概して社會を通觀するに、皆な無敎育の婦女にして、其子を敎養するの任に堪ゆるもの殆んと稀なり。故に常に兒童の智識を渴望するの狀あるも、終に其情を察せすして却て之を叱斥し、或は舐犢の愛に溺れて生理衞生の法を知らす、遂に其子を多病に陷れ、或は德義を訓練すへき機會あるも、胸裏に訓誨の素養なくして漫然之を空過するか如きは、吾人か常に悲む所なり。古は所謂胎敎と云ふものあり、目に非禮の色を視す、耳に非禮の聲を聽かすと。其母の一擧一動も、亦以て胎兒の性情を變するに足れり。況んや其生育して既に知覺あるものに於てをや。若し其父母をして品行端正ならさらしめは、之か兒童たるもの習慣は第二の天性と爲り、牢として動かすへからさるに至らん。方今胎敎の衰廢するや既に久し、家庭の荒蕪するも亦太甚しと謂ふへし。然り而して、人或は人性の善惡あるを疑ふものは抑も末なり、今若し學校に於て一日五時間之を暖むるも、剩餘十九時間は彼の無敎育なる母に委托して以て之を寒却せは、其陷りて鬼と爲り虺たらさるもの殆んと僥なり、何そ兒童の賢明ならんことを望むを得んや。嗚呼田園の荒蕪せるは猶耕耘すべし、家庭の荒廢せるは如何すへき、是れ吾人の最も注意すへき所にあらすや。今若し之を救はんと欲せは、女子敎育の切要なるは架說するを要せす、苟も邦家の文明を根底より進步せしめんと欲せは、家庭敎育の改良より急務なるはなし。故に西人言へることあり、曰く婦德の長短を觀て其國文明の進度を知ると。又曰く一個の善良なる母は一百人の學校敎師に勝ると。然らは則ち敎育の源泉は一家にありて、家庭の敎育は母の一大責任たることを知らさるへからず、其婦女の國家に關係を有するは至大なりと謂ふべし。而して今日無敎育の過半數の婦女子は、他日人の妻たり、母たるの人にして、後來日本の文明を進捗せしむる責任あるものなり、第二の國民を敎養すへき責任あるものなり、豈に之を放棄して可ならんや。試に亞米利加合衆國の隆盛なるを視よ、其國人の溫和にして活潑なるは、歐洲諸國の及ばざる所にして、今其國の敎育を觀察するに女子敎育の盛なるは推して世界第一と稱す。故に世人は米國人の勤勉にして活潑自立の氣象あるを以て、皆な婦德の感化に歸せさるはなし。彼の獨立戰爭の如き

も亦其感化に依らずんはあら、ず是れ皆な家庭敎育の然らしむる所にして、蓋し一朝一夕の故にあらさるなり。凡て婦人感化の勢力は潛勢力にして顯著ならずと雖とも、其强大なるに至りては驚くべきものあり。此社會を動かす力も、亦寂莫幽閑の深閨にあり、吾人其源泉に溯りて之か澄清を謀らば、其灌漑の及ぶ所啻に一州一國に止らずして、進て我瑞穗國を濕すに至るべし。『女學世界』は此源泉を淸くして、邦家文明の根幹を培養するの責任あるものなり。故に今其發刊に際し一言して以て祝詞に代ふ。



◎書ニシテ若シ衷心ヨリ出タル者ナラバ必ズ爲ニ他人ノ衷心ニ透徹スベシ　　カーライル

◎眞美ハ深山幽谷ニ在リ　　ウヲルヅウヲルス

◎天コソ眞ノ詩人ナレ人ハ只之ヲ演ズル而已　　バルザク

◎詩ハ世上ノ至善至美ナル者ヲ悉ク不朽ナラシム　　シエルリ

◎余レ天ニ虹ノ横ハルヲ見ルヤ吾心躍ル　　ウヲルヅヲルス

娯樂



春遊び

◎いろはまはし

羽子突は女子の戸外遊戲として、手毬つきは室內遊戲としてむかしより今に至るまで變ることなし、それを外にして淑女の春遊びは、歌加留多、トランプ、花牌、双五六などなるべきが、玆に室內遊戲の一法として乙女子の遊びにおもしろかるべきは「いろはまはし」などいふものなるべし。これは幾人にても順番を立て置き、甲が一首の歌を唱ふれば、乙は其歌の下の句の頭字を取りて其文字より始まる歌にて自分の記憶せるものを直ちに唱へ、丙丁戊己と以下順番に同じやうにして廻し、若し滯る時は其人は約定の罰に處せらるゝなり、歌を諳誦するに好き方法なれば始めより古今集ならば古今集其他何



むきみかん

集にても「いろはまはし」をせんなど、約束して下讀をなし置かば最も面白かるべし今實地の模樣を記せば左の如し

(甲) 春たつと云ふ計にやみ吉野の
　やまも霞みて今朝は見ゆらん
(乙) 山さとは冬ぞ淋しさまさりける
　ひとめも草もかれぬとぞ思へば
(丙) ひさかたの光のどけき春の日に
　しづ心なく花のちるらん
(丁) しるしなき音をも鳴く哉鶯の
　ことしのみ散花ならなくに
(戊) こづたへは己が羽風に散る花を
　誰におほせてこゝろなくらん
(己) たかさごの尾上の鐘の音す也
　あかつきかけて霜や置くらん
(甲) 秋風に聲を帆にあげくる舟は
　あまの戸渡る雁にぞありける
(乙) おたご山しきみが原に雪積り
　はなつむ人のあとだにもなし
(丙) 花の色は霞にこめて見せずとも

。かをたにぬすめ春のやまかぜ

（丁）。から衣きつゝ馴にし妻しあれば
　はる〴〵来ぬる旅をしぞ思ふ

（戊）。はる霞棚引にけり久かたの
　。つきのかつらも花やさくらん

（己）。鶴かもも千歳の後は
　知らなくに
　。おかぬ心に
　まかせはてゝん

（甲）。あめふれど露もゝらじ
　を笠取の
　。山はいかでか
　もみぢそめけん

（乙）。やま高み雲井に見ゆる
　櫻花
　。心のゆきて折らぬ日ぞなき

（丙）。心なき身にもあわれを知られ鳬
　。しぎ立澤のあきのゆふくれ

（丁）。しら雲に羽くちかわし飛ふ雁の
　。かづさへ見ゆる秋の夜のつき

（戊）。かすみ立つ春の山邊は遠けれど
　。ふきくる風は花の香ぞする

（己）。ふるさとは吉野の山も近ければ
　一日もみゆき降らめ日ぞなき

（甲）ひ…………………………

散兵



◎鶏取り

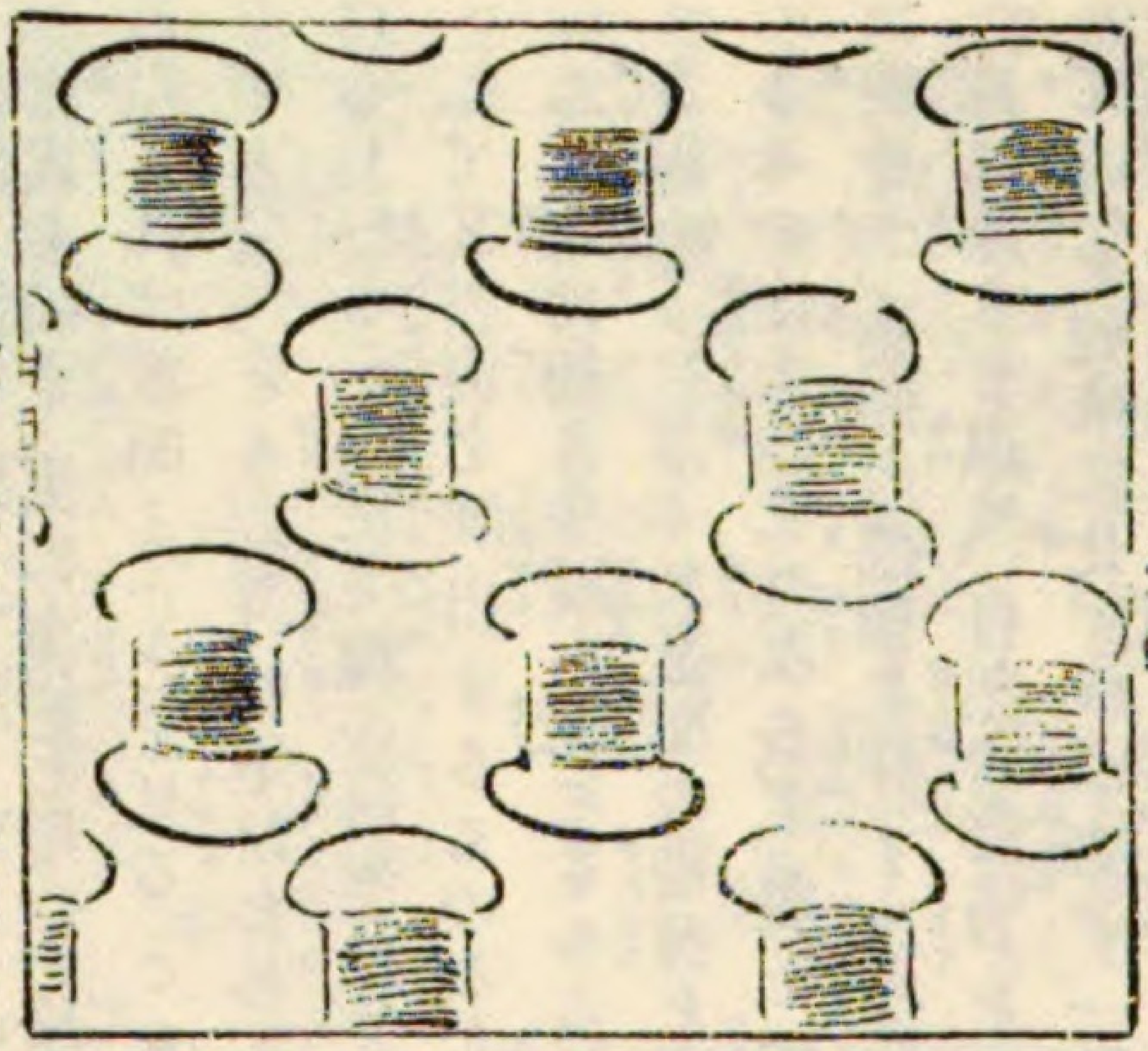
右は室内遊戯の一法なるが、茲にまた女子の戸外遊戯としては「鶏取り」「子探し」など風情のおかしきものなるべし、是は十名以上十五名以内の少女を一列とし後の者は前者の肩若しくは其衣服を握り、其前列にあるものは牝鶏となり、其手を捧けて雛を奪はんとする鼠を防ぐ、後者若し躍脱して雛を捕へ、一たび其背を打ちたる時は其雛は鼠の有に屬し牝雞は之を列外に置く、斯の如くにして鼠は雛の全數を捕り盡すを以て此遊戲の終とす、次に

◎子探し

これは遊戲者互に其手を握りて環輪を爲し二名の少女

を選び其眼を蔽ひ、(甲)には球を持たしめ、(乙)の名を呼びて汝は何處に在りやと云ひて(乙)の所在を卜し、球を投じて之を的中せしむ、(乙)は(甲)の耳覺に觸れざるやう遁走して(甲)の呼びに應じ余此處に在りと應答す、若し(甲)彷徨して環輪の傍近に來らば適意の注意を與へて環輪の中央に踊らしむ、斯の如くにして(甲)は遂に(乙)に投球し、的中したる時は第三者代る、

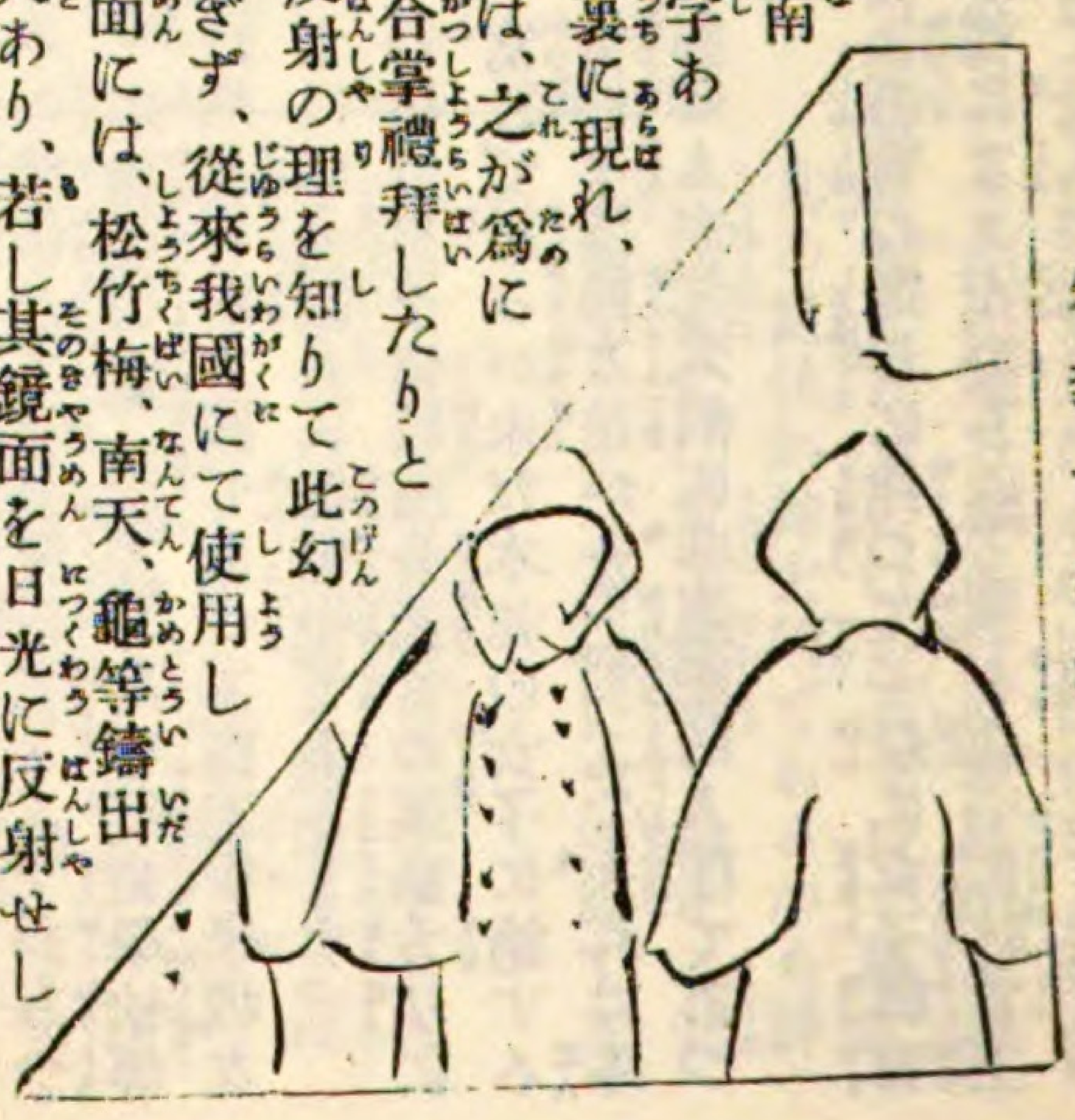
いとまき分銅



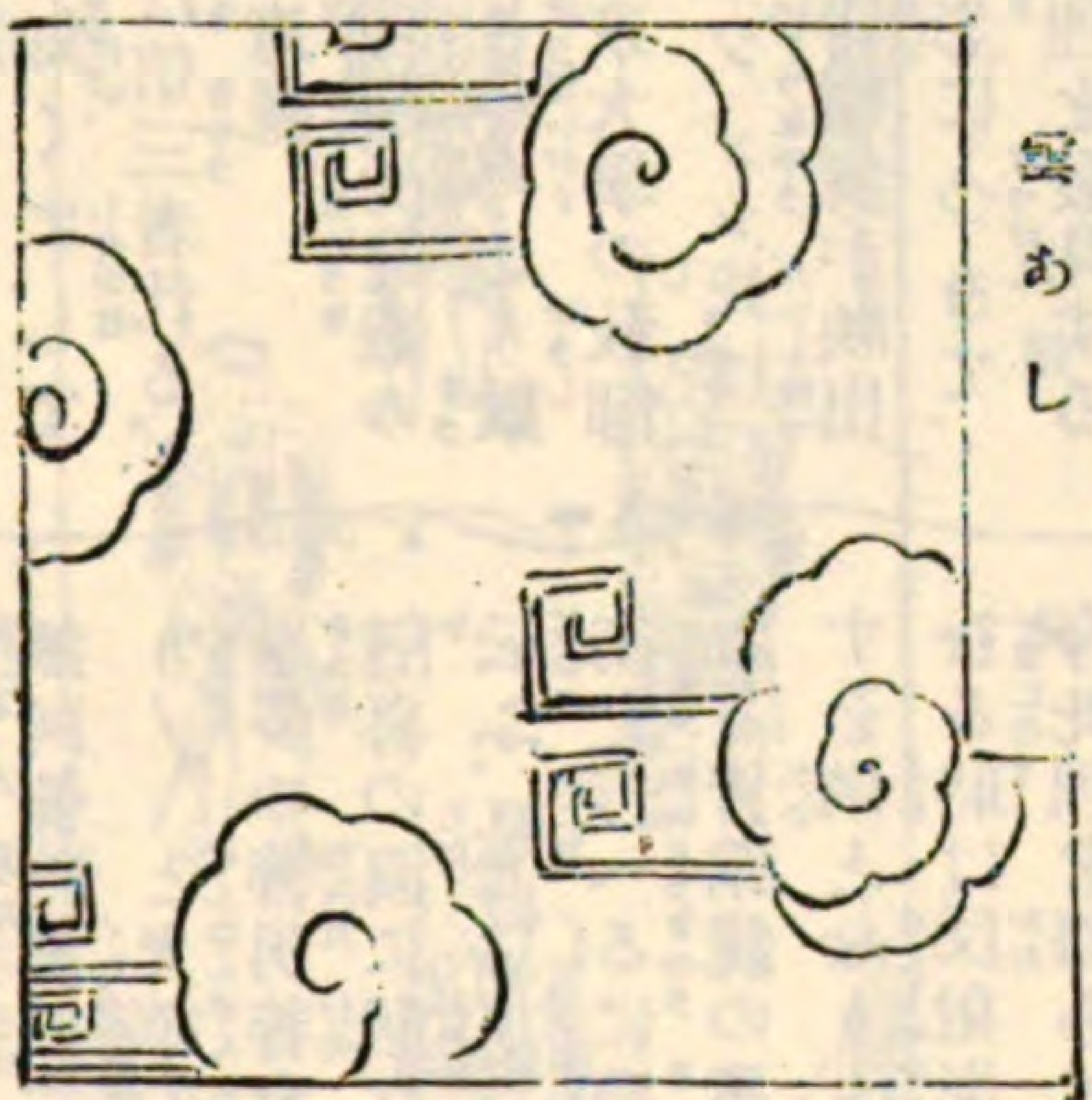
◎日本魔鏡

これは理學的遊戲の一法なるが今より數年前東京大學の敎師アトキンソン氏は、日本の青銅鏡が映出する幻影につきて、到底其理を發見する能はず、遂に某街の鏡師につきて其敎を乞ひたる一奇談あり、爾後泰西に於ては、日本魔鏡と稱し一時は大に流行したりと云ふ、又府下の某寺院にて狡猾なる寺僧は窃しく一面の青銅鏡を取出して其面を日光に曝らし、光線を壁上に反射せしめしかば南無阿彌陀佛の六字あり〳〵と光華の裏に現れ、衆多の善男善女は、之が爲に隨喜の涙に咽び合掌禮拜したりと云ふ、是は光線反射の理を知りて此幻術を行へるに過ぎず、從來我國にて使用したる青銅鏡の裏面には、松竹梅、南天、龜等鑄出すを例とせり、人あり、若し其鏡面を日光に反射せしむる時は反射影裏自から裏面の畵形を現出するなり、今此理を語らんに鏡の後面の凸起する部に對する前面に於ては反射力強く、凹下せる部に對する前面に於ては、反射力弱きが故に、其映出する影像中にも濃きものと淡きものとありて、後面の狀をあらはすなり、猶彼の鏡師が英人に答たる概要を摘んで記さんに、鏡影をして其裏に種々の形を映出せしめんと欲せば、先づ鄭重

外套するめ



に其鏡面を琢磨し、而して後酢を以て隨意に好む處の書畫を描き、更に水銀を用ひて能く全面を再磨すべし、左すれば鏡面より之を見るときは、些少の汚點を止めずと云へとも、酢は其筆跡をして隱然腐蝕する所なからしむるか故に光線の反射自づから他所に異りて、隨ふて其書畫を映出するものなりと、顧ふに斯の如き手段を施こさゞる尋常の青銅鏡にして、其裏面の畫像を映出するもの亦此理に外ならず、盖し鏡面を研ぐや、裏面の模樣を存する箇所は其殊に厚きを以て、自然研磨力を加へ得て、之を他所に比すれば必ず一層好く研磨せらるべし、故に其部分のみ光澤の自づから他に超越するものありて反射影裏に之を現出するに至るならんか


鏡あし

◎戸外遊戲の一法(庭球)

◎男子間に打球の競技が流行すると同時に女子學生間にもローンテニス(庭球)が盛んに流行する樣になりました。

◎庭球の最も勇者に富んでゐるのは華族女學校であッて、同校の中等學科以上は殆んど選手のみといふて宜しい程である。

◎是れに續いては女子高等師範學校附屬の高等女學校で其他各種の私立女學校でも盛んに此の遊戲を奬勵してゐるが、日本躰育會の女子躰操講習所などは頗る見るべきものがある。

◎庭球は單に女子の間のみならず、男子の間にも又隨分流行する傾があつて現に高等商業學校、高等師範學校等は斯界の兩大關であつて商工中學校などは昨今頻りに練習中であります。

◎扨て男子には隨分適當の運動方法に富むで居るが未だ本邦の女子に適する恰好な運動方法がなかつた、夫れは本邦婦人が先天的に非運動的人種であつたからでせう。

◎併し昨今次第に社會の進歩に伴つて一般に女子躰育の必要を感ずる樣になッたから庭球を第一に躰育上必要な遊戲として世人が認むることに進んだのである。

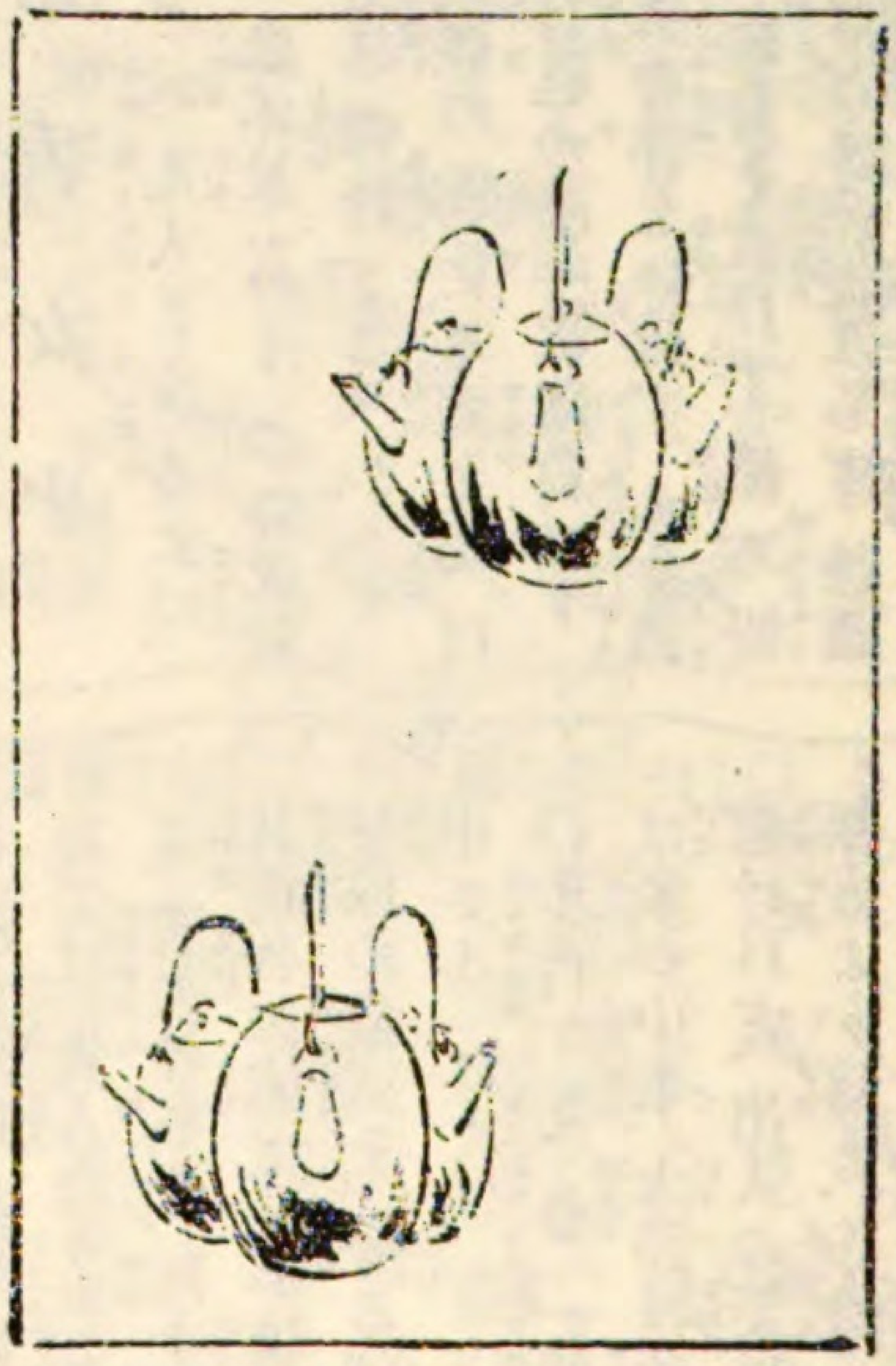
◎是に就ては華族女學校の姫君達が緋袴を股立高く、襷掛けてラッケットを手にして此の輕快な庭球に熱中したのを多しとするのである。

◎扨今茲に庭球に就ての二三の特色を申さうならば、野球、フートボール、クリッケットの様に、壯快な運動を見ることが出來ない代りに、これ等の様に戰闘的でなく、隨て殺伐の風は微塵もないのである。

◎夫れ故非運動的なる本邦婦人に運動の趣味と必要を感ぜしむる第一着歩として此の温柔閑雅なる庭球が流行する様になッたのは實に自然の結果でありませう。

◎現に端艇、自轉車、競走等は女子に不適當なるのみならず、有害なる運動としては識者は夙に排斥してゐる。

◎加之に昨今では柔軟體操まで女子には適當な運動であるとの議論も出てゐる。



よせどびん

◎庭球は野球其の他の様に多人數の競技者を要せず、少くとも四人の競技者現はるれば愉快なる數番のゲームを實行することが出來る、されば家庭的遊戲としては實に此の遊戲に越したものはあるまい。殊に其の競技が紳士的であるから紳士淑女には最も適當でありて球突のやうに不經濟不健康でない。

◎此の競技も亦野球のやうに身躰全部の各機關を遺憾なく運動させるのであるから頗る他の競技に優り、且つ決して他の競技の如く餘病を惹起すことはない。夫故男子間に野球が流行すると共に女子間にも學校のみとは云はず家庭へまでも庭球の猶ほ益々流行することを望むのである。



社交

交際の栞

翠香女史

交際欄を設たれは、何をかかけと云、凡人と交るには、座作進退ともに、其時處に依て、過不及なく、談話笑語も、相對する人に應じて、其適宜に從はざるべからず、晴なる席にも、怯する事なく、親睦の間にも禮を失はず、他人の煽動に乘せられず、自己の勝手に附會けず、世上雜話は面白くして慢に知人の非をいはず、人を遇するに親疎なく、初見の人にも、城府を設けず、然も慢に、心事を露出せず、一見識を有して、高慢ならず謙讓にして諂はず、俄の出來事に狼狽せず、機轉頓才ありて、人の擧動を見ては、疾く其情を察し、他の口吻を聽て、速に事を決斷するの明なかるべからず、是等の事、今更、事新らし氣に、記せずとも、誰人か知らざらん、然と雖、其何人も、知り拔たる事を、知らざるに似たる人、なきに非ねば、諄々記して以て、責をふさぐのみ

座作進退

座作進退とは、立居ふるまひ也、人に交るに、此法を克心得おれは自ら人に敬はれて、侮り輕しめらるゝ事なし、座作進退、法外に逸すれば、男子はともあれ、婦人としては、貴人たりとも、卑く見え、其素生さへ、推量られて、親夫の名を、汚す事あり、先其本式を克心得おき、而其場合に依ていか樣とも、斟酌すべきなり、敢て伊勢小笠原の儀式を、守るばかりが能にはあらず、先小口より中さん

◎歩行　凡疊一間を、六足に行を、程度とす、但し是は家の中也、大路は此限にあらず、席に依、一概には云難けれど、出入の要は、壁襖のある方より入て、出るは無方より爲と、心得て違ふとなし、敷居、緣を踏まず、物をまたげず、人に行逢ば、傍に避て通し、若人より讓らば、一應は辭すとも強られては、爭はず行べし、歩行態は、反らす屈まず、疾からず、遲からず摺足はよし、飛越る樣なる、足つきせず、足音の、高からぬを、よろしとす、手は内袖の口を持添て、前方、腿の附根邊に、兩手

共、指先を揃へて、重ならぬ程に置、前にて重ぬれは、何かを押へる如くみえて、フと人に笑はるゝ事あり、心すべき也

◎出入　障子、襖、開戸、何にても、始に、開てあらば、其儘にし、閉てありしは、必閉おくへし、主人方の都合有事なるを、猥に、開閉すべからず、扨開様は、障子、襖、ともに、先、其前に座し、左手を突、右手を引手にかけて、少し開かけ、下より、四五寸程の處を排て、徐々と、小襖ならば全、大襖は、二尺計開て、座したる儘、摺入、向直りて、又引手を、右にて引出し、若も、動きにくゝば、下を左に、持添て〆よせ、細目にあかぬ樣、些ホンと音をさせて、〆切べし、是行儀のみに非ず、惣じて、建具は、上方を持て、開閉せんとすれは、ガタヒシと軋れて、動きにくき物なり、建附はろき、戸障子にても、下四五寸の所にて爲は、克動くべし、たとひ我室などにて、立乍爲るは構はぬも、要は其、建具の、斜にならぬ樣、眞直の儘に、動かせは、克動く也、其爲に、引手あるにも拘はらず、樣を摑て、引よせ、手を引たる跡、細く明たる儘にして、おく、心なき人の、よく爲る事也、開戸は立なから排して、出入し、跡の風に煽がぬ樣、注意すへし

◎座　兩足の拇指を、重て座し、折々左右を、上下すれば、久敷しても、痺のきるゝ事なし、男子の如く、膝頭を、開べからす、近頃、女生徒輩、男めきて、膝頭を開き、座するあり、袴着たるは、まだしもなれど、袴なきは、甚見苦し愼むべし、手は袖口より、指先のみ、見ゆる位にして、膝上に置へし、

◎進退　進には、兩手を膝脇に突、身を少し、浮かす心持にして、すゝむ、退も又同し、然して、手の突方は、大指、中指、食指の、三ッとす、大指は延べ、他は四指共に、屈めて、三指大は、指の腹、人中は中節を、突なり、故に、行儀よきを、三つ指と、云習はせり

◎立居　先足頸をたて、而して、兩足一同に、立うちに、右少し先なるを、よしとす、人のなき方の手を、め立ぬ樣に　つきて、片手は、膝上の儘、立べし

居るは、其居べき處迄、歩行て、徐に座し、前の裾を、揃へて、左右へ程克出し、左右曠ければ、兩袖の袂を、左右へ、躰裁よく、出すべし、狹き席ならば、後の方へ、おくべし、席混雜して、人に踏るゝの恐ある時は、袂を膝上に、重ね置へし

◎客となりて、他家へ行たる時は、常の家ならは、壁を

掛て、案內を乞べしと雖、大邸は、玄關に、人氣なき事あり、さる處には、必、ベル、又は引鈴など、懸て有ものなれば、見廻して、ベルは押、銅線は、引て待べし取次出來らば、一禮して、來意を告、名刺を出すべし

◎坐敷へ通されたらば、主人の出る迄に、先其、床の掛幅を始、飾りある品々を、めをとめて、視察し、下坐の處に座して俟、主人出來らば、座を放れて、挨拶す、椅子の席ならば、即立て禮すべし

◎主人か、客に見せんとて、飾り立たる物を、知らず貌なるは、無愛相なれば、程よく稱贊すべし、然れとも、書畵の、作者の名、及時代、器具の名稱等、たしかに知れるは、云も一興なれど、おほろ氣ならば、中々に、間違を云て、笑はれんよりは、唯、感じたるさまを爲して、結構、見事、うつくし等にて、言すくなに、譽おくべし

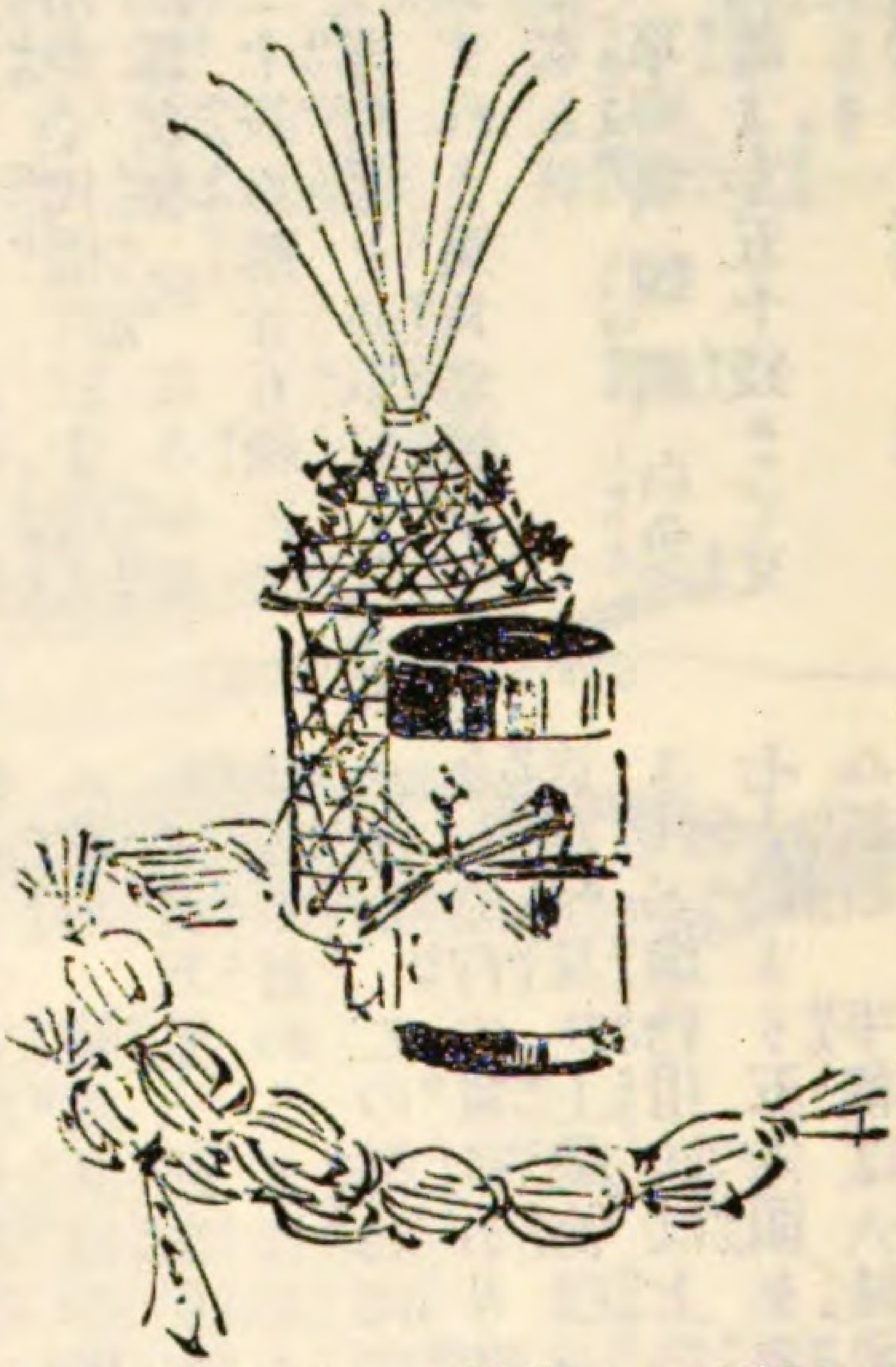
◎茶は必、一碗を、呑終るべし、底に少し、殘すべからず、若茶滓ありて、呑にくゝば、灰吹へ捨べし、それもなき時は、茶をよく啜りて、懐紙に、滓を取て、捻りて袂に入置べし、其儘におくは、失敬なるを、知らぬ人多きが如し、扨、まだ呑度思はゞ、茶碗は、元の如く、茶托にのせ置、もはや、呑まじと思はゝ、俯にして置、茶碗にても、酒の盃、猪口にても、俯におく時は、もはや足れりと、云に同じ、主方にても、仰てあれば、幾度にてもつぎ、俯たるには、つがぬが禮也　（未完）

音問物の贈答の事（年首の贈り物）

人間は社交的の動物なりと申せば何となく青書生の口吻めけど、是れは希臘の大賢、ありすとーとるが二千年前に言はれた名言であッて、今も猶いき〳〵として世に用ゐられてゐる言葉である、人は生れて死ぬるまで人間の中にくらして行くのであるから何事も人と人との關係で事がきまるのであります、これを思ふたらば、人間は交際といふ事が第一であるとの義も自ら分るのであるが、扨て交際と申せば直ぐ金錢の費える事のやうに思ふ人もありますけれどもこれは未だ盡さない考へであります、交際は人間の間柄を殺風景に了らしむるのを豫防する具で、人間の處世上には欠ぐべからざる所ろのものである。そこで從來我國の婦人と申せば全く蟄居的で、其の領分は唯家の臺所か一家の室內に限られて、外の交際といふても僅かに親類か極したし

い二三人のお友達か乃至は向ふ三間両隣に限られて居ました、それゆえ俗に婦人の交際談話を井戸端會議など〻見くびつてゐた風がある、甚だ侮蔑した言葉であるが、日本の婦人が蟄居的で、交際の區域が至ツて狹かつたからである、併しこれから婦人の地位を高むるに就ては是非とも其一要件として交際の領分を推し擴めねばなりません。

扨て交際と申しても其仕方は色〱あるが、彼の男女交際など〻いふ西洋風の交際を直ぐに實行するといふ場合には未だ至らないから、婦人は婦人で兎に角家庭的の交際を擴張したいものである、扨て家庭的の交際、これにも色々あるが音物贈答は實に其の重要なものである、男子は職業の爲め、女子は家事の爲め、それ〲平常はなか〱多忙である、其の多忙の爲めに平素兎角無沙汰勝となるので、其の無沙汰はつまり疎遠の始まりて、交友の情も漸次に薄らぐのを免かれない、と言つて貴重な時間を欠いてまで外の交際ばかりしてゐる事も出來ない、殊に婦人の身であれば猶更の事、それゆえ茲に音物の贈答といふ事がある、音物は唯一片の品物たるに過ぎないが、其の品物はつまり贈る人の志を籠めるので、そこに人情の美も見ゆる、一年三百六十五日疎遠に打過ぎた中も一片の年首狀で御互の志しが見ゆる、況して歳暮、年首の贈答品であれば、譬へ干鮭一尾でも、久濶の情は十分言ひ顯はして平素打絶へた交情を温めるの媒となるのである。況んや其の贈答品が海山の珍物であるに於てをや。今左に年首贈答品として普ねく通用する品物の數を示して見やう。



△煙艸　舶來葉巻の煙艸には二十五本入にて金十二圓五十錢、一本五十錢といふもあれど斯くの如きは少しく贅澤に過ぎて需用者も少なかるべければ十圓以下のものを記せばプリメラー（二十五本入四箱）十圓特製

エキジスト九圓アルフオンソス七圓五十錢ハイライフ七圓ペリオル百本入三圓なり他は略す○猶舶來紙卷莨はカメチ一箱（十本入五十個）三圓七十錢キング三圓八十錢バツトルアツキス二圓二十五錢ピンヘツド及びオールドは一圓七十五錢位なり○刻煙草は長崎、水戸、秦野、薩摩、阿州、備中、備後、伊豫等いろ〳〵あれど進物用には水戸の本廣雲井最も需用多く代價は三十匁入一個三十五錢普通三十錢又長崎は五十匁包なるが鳳凰印五十錢二羽鶴四十錢一羽鶴三十錢舞鶴廿五錢にて其他は種々あり桐箱に水戸、長崎、秦野等を躰裁好く入れて一圓以上三圓五圓のものも調製すれど兎角卷煙草に壓さるゝ氣味ありて注文する者少なし

△佃煮其他　海老、沙魚、蛤、アミ、車海老、蜆、鯛、白魚、蛸等を躰好く曲物に詰めたるは六錢より五十錢まで又折詰は十五錢より一圓まであり

鮒の昆布卷は十錢より十五錢二十錢三十錢五十錢おなじく雀燒は十五錢より一圓まで同甘露煮は一折十五錢位より五十錢沙魚の酢漬は二十錢より一圓まで日光唐辛は十錢より二三十錢にてあり

△新鮭と鱈　本場物の入荷は少なけれど相場は昨年に比して稍安き方にて直段は上等一圓に付一貫三百五十匁よりあり鱈は一圓に六本内外されば小賣店の相場は鮭が五十錢以上一圓位まで鱈は二十三錢より二十七八錢なり

△海苔　昨春より三割方安く一帖三錢よりあり極上飛切にて十五錢大判物にても十四錢より十八錢止りなり

△雞卵　鐵馬其他の廣告にも見ゆる如く小一錢五厘より二錢五厘三錢止りあれば五十錢以上の函入ならば一寸躰裁好かるべし

△鰹節　この進物には首を傾ける人もあれど一昨年頃より流行の氣味あり昨盆頃に比して稍下落したれば伊豆房州及ひ上總物は一貫目三圓五十錢より四圓位なりされど進物用には上等を用ひる事なれば箱入にして六七十錢より五六圓を要す

△紙類　半紙は一帖飛切上等四錢よりあり上は三錢五厘並三錢にて改良半紙二錢五厘より二錢一錢五厘藁紙一錢五厘より一錢七八厘なるもあり又半切に添ふるにライスと稱する二重狀袋二十枚乃至三十枚を添へ彩色畫の袋に入れたるなども躰裁よろしかるべし

△石鹼　舶來なれば三個入三十錢より三圓位までの品

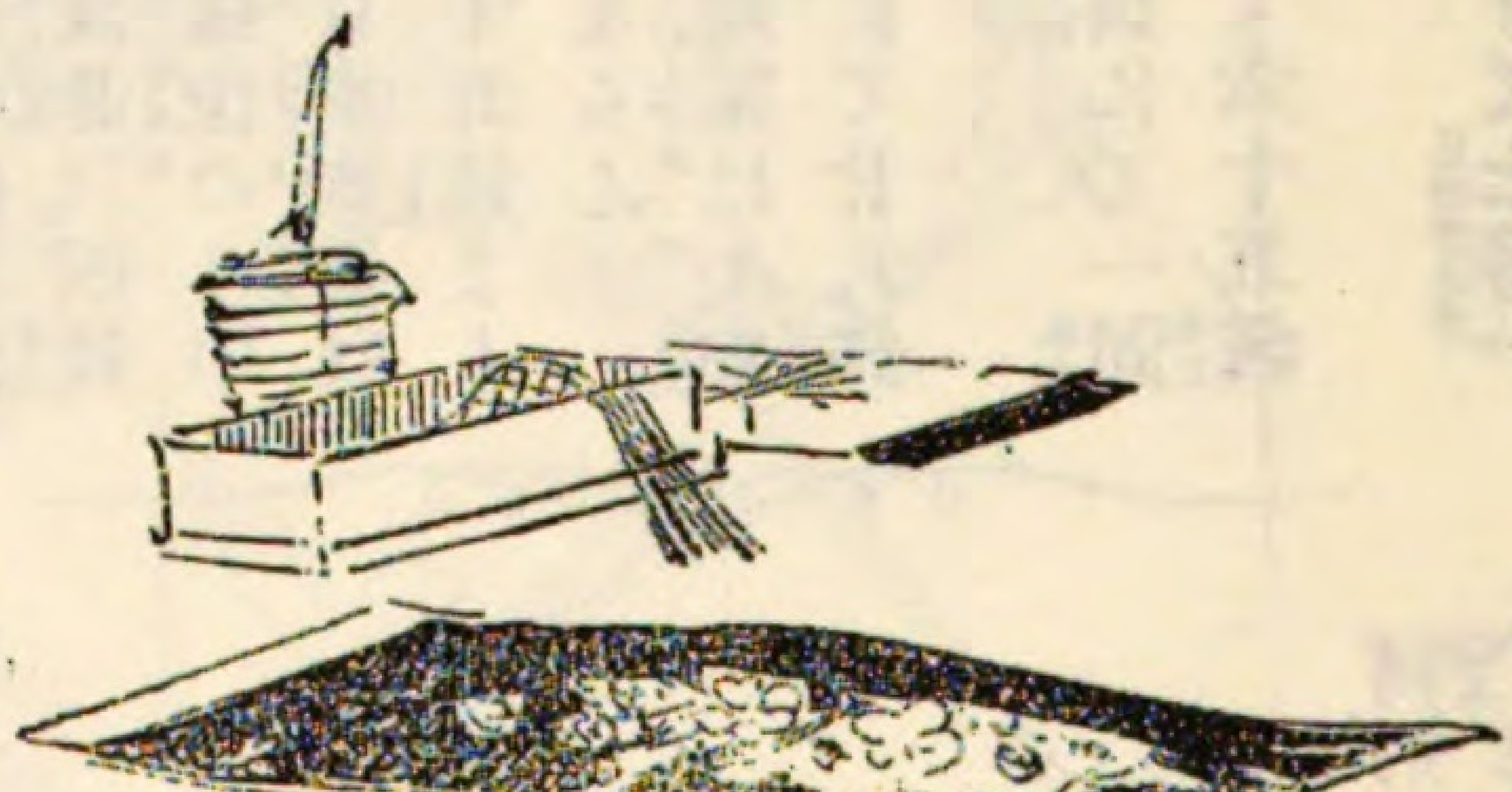
あり和製は數多ければ一々記さゞるが一個七八錢以上なれば進物に用ひらるべし

△雲南麝香　これを進物にせば五十錢包よりあり一圓一圓五十錢より五圓位に至らば婦人の遣物に宜しからん

△時計類　めざまし時計は一圓位より一圓五六十錢置時計は二圓以上五圓まで位なるが昨今流行の獨逸シェーマック商會製造オルガン入は五圓二三十錢にて却く優美高尙なり

△寫眞ブック　安きは三四十錢より二圓三圓五圓十圓等いろ〳〵あり

△ハンケチ類　絹製上等は西陣織模樣物にて紋羽二重多く上州邊の產九分を占め居れり代價は尺三が二十五錢より七十五錢尺五が四十五錢より九十五錢尺七が七十五錢より一圓二三十錢以上大きさに依り三圓五十錢まであり又キヤラコは一打に付尺物二十五錢よりあり一般に昨年より高直なり但し右の函は並三錢より十五錢まで位あり



△砂糖小賣相場の標準は天光一斤十錢初雪十一錢花見十二錢上三盃白十二錢極上三盆白十二錢五厘上々三盆引十錢五厘上玉八錢五厘の見當なりされど同じ名の品にも上下あると勿論なり尤も近年は二斤袋へ一斤半位を入させ袋ぐるみ一斤半の代價を拂ふ人多くなりたりとぞ箱入は杉箱二斤入十八九錢より五錢增位にて種々わり七斤入にて一圓內外の進物出來る由なり又樽詰は近年大いに流行し初めたるが樽の代大は十錢小八錢位なり

△氷砂糖と角砂糖　氷砂糖は一斤に付上二十錢並十八錢位にて箱入は三十錢以上三圓位まであり角砂糖は一斤十三錢珈琲入も同樣なり

△青鴨と小鳥　鴨は品拂底にて相場非常に高く上物一番一圓七十五錢次即ち尾長鴨一番一圓三十錢よし鴨一番九十錢赤鴨俗に緋カシラもよし鴨と同樣なり又小鴨は一番二十八錢以上雁は一番二圓三十錢大雁俗にヒシクイは一番三圓五十錢雉子と山鳥は何れも一圓四十錢鶉は二十五錢鴫と鳩は何

れも十八錢位なり青籠は一個三十錢なるが青鴨一番を入れ芹柚子慈姑などを添へて体裁よく調製すれば二圓二三十錢を要す

△菓物　林檎は近來舶品と稱するも盛岡信州地方産多く昨今の相場は柳玉上等一個十二三錢並物四五錢又ダランと稱する青く長きものは一個上七錢並三四錢にて青籠に入れたる四五十錢より一圓五十錢位のものは出來合あり猶又米國産蜜柑は一個十二錢日本蜜柑は平籠に入れて十二錢より二十五錢髯籠入は十五錢より五十錢それより上は箱にて進物とする方可ならん

△鑵詰物　福神漬は大十六錢小八錢海苔の鑵詰は矢羽印の上等二十五錢次もの二十二錢鮭は平鑵にて廿八錢猶鱒、筍、松蕈、牛肉等種々あり

△手袋　舶來毛織六十五錢より八九十錢革製にて一圓五十錢より二圓七八十錢婦人向なれば毛にて六十五錢より絹にて七十五錢より一圓四五十錢まで

△メリヤスの襯衣　裏毛は七十四錢よりありて上等一圓八十錢位までなるべし但し一圓以上なれば舶來品を求むるを得べし

△婦人用懷中化粧具　櫛、鋏、鑷、小刀、耳かき、香水等十餘種の品を入れたるものにて代價四五十錢よりあり一圓二三十錢以上には上等物いろ／＼あり

△ノートブック　學校生徒などに贈らば好からん安きは一冊十錢位よりあり二三十錢以上なれば上等なるべし

美は唯詩歌の中に花咲く　シルレル

美は眞なり眞は吾人が此世にて知る所は唯是れのみ知るを要する所は唯是のみ　キーツ

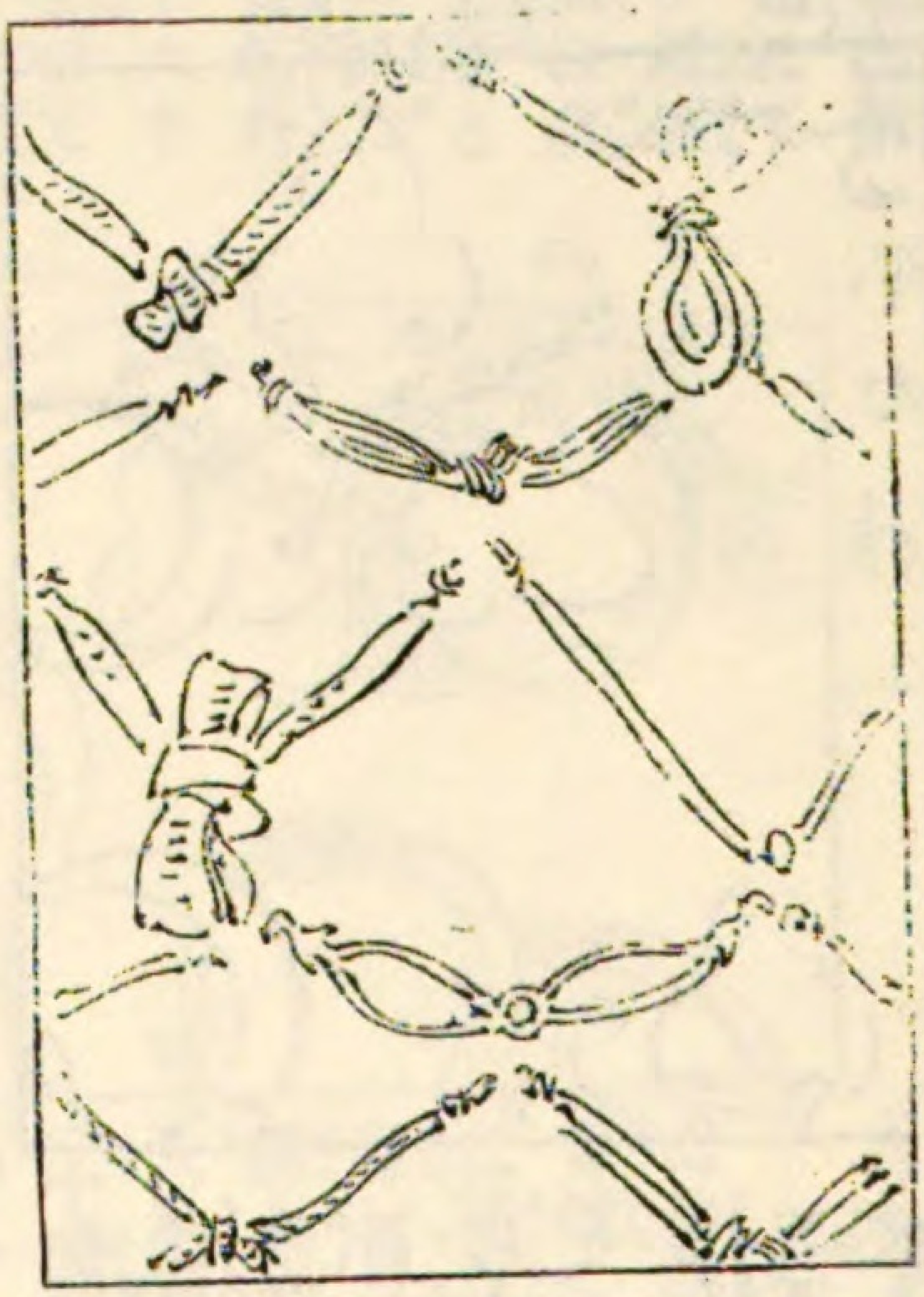


流行

流行の春着

○男子向禮服（三井好み）

△上着は腰熨斗目にして地色は縹或は納戸色にして紋は織縫ひ又は定紋を織り出すもよし△下着素鼠の羽二重の通し無垢二枚△長胴着は下着と同じ羽二重にて素鼠色△長襦袢胴は長胴着と同品同色にして袖は大幅縮緬の無想仕立、胴と同じ素鼠とす以上代價（百圓位）△羽織地質は鹽瀬染色、紅下染め極上の檳榔子染、紋は五つ（其大さは一寸一分）△胴裏は繻珍織又は時代緞子にして其模樣は有職模樣（以上三十五圓位）△袴地質は茶苧縞柄は薄鼠の棒縞或は鎧縞にして裏は松葉色玉蟲の茶苧を用ふ（三十五圓位）△帯は本博多の白献上を用ふ（八圓位）



○同上略服

△上着は黒羽二重小袖紋五ヶ所（其大さ鯨一寸一分）△下着上着と同樣鼠羽二重の通し無垢二枚、長胴着と襦袢は下着に同じ（以上代價九十圓位）△羽織は黒羽二重紋五ヶ所（大さ同上）、胴裏は繻珍織或は時代緞子（代價三十圓）袴博多平或は仙臺平縞は薄鼠の變り小立、素鼠棒筋又は細き松魚縞裏は鼠甲斐絹或は黒甲斐絹を用ゆ（二十三圓位）△帯鹽瀬の無想羽織模樣は白上の富士（四十圓より五十圓位）綴織錆白茶地亂立縞（十八位圓）又

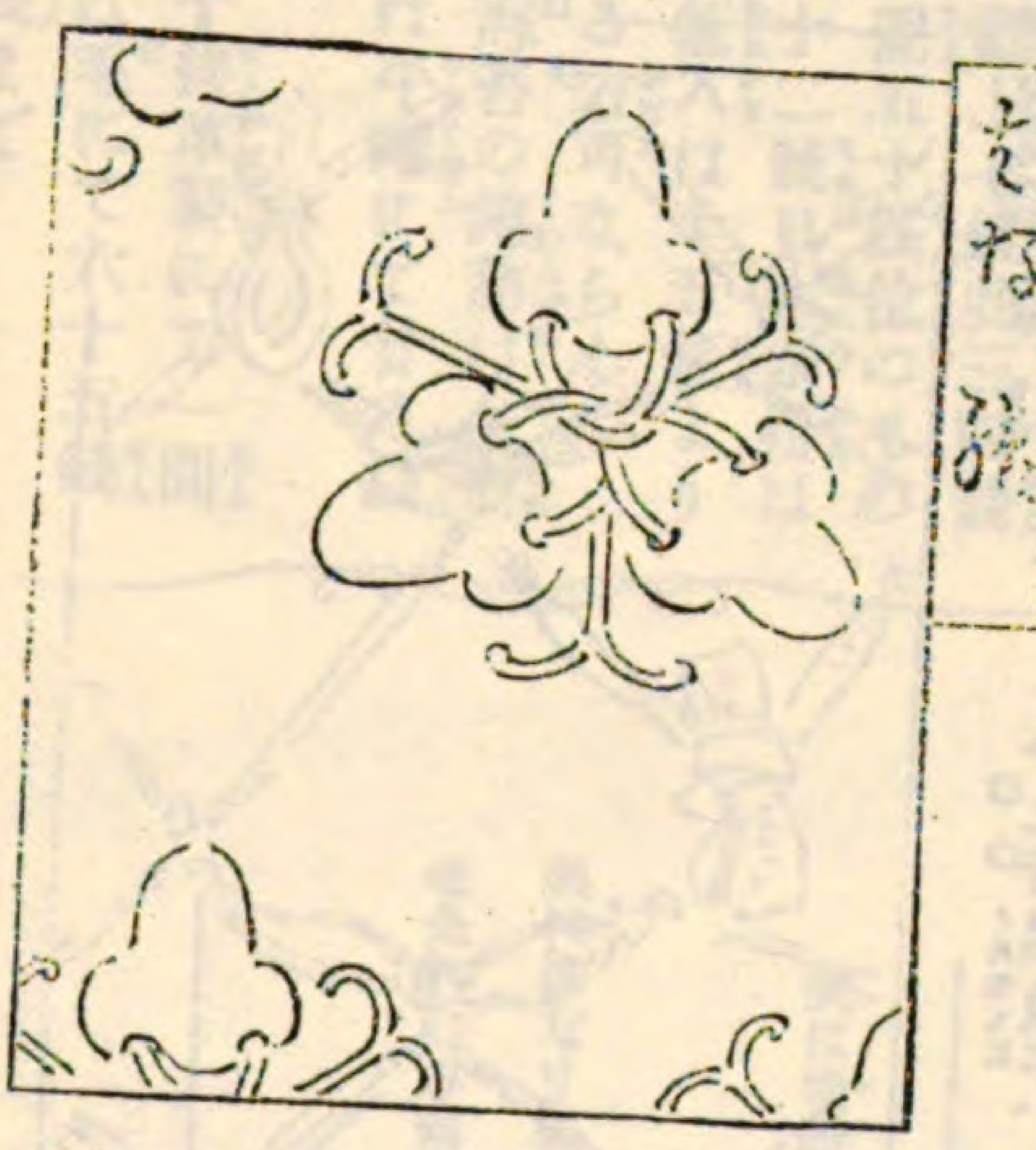
◎其次の男子向

△上着黒魚子、△下着風通糸織の通し二枚、何れも裏は褐色絹にして袖口は黒八丈（六十圓位）△胴着更紗縮緬更紗魚子、羽二重にて半胴着仕立、△襦袢鼠縮緬、裏は白絹、半襟は黒八丈（三十圓位）△帯繻珍織銷茶地友貫小寳、或は遠州模樣（十圓位）△袴茶苧の單（無想（三十

圓位）又其次の男子向としては△上着平御召、綾織、風通織の三紋重ね上着も下着と對にして裏は褐色絹（五十五六圓位）△胴着更紗縮緬裏は素鼠絹△繻袢も上の胴着と同じ袖は更紗と無地とに染分けて無地を袖口にす（二十五圓位）△帶和蘭織或は博多の茶獻上（八九圓位）

◎婦人の禮服（大丸好み）

十七八の令嬢方なれば先づ上着は濱縮緬の紅鳩羽か、薄牡丹、櫻鼠等の高江戸棲にて、晝夜染の下色は薄鼠地に菊の見切りを付くれば四君子、又松の見切ならば光琳の竹に梅、定紋の見切なれば景色風の模樣にて、當時ぼかしは流行せず、扨紋の大さは鯨の一寸位、五つ紋なり、下着は上着と同樣胴拔二枚、胴は紅絞りの紋羽二重か又は友禪の紋羽二重にて胴拔は三枚とも上等の紅絹にして此の總計代價——八十五圓より九十圓位まで。



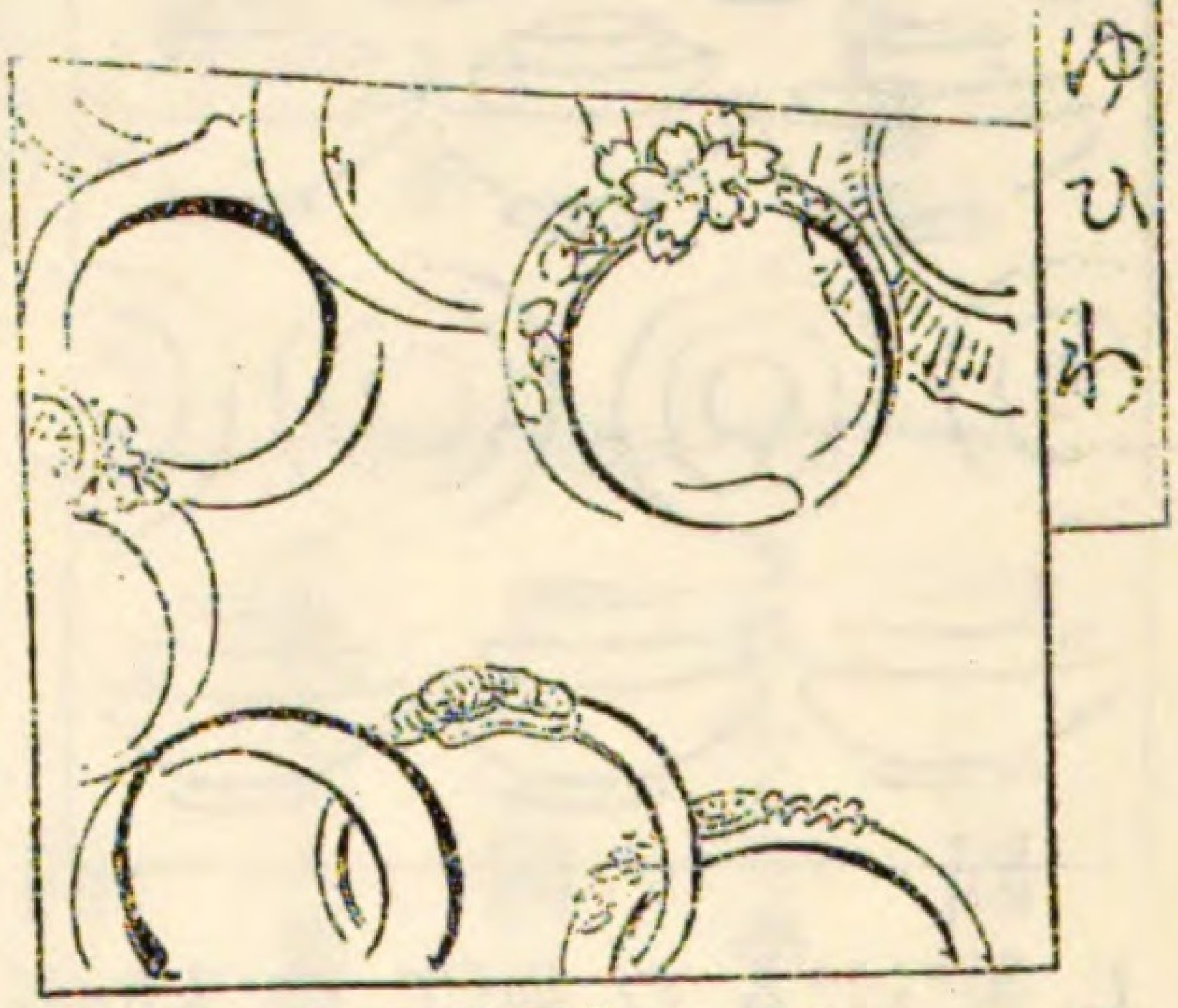
△長襦袢は紅か緋、亦は紫、牡丹色等の紋羽二重にて模樣は胴拔染胴形は、千羽鶴、廻りは草花かさなくば紅地正多形の總形にて千羽鶴の地拔にす、襟は縮緬の牡丹色に菊、若しくは淡泊に牡丹を白拔きにするを宜しとす、裏は紅絹にて袖裏へ緋縮緬を付けて代價——二十五圓位。之は年齢二十歳位までの好みなり。二十六七歳の處を言はゞ黑縮緬の五つ紋、紋は矢張り一寸位裾模樣は奴棲にて模樣は詰合の寄松葉か又は詰合の菊なり。△下着は利休鼠かお召し鼠生壁鼠等の胴拔二枚、模樣は上着と同樣、胴は淺黃かひわの絞り、紋羽二重、裏は何れも上等の紅絹として出來上り——八十圓より八十五圓、△長襦袢は紅鳩羽か、紅久留米の絞りの紋羽二重で、模樣は繪羽染——白の鹽瀨に小菊の縫入をしたる半襟をかけ、緋縮緬の袖裏を付けて、胴裏を上等の紅絹にすれば——二十四五圓なり。

△帶は十七八の令嬢方にては繻珍織の黑地か御納戸地へ古代有職金銀糸入の裏ふき模樣か八かま位の菊の蝦

火錦の模樣物ならん、代價は――三十圓より四十五圓位にて種々あり、二十六七ならば白茶地に島襷又は龜甲の內に鶴などの模樣にて何れも撚金入代價は四五十圓なり。

◎婦人の略服

以上禮服より少し略せし處、儀式、他出兩川兼帶に成るべきは、十七八の令孃にて上着は風通お召しの小紋へ三つ紋の縫紋をなし、縫紋は菅縫か織縫にして柄は高砂小紋草花小紋等宜しく、下着も上着と同樣小紋の胴拔二枚にて胴を絞りの紋二羽重にし、裾廻しに櫻鼠か薄小豆牡丹色等の縮緬を付くれば出來上り――六十五圓位　長襦袢と帶は前同樣なり、上つて二十六七の方にて上着は風通小紋の薄色小形にて三つ紋の縫紋となし下着は上着と同じく小紋の胴拔二枚にして胴は色變りの紋羽二重裾廻しは御納戶か勝色の質素なる縮緬を付け胴裏は三枚共紅絹の上等にて――六十五圓より七十圓、それより一段年上にて三十位の細君にて少し澁き好みなれば近頃大流行の大島紬にて龜甲形か、其外何か變り絣の三枚重ね、それへ勝色絹の裾廻しを付けて胴裏を上等の紅絹にして六十五六圓より七十圓、令孃羽織は先づ紋羽二重か紋鹽瀨の五ッ紋色は紅葡萄か紅鳩羽にて裏を紋羽二重紅地の古代形にして廿二三圓なり。



◎反物の相場

△絹物　京糸織（八圓より十五圓まで）高貴織（十五六圓より十八九圓）繋糸織（十二圓以上十七圓）市樂織（十圓以上二十圓まで）吉野織（八九圓）平御召（八圓以上十六圓まで）大島風通（十三圓以上十七八圓）大島紬（十四五圓より二十圓位）米澤糸織（十圓前後）米澤琉球（五圓以上九圓）結城紬（十一二圓）銘仙（五圓より八圓）秩父（四圓より六圓）

△木綿物　瓦斯二子（一圓五十錢より三圓）琉球絣（二圓より三圓）新大島（二圓より三圓）諸二子（二圓より三圓）新紬（一圓五十錢より二圓）

▲裏地　花色二羽重（十五圓より十八圓）、勝色羽二重

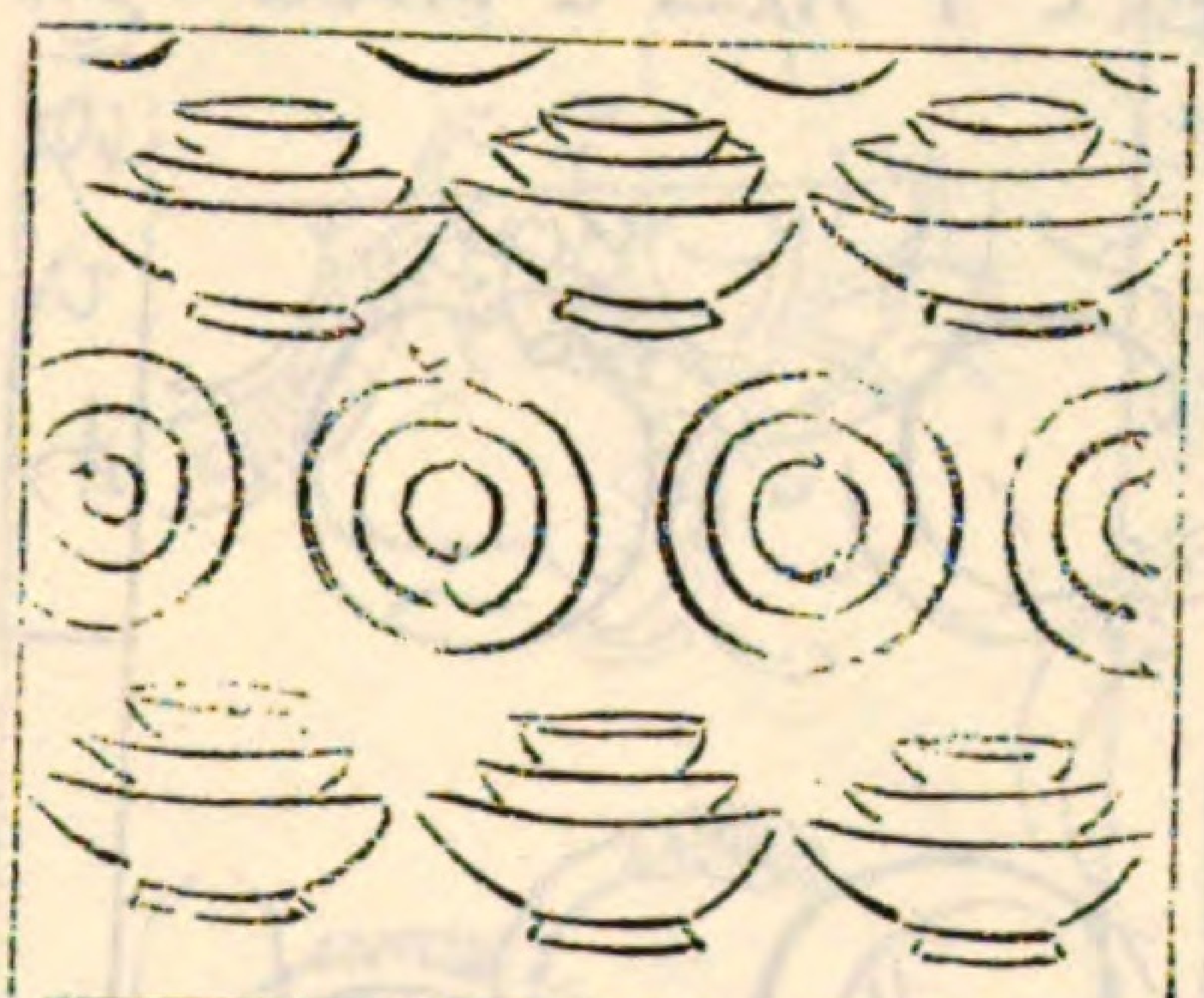
（十五圓より十八圓）花色根古屋（五圓より七圓）羽二重紅（十圓前後）本紅絹（五圓以後）改艮紋絹（二圓八九十錢より五圓）勝色根古屋（六七圓）

△羽織の裏　繻珍緞子（六圓より十五圓まで）琥珀緞子（八圓より十五圓）羽二重更紗（五六圓）無地琥珀（七八圓）支那緞子（五圓以下）無地甲斐絹（二圓五十錢三圓五十錢）綸甲斐絹（二圓五十錢位）色紋羽二重（五圓前後）

流行の美術裝飾品

◎指環　昨今金無垢の幅廣無地又は彫刻物などは野卑なるものにして棄てられ寶石入ならでは用ゐるものなし中にも貴金屬類は極めて細き赤磨き又は光澤消を用ひ一見指上にて寶石のみ光り居るかと思はしむる寶玉形、若くは佛蘭西形最も流行し日常認印を使用する官吏、會社員の如きはバネにて寶石の箝めある部分を押せば裏面にある印面現はるゝものを使用せり、之は實用に適し且つ優美なり

◎帶止　紐は繻珍鹽瀬の刺繍等にして金屬に大金を投づると相變らず大流行なり、去る天長節の夜會に某子爵夫人の用ひたる金剛石入激浪高彫の金屬は三百五十圓なりしといふ以て其一斑を知るべし。



◎簪　珊瑚珠、堆朱、瑙瑪の玉附は昨今廢れたりといふにあらねど近來は金製にて、寫生物の丸形彫刻類に寶石を付し髷にも束髮にも用ひらるゝもの大流行なり

◎胸飾針と襟留　金製彫刻品若くは極めて細き爪にて留たる寶石入金物に限るが如し又寶石入の金屬を螺旋にて指環帶止の金屬、簪の玉又は襟止などに兼用するもの少からず、其他手釦は鎖附にて夫婦形と稱する兩前物流行し卷莨入は鰐皮製のもの多し總じて昨年に比し最も著しき變化は指環、腕飾、帶止等に金剛石よりも上等の眞珠を用ゆるとなり

才媛詞藻

歌の栞

佐々木信綱先生選評

女學世界の初すりをことほきて

奈良　大桑いよ子

さきいてしこの一もとのゆかりにそ
もゝちの花も春をしるらむ

同

奈良　師岡伸子

すゝみゆく年のはしめにをみなふみ
つとへしふみのいつるめてたさ

同

奈良　西川いと子

たちのほる光まはゆくかゝやきて
世界をてらす女ふみかな

同

奈良　森　とみ

をみなこの道をゝしふともしほくさ
かきあつめても見するふみかな

同

奈良　三田村てる

うれしくも學ひの枝折いてにけり
しら[illegible]山のはなもみるへく

同

奈良　池内たみ

千代までも榮えゆかなむ女子の
文のはやしの道しるへして

同

奈良　都筑みね

年ことにいやさかゆらんをみなへし
ひろき園生もところせきまで

雪中竹

くれ竹の直なるふしも撓みけり
　いやつもりたるけさのみゆきに
　　奈良　師岡伸子

同

しけりゆくみ園の竹のいろそひて
　うれしきふしにつもるしら雪
　　奈良　西川いと子

雪霜にいろもかはらぬ竹垣の
　めぐれる庭に千代そこもれる

初冬雪

めつらしとむかふまもなく我庭の
　ゆきの初花ちりみたれけり
　　奈良　土井しげ

雪中竹

うつもれてけふはむなしくくれ竹の
　あすの朝日を下にまつらん
　　奈良　樋谷きく枝

同

庭のおもにめなれし竹のめつらしく
　見ゆるは雪のおしたなりけり
　　奈良　矢追たを

同

いやかうへにふりそふ雪にたわみつゝ
　下折れぬ竹のふしぞめてたき
　　奈良　椿井くに

同

なひけとも下をれはてぬなよ竹の
　みさをは雪のいろにきほへり
　　奈良　前田さだ

同

ふりつもる雪にうもるゝなよ竹の
　みさをはつひにかくれさりけり
　　奈良　都筑みね

新年雪

たらちねのいさめもきかて初雪を
　袖にうけしもむかしなりけり
　　奈良　井上操

同

けさのみはなれにし庭も玉しきて

ふみわくるたにたゆたはれけり

同　　奈良　扇本おとめ

降りつもる雪にみとりのいろましてけさめつらしき門の松竹

同　　奈良　山口きみえ

あら玉の年たつけふのうれしさにそへてつもれる庭のしらゆき

同　　奈良　森家とめ

かと松にたてしその枝にふりつもり千とせの花と見ゆるしらゆき

新年國旗　　奈良　池田よし

家ことにかゝけていはふ旗の手になひかぬかたはあらしとぞ思ふ

同　　奈良　井上操

あら玉のひかりあまねき朝日かけ世界のいつら隈かあるへき

新年外征に從へる人を思ふ　　奈良　大桑いよ子

ものゝふのいかにか年をむかふらむさゆるあれのをおもひこそやれ

國旗

はたの手に昇る朝日の影とめてひかりにもるゝ國はあらしな

草も木もなひきわたれる時津風うつろふ旗に朝彦のかけ

新年外征の人をおもひて　　奈良　槌谷きくえ

親に子にわかれてひとりものゝふはいかにさびしきとしむかふらむ

奈良縣高等女學校生徒の歌を閲して　　竹柏園主人

いにしへのならの都に言の葉の花よ二たび匂へとぞおもふ

もえそめし若草山のにひくさに

花さきいでむ秋をまつかな

雪中竹　米澤　蘆川澄子

世のうさをいさしら雪のいさきよく
八千代をこめし御園生の竹

同　米澤　蘆川澄子

雪つみて伏せりとみればまた起きね
みさを直なる千代の呉竹

同　米澤　北澤ゑい子

なよ竹の身にしら雪をいたゞきて
折れぬや千世の姿なるらむ

元日　米澤　馬場はる

若水をくまましものとたちいてゝ
まづあふきみる今朝の大空

雪中竹　米澤　馬場はる

ふりうつむ雪にたゆまぬくれ竹わ
千世のためしのすがたなるらむ

同　米澤　富永なつ

もゝしきや竹のみどりも埋もれて
千代をこめたる今朝の白雪

同　米澤　大熊信子

ふる雪に折れぬ操をしめしつゝ
色こそまされ御園生の竹

文の葉

中村秋香先生選評

○轟きのたき　國學院　小野芙蓉

思ふとちかいつらねても、山に花見けるかへさ、轟ぎのたきこゝより程近しと聞きて、見ざらんはほいなかるへしとてあないせさす、嶮しとにはあらねど、苔のほそみちふみわけ行くほど苦しからずしもあらず、や

ゝたとりゆけばほのかに瀧の音のきこゆるに人々顔みあはせてぞうちゑむ、とゝろぎのかねはおとろ〳〵しけれど、聞しにも似ずいとわづかに水のおつるなりけり、たきつぼとおぼしきわたりも埋れて、そのかたへにすゝけたる地藏ほとけのたゝせ玉へるもゆゑありげなり、おないせるおうなの髮のよもぎのやうなるに問へば、さすがにけしきつくりていざかう年老いほけてはなに事をかはとおぼめくさまの心ありげなれば、せちにせめとふに、ひかおぼえもこそとてうちかたる、いかに聞えさせけん、おん名ぞふとしも思ひ出られぬ、いつの頃にか、このわたり領じて時めきたまひしとのおはしき、そのあととていまもかしこに殘れるは、と一もとの松たてる方をゆびさしてさてかへるは、そのおんむすめ一方おはす、またなきものはおほしかしづき給ふこと限なし、されど姫君はをさ〳〵人にも見えたまはす、ひたやでもりにのみおはして、たゞ和琴をなん明暮のかたらひがたきはなし玉へりける、そのころよろつにはなやかなるおんあたりにて、松とのと聞えしは、山の彼方を領し給ひしがいかにもしてこの姫君の家の領知をも取り侍んものをとみそかにたはかり給ふとも、いかてか知らん、女君もやう〳〵おとなひ給ひければ、父母の君たちいかてこれによきむこ君をも心かけたまへりしか、かの松殿の次郎君にて、限りなうかなしきものにし給ふなる鶴若との御文もて來て、いかでと中すものありしかは、親君たちよきえにしぞとよろこひ給ひて、そのよし女君にかたらひ玉ふに女君はたゞ尼法師となり世に出てまじらはじとこそおもひ玉ふれ、いかでかさることはおもひより侍るべき、とて更にうけがひ給はず、さるは凡心のうちにはかうみにくき身をさばかりせちにのたまふは、吾によりてつひに我か家を領じとらんとたばかり給ふにこそとおぼし玉ふよりのことにて、これより後はいとゝ世をものうきものにおぼしけり、まことやおんすかたたとしへなうみにくゝおはしけりとかや、人のものいひさかなさよされど父の殿のおん心にては、とづかぬほどのはづかしさにかくはいふなめりとて、うち〳〵にはもはらそのまうけをいそき給ふ、其日と定められし日をあすといふよのほどに、女君はみそかにおんやかたをばしのひ出で給ひぬ、頃しも秋のなかばはすきたれと、月はくまなうあかき

に、ふみもならはぬみちしはの露にはかなき上をおほしよそへて、とゞろぎのたきさして行きたまふ、かけまくもあやにかしこかれと、花山の帝の內裏いてさせ給ひけんにもまして、心のうちいかなりけん、おしはかられてなん、

聲を帆にあけて空とひ渡る雁を見たまひても、つらをはなれてとたらちねのわがなきあとにしもいかに歎かせ給ふらん、不孝のつみはさりかたけれど、つたなかりしすくせのほどとおほしてと心にうちねんじつゝ、たき近うなりぬ、山もゆりぬべうなりとよむ瀧の水うち見るたにもかみのけこと〳〵たちぬへきを、あはれたちまちうたかたの泡とは消え給ひにけり、

わすか河のふちせさためず、入り玉ひけん瀧もほそりておちぬさまになりにしのち、この近き里にはらめりける女ありしか一夜そが夢に見え給ふやう吾かためとゞろきのたきに地藏符まつれ、とのはらみたらん女の限りまもりてん、とありけれはさめてこの事かならすなしをへんとて、やがてかこやかなる堂たつものたてゝ地藏をばすゑ奉りけるなりとぞ、近き頃まていとたふとくてをがまれさせたまひしが、いぬる年の炎上にやけうせて、とはならちかみてかたちいて哀れなれば誰も〳〵空に知られぬ春雨に袖ぬらしつゝやをらぬかつくほど、この物かたりに日かげうつりて、長き春日もやう〳〵くれはてぬらん、山寺のかねたゞらもとになり渡りぬ、

○秋の夕

岡山女學校　小野秀代

大かた秋はものかなしきならひなるが中に、夕ぐれことにはいとひしらぬ、空の景色もたゞならす、雲間を渡る雁がね、くさむらにすだく虫の音、見るものにつけきくものにつけ、いづれか哀ならざらん、すみのほる大そらの月影も、わか身ひとつかとこたひし言の葉のことゝ、何とはなけれど心細さまさりて、春夏の月には異なり、ましてそよふく風に、萩の下葉の露とゝもにもろくちるゆふべ、やう〳〵ほそり行く虫の聲のかくもかましくつふやきたるほど、はた何とかはいはん、村雨の音も哀れにふりそゝぐ夕くれなど、山里に家居して峯の紅葉のちりしく中に、妻こふる鹿の音の聞きたらんいかにとおもひおるだに淋しからしやは、實に一と年の中よろづにつけてあはれに物さびしさをおほゆるは、秋

の夕暮なりけり

やはらかにしてよくきこえたり

○通信手習會を催さんとて遠方の友の許に

國語傳習所　木村花香

涙の露を形見にとゞめて、汽笛の聲にをしき袂をわかち參らせしは、きのふの如くおぼゆれど、はや一とせあまりのながき夢とはなり侍りぬ、そのゝちいかに、恙なくやおはしますらん、いと心もとなくこそ、こなたにはかはりたる事もなく過し侍り、こゝろやすうおぼしめし給ひてよ、花のあした、月の夕、君やいかにと心に浮ばぬ日はなけれど、世の事わざしげきにかいまぎれて、久しうおとづれもし侍らざりし、怠りの罪はさるかたにゆるさせ給ひてよ、さても此の頃は夜もやうく長くなり、燈火の影何となう親しまるゝにつきて、夜な夜な讀書の時間をいさゝかけづりて習字にもちひばやとこたび親しきどち相かたらひて通信手習會といふものをもうけ侍り、さるは色紙短册さては懷紙書狀などの書風を、通信にて研究せむとてのしわざになむ、ものよく書かむ事は誰もたれも必要の事なるは、今更耳あたらしく申すまでも侍らねども、何くれとなさまほしきことゞもの多きにかいまぎれてなむ年月を過し侍りし手跡のいたう拙きはいかにその人のみめ形麗はしからむとも何となく心おとりせらるゝものにて、これにひきかへ水莖の跡きよくうるはしきは其の人のこゝろばへまで床しうなつかしうおもひやられて、いとゞめでたきものなり、とは早くより師の君の御をしへをも聞き知りては侍りしかど、よろづ遲れ勝ちなる心には拙々しく思ひたつこともなくて今日になり侍りにき、君にも常々たしなみ給ふ道なれば、いかで此垣内に加はり給ふまじくや。會は每月一回として回每に課題を設けて書き認め、何某先生に批評を乞ひ、これを筆記して通信氏にゆたぬべき心組に侍り、されば千さとを隔てたる所にありても、猶ほ一堂に會して親しく何某先生の敎へを受くるおもひも侍らむ、右先生は都にて此上なうほまれ高くことに假名書風には最も妙をえ給ひ、貴嬪令孃はおしなべてこの先生のおしへをうけられざるはなきほどなりとか承り侍り、さるかたざまのはせにて我が會に親しく敎授の勞を執らせたまはらむは、わなみがさちはいかばかりならんか、と共々よろこび

おへる事になむ、なほくはしき事は御返事を待ちての後に聞え上ぐべし、先は御すゝめまでかくなむ、あなかしこ。

○寒夜讀書

米澤高等女學校　馬場はる

雪げの風はだ寒くてとひらくる友もなければ、窓の燈火あかうかゝげて文机にむかひたる心地、先いひしらずかし、軒の松風吹絶えて門の小川も氷りはてたれば、すべていとさう／＼しき夜のさまなるになか／＼に書見んにはとよべよみさしたる大鏡かいひらけばおほやけの口上より大臣の事までいとつばらなるがうれしくて、讀みもて行くまゝに、花山院のくだりに至る程、あやしや袂はうるほひぬ、げに有明月のいみじうあかゝりけるを顯證にこそ、いかゞすへからんとのたまはせしかしこさ、あはれと云ふもなのめなり、あはれその大御世や御裳濯川やゝ細りゆきて、藤原の流のみひろごりつゝ、かけまくもかしこきひつぎの御位の上をさへまつりごち奉り、己が住居をば内裡にもまざりさまに磨きたてぬるなど、今の世より思ひやるだにかなしく口をしきを、あはれ正史は勢ある人を憚りてあから樣にもえかゝず、まゝ筆をまぐるふしの多きにかしこや世繼の翁いな爲業ぬし、今宵我にありのまゝをなむるもこゝろかたり給ひぬる、あまりのうれしさに、埋火の雪となるもわすれしに、いつしかと時やうつりけむ、窓にさし入る有明月の影いとさむし、

○月

米澤高等女學校　大熊しん

同じ月にしあれど、四季折々趣を異にするなんいとをかしくもあはれなる、されどそは見る人々の心よりして大かたさこそあるらめ、春の夜の月のおぼろげにかすめるを、咲匂ふ花の木のまに見たる、夏の月の涼しげに置く露に宿れる「月みれば千々に物こそかなしけれ」とむかし人のよみ給へる秋の月は、殊更身にしみてあはれ深く、心なき人をも動すめり、雪ふりつもる冬の夜に鏡とはかりさえ凍りてたる影などいづれをかしくあはれならざる、三日月弓張月、十五夜、十六夜はとりわきてをかし、さるは防佛尼が昔しも忍ばれてなむ九重の雲井の庭より、賤が屋のやれし軒までも、影をはかたすくまなくてらすこそ殊にいとゆかしくあはれなれ。

○舟あそびの記

岡山高等女學校　矢吹幾世

明治卅三年十月廿四日、我女學校にては師の君達事務員の人〻つき添ひて、百二十名許りの生徒に遠足せしめられき、さるは四五日前より噂ありけれど、行先はいづちとも告げられず、京都なりと云ふ人あり、姫路なりと云ふ人もあり、さては神戸鷹島などとまち〳〵なりしが、遂に鷹島へ行く事と定められしなりけり、ねぐらはなるゝ鳥と共に起き出でて學校に至る、今日は空よく晴れて心地よき事いはんかたなし、午前八時人々と共に校を出でて京橋に至り、六艘の舟におの〳〵組をわかちて打乘る、さし昇る朝日の影は水にうつりてこかねの波をくだくさまいと美し、船やう〳〵岸をはなるゝほど唱歌の聲はこゝかしこに起りぬ、鐵道唱歌の本持ちて舟ばたをたゝきつゝ歌ふもあれば、「漕げども」を高き聲して唱ふるもあり、釣せんとにや棹持てるあり、まと居してかたらふあり、六艘の船かたみに後になりつ先きになりつつ進み行く程に、川幅はみる〳〵廣くなりて、はや三幡に近しなといふあり、此あたり山水の眺めいとをかしく、白帆張りたる舟の行きかふ、網引するに小舟の漕ぎ行くけるなどけしきいひしらねば歌詠まんとにや、懐紙とうづるもあり、筆持ちてうちながむるもあり、吾もこの道ねけたらんには一ッ二ッは詠まんものをといとくちをし、

舟はいつしかと三幡に着きぬ、されど潮あしくて鷹島へはえ行かれねば、三角洲にて貝捨ひする事となり、舟は再ひき動出しぬ、かゝる程にやう〳〵午となれば携へ來たりし辨當を開きてよべ母君が心盡しの結び飯を舌打しつゝしたしむるほど、船はやかて三角洲に着きぬれば、皆人堤に上り裾かかげつゝ渡る、水の中を探ぐりて貝を求むるもあり、かにをとらうるもあり、或るひは貝を探らんとしてかにに狹まれ叫ぶもあれば、かにとらへんとして三人四人して追ひわめくもあり、かしこにはしり、こゝにつどひ、心に遊びたはぶれて家路の空もうちわするゝほど、先生のよび給ふに、各々再び船に乘り、打ち興しつゝ京橋に着きしは午後五時半頃にやなりけん、かくて鳥のねぐらに歸る頃かたみに別れて家に歸りぬ、吾は今日ありし事ども樂しく母君に語り參らせて、例よりは早く寢ぬ、床に入りて目を閉ぢたれど、尚舟にある心地して、唱歌の聲も只耳に殘りていと

愉快なりき、されは後のしのぶ學にもとその大かたを只かくなん、

○日記の一節

岡山高等女學校　山本勝子

七月卅日きのふの如く晴れたれど、風少しもなく暑さ例のいといみじ、

朝九時頃久重の君の來ましゝかば、あつきわすれにもとて、ともに文の林に分け入るに時のうつるをおぼえず、いつしか午ちかくなりぬ、伯母君の徒然ならんにとて月琴を出し給へれば、いなみたくて久重の君と唱歌を合しなとしてうち興しぬ、

夕つかた小田のあたりそゝろあるきす、秋涼しく吹く風はいつ地よりか來ぬる。ひるのあつさはいづこにかいにけむ、名殘ものこらすいと心地よし、

卅一日少し曇りて暑き昨日にもまして堪かたし、今日は舊暦の七月なれば、久重の君とともに短册したゝめはてては茄子もて牛つくるなどして打興ず、いと樂し、夕飯したゝめ終へて、涼せはやとて門に出てゝ見れば今しも村の小供は多くあつまりて堤の上にてたき火をなしつゝあり、火のさまさながら火事に異ならず、あれはいかにといへば祖父の君は打ほゝ笑み給ひて、あれは此あたりのならはしにて、舊の七月の六日には例年かく火たきて佛を迎ふるなりとの玉へり、いと奇しき事なりかし、そは竹にてひくきらちを結ひ、其の中に麥藁を山の如くつみあげ、それに火をつけ大きなる聲にて「じいもばあもこれに付いて來やれ」と人々聲々にさけび、又其の中の一人は竹にて造れるほらをふきなどいと〳〵騷がしく、そが終れば、一揃ひの提灯にひとしく火をともし、かけごゑと共に堤より下り來るさまいとおもしろく目あたらし、

○寫眞を贈る文

岡山高等女學校　根岸松世

御玉章拜見致し候、去にして三月御別申てより、わづか二三ヶ月の間に候へ共、はや一年も御目にかゝらぬ心地致し、誠に御なつかしく存じ居候ひし折柄、御玉章にそへて美はしき御寫眞御送り下され有がたく久々にて逢ひまゐらせしこゝちして日々とりいだしては御顏拜しうれしく存じ候、就てはわが姿をも送りまゐらすへきよし、折角の仰をいなみまゐらするもいかゞと存じ、相かはらすいかゝしきさまながら、先日とらせしを

この書に相そへ御送り申上候よろづ御話申上度き事山々に候へ共暑中休に御かへり成され候節御目にかゝりゆる〳〵申上、又御地の御有樣をも承るべきと樂みに致し候かしこ

○冬の夜書を讀むの記

愛知高等女學校　黑神田鶴

錦おりなしゝ木々の梢も、しな戸の神の荒びにいつしか散りて跡もなく窓のひまより襲ひ來る風は針もて刺すか如き頃とはなりぬ、勤むへき哉、勵むへき哉、書讀む時はまことに此の時ぞ、夏の夜は文机によるま程なく明け行くに、ましてなにがしのおもとが細聲におきてといひけん蚊さへいといぶせきをや、さはいふものゝ、冬の夜は山鳥の尾のなが〳〵しくて獨り燈の下眼を學ぶ書にさらし、手を縫ふ衣に動かすは、面白きものからまたは沈み氣たゆみて眠をさへ催すよ、思へば昔延喜の帝は寒夜に御衣を脱かせ玉ひて、民の凍餒をおほしやらせ玉ひへりとか、われら幸にかゝる聖の世に生れあひて、思ひのまゝにもの學ぶ身の、などてかういふかひなき、よしや針の動き止り、峯の命毛尖凍るともと、今日の定めの業終りて寢ぬるには時はやゝ早きに思ひつゞくる一ふしをいさゝかものにかき記しつゝ

○秋の夕ぐれに古里をおもふ

愛知高等女學校　竹本妙

千草にすだきし虫の音も、今はいつしかとなきたえて落葉にさわく風の音いとすさましき頃とはなりぬ、玉しきの都にてすらかくさびしきに、まして古里はいかにと忍ばれて、戀しき慕はしさいはんかたなし、あはれ我か里人は此夕ぐれをいかに過すらん、思へば去年の秋母君と共にながめし庭の萩は今は早やあともなうちりはてつらん、思ひ廻せば一年の永き月日もなかばは夢に過ぎにけり、あゝ戀しきはまことに古里なり、母君なり、兄君なり、姉妹なり、母君のめで給ふ前栽の菊は今は霜にやうつらふらんなど思ひつゞくる程に、夜もいたう更け行きて廿日の月も影うすう、庭の落葉の上をてらしたるは又一しほのあはれをもよほしぬ、

○冬のはじめ

愛知高等女學校　吉野澄

たのもしとかこちし秋もゆめのまにすぎて、はやくもふゆとめぐり來ぬ、

昨日までさしもときめきし紅葉の錦もふく木枯に今日

はおくたとなり、ちり塚の霜にからみかほなるもあはれなる中に、さきのこりたる白きくのひとり霜ふかき離きににほうこそまたなくいみしうゆかしけれ、

○吉川金造氏の來校につきて

愛知縣高等女學校　河村ます

春秋の花も紅葉も、目なくてはいかで、うるはしと見むのどけくうたふ鳥のこゑも、耳なくはいかで樂しときこゝえむ、家にありて父母はらからに向ひ、外に出てゝ人と交るにも口なくばいかで心をはるくべき、さればこの中の一つだにかけなば、人の樂しみいとうすく、いかにひんなき事ならまし、さるを、二つまでさへかきたる啞人にて、そが學ひの業を卒へ、世の事らの理をよくさとりて、今は同じ不幸にしづむ人とは教育に、心をつくさるゝ吉川金造氏の名は、かねて校長の君より承りき」

さるにけふゆくりなく其君は、愛らしき教へ子を携へて我學びやに來られ、其教授のてだてなど、いと委しう知らしめられしこそ、うれしけれ。」

校長の君、氏を紹介したまふまゝに、氏はやがて懇なる詞を述らる、さるは其筆のあと、いとあさやかに、又言の葉もよく通しぬれば、はじめ、いかに其幸なきを歎くらんと思ひやりし心は、かへりて我大御代の御教へをうけし、幸をいかに悦ふらんとおもふ心におほはれぬ、また其の伴はれし小山保次氏の教へをうけらるゝさま、いと愛らし、發音は未だたしかならざれとも、作文會話などの、一とせにもたらぬ僅の月日にて、いかでかくはかりはとあやしまるゝばかりたくみなり、間々に二つ三つ力およばぬふしのみゆるも、なか／＼愛らしく、げに天眞爛熳といひつへき樣になん、文字もいとよくかゝれていみじう、人の心を引きぬ、終りには發音の符合など、委しう示されしか、其間教授の、心あつきさま其手だてのこまやかなる、かくてこそかくいみじきしるしをも得たるなりけれ、と今更におとろかれぬ、あはれ、當氏のかゝる幸にあひ給ふは、此大御代の御惠とはいへ、またかの君たちの志の厚きに、依らでやはげに耳なく口なき身にて、學ひの道をはげみまなぶ、其勇氣と辛苦とは、そもいかならん、さらば世のあたらしき事を見もし、きゝもし、うたかはしきは、おもふまゝにとひ究めえらるゝ、おのれ等にして、かばかりつとめはげまば、いかばかりの智識も得られ、學ひの業もすゝむへき。さるを目にふれ耳にあたることの、理をもわきま

へず、いたづらに、うち過すこそ、いと〳〵はづかしき事なりけれ、いてや此二氏をもてわか心の織とし、全き躰をうけえし、大なる幸を、むなしくせざらむやう、朝な夕なにとぎみがかばや、

○定家卿の家集を讀む

國學院　小森甚作

此ごろ、とある店にて、扇を買ひたるに、雪ふりしきる野路に、狩衣姿して月毛の駒にのりたる人の、繪かきたり。あつきをり〳〵、うちあふぎつゝ見るに、何となく涼しきこゝちするに、やがて、ことにかなふべき歌よみ出でゝ、書いつけまほしき念、さへおこりぬ、こと日、友がりゆきて、何くれと打かたらふほど。友は、かたはらの書棚より、古き書一册とうでゝ、こはこのほど得つる定家の家の集拾遺愚草なり、といふに、名はかねてきけれど、まだみぬものなれば、開きもてゆくに、春、夏、秋、冬の四季に分ち、外に、戀、雜の部を設けられたるが、その歌いくらといふ數をしらず。拾遺集、玉葉集、新勅撰集、新古今集等にいれる歌もいと多かり、いづれも、風調、優艷、温雅にして、情濃に、鬼神をなかしるといふ言の葉さへおもひ出さるゝや。新古今こそ、いとめでたき集なれ。そも〳〵、この集は、後鳥羽上皇の勅を奉じて定家卿が主となり、源通具、藤原家隆の兩卿と相語らひて、撰まれしものなるが、その歌の優婉、美麗なること、古來集多しと雖も、これを凌ぐものあるを聞かず。卿は、常に不遇を嘆き、これを怨む言葉ぞ、やがて詠歌に現はるゝとかや。げにさるふしも見ゆめる、凡そ、和歌を詠まんとならばまづ、

故郷有母秋風涙　旅館無人暮雨魂
蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中

といふ句を誦すべし、意氣自ら高妙至らむと。常々の玉へりとかや、その心を歌に用ゐられたる、概ねかくの如し。後堀河帝の天福元年に薙髮して、嵯峨の小倉山に住ませたまひしとぞ、また詩をも能くし給ひつる事、書どもに見えたり。わきて和歌の才は、天より稟けたまひつらむ。

駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし
　さのゝわたりの雪のゆふぐれ

冬の部にて、ふとこの歌に目止まりぬ。こは、世人のもてはやすめる、いとめでたき歌なるにて扇の畫もこれを書きたりしものなるを、などかくは打わすれけん、い

ざこれかいつけむとて、扇を開きしに、又もふと心に浮びいてぬるは、雲井にかけれのふるとなり、けに某かいへることく、景によりて情起り、情によりて景をおもふ、もろきは人の心かな。

○同胞女子諸君に告ぐ

埼玉縣師範學校　猪野いう子

明けく治まる御代の三十四とせの一月五日博文館より女學世界發行の企ありと聞きしときは如何ばかりの喜ばしかりけん妾いとけなき頃より雜誌などひもとくことを好みてくさ〳〵のもの讀みしかどむねはをの子のためにものせるもの多くて妾等かひもとくにふさはしきものはいと少なきは悲しき極みなりけり、さるをこたび發行せる女學世界は妾等女子のためにもつはら智見をひろめ貞德をみがくにつとめらるへしときけば今よりのちは我が國女子社會のともしびとなりしをりともなりて益をあたへらるゝことゝなるべしとはよろこはしくなん、さても今の世我國婦人の社交上の方針につきては世論定まらずために妾等女子をして其の如何なる道に依るへきかをうたがはしむるはいとも嘆はしきことになむされど學ぶ所に醉ふと醉はざるとにありてかの西洋のふみなど讀みそのふりを習ひたる人は彼の國の婦人の習はしに醉うてひたすらそれをよしと言ひ甚しきは男女同權などさへ唱ふるに至りぬるとかやそも〳〵女子の身としてことあげめけること言ふはいとをこがましけれど世のため人のためと思へばいかでかもだしあへんや、もとより女子は其の躰質其のさがをの子に較ぶへくもあらぬものなればそれにふさはしきわさをなすをこそは女子の務とはいふ可けれ世の男女同權を夢みる人々は多くは此點に思を及ぼさゞるなるへし躰質すこやかにしてつよき男の子は外の事に從ひか弱き女子は內の事を行ひ又兵士として戰をなすは男の子の責にて子をはぐくむべき重き任は女子にあるならずや是れ世のつねのことわりにてひがことにあらざるを女子も男子と同じ形の身躰をもち又同しく精神作用を有するものなれは男子のなすことは女子になし難きことなしといひはては男子をいやしみ世をはかなみ甚たしきは身をえうなきものになすともがら我同胞女子の中にありときくはげになげかはしきことになむ社會はもと秩序によりて成立つものときゝぬもしこの秩序をやぶらばいかでか社會の安寧をたもつことを得

べきさて女子が世に立ちて男子と同しわざをとりたらむには社會のみだれそもいかばかりならん社會の一員として社會のめぐみにより生をながらふるものは社會のためにつくすべきこそことわりならめ社會をみだらんとするは惡これより大なるはなかるへし故に女たるものは其天性にかなへるわざをつとめ男の子をしのぐが如きことあるへからずかくいへばとてひたすら男の子に屈せよといふにはあらすつくすべき道は如何なる折にありてもつくすへき道にして男の子といへどもまぐべきにあらじされど我國女子敎育の未だ完からざる悲しさには男の子のためにいやしめかろんせられ女子の本分をさへつくし難きこと往々にしてあるはいとうたてきことなり我が同胞淑女の君たちよいきより一層まなひの道をつとめ世の理に通じて女子の本分を盡されんことを望む所になむ

○秋の野

奈良高等女學校　和氣てる代

野邊近く家居しせれば、秋の哀こそいはん方なけれ、打まねく尾花の袖も何となくゆかしきにたがぬぎおきけんふぢ袴の見る人もなき野末のつゆに一しほの色をそめまして風にさとうちかをりたるもいとけふあり、名はおそろしけれど虎の尾、鬼のしこ草、花はいと愛らしくめでたし、まして荻の上風に夢さめて、夜深く雲井をわたるかりがねの聲をきゝ、さては野末ほのかに妻とふ鹿、草むらにすだくむしの音などすみわたる月の顔にきゝたる、何とかはいはん、秋やう〱たけゆくまゝの木のまにはるかに見渡さるゝに、龍田姫がおりいでてけんもみぢ葉のてきうすきがまつに、夕日の匂ひたるは、又たとへんかたあらじかし大かた秋の野は物あはれにみるものきくものすべて心ゆかぬはあらずかし、

○初　賣

奈良高等女學校　山田かう

夜もいまだあけぬに、市にのゝしる人のこゑ、ゆきかふ車の音いとかしましく、初賣〱とよびまはるこそ、ゆたかなる世もおもひしられていとめでたけれ、きのふわざをやすみしはあなかち年のはしめを祝ふのみにもあらじ、晦日の夜半からつかれもありしなるへきを、けふははやいさみ立ちて賣り買ふ業をつとむるよその身を立て家の榮をおもへはなるべく、かの一年のいとなみは年の始にありと云ふ語にも叶ひていと〱ゆか

し、かういそしみはけむ商人に、わかどち文の林をわくるもの丶志のほどをくらへみたらんには、うらはつかしとおもはぬ人いくたりかあらんとおもふも今更おもふてふせける心地してなん、

○新年遠征軍人を思ひやりて

奈良高等女學校　武田うめ

あらたまの年のはじめの朝日かげ、うら丶かにさしのぼり、軒にかゝげし日のみはたあさ風にひるがへり、門にたてたるまつ竹はときはのみどり色深くみるものきくもの一つとして心ゆかぬものなんなき、かゝる新年をむかふるにつけても、まづ思ひやらるゝは、外つ國にあるみいくさ人の上なりけり、そもわが幾千のはらからは、虎ふすのべに銃とりて、皇みくにの大みいづのいや•ましにかゞやき渡らんことのみをこひねかへり、さればかちどきをあげてかへり來べき日をのぞみたのしむらんものから、み雪つもる荒野にとしをむかへては、さすがに故郷のそらやながめらるらんをと思へば、あた丶かく着、うまきにあきて、いたづらにけふを祝ひほこらんことのかつはいとはづかしくかたはらいたくなん、

○月なき夜半

奈良高等女學校　前田はま

まどかにすみ渡りし月を、夜毎〳〵にかけほそりゆきて、はてはぬは玉のやみのそらとはなりぬ、さらでもさみしき秋の夕に、時雨さへをり〳〵ふりすぎてふけゆく夜半にひとり燈かゝげつゝ文讀みすさびてあれは、玉水の音いとあはれにて、思はじとすれど、思はるるは故郷のにとこそ、あはれこよひしもわが父母の君には如何にしておはすらん、幼きはらからは暖きしとねに、何の夢路かたどるらん、はた里人の臼ひき歌はいかに、庭のつた楓も此程の時雨にいろつきそめつやなど、さま〴〵の想ひつゞくる折しも、「カヘラー」とほのかになける鹿の聲にこゝろそゞろにうごきて、まどのやれより見いだせは、世はいと暗く物すごく月なき夜半のいとくらく、又一しきりさとしくれきぬ、

問答

○豚の飼料
(問)豚を飼ふには如何なる飼料を與ふと可なるや。
(寒山女史)
(答)其飼料は數々あれども玉蜀黍などは最も功能ある飼料です、玉蜀黍で飼へば豚の味が甚だ佳くて煮れば其容積が増して來る、馬鈴薯で飼ッた豚の肉は誠に不味くて其煮れば容積が減ずる。又人參を與ふれば肉は一層美味となります。(溪水生)

○冷水摩擦法
(問)冷水摩擦法を氣候の變り目に行ひし爲め熱(寒冒性か)を起せしが、かまはず續けてよき哉(柳南女史)
(答)獨り健體に行ふのみならず熱性(寒冒性)を帶ふる際も構はず持長するが宜し(香花生)

○窓硝子の霜除け法
(問)追に寒になりますと窓硝子に霜が氷りますが之れが爲めに室の中が暗くなッて困ります之を防ぐ方法は如何したらば宜しきや(花溪女史)
(答)方法は種々ありますが硫酸を雜巾に浸して硝子の外面を拭ひ置くか又はグリスリンを薄く塗りて乾かし置くべし(蝶夢生)

○胃擴張の養生法
(問)小生は漫性胃擴張にて甚だ困難せり、良き療法あらば敎示ありたし(折柳女史)
(答)胃擴張には成宜く食物の攝生に注意するをよしとす、即ち少しつゝ數回に食し、殊に溶體、澱粉質及脂肪食を禁し、主として動物性食餌を食ふべし液躰は胃をして其重さに耐へざらしむる害あれば宜しく適量の液躰(二百乃至三百滴の阿片丁幾を和したるもの日に兩三回)をのむべし(GT生)
(問)神經病にて嘔くが何んの理に候哉(石橋生)
(答)質問の意味よく判ねど神經性嘔吐ならん、嘔く原因は澤山あり、尤も多きは腦の官能的疾病たとへばヘステリー及び神經衰弱症より起る嘔吐なり又婦人は生殖器の異常より嘔吐を發すこと多し、治療法は原因を療さねばならぬ故病氣の原を知らせられよ(筑水女史)

第一回懸賞文募集

本誌には『才媛詞藻』の欄を設け、毎月一回賞を懸けて全國才媛の詞章を募る是れ、方今の才媛文學を奬勵せんと欲する趣旨に出づるものにして、初刊早々、第一回募集の擧に事づるも亦此意に外ならざる所以也、乞ふその美感佳想に成れる玉稿を投寄して、新春に於ける才媛文壇を飾られんことを、

課題及選評者

中村秋香先生選（賞品は甲賞壹名二圓乙賞二名一圓宛丙賞三名五十錢宛圖書切符を以て附與す）

文章―細川忠興夫人（國文躰）

虛飾を戒むるの文（書翰文躰）

坂正臣先生選（賞品は甲賞一名二圓乙賞二名一圓宛丙賞三名五十錢宛圖書切符を以て附與す）

和歌―山家早春

鏡

○投稿期日は、一月十五日限りの事

○發表期は、第二號（二月五日發兌）の誌上を以てす

○投稿心得は、特定なき分は投稿規程に由る

投稿規程

一、本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す

一、投書の種類は文章（文躰は國文及普通文に限る）詩歌（新躰詩及短歌今樣の類）小説優美にして卑猥ならざるもの等とす

一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る

一、投書の用紙は半紙二ッ折（和歌は端書に限る）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る

一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す

一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すると

一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

◎寄書募集

社會的見聞の材料として、左記各項の範圍に就て、普く江湖諸君の寄稿を募る

▲家庭及び地方風俗に關する雜聞 ▲古今東西の兒童に關する譚話 ▲各地方に於ける婦女子社界の狀態 ▲孝女節婦の美談佳話 ▲其他本誌の參考となる者

學事

共立女子職業學校參觀

女子に職業の敎育を施すは、最も必要の事にして、吾人は大いに之れを奬勵せんと欲す、されど唯に机上の議論を爲さんよりは、寧ろ實際に就て審究し、世の參考に資するに若かずと感じたれば、此種學校に於ける內部の設置及び實地敎授の摸樣を見んと欲し、昨年暮れの頃、忙中の閑を竊みて、彼の著名なる共立女子職業學校を參觀しぬ、參觀の同伴は、本館の松原、苫米地(記者)齋藤(寫眞技手)片山(寫生畵家)高畠(速記技手)等にして、これ寫眞と圖畫と記事を以て、其實見せる結果を讀者に紹介し、且つ敎育上の參考に供せんとするの用意に出づ。

校の沿革 校は明治十九年有志者相謀りて、神田區錦町に創立したるものにして、翌二十年を以て現所在地神田一ッ橋通二十二番地に移轉せるなり、是れ實に我國に於ける此種學校の鏑矢たり、始めは矢張り微々として振はざりしが、開校以來十有四の星霜を經るの間に、年每に校摸は擴張せられ、入學女子の數を增加し來たれると共に、校舍も幾回の新築に由て構內殆んど尺地を餘さざるに至れり、其間卒業生を出だすもの實に千有三十八名、此等卒業の女子は、自家に在りて業を執るものあり、學校の敎員となりて實業敎育に從ふものあり、校の功績豈見るべきものなからんや、近年地方女學校の增設と共に、夥だしく敎員の需用を增したれば、之れに應ずるの目的を以て、一昨年裁縫敎員養成所を設け、敎員たるべきものを養成したるも、尙ほ其需用を充たす能はざるほど世に歡迎せらる、是れ此校敎育の時勢に適切なるが爲めならずんばあらず、されば　天皇皇后兩陛下には親しく行啓あらせられ、且つ賞品を賜はりたることもありまた內外博覽會に於て、此校の製作品にして喝采を博したるもの少からず、校長は始めは服部一三氏にして、後ち手島精一氏之れに代り、現校長は中川謙二郎氏なり、副校長は宮川全保氏にして、創立以來此の校の爲めに盡したる人なり、校の沿革を概記すれば前記の如く、兎に角我國に於ける此種學校にては唯一の摸範學校なりといふべ

し。

校の景況

現校舍は、外觀甚だ壯麗ならず、昔の士族屋敷の如き、黒塗りの門內に在りて、門の柱には校名の大なる標札を掲げ、門の傍には、門番の住むが如き小さき家あり、外より見れば、何んとなく古風の學校に見ゆ、吾等參觀者は、玄關より入り、刺を通じたれば、兼てより約あることゝて、直ぐに應接所に引かれ、事務員及び敎員諸君は、懇ろに面語せられたり應接所は流石職業學校だけの特色ありて、室內は生徒の製作品を以て飾られ、中にも枝上に止まる鷲、庭に遊ぶ双鷄、刺繡を以て造られたる床飾は、頗る人目を惹けり、また棚の上には、福壽草の鉢植、八重一重の櫻花、その他の大小製作品は、燦然として美觀を呈せり、吾々は此所にて暫時此校に關する談話を聞きぬ、

現校舍は、二階建三百二十四坪、平家建百六十坪餘、合計四百八十四坪餘あり、其內敎室の數は十四にして、寄宿舍は別に一棟あり、その他は敎員控所、事務所應接所等に用ゐらる、職員總數は五十八名にして、內三十六名は敎員なり、校の經費は、三十二年度に於て、收入金額（授業料、束修金、製品の純利金）は一萬三千四十九圓九十錢にして、內授業料額は八千圓位、その他は製品の利益金なり、また支出金額（凡ての經費と材料費）は一万二千六百四十一圓九十四錢にして、內製品材料費は四千圓、其他は各種の費用に支辨せらる、現在學生の總數は、六百二十三名にして、內養成科は十八名、裁縫科（敎員養成甲乙二科）は二百三十三名、刺繡科は七十九名、編物科五十八名、圖畫科は二十名、造花科は四十三名、割烹科は十五名なり、以上は概要のみを記したるが、外觀の甚だ壯麗ならざるに反し、內部の規模、設置は頗る盛大なるが如し

校の教授法

校の敎旨は、女子は、高尚なる學問よりは、寧ろ實用的に技藝職業を敎ゆるに在り、されば、校風の如きも、浮華を避けて質實を尚ぶが如く、服裝に關する生徒の心得の如きも、頗る周到なり、校の學科は學科、術科の二科に分かれ、學科にては、女子に須要なる簡單の學問、術科は尚ほ裁縫、編物、刺繡、造花、圖畫、割烹に分かれ、生徒の所望に從ひ、一科を修むるものとす、今各科中裁縫造花の敎授細目を得たれば、左に之れを掲げ、敎育者の參考に供す、

裁縫科課程細目

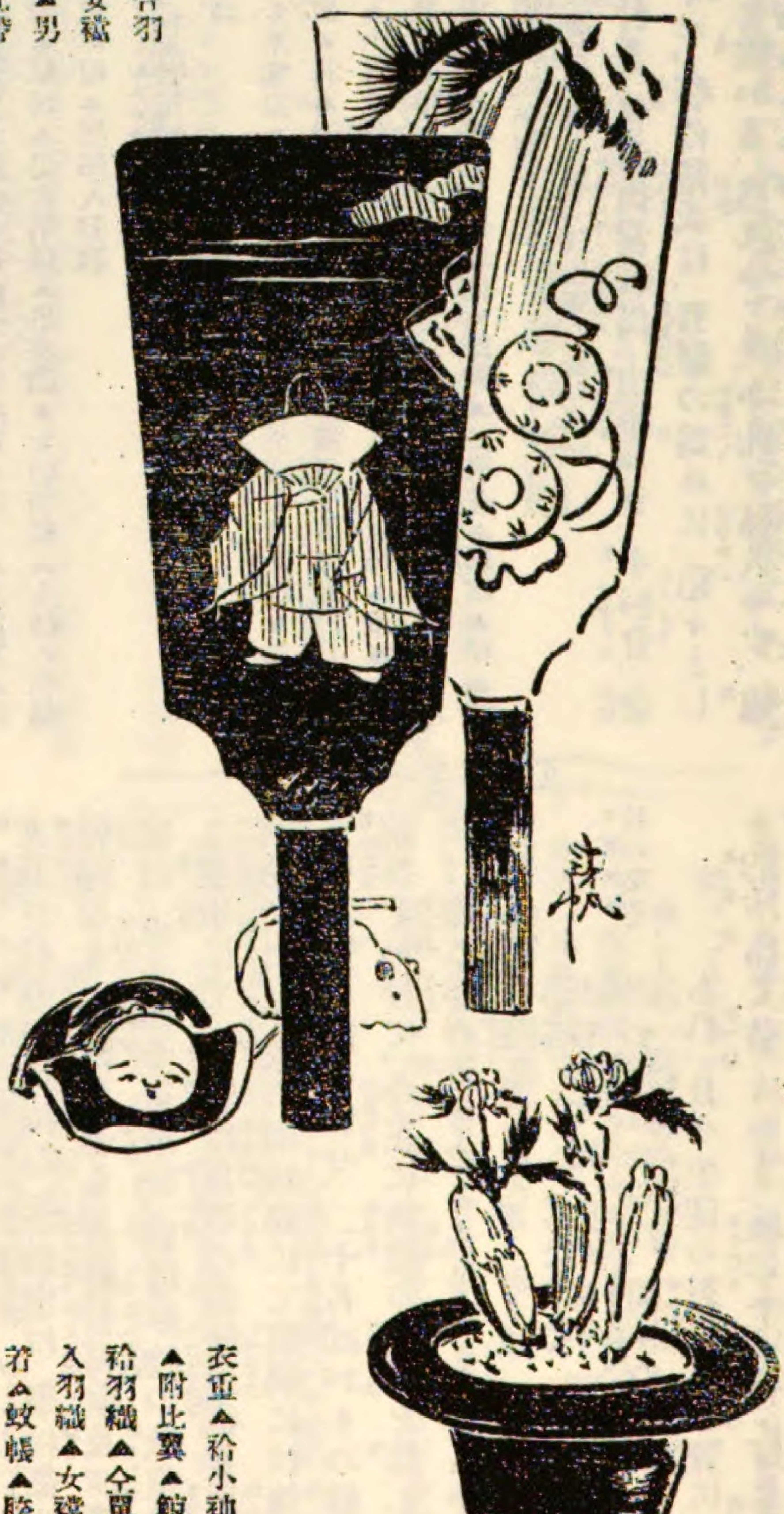
◎教員養成科

▲ミシン使用法▲西洋形小兒前掛▲仝大人前掛▲仝涎掛（以上を教授するに當りまつり縫及返し縫を授く）▲シャツ及ツボン下（但シャツ一組は飾りシャツ、ヅボン下も之れに準ず）▲穴かゝり▲袷小袖▲小袖▲本比翼▲男袷羽織▲男單羽織▲女綿入羽織▲女袷羽織▲單衣重▲長襦袢▲道行▲被布▲女合羽▲女襠無袴▲女襠有袴▲男單袴▲男袷袴▲男帶▲丸帶▲鯨帶▲女服洋服▲男兒洋服

◎甲　科

運針▲穴かゝり▲まつり縫▲千鳥かけ▲返し縫▲西洋形前掛▲西洋形小兒前掛▲シャツ▲ツボン下▲日本形涎掛▲單襦袢▲男女單物▲裙形▲袖形▲鯨帶▲袷▲合羽▲綿入▲羽織（以上一年級）西洋形前掛▲シャツ▲ツボン下▲雛子の類▲羽織（男、女、單、袷、綿入）袷（絹、木綿）▲綿入▲袴▲仝▲鯨帶▲男帶▲長襦袢▲破布▲道行（以上二年級）ミシン使用法▲西洋形涎掛▲女兒洋服（下着共）▲單衣重▲袷小袖▲綿入▲仝▲本比翼▲附比翼▲鯨帶▲丸帶▲男帶▲男袷羽織▲仝單▲男袴（單袷）▲女綿入羽織▲女襠有袴▲男兒洋服▲夜着▲蚊帳▲膀引

生徒の製作品



◎乙　科

運針▲穴かゝり▲まつり縫▲千鳥かけ▲返し縫▲西洋形前掛▲單襦袢▲單衣▲日本形涎かけ▲長襦袢▲シャツ▲ツボン下▲西洋形小兒前掛▲裙

形▲袖形▲合羽▲袷▲綿入(小供物)▲羽織(男、女、木、絹)▲鯨帶▲男帶▲女襠無袴▲男袴▲帷子(一年級)▲ミシン使用法▲西洋形涎掛▲帷子▲袷小袖▲女襠有袴▲男單袴▲男袷袴▲折り袷シヤツ▲道行▲被布▲鯨帶▲丸帶(外に鯨帶)▲男帶▲長襦袢▲單衣重▲綿入▲本比翼▲附比翼▲胯引▲夜着▲蚊帳▲男袷羽織▲單羽織▲女袷羽織▲女綿入羽織▲女兒洋服▲男兒洋服▲男綿入羽織

造花科課程細目

◎甲　科

庚申ばら▲梅▲金米糖菊▲小櫻▲小菊▲桃▲蒲公英▲すみれ▲丸薔薇▲あぢさい▲海棠▲萩▲糸菊▲蝦夷菊▲蓮逢▲藪柑子▲紫菀(一年級)▲櫻▲藤▲霧島▲山吹▲葵▲うつき▲桔梗▲蘭▲松葉牡丹▲茶▲もくせい▲亂菊▲丸薔薇▲椿▲姫百合▲福壽草(二年級)▲牡丹▲菖蒲▲瑞香▲大百合▲木蓮▲よれぎく▲朝顔▲藤袴▲舶來花▲柘榴▲松▲水仙▲實物寫生▲南天(三年級)

(乙科の程目は略ぼ甲科と同じ只程度に差あり)

右敎授細目に付き、各科擔當敎員山中コウ、小杉倉、金子トフ、松本ヤエ、等の諸氏は、吾輩の爲めに、懇々として實地敎授法を說かる、然れども、今此に挿入せず、他欄(技藝等の欄を參看せよ)に揭ぐることとせり、是れ專門學藝に屬するものにして、便宜上かく配置せるなり、右等の人々に導かれ、樓上樓下の各科敎室に入りて生徒學修の模樣を見たるに、敎授方法至て整理せるが如く、各敎室に充てる女生徒は、肅然として修藝に餘念なし、是に於て、寫眞技手は、各科の室內寫眞を撮り、寫生畫家は、室內及製品を寫せり、(寫眞は口繪、圖畫は此文及び技藝欄に挿む)各敎室は、學校衞生上より見れば整備せりといふべく、裁縫各科室及び造花圖畫の各敎室は、卓子椅子を用ひ、刺繡編物の敎室は、疊を敷きたる坐敷にて、刺繡は角形の刺繡用机を用ひおれり、また割烹科は、平家の別校塲にて室隅には煉瓦造りの竈の上に二個の鍋を載せ、二十名ばかりの婦女子は、白布の前掛をかけて、今正に料理の實習を爲しつゝあり、此所には頗る年の行きたる人も見えたるやうなり、以上は室內參觀の概要なり、

●●●校の榮譽　此校にては、從來每年一回　天皇陛下より侍從を差遣せられ、同校の景況を御下問あらせられ、且つ生徒の製品を叡覽に供すべき難有き御沙汰を蒙りおり、昨年十一月にも北條侍從御命を受けて來校せられ、前同樣の聖旨を傳へられしかば、校員一同皆感泣し、將來益々奮勵して、優渥なる聖恩の万分の一に報ひ奉らんことを誓ひたりと、又た該校生徒の製作品中、造花科にて製作する、八重一重の櫻花(之

れは造花部にて圖を示し且つ説明すべし)は、頗る雅致あり、日本の華美を愛し、且つ裝飾に用ゆべきを以て、大いに外國人の嗜好に適し、時々當市貿易商福島九誠等の手を經て海外に輸出し、製作さへすればいかに多くの需用もありといふ、此等の事は校の榮譽にあらずして何ぞや。

私立 共立女子職業學校規則

第一　本校は女子に適應せる技藝職業並に必要の學科を授くる所とす

第二　教科を甲乙二科に分ち甲乙科共に裁縫、編物、刺繡、造花、圖畫の五科を置く

但し甲科生徒は二科に限り乙科生徒は一科に限り之を撰修するものとす

前項甲乙二科の外裁縫教員養成科及割烹科を置く

第三　甲乙科共に術科の外に必らず修身、讀書、習字、算術、家事、理科の六科を課す

本文の學科中に就きて既に習得し之を修むるに及ばずと認むる者及特別の事情ある者には之を修めしめず

第四　甲乙科共に術科學科を併せ修むる者を本科生とし術科のみを修むる者を撰科生とす

但し本校に於て學科を修むるに及ばずと認めたる者は本科生とす

第五　修業年限は甲科三ヶ年、乙科二ヶ年とし四月より翌年三月に至る一ヶ年を一年生とす

但し圖畫科は乙科を三ヶ年とす

第六　甲科生は年齡十二年以上、乙科生は年齡十五年以上にして共に略々讀み書きを爲し得るものとす

第七　生徒入學の期は每年四月と定むれども缺員あるときは臨時入學を許すことあるべし

但し入學の際試驗を要せず

第八　授業時間は每日凡七時間とし日の長短等により之を伸縮す

第九　休業日は左の如し

日曜日　紀元節　天長節　地久節　大祭日　本校紀念日（四月十二日）、夏期休業（八月十一日ヨリ同三十一日マデ）冬期休業（十二月廿五日ヨリ一月七日マデ）學年末休業（三月廿四日ヨリ同三十一日マデ）

第十　夏期休業の前二十日間後十日間は午前の中三時間の授業を爲し學科は修身の外之を授けず

第十一　甲乙二科の術科及學科課程は左表の如し

◉術科課程表

裁縫	小裁、中裁、本裁、衣服、シャツ、ヅボン下、子供並に婦人洋服類及其附屬品等
編物	衣服附屬品及裝飾品等
刺繡	綴繡、平繡、けし繡、すが繡、すから繡、肉入繡等
造花	各種の花簪、草木花卉の模造及室內裝飾品等
圖畫	日本繪畫圖按、陶畫器法、友禪畫法等

◉術科課程表

學科	毎週時數	第一年	毎週時數	第二年	毎週時數	第三年
修身	一	人倫道の要旨	一	仝上	一	仝上
讀書	二	普通文	二	仝上	二	仝上
作文	一	書簡文	一	仝上	一	仝上
習字	二	平假名、行書、草書	二	仝上	二	仝上
算術	二	筆算 加減乘除、諸等 珠算 加減乘除、小數	二	筆算 小數、分數、珠算 諸等相掛割	二	筆算 比例 珠算 利息
理科	一		一	生活上緊要なる理科大意	一	前年の續
家事			一	衣食住、家事管理法	一	家計簿記、育兒法

但し割烹は毎月數回人員を限り日常自家に適用すべきものを實習せしむ

第十二　術科は甲乙科とも專ら實物に付きて教授す

第十三　入學を望む者は甲號書式の入學依賴書並に履歷書を出し入學を許されたる者は乙號書式の入學證書を出すべし

第十四　入學者の保證人は成年以上にして東京に住居し一家計を立つるものに限る

第十五　入學者は束脩として甲科は金壹圓五拾錢乙科は金壹圓を納むべし

第十六　授業料は甲科一ヶ年金拾八圓（一ヶ月金壹圓五拾錢）乙科一ヶ年金拾貳圓（一ヶ月金壹圓）とす之を月割にして毎月五日限り納むべし

割烹の實習を爲す者は、毎月器械費金拾錢並に毎回材料實費拾五錢內外を納むべし

但し病氣其他の事故によりて欠席數月に渉るとも本校に學籍ある間は理由の如何に關せず授業料は定日迄に必らず納むべし

第十七　術科に於ては生徒練習のため注文品を製作せしめ其製作品の純益金半額以下を該生徒に分與し其者の名義を以て遞信省郵便爲替貯金局に預け置き卒業の時或は要用あるとき本人の申出により之を渡すものとす

第十八　修業上入用の書籍器具並に術科所用の材料は生徒の自辨とすれど技術進歩するに至れば注文品を以て生徒の實習に供することあるべし

但し裁縫科のミシンは本校所有のものを使用せしむ

第十九　遠國より入學するものゝ便宜を計り校內に寄宿舍を設け人員を限り寄宿を許す寄宿料は一ヶ月金五圓五拾錢とす但し物價の高低により增減することあるべし

第二十　術科及學科に就きては特に定時の試驗を行はず平常の成績に評點を附し學年末に至り合算して及落を判定す

但し學科に就きて試驗を必要と認むる時は臨時に試驗を行ふ事あるべし

第廿一　術科を卒業せし者にして規定の業科を修了し或は之に等しき學力ありと認むる者には第一號書式の卒業證書を與へ又單に術科のみを卒業せし者には第二號書式の卒業證書を授與す

第廿二　生徒には毎年一回若くは二回醫師の身體檢査を受けしむ

第廿三　生徒若し傳染病に罹りたるときは勿論家內に傳染病者あるとき

は醫師の證明あるにあらざれば昇校すべからず

第廿四　卒業生にして更に補修せんとする者あるときは本校の都合上差支なき時に限り補習生として一ヶ年以內在學を許す其間授業料は半額を納むべし

第廿五　若し不都合の行爲あり生徒たるに適せずと認むる者あるときは退學せしむべし

第廿六　裁縫教員養成科規則は左の如し

一　本科は高等小學校等の裁縫科教員を養成するを目的とす

二　學科は修身、教育、裁縫、家事、讀書、算術、習字の七科とす

三　修業年限は一ヶ年とす

四　學科課程は左の如し

學科	毎週時數	程度
修身	一	人倫道德の要旨
讀書	二	普通文
作文	一	書簡文
習字	二	行草書、平假名
算術	二	加減乘除、分數、諸比例
家事	二	衣食住、家事管理法、育兒法
教育	二	總論、管理法、裁縫教授法
裁縫	三〇	小裁、中裁、本裁衣服、シャツ、ヅボン下小供並に婦人用洋服及其附屬品等

但し後半年に於て凡三ヶ月間實地授授の練習を爲さしむ

五　生徒は左の資格を有する入學志願者より試驗の上學入せしむ

一、品行方正、身躰健全にして教員たるに適當なる者

二、年齡十八年以上

三、高等小學校を卒業せる者又は之に等しき學力を有する者

四、教育に從事せんとする志望鞏固なる者

六　入學試驗の科目は左の如し

裁縫　讀書　算術　作文　習字

七　生徒入學の期は毎年四月とす

八　入學を望む者は甲號書式の入學依賴書並に履歷書を出し入にを許されたる者は乙號書式の在學證書を出すべし

九　入學者の保證人は成年以上にして東京に住居し一家計を立る者に限る

十　入學を許されたる者は束修として金壹圓を納むべし

十一　授業料は一ヶ年金拾貳圓(一ヶ月金壹圓)とす之を月割にして毎月五日限り納むべし

但し病氣其他の事故によりて欠席數月に渡るとも授業料は定日迄に必ず納むべし

十二　校內寄宿舍へ入舍志望の者には甲乙科と同じく之を許す

十三　生徒及保證人の心得休業日、及び採點法等は凡て甲乙科に同じ

十四　本科を卒業したる者には第三號書式の卒業證書を授與す

第廿七　割烹科規則は左の如し

一　本科は女子に食物調理の實習及之に關する學理の一斑を授くるを目的とす

二　修業年限は一ヶ年とす

三　本科の課程は左の如し

實習　毎週一回凡四時間

講義　毎週二時間(凡四ヶ月間)

四　生徒入學の期は毎年四月とす
但し缺員あるときは臨時に入學を許すことあるべし
五　入學を望む者は甲號書の入學依頼書並に履歴書を出し入學を許されたる者は乙號書式の在學證書を出すべし
六　入學者の保證人は成年以上にして東京に住居し一家計を立る者に限る
七　入學を許されたる者は束修として金五拾錢を納むべし
八　生徒の志望に依り實習講義各其一のみを修むることを得
九　授業料一ヶ月の額は左の如し毎月七日限り納むべし
但し病氣其他の事故によりて欠席數月に渉るとも授業料は定日までに必ず納むべし
一、實習のみを爲す者　金六拾錢
二、講義のみを聽聞する者　金五拾錢
三、實習講義を併せ修むる者　金八拾錢
十　實習を爲す者は毎回材料實費金拾五錢內外を納むべし
十一　八月一日より同三十一日迄を夏期休業とす其間授業料は納むるに及ばず
十二　生徒及保證人心得等凡て甲乙科に同じ
十三　本科を卒したる者には第四號書式の卒業證書を授與す
但し本科課程の一部を修めたる者には志望に依り證明書を授與することあるべし
第廿八　造花科に別科生を置く其規則左の如し
一　別科生の修業年限は三ヶ年とす
二　別科生在學中は乙科生徒と同一の取扱を爲し全科卒業の上は乙科生徒と同一の卒業證書を授與す
三　別科生在學中は學校に於て私用の造花は製作するを許さず
四　別科生は束修月謝を要せざるのみならず造花に要する一切の器具材料を貸與すべし
但し衣食住等に屬するものは凡て自辨たるべし
五　別科生第二學年の修業を卒りたる者には製作品純金の幾分を給與し卒業後本校に採用する時は相應の手當を給與すべし
六　別科生の定員は三十名とす
但し事宜によりて增減することあるべし
七　別科生は略々讀み書きに通じ在學中家事に係累なき者たるべし
八　年齢は滿十四年以上三十年以下とす
九　最初一ヶ月間は試驗生として假に入學せしめ其技能等を審察し適當と認むる者には本入學を許す
十　別科生は中途にして退學することを許さず若し止を得ざる事故により退學する者は本人或は保證人より在學中の費用を辨償せしむべし
十一　別科生の保證人は東京に住居し一家計を立つる成年以上の者兩名を要す
第廿九　入學依頼書履歴書幷に在學證書書式は略す
第三十　卒業證書書式は略す

雜報

◉四恩瓜生會

四恩瓜生會秋季大會は客臘十一月二十日午後一時より早稻田大隈伯爵邸内なる苑遊會場に於て開會せられたり。此日や初冬に近の秋の日ながら長空一碧拭ふが如く微風温暖極めて快適の好天氣なりければ、正午頃より車馬を驅り輕裘を翻して來會するもの絶えず。午後一時頃には早くも三千餘名の多數に達し門外より屈折して專門學校附近に至る一帶の地は馬車、腕車を以て隙間もなく埋めらるゝを見る。歩して苑遊會場なる庭園に抵れば、此處は一面の白砂燦々として銀の如く、青竹の欄干を以て結び繞らしたる東籬の下には滿目の黃菊白菊其の幾百千株なるを知らず、中には霜風摧落して錦片紛々たる鮮からず、多くは今二三日を花の名殘と咲き亂れたれば馥郁たる滿枝の幽香玉露を含みて金風に舞ひ、冷艶一色、觀るものをして覺えず仙界に遊ぶの感わらしめたり。加ふるに此日參集の會員及び來賓は何れも名媛閨秀にして男子は僅に之が一小部分を占むるに過ぎざりければ、金釵花に晃めき香衣風に舞い其の美麗優婉を極めたること通常苑遊會の席に於て容易に見る能はざる所なり。斯くて二時三十分頃に至るや、養育院幹事安達憲忠氏起て開會の趣旨を陳べ且つ大隈伯爵より一場の演説あるべき旨を告げて席に復すれば主人の伯は悠然軀を苑の東北方に設けたる演壇の上に顯はし、先づ名譽ある四恩瓜生會秋季大會を吾が邸内に開かれたるを感謝し、三千餘名の夫人令孃に對し故人瓜生岩子氏が生前に於て施設したる事業の甚だ偉大なるを賛し、余は生來草花を好むの癖あるが故に草花を以て説を爲さんと云は、花は一種の感化力を有するものにして昔より花を愛するものに惡人ある事を聞かず、花は無邪氣にして人の性情を高潔にし神明佛陀の之を好ませ給ふが故に、冠婚葬祭の大禮にも必ず花を備ふるなり。是れ邪心なく惡念なき天眞爛熳の至情、神に通じ佛に通じて其愛護を受くる所以なるが、人界の事も亦た此の如し。神佛に接近する宗教の四恩會が花の如き瓜生會と和合して慈善事業に盡瘁せらるゝは頗る尊敬すべき事にして、善は一人一

箇の能する所のものにあらず、神聖なる金甌無缺の我日本國に大なる慈善を行はんと欲せば宜しく共同團躰の力に須ゐざるべからざること素より言ふ迄もなし、人間の上より見れば、神の惠み佛の慈悲、耶蘇の博愛、孔子の仁義、孰れも同一にして宗敎信仰の事も亦た人民の自由に屬するものなれば空理空談に走らず實踐躬行を努めらるゝ事宜しく彼の瓜生氏の如くなるべし人は今日の人心を目して敗腐せりといへど、更に其腐敗の甚しきものは維新革命の際に於ける人心の腐敗なるべし。此時に當て獨り亭々として俗流を拔き殺伐亂暴の間に於て能く大事業の成効を告げたる瓜生氏の功績は眞に賛嘆するに堪へたる者と論じて壇を降れり。

是に於て會長下田歌子氏は徐ろに歩を演壇に進めて先づ伯爵の厚意を謝し更に會員に向ひ、吾が永年の懇意なる瓜生女史生前のお噺すべしと告け、宗敎を信ずるものは高尚にして其内に發する惻隱の心聖は人の心に叶ふものなり。瓜生女子一代の目的は慈善救濟の一途にして、十四歳の時より人生の苦艱を救助せんと欲し、佛門に歸依して安心立命の地を得し以來、六十四歳の最後に至るまで殆んど善と慈愛に其一心を捧たる者なり。一寸其一例を擧ぐれば平生木綿服を着して嘗て絹布を纏はず、頭も櫛卷にして麥飯を常食となし。得る所のものは悉く貧人に給與して人間を離苦の中より救はんとするを以て其本願とせり。余が知る所にては歐米各國にも亦た慈善會なるもの甚だ多し。併しながら這は交際の一道具として其名を列するものにして、之を爲さざれば交際場裡に巾の利かざるが如き傾向あり。瓜生氏の事業は全く之に反し、何事も他人の知らざらん事を欲し常に人に隱れて其慈善に盡瘁したるを以て、同氏の生前には之を知るもの甚だ僅少なりしにも拘はらず一度び目を眠らるゝや、彼れも瓜生氏の事業なり此も瓜生氏の事業なりとて諸方に慈善博愛の事業勃興し、即ち學校病院、養育院等今日の如き盛大を致したること我等一同の龜鑑とすべき所なりとて拍手の間に壇を降れり。夫れより會員及び來賓と共に菓子壽司、密柑、ボーロの類を山積せし卓上に向ひ、參々手を携へて花壇を眺め泉地の邊を逍遙し和氣藹々たる間に歡笑娛樂の愉快を極め一同路歸に就きしは四時半なりき。記者招かれて席に列し辭して門を出づれば芬々たる淸香袖に薰じ紫藤金英宛として車上を襲ふが如

し。（一記者）

◎忠婢の旌表式

麹町區公民會にては、彰善會よりの通知に依り、同區平河町二丁目九番地岡本宜美氏方の召仕大堀すま女の善行を表彰する爲、昨年十一月廿五日を以て永田町二丁目日枝神社の社殿に於て其式を執行せり、いま其經歴を記さんに、同女は江州犬上郡平田村の生れ、十八歳の時彦根藩の家老岡本黄石翁の家に仕へ、爾來四十餘年一日の如く忠勤を勵み、時としては自己の財を投じて主家の急を救ひし事あり、また主人黄石翁が國事の爲めに奔走する際には、其夫人を助けて能く家政を料理し、翁をして名を成さしめたるも同女の力與へて多きに居りしとぞ、昨年六月千家府知事より褒狀を賜ひ、又今回の旌表式に擧りて其奇特を世に紹介さるゝに至りしも寔に偶然にあらざるなり、さて式場の概況は、公民會長楠本男爵先づ式場に進みて賞狀を朗讀し、すま女を麾きて木盃一組を授けしに、同女は此日鐵お納戸地一ツ紋の小袖に黒繻子の帶を纏ひ、しとかやかに會釋して式場に進み出で、謹んで之を受けたる後、故黄石翁の門人山崎たけ子女史同女に代りて謝辭を述べ、最と靜粛に式を畢りしが、同日は公民會の重なる人々及び來賓等を合せて、三百餘名の來會者あり、餘興には奏樂及び丸一の大神樂等ありたり、今左に賞狀の全文と同女の謝辭とを揭げて、其主旨を普くす

大堀すま女資性温順主家に事へて克く其家事を輔け勤勉四十年一日の如し其意思の堅固にして其行爲の篤實なるを以て人に事る者の範となすに足る我公民會は其善行を賞するが爲め玆に木盃一組を贈る

明治三十三年十一月廿五日

麹町公民會長　正三位勳一等男爵　楠本正隆

私は故岡本黄石樣御夫婦を主人と仰ぎ四十餘年の間事へました者で御座いますが其間別に是ぞと申して人に勝れた奉公を致しませんで只主人御夫婦程の慈愛はないと信じまして日夜其御恩に報ゆる事を何より大事と心得て居りましたまでゝ御座います存じ寄らず先頃來東京府知事千家尊福殿より御褒賞を戴きました是れは好き主人に事へました御蔭と存じまして早速故主人御夫婦の御墓參りを致しまして此事を申述べ其靈魂を慰めました然るに又今日麹町公民會員及彰善會員の方々爲めに特に旌表式を御執行被下徽章御杯等を賜はり面目身に餘り誠に感泣の外は御座いません猶今日の事も故御主人御夫婦の御魂に告げまする積りで御座いますが嘸かし御主人夫婦も草葉の蔭で皆樣の御厚志を喜ばれる事で御座いませう

大堀すま

●孤島の貞婦

西陲の孤島鹿兒島縣大島郡徳ノ島の龜津村にカナコメ（卅二）と呼ぶ寡婦あり、初め同島井戸川村に生れ、十七歳の時龜津村の春川崎市兵衛に嫁ぐ、市兵衛は内地川邊郡加世田の産にて、流離して同島に渡りし赤貧の身なれば、カナコメは只管夫を扶けて家業に黽勉し、小間物店を開きて、兎も角も不自由なき暮となり、夫の家族六人を加世田より呼び迎へて、初めて一家團欒の樂を爲すに至りたり、然るに魔神は思はぬ處より下り、二十六年二月市兵衛肺臓に罹り、カナコメは一年有餘の間帶も解かず、日夜看護に盡したれども天年を假さず、翌年五月死沒したりければ、其時カナコメの悲は譬へん方もなかりしが、尚ほ重ねて災厄に罹り、義妹イマを失ひたるに、搗て加へて二十八年大風雨にて家屋は更なり、家具一色を洗ひ去られて初めて赤貧に戻り、長女コト祖母タメ義弟兵次郎義父兵市等相次で病に斃れ、左しも豐なりし家族も今は唯義母一人を餘すに至れり、此の間の異變に際し、カナコメは病と貧との中心に立ち便るべき人もなき孤島の身を以て、車輪となつて立働き視る人々をして感嘆措かざらしめしと云ふ、されば今は漸く厄より取り止めたる義母に孝養を盡すを以て樂となし、長男市藏二女イチを尋常小學校に入れて其教育に怠らず、依りて村内の有志者は、カナコメの爲めに醵金を爲し、村役場よりは之を賞し、此程金二圓を贈りたりといふ

●市教育會の希望

東京市教育會にては過般來實業學校設置方法に付き調査中なりしが昨年十二月には調査部委員總會を開きて協議せる結果低度の工業學校は徒弟學校、女子職業學校、工業補習學校の三種となし、其設立方法を定められたるがその内女子職業學校に關する右會の希望は市內の二區若くは三區毎に差向き一校を設くる事（此種の學校は區に依り必要の度を異にし本所、深川、下谷、淺草、及び一般山の手に必要多き事）其教科は裁縫、洗濯、刺繡、編物、造花、圖畫、割烹の一科若くは教科として區の狀況に依り電信、電話、機械、染色等を加設する事但し生徒には一科若くは二科を專修せしむる事入學程度

修業年限及組織は大躰徒弟學校に等しくする事に在る由なるが是れ實際の必要に基づきて計畫せる事業なるべしといふ

◉日本女子大學の近況

東京小石川なる日本女子大學校の建築工事は、目下附屬高等女學校舍寮舍二棟及び職員舍二棟だけは、已に外部の工事を竣り現今專ら内部の工事に着手中なるが已に入學申込者陸續あり、遠く朝鮮九州邊より來るものあり、大學部は百人、高等女學部は三百人の、生徒を收容し得る見込なるも、目下の狀況にては、大學部に尙ほ少しく定員を增加せざるを得ざるべしと、因に來春四月より開校すべき大學部は、先づ家政科、國文科及び英文科なりといふ

◉體育會の女子遊戲

日本躰育會にては、女子躰育の發達に留意して、新式遊戲法の敎授を開始せるが、其成績頗る好く、入會者も既に五十餘名に達したり、然るに場所狹小にして、劃然男子部と區別を立て、若くは屋外公衆の觀覽を避くる能はざるが爲め、充分の遊戲を爲し能はざるより、今回牛ヶ淵公園の或部分を借受けて、四方に嚴重なる圍ひを施し、益々好成績を擧ぐる計畫にて、目下陸軍省に向て交涉中なるが、尙ほ同遊戲部は多分男子の參觀を謝絕するならんと

◉女子嗜輪會の設立

女子嗜輪會は、去月二十五日午後一時日本橋呉服町なる高橋方にて發會式を擧げ、規約十二ヶ條内規數條を定めたるが、幹事は寺澤マサ、田中キノ、東宮イト、柴田環、朝夷タカの五子當選せり、毎月一回第二日曜日例會を開き、春秋二季大會を開き、事務所を當分神田小川町一番地快進社に置く、音樂學校高等女學校其他の生徒にして入會希望の者多き模樣なりと

◉三井の新陳列塲

三井呉服店の新陳列塲は、大いに顧客の氣を惹きたる

がためか、昨今店內甚だ雜鬧を極むる模樣なるが、同店にては先き頃、新橋梅田の二驛に美人の油繪額を掲げ、幾多の才子佳人を惱殺し居るとの噂もあり、尙ほ同店內には米國最新式の金錢輸送器を使用しありて、該器は賣揚金と受取書を傳送すべき、白銅製の輕便器にして、我國商店にて此機械を利用したるは、同店を以て嚆矢とすといふ、また女子職業學校の事業を賛助する精神を以て、同店內に一部の場所を設け、同校生徒の製作品を陳列する由

◉女子制服の改良意見

女子服裝の事は、近來世の問題となれるが、此の問題に付いて、高木醫學博士の意見は、本邦女子の服制改良にはいろ〳〵の意見あれども、サテ之れを一般の社會に實行することは六ケ敷ければ、先づ官立學校の女生徒だけにても實行せん希望にて、「女子は幅廣帶及び長袖を廢し、上衣は穿袖と爲し、袖を穿たしむるは衞生上經濟上及び作業上共に至大の便利を與ふるものなりとの趣意にて、先き頃松田文相を訪ひ其意見を開陳せりといふ

◉飮食用器の取締規則

飮食物用器具取締に關する規則は、內務省の第五十號を以て去月十七日發布せしが、本規則の支配を受くべきものは、普通の飮食器、割烹具其の他の飮食物の調製器、容器、貯器又は量器等にして、本年四月一日より施行すること〻定む、其取締の要量左の如し

▲材料の制限　營業者は次に掲ぐる材料を以て調製することを得ず(一)鉛又は百分中十分以上を含む合金を以て飮食物用器具を製造し又は修繕する事(二)器具の飮食物に接觸する部分を百分中鉛二十分以上を含む合金を以て綿着し又は百分中鉛五分以上を含む錫合金を以て鍍布すること(三)罐詰用の罐には外部の鑞着及び鑞受の鑞着に百分中鉛五十分以上を含む合金を使用すること(四)琺瑯又は釉藥を施したる器具にして之に百分中醋酸四分を含む水を容れ三十分時間煮沸するに其液中に砒素又は鉛を溶出するものを製造すること(五)哺乳器具は鉛又は亞鉛を含む護謨を以て製造すること

▲不正器具の處分　右制限に違背したる器具を販賣し又は營業上に使用すべからさるは勿論尙銅又は其の合金を以て製造、修繕したる器具の飮食物に接觸する部分が鍍金屬の剝脫若は固有の光澤を有せざるものも營業上に使用すべからず若し右の不正器具を製造、販賣又は使用したる時は地方長官(東京府は警視總監)は職權を以て營業を禁止し停止し又は其物品の廢棄を命ずることを得べし

▲罰則　本規則の違反營業者は廿五圓以下の罰金に處せらる

鉛性白粉の有害

我邦に於ける婦女子及び俳優等が、平生使用する鉛性白粉の有害なることは、既に其筋にても認めて種々研究調査を爲し、全然鉛性白粉の販賣を禁止せんとの說ありしも、如何せん多年婦女子等が塗抹し來りたる習慣と、我國人の皮膚には西洋白粉の適せざる等の結果、不得止まだ他に適當なる白粉を發明せざるが爲め、之れを使用せしめ又販賣をも禁止せざる趣きなるが、近年は可成鉛分の少き白粉のみ販賣を許し、其鉛分の多量を含有する白粉をば販賣せしめざるの方針を取り居れりと、尚ほ現に無毒有効なる白粉製造に關しては、種々研究中なるが故に、適當品を發見次第鉛性白粉販賣を禁止すると同時に、相當の取締をも爲す筈なりと當局者は語れり

海外女界の奇聞

海外の婦女社界に於ける奇聞は、時々新聞紙に依りて世上に洩るゝが、いま近頃の面白きものを得たれば、その内の三つを選みて左に掲げつ

○巴里博覽會と結婚　昨年巴里に於て開かれたる大博覽會開會中、互に見初め又は見戀れて結婚を約し、又は申込みたるもの少なからず、已に此が爲め十五の新夫婦を見るに至り、中にも米國商會に雇はれて出場し居たる少女の一群は、最も青年の注目を惹き、その内の尤物たるロッス、メリス孃の如きは、十四ヶ國の人より百十七通の結婚請求狀を受くるに至れりと、されば巴里大博覽會は、若き男女を紹介して婚姻を成立せしめたといふやうなものだ

○維納大學と女生徒　同大學が女生徒の爲めに門戸を開けるは最近の事なるが、玆に奇怪なるは、男生徒にして初めて、女生徒がベケフィー教授の講室に來れる時は、男生徒は、口笛を吹き足を鳴らし、騷擾極りなく遂に同教授は一日の講話せりといふ

○流行の女姿　米國にては、此秋より冬にかけての流行する女の姿勢は、胸を張り腰を突き出だし、其樣子恰かも袋鼠が立ちたるに似たるものなりと、

次號豫吉

初刊の本號は、年末怱忙の間に成れるを以て、未だ充分に面目を揭ぐる能はざるも、次號以下に於ては、大いに記事躰裁の整美を期せんとす。いま次號の誌上に顯はるべき要目は、論說欄には、津田梅子女史の斬新なる思想を演べたる女子教育意見、その他佐々木伯爵の論文を揭げ、講義欄には第一號に揭けたる諸講義の外、中村秋香氏の方丈記講義の新載を始め、傳記欄には、中內蝶二氏が輕妙婉麗の文にて描けるジヤンダークの評傳、學術欄には、三島通良氏の學校衛生談、藤堂忠次郎氏の猫の話、岡田みつ子氏の理化談、技藝欄には、造化、裁縫、割烹科、(高橋章臣)その他野口小蘋氏の繪法指南、多田親愛氏の書法指南、小說欄には、古在紫琴女史が近來の傑作、その量は三十頁にあまる長篇なり、家庭欄には、三輪田眞佐子氏の衣服改良の意見、塚本はま子氏の家政談を重なるものとし、その他有益の材料を集む、才媛詞藻欄には第一回懸賞文募集によりて集まれる才媛諸氏の詞章中、佐々木、中村兩先生の選評を經たる結果を公にす、其他各欄に於ても、勉めて佳良の材料を載せむとす、尙ほ寫眞口繪には有栖川威仁親王御息所慰子殿下並びに小松宮頼仁親王御息所殿下の御肖像を別揭として卷頭に挿み、その他阿蘭陀國女王陛下の御肖像及び泰西貴伯の俊腕に成れる世界の珍たる名畵と東京有名なる女學校の外觀と教室內の狀を撮影して揭ぐべし、

毎月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數………………十二册
　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

不許複製

明治三十四年一月五日發行　第一卷第一號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千八十番　二千六百二十番

謹賀新年

恭賀新正

大橋佐平
大橋新太郎
大橋省吾

大橋又太郎
大橋幹二郎
大橋光吉

博文館編輯局員（イロハ順）

在獨乙 巖谷小波
長谷川天溪
西村醉夢
苫米地日東
文學士 大町桂月
大橋乙羽
片山春帆
河野楊齋
田山花袋
田村松魚
武内桂舟
武田櫻桃
坪谷水哉
中内蝶二
文學士 中川葦舟
紫安清巖

上村左川
山中古洞
松原廿三階堂
藤本藤蔭
國府犀東
今　寒水
小松崎筑嶺
齋木菊雨
齋藤紫白
岸上質軒
木村小舟
三宅青軒
江見水蔭
在米國法學士 森山吐虹

博文館營業部員

大橋又太郎
羽田福太郎
大野金太郎
內山正如
杉山常次郎
野口竹次郎
上村恭三
宮川大壽
堀野賢龍
太田馬太郎
里見謙吉
江橋正貫
田中六藏
加野十次郎
田中庄八
富士原秀穗
黑崎登

來島茂三郎
枝川錠太郎
金子督太郎
古賀豐策
土居通寬
小峯正一
永井泰
細野佐藏
矢野貫一
大谷濱次郎
荒井芳太郎
兒玉幡太郎
權藤文雄
北川豐作
片山宇吉
丹羽該藏
淺沼滿次郎

婦女必要

博文館發行圖書數萬巻其中に就て女子諸君の必讀を要する者最も多し今其一端を摘載して江湖貴孃諸彦に告ぐ請ふ多少に關せず御愛購わらんことを

著者	書名	價
醫學士三島通良君著	●學校衛生學	（正價金七拾五錢 郵税金八錢）
下田歌子女史著	●家政學	（正價金六拾錢 郵税金拾貳錢）
下田歌子女史著	●家事要訣	（正價金三拾五錢 郵税金六錢）
下田歌子女史著	●婦女家庭訓	（正價金三拾五錢 郵税金六錢）
下田歌子女史著	●母親の心得	（正價金三拾五錢 郵税金六錢）
醫學士三島通良君著	●はゝのつとめ	（正價金七拾五錢 郵税金拾錢）
寒澤振作君著	●家政の栞	（正價金貳拾錢 郵税金六錢）
岸上操君著	●家政案内	（正價金貳拾錢 郵税金六錢）
坪谷善四郎君著	●家政整理法	（正價金拾五錢 郵税金六錢）
三浦智之君著	●實用家事經濟學	（正價金貳拾錢 郵税金四錢）
石井治兵衞君著	●日本料理法大全	（正價金貳圓 目方四百匁）
藤本藤蔭君著	●實用料理法	（正價金貳拾錢 郵税金六錢）
下田歌子女史著	●料理手引草	（正價金三拾五錢 郵税金六錢）

（後付の二）

東洋戰爭實記

《第十九編第二十編》

北清戰史

博文館編輯局編纂

上編……一月中出版
下編……二月中出版

◎寫眞銅版口繪十六頁海陸將校及地圖挿入

全二册洋裝紙數一册三百五十頁餘
正價一册金三十錢
郵稅一册二錢

東亞の一角に起りて忽ち全世界を震動したる北清の戰亂も十九世紀の終末と共に一段を告げんとす、而して其戰亂や、世界最多の人口を有する清國が東西八大強國を敵として戰へるもの、太沽の砲臺攻擊より天津停車場の激戰、天津城の攻擊、偖は北倉揚村の戰鬪に續いて、終に北京總攻擊の激戰となり、光緒帝の西安蒙塵に至るまで近世稀有の大戰を演じ、其間北京籠城の大苦戰シーモア救援隊の大困難、或は滿洲に於ける露軍の蹂躙、保定府山海關に於ける連合軍の占領等に加ふるに、文明各國軍隊が行へる總ての虐殺姦淫掠奪等の暴行は、日本軍隊の勇武節制、仁愛等の名譽と相俟て、疑も無く帝國を世界の第一等國と爲せり、此等戰爭の顚末は東洋戰爭實記に於て、畧ぼ之を敍述せしも、事實は得るに隨ふて排列し、前後錯綜通覽に便ならず、故に今特に其發端より最後の外交談判始末までを前後一貫詳細編述し、以て北清戰史と爲し、東詳戰爭實記第十九編及二十編と爲さんと欲す、故に此兩編は發行規定を變更し、每號口繪寫眞及紙數とも平時の三册分を一册と爲し、一、二兩月各一册づゝ發行し、殊に口繪寫眞は最も材料を精選し本文と相俟て坐ながら戰地に臨むの感あらしめんと欲す、從來戰爭實記の愛讀者諸君は勿論、苟くも北清戰亂の始末を知らんと欲する諸君は必ず各一本を購讀せられんことを請ふ

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の四）

每月一日一回發行

少年世界

定價　一冊金十錢　三冊前金廿八錢　八冊前金七拾九錢　郵稅一冊一錢

明治三十四年　第七卷第壹號　一月一日發行

口繪

大附錄支那戰爭双六……江見水蔭案　武內桂舟畫

新造軍艦（朝日）アート

西洋名畫（牛）ペーパー

漣山人と通信端書○鐘乳洞○近衛大演習○坪井博士と人類學室○松江城○富士の遠望○紫宸殿下の一騎打○高架鐵道

●牛長者（筆始）……巖谷漣山人

記事摘要

○樂しき春……佐々木信綱
○鐘乳洞探險記……江見水蔭
○さゝなみ日記……巖谷小波
○古戰場……多賀中尉
○軍艦朝日……硯海水夫
○菊水源流……依田學海
○バイロンの幼時……守拙生
○島根半島……大町文學士
○東海道の話……寺崎留吉
○丑の年……西理學士
○新年と新觀察……木村小舟
○海獸の話……今井金牛
○のし……坪井博士
○新遊戲法……秋廣烟波
○切紙遊戲……竹貫直人
○桑港風俗……森山法學士
○世界滅盡……武田櫻桃
○百思士……楓亭生
○少年泉語……長井金風
○日の丸太郎……巖谷小波
○お伽百物語……松村小舟
○懸賞文詩歌俳句……數十首　水蔭　櫻桃　小舟
○記者通信……數項
○讀者通信……數項
○交詢……數項
○考へ物及判じ物……數件
○時報

《博文館發行》

（後付の五）



第七卷第壹號

三十四年一月一日發行

▲日の出双鶴（表紙）……武内桂舟筆
▲二日もの語（口繪）……水野年方筆

二日物語……幸田露伴

小說
破垣……內田不知庵
紫娘……渡邊霞亭
緣不緣……廣津柳浪

時文數則……中內文學士

講談
出世の大盡……邑井一
天國物產會社……三遊亭圓遊
三題咄……三遊連中

譚海
○初出　○力士美談　○巴里女
○力士隱藝　○松竹梅　○晴勝負

詞花
○俳句披露　○難題　○三十名句
○和歌　○俳句　○新躰侍
○狂句　○狂歌　○情歌

新年附錄
佛國美人巴里女優伊太利女優寫眞銅版畫大判

藝林
○梨園笑話
○樂屋の寢言
○名人逸話
○藝人笑話

雜錄
河內入道……依田學海
仕入帳……齋藤綠雨
自由花魁……幸堂得知
雅名と其人……雪中菴雀志
雪中の竹……錦鄉子
西洋神と髮……大橋乙羽
北清の藝者……坪谷水哉
酒欲……大町桂月
琴の音……中內蝶二
妓……岸上吒劍
本年の大計畫……江見水蔭
丑の元旦……武田鶯塘
春の仕度……齋木菊雨
酒杯……田村松魚
希望……三宅靑軒

雜報
勝地案內……數項
名家墳墓……數項
諸國奇談……數項
諸國風俗……數項
百事問答……數項
時報……數項

定價
一冊金廿五錢○三ヶ月分七拾五錢○半ヶ年分壹圓八拾錢（六冊）○一ヶ年分三圓五拾錢（十二冊）○郵稅一冊三錢

每月一回一日發兌

本文紙數三百二十頁寫眞銅版八丁木版口繪二丁兩面菊判繪表紙

發兌元　博文館

（後付の六）

（後付の七）

恭賀新年

（後付の八）

東京日本橋病院長 醫學士 岡本武次先生の新發見藥

（酒席。旅行必携靈藥）

太陽丹

平素は勿論、酒席、旅行及び悪疫流行の際は必ず携へ時々服用せられよ。此藥は○頭痛○眩暈○酒、船、車の酔○吐瀉○下痢○胸腹の痛等に著効あり。殊に食後常に四五粒づゝ用ふる時は○時候中り○食あたり○食物滞り等の憂なく、血液の循環を整ひ、精神を爽快にし、音聲を清浄にし、益々壮健の身と成こと、大醫の證明せらるゝ處なり

（定價）
千二百粒入金一圓
五百粒入金五十錢
二百十五粒入金廿錢
百五粒入金十錢
五十粒入金五錢
郵送料各二錢づゝ



（かぜ早なをしの最新藥）

太陽散

風邪は萬病の基、輕とて効能薄き駄賣藥に甘じ、其療治を躊躇する時は、種々の恐ろしき病を起す事少なからず、故に人常に其靈藥を備へ置き、殊に旅行の節は必ず携へ、機に臨み服用し、以て後の難義を遁れ給へよ

定價（四十包入金五十錢七包入金十錢
三包入金五錢●送料各二錢



（腫物。創傷。の最進良藥）

太陽膏

定價（罐入金十錢大貝金五錢
小貝金三錢送料各三錢

何程毒ある物でも早く治る殊に舶來綿布を入あり



本舖 東京日本橋區本石町二丁目 藥種問屋 博愛堂

●賣捌は全國の確實にして敏活なる藥店にあり最寄にて御求を乞ふ若無時は直接御注文あれ

新體詩日記紀行文美文及び短歌

佐々木信綱君編

竹柏園集

第壹編
洋裝袖珍紙數五百ペーヂ
一月中旬發行

心の強き人弱き人、清き人、さま〴〵の人相あつまりて、竹柏會といふ歌文の會は組み立てられぬ。會員の中には、學生あり、博士あり、畫工ありピヤノひく人あり、專ら詩の神に生涯を獻ぐるあり、詩歌には縁遠き職をとれる學士あり、貴家の夫人令孃あり、山深き里の僧侶あり、廣き林檎畠の主人あり、山水の景勝をめでて旅より旅に暮らせるあり、かつ耕しかつ歌ふ農夫あり、敵に向ひて獅子の如く猛く筆を執りては小羊の如く素直なる水兵あり、かゝる人々相あつまりて、月毎の研究會春毎の大會に相つどひ相語り、若しくは消息の贈答に歌文を研究せること既に數年。いま其會員の短歌新體詩日記紀行文スケッチの類をあつめて毎年二回世に公にせんとす。こゝに明治三十四年一月を期して其第一篇を出しぬ。載するところ短歌數百首新體詩美文二百數十篇なり。素より一小冊子に過ぎずと雖も、あるは心なやめる人の友と爲り、あるはさびしき旅窓の好侶伴たるべきか。

東久世伯爵序
高崎男爵序
小中村博士序文
佐々木信綱君著
●歌の栞
全壹冊總皮本綴千六百頁
正價壹圓廿錢目方四百匁

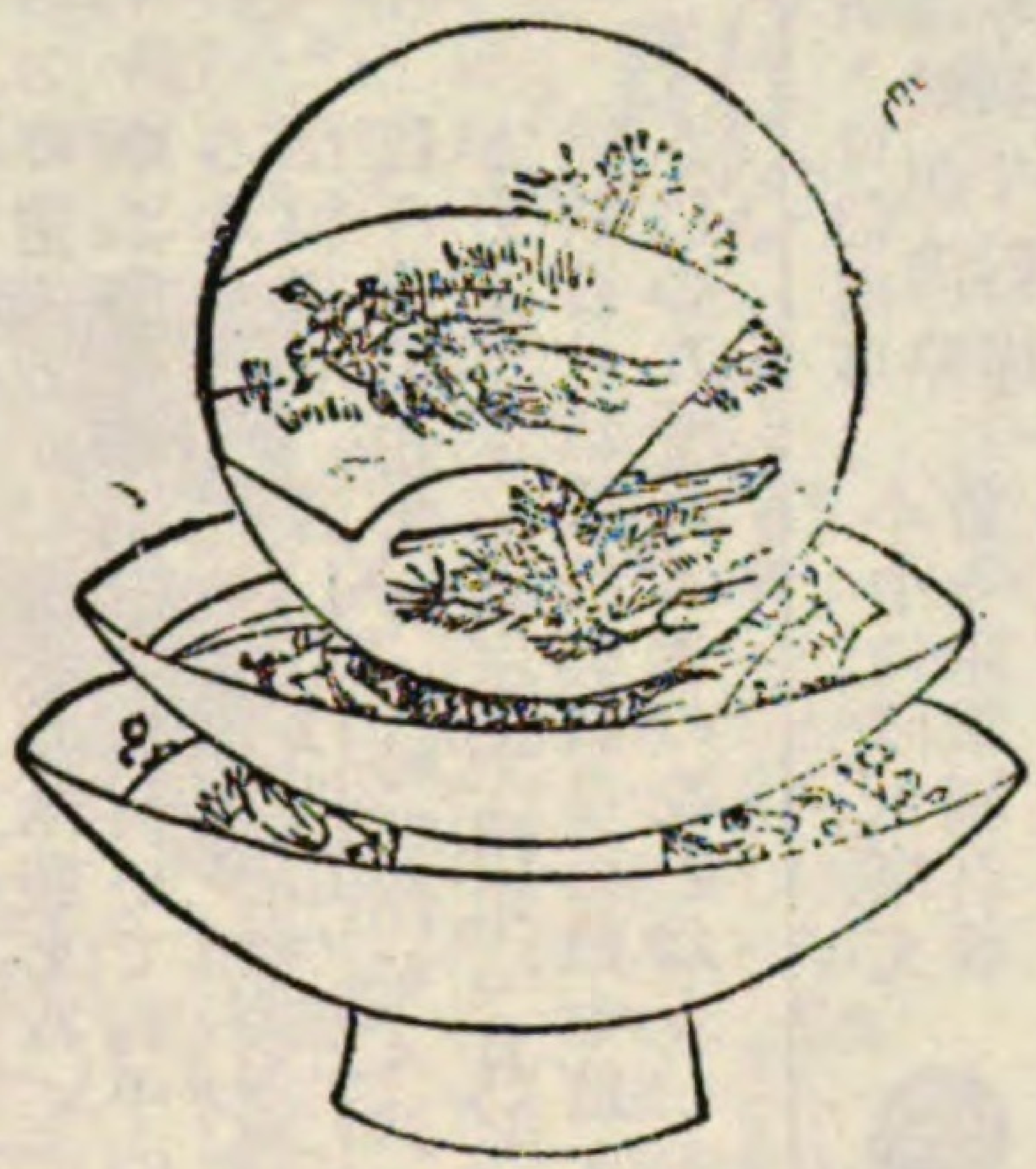
福羽子爵序
近衛公爵序
東久世伯爵序
福羽子爵序文
佐々木信綱君著
●詠歌自在
全壹冊總クロース金文字
正價金壹圓郵稅金拾四錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界
毎月一回五日發行
（明治三十三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）第壹卷第壹號（明治三十四年一月五日發行）

謹賀新年

宮内省御用



金銀製作盃類

美術新形 しきしま袋



定價 金五圓以上十圓迄

餘は御好み次第調製可仕候

弊堂は金銀各種の製作に付ては已に諸君の御高評を蒙り日に増し繁榮の段奉深謝候然るに猶又今度形模様の意匠考案は美術の大家に彫刻は府下銘家に特約を致し愛顧諸君の御好みに從ひ廉價にして且迅速に美術の製作に應じ可申候間陸續御注文の程奉冀上候敬白

爰に弊堂が近頃新に按じ出たる敷しま袋は、この道の有名大家の丹誠を凝したる品にして、世の常のものとは異り形も品も優雅なること言ん方なし裂地は繪革、繻珍、緞子、其他くさ〴〵の品あり殊に配合好き紐に優美なる專賣の金具を附したるは、これ弊堂が特に工夫を凝したるところにして、誠に貴婦人令嬢には適當の持物なり、願くは一覽して、弊堂が諸君を欺むかざる事を知し召せ謹て白す

東京下谷區池ノ端仲町 電話本局九百六十五番 貴金屬及美術袋物商 玉寶堂

（定價金貳拾錢）

No. 1 東京市牛込區市ヶ谷加賀町壹丁目秀英舍第一工場印行